カオス レギオン 03

夢幻彷徨篇

冲方 丁



富士見ファンタジア文庫

イラスト 結賀さとる

カオス レギオン 03
夢幻彷徨篇

赤き騎士は、ふと目覚めた。

だが、頭の中に白い靄でもかかっているようで、何も思い出せない。手には鞘の無い剣。辺りは静まり返り、花の甘い香りが微かに漂っている。

（斬らなければならない——）

ふいに強い決意が胸をつく。誰を？ なぜ？ その時、男は壁に刻まれた名前を見つけた。

「……ノヴィア」

騎士——ジーク・ヴァールハイトは一人立ち尽くすのだった。

霧深い古城。レオニスの刺客によって、ジークとその従士ノヴィアは離れ離れに。しかも、お互いに記憶を失って……忘却の果てに二人が辿り着くのは!?

追憶が遠い過去を呼び醒ます——。

書き下ろし大巨編第三弾!!

カオス レギオン 03

夢幻彷徨篇

1016

冲方 丁

富士見ファンタジア文庫

136-5

口絵・本文イラスト　結賀さとる

目次



ノヴィア・エルダーシャ
ジークの従士。〈銀の乙女〉所属の聖女
「はい、頑張りますっ!」
アリスハート
ノヴィアと行動を共にする小妖精
「チビって言うなっ、この狼男っ!」
カオスレギオン
CHAOS LEGION
CHARACTER & HISTORY
ジーク・ヴァールハイト
黒印騎士団所属の葬士
「俺がお前を止める」





HISTORY

天界と堕界を分かつ大地、アルカーナ大陸。
ジークたちは、凶行を繰り返すかつての友・ドラクロワを追っていた。
旅の途中、一行は聖地シャイオンにてレオニスと出会い、それぞれの道を歩み出す。
三人の男が握る大陸の未来。混沌<カオス>の大地は新たな局面へ突入する……。

Prologue　霧の城

男は、ふと目覚めた。
最初に見えたのは、自分の体を覆う緋色の布と、そして滑らかな灰色をした石の壁。
のろのろと布をどけ、壁に手を当てようとして、何かを握っていることに気づいた。
鋭い銀の輝きを放つ剣だ。その柄を、拳が強ばるほどの力を込めて握っている。まるで今にも敵が襲ってくるというように。
手の力をゆるめつつ、刃を見つめた。強い疑問があった。
なぜ鞘が無いのか——？
だが同時に、鞘という考えが間違っていることを思い出している。
この剣は、もっと大きなものに収められるべきものだ。大きなもの——銀色の——それは自分にとって、重要な道具でもある。なぜなら死者を——この手で——
葬るための——シャベル。

男は小さくかぶりを振った。頭の中に白い靄でもかかっているような気分に襲われたのだ。何か大事なことを忘れていながら、自分ではそのことに気づいていないような気分に襲われたのだ。

男は剣を握ったまま、左手を壁に当て、慎重に身を起こした。

白外套に黒革の鎧、両手には赤籠手という自分の出で立ちを見下ろし、妙に安心した。どうやらそれだけ見慣れたものであるらしい。

肌寒いが、凍えるほどではなかった。布にくるまっていたお陰だろう。

辺りはしんと静まり返っている。雨でも降った後のような、水っぽい空気。かすかに花のような甘い香りが漂っている。

今いる場所は、がらんとした広間だ。礼拝堂らしく、石造りの祭壇がすぐそばにあり、その後ろの壁を緋色のカーテンが飾っている。カーテンの一部が切り裂かれており、どうやらそれを毛布代わりにして自分は眠ったらしい。

窓際の松明が、ちろちろとくすぶっていた。多分、自分が灯したのだろう。ここで一夜を明かすために。だが、なぜ——こんなところで？　ここはいったいどこなのか？

猛烈な不安が込み上げてくる。男は冷静にその不安を抑え込み、周囲を観察した。

部屋の扉を見ると、二つの丸い取っ手に、銀色の太い棒がさし込まれていた。外から扉が開かないための処置だ。そして唐突に、自分が見ているものが何であるか理解した。

急いで広間を横切り、その銀色の棒に触れた。強い確信が起こった。
これだ——これが、この剣の鞘だ。
男は、扉を閉ざしていた銀色のシャベルに剣を収め、肩に担いだ。それだけで、意外なほどの安心感が込み上げてきた。何気ないことの一つ一つが、不安を呼び、また安心させる——その繰り返しだ。それを延々と続けられたら、神経が参ってしまう。それを防ぐには、とにかく自分の置かれた状況を調べ、理解する他ない。
男は扉に手をかけ、部屋を出て行こうとして、寸前で思いとどまった。
焦るな——
男の本能が警告していた。気を付けろ——自分は今、恐ろしく無防備になっている。焦って状況を把握しようとして、逆に、事態を悪化させる危険もある。まだこの部屋に何かあるかもしれない。出来る限り周囲の状況を把握しなければ——
男は、窓の一つにそっと近づいた。
光の感じからして、まだ早朝だろう。曇天の下に、険しい山の連なりが見えた。
窓から外を覗くと、霧がかかった巨大な都市があった。
背には断崖、都市前面には分厚い城壁。建物も階段も石造りで、豪華な建物があちこちに見える。花のような香りがするが、あまり緑はない。

どうやら自分は今、高所に建てられた城の一角にいるらしい。
険峻な地の利を生かした、城塞都市――もとはただの砦だったものが、貿易の要所として発達し、富裕な商人たちが造営した結果、一大都市となったのだ。
戦争と商売の両方に通じた――南方の都市ルカ。
ようやく都市の名が思い浮かんだ。それが自分の目的地であるという強い意識。そして近辺の地形を思い出し、さらに安心感が湧く。近くに河があるはずだ。ネルヴァ河――大陸を渡る大河が。この都市は、ネルヴァ河への入り口として商業で賑わい――
（賑わう――？）
だが霧が漂う都市のどこにも人影がない。異常なほどの静けさだ。早朝だから？　しかし貿易に携わる者なら、もう起き出しているはず――
（閉鎖――）
かすかな記憶の糸口。都市の危機――既にここは閉鎖された。生存者は不明。事態が解決するまで、自分たちだけが単独で――
（自分たち――？）
ふと、眠るように静かな都市を眺める自分が、何をしているのかを理解した。
誰かを捜しているのだ。この部屋にはいない誰か――自分のそばにいるはずの者を。

男は窓から離れ、部屋を注意深く見渡した。扉は内側から閉ざされていた。誰かがここにいたはずはない。少なくとも一晩、自分は一人でここに閉じこもったのだ。

だがなぜ？　捜している相手というのは、そんなに信用出来ないのか？

（斬らなければならない――）

ふいにその決意が強く胸をつき、思わずはっとなった。

誰を？　自分が捜している相手を？　斬るために捜している？　なぜ？

そのとき、男の目が、斬られたカーテンから覗く壁をとらえた。自分が目覚めた場所――先ほど手をついた壁だ。そこに、何かが刻まれているのが見えていた。

そちらへ急いで歩み寄った。歩調が速い。男の本能は、しきりに落ち着けと警告している。無闇に焦れば、取り返しのつかない事態になると。

男は壁の前に立ち、刻まれた文字を見た。その文字を、自分は眠りに落ちる前に、この剣で刻んだのだという意識があった。それだけは間違いないように思われた。

だが、その刻まれた文字が何を意味するのか、まるで理解できない。

（――ジーク様）

脳裏に声が甦り、はっとなった。自分の名を呼ぶ若い女の声。もの悲しげな、諦めの込もったような響き。遠い記憶の片隅には、今も彼女の悲しみが残っている――

どこからか漂ってくる花の香りが、かすかに強くなった気がした。
男は、そっと壁に刻まれた文字に触れ、口に出して読んでみた。
「……ノヴィア」
だが何も思い出せなかった。
霧に囲まれた城のまったただ中で、男は、呆然と立ちつくした。



第一章　狩人たち

1

からりと晴れた空の下――賑わう街に、楽しげな声が響く。
「どっち見ても人ばっかりぃ。何だか大繁盛ねぇ」
小さな羽を震わせて宙を舞い、きょろきょろ辺りを見回すものがいた。掌ほどの妖精である。女性形の身をシルクのドレスで包み、金髪金瞳、背の羽も淡く金に輝いている。
「ねえねえ、ノヴィアぁ。お買い物しようよぉ」
天気のせいであちこちで市場が開かれているのだ。買い込んだ日用品を袋詰めにして持ち帰る子連れのおかみさんや、旅商のグループがたむろしている。といって妖精自身、欲しい物があるわけではない。珍しい商品が並ぶのを眺めて楽しみたいだけなのである。
「駄目よ、アリスハート。ジーク様のお仕事の方が先です」
少女が、荷を背負った馬の列をよけながら、きっぱりと返す。溌剌と束ねた栗色の髪、

淡く澄んだ紫の目。青い法衣の胸元を〈銀の乙女〉の紋章が飾り、手にした青い宝玉つきの宝杖とともに、少女――ノヴィアが、れっきとした聖道女であることを示している。
「まず、街の聖堂に、お話を聞きに行きますか、ジーク様？」
ノヴィアが傍らの男を振り返る。まだ街に着いたばかりだったが、馬車を乗り継いできたため、さほど疲れてはいない。だが――
「いや……様子を見よう。今日一日、自由にしてていい」
男は思案げにざわめく街並みを見渡しながら言った。燃えるような赤髪に、研ぎ澄まされた美貌。その眼差しは鋭く、白外套に黒革の鎧、赤籠手と、実に殺伐とした出で立ちだ。
が――その肩には、なんと銀に輝くシャベルを担いでいる。人でごったがえすこの通りでも、実に目立つ。街角に立つ衛兵たちもジークに目を止めては、シャベルの歯の裏に刻まれた聖法庁の紋章に気づき、呆然と見送るという有様だった。
「様子見……ですか」
ノヴィアはちょっと驚いた。そもそもどんな場所でもジークが堂々と姿をさらすのは、あえて敵を自分に引きつけるためだ。聖法庁に対する謀略を仕組む者は、必ずといっていいほど向こうから罠を仕掛けてくる。それを逆に撃ち破るのがジークの主なやり方だった。
「俺は、情報を仕入れてくる。お前は、街を見ておけ」

「だってさ、ノヴィアぁ。ゆっくり街を見て回ろうよぉ」
アリスハートが嬉しげに言う。ノヴィアは困ったように微笑した。ジークが見ておけというのは、ノヴィアの力——彼方まで見通す万里眼を用いて、偵察しろということだ。
「観光じゃないのよ、アリスハート。お仕事なんですから」
ちょっとたしなめるようにノヴィアは言った。
「あまり気を張らないでいい。危険があるかどうかだけ確認しながら動け」
そこでまた予想外の言葉が来た。まるで適当に遊んでいろと言わんばかりである。
「よろしいのですか……？」
驚きよりも、やや不満を込めて問い返す。ジークの役に立ちたいという思いを、すげなくあしらわれた気分だった。ナデッタの民と別れて以来、確かにずっと移動ばかりで、今すぐ戦いが起こるという感じはないが——
「私も、ジーク様とご一緒にいた方が……」
「お前の力が必要なときは言う。今は休んでいろ」
淡々と返された。夕刻に宿で落ち合うことを決めると、
「たまには買い物も良いだろう」
なんとそんな言葉を残して、ジークは一人、雑踏に消えた。立ち止まってその背を見送

っていたノヴィアは取り残された気持ちになり、つい、不満が口をついて出た。
「もう少し、何か命じて下さっても良いのに……そう思わない、アリスハート？」
「え、いやぁ……狼男なりに、ノヴィアのことを思ってるんじゃないのかなぁ……。ノヴィアったらいつも働きっぱなしだしぃ」
狼男とはジークの目の鋭さを茶化した渾名だ。するとノヴィアも珍しくそれに合わせて、
「狼なら、もっと群のことを考えても良さそうなのに……」
「うーん、一匹でうろうろするのが好きなタイプだからねぇ」
「そんなの……そのうち迷子になっちゃうわよ」
「そしたらノヴィアに見つけてもらえると思ってるんじゃない？」
適当にアリスハートが言う。だがその一言で、ノヴィアは、どきっとなった。
「そ、そうかしら」
「そうよぉ。ノヴィアの目が見えるようになってから、狼男ったらますます平気で危なっかしいところに行くようになったしぃ。きっと信頼してんのよぉ」
何の根拠もないアリスハートの言動だが、ノヴィアにとっては嬉しい限りである。
「そうね……私、いつでもすぐに見つけられるものね……ジーク様のこと」
今さらそのことに気づき、妙にどきどきした。

「そうそう。だから、狼男のことは放っといて遊びに行こうよぉ」
焦れったそうに羽を震わせるアリスハートに従い、ノヴィアもようやく取り戻した微笑とともに雑踏に身を任せた。

ジークは市場を通り抜けると、真っ直ぐ駅舎へ向かっている。
駅舎は、金を払って馬を乗り継ぐための施設で、公務にある者ほど優先的に良い馬を借りることが出来る。駅舎にも大勢たむろしており、この街が貿易の要所であることを物語っている。行商風の男が一人、せっせと馬に鞍を着けながら、通りがかったジークに、
「どうだい、良い毛並みだろう」
と声をかけてきた。柔和そうな壮年の男である。ジークが無言で振り返ると、
「聖王の持ち馬は大した毛並みだって話だが、こいつもそれに負けちゃいない。なあ、あんた聖王の馬の色を知ってるか？」
「――黒だ」
「そう。足先から尻尾まで真っ黒の、〈戦場の真理〉って名の馬さ」
そう言って親しげにジークの肩を叩きながら、ともに駅舎の裏へ廻った。
「馬呼ばわりなどして失礼した、ジーク・ヴァールハイト。文句は、暗号を決めたお偉方

に言ってくれ」

「諜報院の仕事に文句はない」

興味なさそうにジークは返した。諜報院とは聖王直属の密偵機関であり、ジークに任務を告げ報せる情報源だ。男は書状を取り出してジークに手渡し、言った。

「増殖器が運搬されたと思われる経路と、運搬に関わった可能性のある街のリストだ。中でも有力なのが、この先にある……」

「城塞都市ルカか――」

書状の中身を開きつつ、ジークが呟く。

「そうだ。あんたが、例の故郷を失った民を守ってた間に、予想される運搬経路をしらみつぶしに調べた結果、その街に行き着いた」

ジークは小さくうなずきながら、いっときナデッタの民の面々に思いを馳せた。マイアの地を去ってから、まだ半月余りしか経っていない。ともに夜明けを目指して歩んだ彼らの新たな生活が、幸運に恵まれることを祈るばかりだった。

「あんたの睨んだ通り、増殖器やその他の物資の大半はルカの都市を経由して、ネルヴァ河を下っているに違いない。そしていったん海に出て、各地へ運ぶ気だ――」

「――聖地シャイオンの動きは？」

「増殖器の小型化に成功したのは前領主ロムルス・ジェルミナルで、関わった側近は全て逮捕して尋問したが、現領主とは関係ない。ただ……気になる点がある。現領主がやたらと人を集めているんだ。様々な職業の者を。まあ領主が文化人を集めて領国を豊かにしようってのは、よくある話だが……しかし聖印の研究者を大勢招いてる点が問題だ。いずれ近隣の領国も、警戒し始めるだろう」
「聖印の研究……。領土を拡げる気か……」
「領主が聖印の力を手に入れてする事と言えば、自分の領土の耕地を拡大して、他の土地の聖性を涸らせることに決まってる。あの地域で、また一騒動あるかもしれん」
「野心を抱いたか……レオニス。それとも――」
あの小柄だが聡明な少年の姿が脳裏をよぎった。歩けぬ代わりに、あらゆる知識をたちまちのうちに吸収する、頼もしくも危うい諸刃の剣のような少年の姿が。
「ところで、従士はどうした？　一目見られるかと思ったが……」
ふいに男がそう言って辺りを見回した。ジークは訝しそうに眉を寄せ、
「俺の従士に、何か用か……？」
「あのジークが、ちっちゃな女の子を連れていると、諜報院でも噂でな」
「……それほど小さくはない」

ジークが何となく憮然となる一方、男は真顔で腕を組み、
「優れた聖性の持ち主で、戦力になるという話だが……その従士にも情報は隠しておく主義か？　あんたが不在のときは、そのちっちゃな女の子に情報を渡す必要があるんだが」
「聖地シャイオンの情報は、あまりあいつには伝えたくないだけだ」
ジークが珍しく本音を告げた。男は不思議そうな顔でいる。
「聖地シャイオンとあんたの従士と、何か関係が？」
「あいつは……あそこの新領主のことを、弟のように思っている」
ジークはただそう返した。レオニスとノヴィアの間に血のつながりがあることは聖法庁にも報告していない。それがレオニスの父ロムルスと、ノヴィアの母フェリシテが望んだことであり、ジークが闇に葬るべき事柄だった。
「じゃあ、あんたの従士に情報を託す場合は、厳重に封をした書類を渡すようにしておこう。あんた以外の者が勝手に開けば厳罰に処される。そうすれば、どんな情報だろうと見られる心配はない」
万里眼に封など無意味だが、ノヴィアの性格上、勝手に中を見ることはないだろう。
「頼む。余計な手間だが……」
「なに……あんたが、ひどく従士思いだってことは有名だからな」

男は、やけに納得したように言ったものだった。
「たとえ、あんたが何人もの従士を自分の手で斬ったとしても……いや、そうだからこそ、きっとあんたは自分の手にかけたんだろう」
ジークはそれについては一言として返さず、ただ黙って書状を懐に入れた。
「俺は都市ルカに行く。その前に、相手の動きを封じる準備が必要だ」
「了解だ。何せ相手の目的は物資の運搬だからな。下手につつけば抵抗せずに証拠を隠して逃げるだけだろう。そしてほとぼりが冷めた頃に、また運搬を開始する……」
ジークはうなずいた。男は組んでいた腕をほどき、
「諜報院を通して信頼できる騎士団を動かす。数日以内には、ルカに通じる道の全てを封鎖出来るはずだ。それまで、ちっちゃな従士と一緒に、のんびりやっててくれ」
片方の目をつむってみせ、さも商談がまとまったような顔で馬の方へ戻って行った。
一方でジークはその場にとどまり、自分の脇腹の辺りを見つめた。並んで立ったとき、ちょうどノヴィアの頭がくる辺りを。
「そう小さくはない……」
ぽつりと呟いた。滅多にないことに、あまり自信のなさそうな口調だった。

「あ、男の人が馬に乗って街を出て行く。ジーク様……どうしたのかしら。ご自分のお腹をじっと見たりして」
店先に並ぶ品々には目も向けず、ノヴィアはあらぬ方を見て呟いている。
「もうノヴィアったらぁ、のぞきは良くないわよぉ」
アリスハートの呆れ声に、慌てて視覚を元に戻した。
「の、のぞきじゃありません。見守ってるのっ。ジーク様……なんだか知らない人と会ってるみたいなの。諜報院の人かしら」
「狼男だって子供じゃないんだから、知らない人についてったりしないわよ」
「そうじゃなくて……やっぱりお仕事だったんだ。私……遊んでて良いのかなぁ」
「んな大して遊んでないってばぁ。ちょっとノヴィア、自由にしろって言われたんだから、ちゃんと自由にしなきゃ駄目よぉ」
アリスハートは不満げに、ふわっとノヴィアの目の前で宙を舞い、
「そんなんじゃ、そのうち命令されなきゃ何にも出来ない子になっちゃうわよ」
強くたしなめたものだ。ノヴィアは思わず首をすくめて、
「そうかしら……」
「そうよぉ。狼男だって、ノヴィアにそうなって欲しくないから自由にさせてんのよ」

アリスハートがまた適当なことを言う。だがノヴィアは真顔で考え込み、
「そうなんだ……。そうよね……こんなんじゃ私、子供みたい」
「あ、いや……確かに……」
子供なんだけどね、という言葉を咄嗟に呑み込んで、うにゃむにゃ言うアリスハートをよそに、ノヴィアは宝杖を握りしめ、ぎゅっと唇を引き結んだ。
「大人にならなきゃ。ね、アリスハート」
「え……う、うん」
「頑張って遊びましょう」
俄然、やる気になって人々の行き交う通りを見渡すノヴィアに、
「う、うん……そうよ、そうそう、遊ぶのが一番よぉ」
ちゃっかり合わせるアリスハートだった。
結局、二人してそこら中を見て回って過ごした。ノヴィアにしては珍しく髪留めや法衣の袖飾りなど、こまごまとした物を買っている。以前、ある砦を訪れたときに受け取った金を僅かばかり費やしたのだ。いざ遊ぶとなると何をして良いか分からなくなるノヴィアにとっては貴重な半日だった。ただ――
「ジーク様……そろそろ聖堂に行くみたい。私たちも宿に行きましょう」

など、逐一ジークの動向を見ては、アリスハートに眉をひそめられ、

「前はそんな風に狼男のことのぞいたりしなかったのに、変よぉノヴィアぁ」

「従士として見守ってるだけです。変じゃありません」

むきになって返しながら、宿へ――〈銀の乙女〉の修道院に向かうのだった。宿に荷物を置いてから、ジークが泊まる聖堂へ食事の用意をしに行くのだ。

正式に紋章を授かる以前は、ジークと一緒に宿を求めたものである。ノヴィア一人では、聖王の騎士の従士であることを、すぐには信じてもらえなかったのだ。紋章の由来などいちいち質問されてやっと逗留が許可されるという状態だった。それが今や、

「先日ご連絡したノヴィア・エルダーシャです」

この一言で済んでしまう。ジークが諜報院を通して事前に連絡をつけてあるのだが、それ以上に、どの修道女もノヴィアの紋章と宝杖を見るなり頭を下げ、

「ようこそ、紋章に名を刻まれ、教えの杖を授けられたお方。貴女の逗留を心からお喜び申し上げます」

などと、うやうやしいほど丁重に迎え入れてくれるのだ。序列に厳しい〈銀の乙女〉ならではの光景だが、アリスハートにとっては格好のからかいどころである。

「ノヴィアったら、すっかり偉くなっちゃってぇ」

「私が偉いんじゃないもの。母さんの紋章と、この杖が偉いだけよ」
あてがわれた部屋に荷物を置きながら、あっさり返す。それが、紋章と宝杖を授けられたときに得た教えの一つ――「鏡の教訓」だった。人は他人の反応を通して、自分が綺麗だとか偉いとか、鏡を見るように判断するものだ。その鏡が無くても、ちゃんと自分のことを判断出来ねば、紋章は与えられない。
「ノヴィアだって凄い力を持ってるじゃないのぉ」
「どんな力だって完全じゃないもの」
当然のように言った。それが「杖の教え」の意味だ。どれほど強大な力を有したところで完全にはほど遠い。むしろ遥か彼方へ歩み行くための、杖のようなものでしかないのだ。
「ジーク様が、それを教えてくれたのよ……」
過去の授章式のことが思い出された。あのときジークは自分を置いて行こうとしたのだ。ノヴィアが力を手に入れたから――人を傷つけ、殺してしまえるほどの力を。
そんな力を持って戦場に行けば、きっと必要以上に使いたくなるだろう。怖さや憎しみや怒り――また主人や指揮官の命令だけを根拠に、力を際限なく行使するようになるのだ。
そうなれば人の心はたやすく死んでしまう。自分や仲間の命を守るためと言いながら、力まかせに生き延びようとすることで当たり前の感情さえ失ってゆく。ノヴィアがそうな

らないためにジークは独りで旅立とうとした。幾ら自分は大丈夫だと主張しても、ジークは振り向きもしない。問題は、実際にそうなってしまったときに、どうするかだった。
「ああ……ノヴィアが紋章をもらったときねぇ。狼男ったら、いきなりノヴィアと戦い始めるのかと思って、びっくりしたわよぉ」
アリスハートが笑って言った。ノヴィアも微笑む。
「でも結局ノヴィアが、ああいう風に決めたせいで、狼男の方が、もーっと驚いてたけどね。あいつのあんな顔、また見てみたいわぁ」
二人しておかしそうに、くすくす笑いながら部屋を出た。
「今日、何度か、お前の聖性を感じた。俺を見てたのか？」
食事の席に着くなり、ジークは言った。別に咎めているというのでもない、何気ない口調である。だがノヴィアはどきっとなり、
「え……？　あの……も、申し訳ありません。わ、私……従士として……」
たちまち真っ赤になってしどろもどろになる横で、
「あらぁ、狼男ったら、分かるんだぁ。ノヴィアがのぞいてたことぉ」
アリスハートがパンをかじりながらのほほんと感心する。

「の、のぞきじゃありませんっ！　その、私……勝手に……すいません……」
まさか、そこまでジークが鋭く万里眼の視線を察知するとは――一方的に視線を浴びせることの失礼さに今さら気づいて恐縮するばかりだった。
「お前の力だ。自由に使え」
だがジークは淡々と言って、ノヴィアが作った、どどめ色のシチューを口に運んでいる。
「え……あの……自由に？」
「お前の力が必要なときは言う。力を使いすぎて疲労しないよう気を付けておけ」
それだけだった。怒りも叱りもしない。ノヴィアは一瞬、放り出されたような気分になった。下手に怒られるよりも、遥かにきつい言葉に思えた。力を持つ者の責任を無言で問われているような気にさせられ、お陰でジークは怒っているのだろうかと食事の間中、ずっと悶々とする羽目に陥った。
「明日も様子を見る。聖堂には俺が顔を出しておく」
どうせ大したことはないから、明日も自由にしていて良いと言うのだ。
アリスハートが喜ぶ一方、ノヴィアは悄然となった。
「はい……」
なんだか悲しい気分だった。

ジークが淡々としていられるのは強い自制心ゆえだ。物資の行方を追うことでドラクロワに行き着くのではないかと、大陸中の地図と情報に首っぴきでいるジークが、何の感情もなく様子を見るなどと口にするはずがない。今度こそ相手に追いつこうとする不安や焦りを必死に抑え、慎重に機を見計らっているのがノヴィアにはひしひしと感じられた。
せめてジークの気持ちを和らげられればしないかと思いながらも何も言えない。黙って万里眼で見ていたことが後ろめたく、しかも何の咎めもないことで余計に心が重い。
せめて怒ってくれればジークの感情が見えて安心するのに。いたずらに心が波立つうちに食事が終わり、宿に帰る頃合いになってしまった。それでもお茶を淹れたりして、何ということのない会話をいつまでも続けるうち、
「もう遅い。帰って休め」
とうとう、ジークに言われてしまった。
「はい……おやすみなさい、ジーク様」
「ゆっくり休め」
「……はい」
とぼとぼとなって宿に戻るノヴィアを、アリスハートが不思議そうに見つめて言った。
「どしたの、ノヴィアぁ。お腹でも痛いの？」

「……ジーク様、冷たい」
思わずそんな呟きが零れ、アリスハートを驚かせた。
「そんなのいつものことじゃない。どしたのぉ、突然」
「万里眼で見てたことも何も言わなかったし……自分で反省しろってことかなあ」
「えー……別に怒ってないと思うわよぉ、狼男のやつ」
アリスハートが、妙に分かったような声を出す。
「あいつだって、ノヴィアが見て報告しなきゃいけないこと、知ってるわけだしさぁ」
その使命を〈銀の乙女〉がノヴィアに授けたのだ。ジークの働きを見守り、報告せよと。
「でも……なんで……何も言ってくれないんだろう、ジーク様」
深々と溜め息をつくノヴィアの肩に、ふわっとアリスハートが舞い降りる。
「ノヴィアは、本当に頑張りやさんだからよぉ。それが狼男も分かってるから、きっともう、簡単には叱れないのねぇ。最初に旅に出たときと違ってさぁ」
そういわれて、ノヴィアの胸の奥で、杖を頼りにジークの後を追って街を出たときの思いが急に甦った。ずいぶん遠い昔のことのようだった。あのときに比べて、ジークに近づけたようにも思うし、しかし肝心なところでは全く距離が変わらないような気もした。
「遠いなぁ……ジーク様」

心のどこかで、焦る必要なんてない、という優しい声がした。別れたナデッタの民の、あの飄々とした若い領主の声。自分の本当の心を知るのが先だと——どう接すれば良いのか、相手に教えてもらえば良いのだと。ノヴィアはまた一つ、溜め息をついた。

「ほんと、ノヴィアもよくここまでついて来たわねぇ。狼男も、もう何かあったって黙ってノヴィアを置いてったりしないわよぉ。それだけは確かだと思うなぁ」

アリスハートにそう言われて、ようやくノヴィアも微笑した。

確かにそれだけは無いと信じたかった。それだけの苦難をともにしてきたのだから。これまでずっと——そしてきっと、これからも。

一度だけ立ち止まり、ジークがいる聖堂の方を振り返った。万里眼で見たかったが、そんなことをすればせっかく取り戻しかけた気持ちを沈ませてしまうだけだろう。

「力なんて……本当に、杖みたいなものでしかないのよ……」

そう呟き、少しだけ背筋を伸ばして、また歩き出すノヴィアだった。

2

「レオニス様はいずこに？　レオニス様は？」

聖地シャイオンの城の廊下を、廷臣が一人、慌てた様子で駆けて行き、

「レオニス様は、学びの広間にいらっしゃいますが――」

使用人の娘の言葉に従い、あたふたと広間に向かった。

すぐに、白い法衣の学者たちがずらりと並ぶ広間にやって来て、

「至急、レオニス様のお耳に入れたいことが」

執事の一人に言った。すると、学者とともに円卓に向かっていた少年が、

「どうした」

ひどく大人びた声を放った。澄んだ青紫の瞳、高い鼻筋、白い磁器のような滑らかな肌。茶色がかった金髪には、細く銀髪の輝きが混じり、特に顔の両脇の髪などは鋭い白刃のごとき銀髪だ。その金銀の髪に彩られた少年が、若い威厳のこもった目を向けると、誰もが思わず姿勢を正してしまう静かな迫力があった。

「は……客人に、いささかありまして……私どもの説得では、止められず……」

「あの者たちが、また何か問題を起こしたか」

廷臣が神妙にうなずく。レオニスが細い眉をひそめ、

「分かった、僕が行こう。みな議論を続けてくれ」

手を振って、学者たちの会話を促す。みなレオニスが招いた聖印の研究者である。中には司祭もおり、日々、レオニスが提示する問題について議論と実地検証を重ねていた。

廷臣が、レオニスが乗っている物を押すよう執事に指示した。
レオニスにとって唯一の移動手段――車椅子が、うやうやしく押され、運ばれてゆく。
執事とともに付き人が数名、それに従った。
「これだけ大勢の客を招いてるんだ。問題児の一人や二人は拾うことを覚悟していたが
……こう毎日だと、さすがに、うんざりするな」
「は……レオニス様のお言葉にだけは素直に従うのが、救いでございます」
「どれほど力がある人材を集めても、御せなければ意味がないよ」
レオニスは苦笑し、畏まって頭を下げる廷臣に、言った。
「どうせ、狩りに出られず苛々してるんだろう。今までずっと機会がなかったせいで焦れてるんだ。三人とも獲物を横取りされることを恐れてるのさ。だがまだ狩りには早い」
「狩り……でございますか？　確かにまだ狩りの季節には……秋には早いですな」
呟く廷臣をよそに、レオニスはうっすらと微笑を浮かべている。
このところ、城は立て続けに客人を迎え、廷臣たちを驚かせていた。
豊かな国ゆえ多くの人が訪れるため、外の者がやって来るのは不思議ではない。
ただ、己の腕を磨くために各地を転々としたがる学者やその他の職業の者たちが、揃ってレオニスのもとに留まり続けていることが、廷臣たちには驚きであり喜びだった。

多くの者を引き止められるということは、それだけレオニスが優れた領主である証拠なのだ。中には優秀な人材が逃げないよう軟禁状態にして無理やり働かせる領主もいる一方、レオニスはまず客に対し、こう口にした。

「聖地シャイオンが、あなたの第二の故郷となることを願っている。私はこの地を、多くの者の新たな故郷となれる場所にしたいのだ。そのためにあなたの助力を請う」

そしてそれが掛け値なしの真実の言葉であることを示すべく、領地の発展に力を注ぐのだ。そのレオニスに従う者も、今や何百人という規模になり、しかもなお増えていた。

そうなると客同士のいざこざも増える。特にレオニスが個人的な嗜好で招き、執務室にもひんぱんに迎えている三人の問題児は、既に城でも有名だった。

二人が女性、一人が男性である。彼らはそれぞれ優れた技能者であるゆえ、特別に招いたのだとレオニスは廷臣たちに告げていた。

「それにしても、滅多に地下から出て来ぬレティーシャ様が、狩り好きとは……」

「彼女のことだ。獣が死ぬところが好きなんだろう」

「はあ……それはまた……納得させられる理由ですな」

女性の一人は、彫刻師であった。

大規模な石像から、細かな装飾品まで、一級の冴えで彫り上げる腕前を持つ。

　しかもどうやって彫るのか、恐ろしく早い。凝りに凝った意匠の像や杖や柱を、またたく間に仕上げ、廷臣たちが奪い合う間もないほど大量に揃えてしまうのだ。
「まったく、あれであの感性でなければ、大陸一の彫刻師になれるのに……」
　レオニスが呟いたとき、付き人たちが車椅子を持ち上げ、階段を下り始めた。
　足早に進む廷臣を先頭に、地下牢へ下りてゆくのだ。じめじめと黴ついた壁に、松明の火が不気味に揺れている。あちこち水溜まりがある床に、そっと車椅子が置かれた。
「レティーシャ・ベルゼブベス！　何をやっている！」
　レオニスの一喝が響き渡った。
　暗がりで、ゆっくりと一人の女が振り向いた。二十歳そこそこの若い娘である。
　品良く飾り気のない衣服。ほとんど真っ白に近い髪が、腰の辺りまで真っ直ぐ伸びており、闇の中でまるで鬼火のような青白さを帯びている。
　綺麗に揃えた前髪の下で、大きな緑色の目が、妙に幼い表情を浮かべてレオニスを見た。
「……お仕事」
　やや間があってから、ぼそっと呟く。同時に、のんびり右手を掲げてみせた。彫刻師にしてはやけに細い手が、異様な光を放つものを握っている。なんと肉切り包丁であった。
「いったい何の仕事……」

レオニスは暗がりに目を凝らし、絶句した。
女の他に、三人の人間がいた。二人の屈強な獄吏が、なぜかもう一人の若い女性を縛り上げているのだ。女性は、熱病にかかったように、がくがく震えながら、レオニスに助けを求めるような目を向けている。あまりの恐怖に声も出ないらしい。
「あの娘の父君が、レティーシャ様に、娘の像を彫るよう頼んだのです」
廷臣がレオニスに耳打ちする。レオニスが呻いた。
「なぜ縛る必要があるんだ！」
思わず声を荒げたのは、どんな答えが来るか既に予想がついていたからだ。
「……その方が、綺麗」
子供のような口調で、女――レティーシャが告げ、
「ね……兄様」
左手で大事そうに抱えたものに、確認するような目を向ける。
宝飾の付いた布に包まれ、真っ白に磨かれたもの――人間の頭蓋骨であった。
レティーシャが軽く左手をゆすると、その頭蓋骨の歯が、かたかたと鳴った。
「ね……兄様も、その通りだって思うよね」
まるで頭蓋骨が意志を持っているかのように主張するレティーシャに、レオニスも他の

面々も、うんざりした顔になった。
「その包丁はなんだ」
レオニスが不快感をあらわにして問う。レティーシャは首を傾げて、無表情に若い女性を見た。心もち刃を持ち上げ、
「像を彫る前に……この人を、もっと、綺麗にするの……これで……」
そう言って、無邪気ともいえる声で、ぼそぼそと、吐き気を催すような、思わず耳を塞いで逃げ出したくなるような所業を、次々に述べたてた。
「それから……顔も、おんなじにして、それから……指とかも、最後に……」
縛られていた女性が、最後まで聞く前に、泡を吹いて気を失った。
唖然としていた面々が、はっと我に返った。
「もういい！　お前たち、さっさとその方を解放しろ！　早くせんと、お前たちの彫像をレティーシャに依頼するぞ！」
レオニスが本気で怒鳴った。獄吏があたふたと、ぐったりする女性の縄を解く。
とはいえ獄吏に罪はない。レオニスの客人の命令に従っただけだ。
「レティーシャ、領民から依頼を受けるときは普通にやれと言ったはずだ」
レティーシャは、つまらなそうに包丁をぶらぶらさせている。

「言うことを聞かねば地下牢から追い出して日当たりの良い湖畔の別荘に住まわすぞ」
がらん。包丁が床に転がった。レティーシャは頭蓋骨を両手で抱きしめ、
「……やだ」
悲しげな顔で、おずおずと背後に下がった。
かと思うと、背を向けて地下牢の奥へ走り出した。ぺたぺた足音がした。見ればなんと裸足である。そのまま、扉を開け放してある一番奥の牢へ入ってしまった。
レオニスは溜め息をつき、地下牢の奥へと、執事に車椅子を押させた。
「まったく……何とも言えない腕前だ」
見ればそこは、一面の地獄絵図であった。壁や天井、床に至るまで、びっしりと奇怪な人の姿が彫られている。顔も体も歪ませ、苦しみ、怒り、悶え、この世の全てを呪い憎むかのような姿たち。それが、レティーシャの言う、「綺麗」なものの全てだった。
最初レティーシャに牢に住みたいと言われたときはまるで本気にせず、普通の部屋を与えたものだ。だが彼女のいう「綺麗」な彫刻を見て、初めてそれが本気だったことをレオニスは理解した。また彼女が頼まれもせずに阿鼻叫喚の像を大量に造り始め、それが城中の恐怖を呼ぶに至り、とうとう彼女の好きなようにさせることにしたのだった。
彼女が最も好む場所に住まわせ、その空間でのみ彼女の本性ともいうべき彫刻を許し、

表には出さないよう厳重に言い渡してある。レティーシャは牢が空くそばから「綺麗」な像を彫りつけ、今や聖地シャイオンの城の地下牢は、この世の地獄と化していた。
「ううあぁ……領主様ぁ、お願いです、ここから出して下さいぃ……」
「恐ろしい……恐ろしいぃ……もう法を犯したりしません……領主様ぁ……」
レオニスの姿を認めた囚人たちが、鉄格子の向こうから一斉に救いを求めてくる。
レティーシャの自慢の彫刻に囲まれていれば当然である。その恐ろしさは下手な罰を与えるよりもよっぽど罪人の改心に効果があった。
「レティーシャ、綺麗な像を彫るときは、想像だけでやれ。せっかく招いた客人を、僕の手で縛り首にさせる気か」
「……みんな……ほんとは醜いのに。ね、兄様」
レティーシャは、頭蓋骨に頬を寄せながら、牢の隅で膝を抱えている。
「みんな……ほんとは悲しい。みんな……ほんとは苦しい。みんな……ほんとは汚い。ほんとのものだけが、綺麗。兄様みたいに綺麗なものだけ彫りたい」
「……その兄様を、綺麗にした男を、捜していたのだろう？」
レオニスが静かに囁く。レティーシャは緑色の目を見開き、顔を上げた。
「じきにトールが戻る。そうしたら、お前を、その男に会わせてやろう。その代わり、言

われたことを守るんだ」
レティーシャは、こっくりうなずいた。それから頭蓋骨を撫でながら、
「兄様、兄様、兄様。兄様を綺麗にした男を私が綺麗にする。兄様みたいに綺麗にしてあげる。綺麗に、綺麗に、綺麗に、綺麗に、綺麗に、綺麗に……」
延々と続くレティーシャの呟きに、囚人たちの呻き声が合唱のように響く。
「嫌だあああ……魔女がまた囁いている……誰かぁここから出してくれぇええ……」
「聞きたくない聞きたくない聞きたくない……気が狂いそうだ、あああああ……」
レオニスは肩をすくめ、執事に車椅子を押すよう指示した。
「その女性は丁重に看病し、全ては悪い夢だと言い聞かせてから家に送って差し上げろ」
付き人たちに気を失った女性を任せ、車椅子を運ばせる。
そうして地下の地獄から出てきたところに、また別の廷臣が駆け寄ってきた。
「レオニス様、大変でございます。例の、客人が……」
たちまちレオニスが怒りの表情になる。だが、つとめて冷静に、
「今度は誰だ」
「アキレス・ツェペット様でございます……。救護院で、患者の血を……」
「案内せよ」

ぴしりと命じた。執事と廷臣と付き人たちが、ぞろぞろと城を出て、救護院へ急ぐ。
救護院はレオニスが設けた施設で、貧しい者でも僅かな金で医者に診てもらうことが出来る。そこの一室に、三人の客の一人——医師の男がいた。
「アキレス・ツェペット！　貴様、何をしているか！」
くるりと男が振り向いた。瀟洒な貴族服に身を包み、両手に白い手袋をはめている。
長い黒髪に、ぬめるような白い肌。黒々とした目に、ひどく赤い唇。まるで骨のない生き物が人間の皮をかぶったような仕草で一礼すると、
「新しい薬を調合していたのですよ、レオニス様」
ずらりと並んだ瓶を指し示し、笑みを浮かべたものだった。どの瓶にも真っ赤な液体が——どす黒いものから鮮やかな赤さのものまで——たっぷりと入っている。
「薬だと……？」
レオニスが、男を睨みつける。もともと貴族出身の男で、医術に興味をもって学ぶうちに、優れた知識と技を身につけたのだという。確かに驚くほど医学に詳しく、身体の不調を訴える廷臣たちに薬を処方し、たちまち治癒して賞賛を浴びたのだが——
「はい。これらの妙薬を混ぜ合わせ、人に活力を与える薬を作るのです」
「その瓶に入ってるものが妙薬か」

「そうです。馬の血、猫の血、トカゲの血、そして人の生き血――」
「人だと？」
「はい。救護院に来る患者から、こっそり抜き採ったものです。病を持った者の血には、病に勝とうとする力が込められているもの。それを活用するのですよ」
廷臣たちが一斉に呻いた。レオニスを除いて、みなアキレスの処方した薬を飲んだことがあるのだ。動物の血のみならず、人の――それも病人の血とは。
何人かが嘔吐をこらえきれずその場から駆け出していった。
「患者の血をこっそり抜く医者があるか！　しかもそれを飲ませるだと？　病が感染したらどうする気だ！」
「毒薬の研究も、良い薬を生み出すためには必要なのですよ、レオニス様」
アキレスが楽しげに、真っ赤な瓶の一つを掲げてみせる。
レオニスの顔から表情が消えた。車椅子の後ろに手を伸ばし、金色に輝くものを握った。
「愚か者が。我が領民を、勝手に貴様の研究材料にして良いと、誰が言った」
冷ややかな顔で、手にしたものを抜き放った。ジェルミナル家に伝わる宝剣――剣にやどる聖性を活性化させることで勝手に動き、どんな強敵にも打ち勝つという剣だ。
そして今やレオニスは、父以上に、宝剣の力を我がものとしていた。

「もう一度口にしてみろ。この剣で貴様の舌を切り取り、一生レティーシャの住む地下牢に幽閉するぞ」
アキレスの笑みが強ばった。廷臣たちが、はっと息をのむ。
同時にレオニスの手から、剣が放たれていた。まるで目に見えない剣士が剣を握るかのように、ひとりでに宙を舞うや、唸りを上げて猛烈な斬撃を放ったのだ。
鋭い音を立てて、瓶が、縦に真っ二つになった。一瞬、中の液体までもが真っ二つになるさまが見えた。それほどの鋭さにもかかわらず、アキレスの手には傷一つない。
瓶が床で粉々に砕け、真っ赤な液体がぶちまけられた。
アキレスは大げさに我が身を抱いてみせ、芝居がかった動作でひざまずいた。
「レオニス様のお力になろうとする一心でのこと……どうかお慈悲を」
「どうせ自分の力を増そうとして、血を求めたのだろう」
宙を舞う剣を手元に戻しながら、レオニスが嘲るように返す。
「じきにトールが戻る。それまでは野にいる獣の血だけで満足していろ。抜き採ってしまった血は仕方ない。自由にしろ。ただし二度と民の血を求めるな」
「全ては、レオニス様の御心のままに」
アキレスが深々と頭を垂れる。レオニスは剣を鞘に収め、顎をしゃくって、車椅子を押

するよう促した。アキレスは微動だにしない。レオニスたちが去り、ようやく顔を上げた。
そして、白い手袋に染みついた真っ赤な血を、じゅるっと音を立てて吸った。

救護院を出て城に戻る途中、レオニスは、ふと城の中庭に目を向け、
「なんだ……あれは」
怒りもあらわに、そちらへ車椅子を運ばせた。
豊かな緑と花々に囲まれたそこに、宴のための長テーブルが置かれ、その上に所狭しと料理が載っている。テーブルの両側には、城の貴人たちが並び、笑い声を上げていた。
単に、みなで外に出て遅い昼食にありついている──ようには、到底、見えなかった。
誰もが笑っていた。顔を真っ赤にし、涙を流しながら、獣の叫びかと思うばかりの声を上げているのだ。ある者は頭から酒を浴び、ある者は食っては笑いながら吐き、食っては笑いながら吐くということを繰り返す。皿をかじり、髪をかきむしり、己の胸を叩き、溢れ出す感情に今にも溺れ死にそうになりながら、それでも笑っていた。
「フロレス・アンブローシャ！　なんだこの有様は！」
レオニスの口から怒りの声が迸った。
すると、テーブルの一端で、貴人たちの様子を楽しげに眺めていた女が立ち上がり、

「これはこれはレオニス様……ご機嫌ようございます」
優雅な動作で会釈した。長身で、手足も長く、百合の花を連想するような柔らかな肢体だった。輝くような碧い双眸、ふんわりとした黄色に近い雛色の髪を上品に束ね、彫りの深い顔立ちは母性的な笑みに満ちている。その両手の中指に銀の指輪をはめ、指輪から細い鎖が、手の甲、袖の中へと伸びていた。
三人の客の最後の一人――調香師の女であった。調香・調味に優れ、特に香りに関しては料理以外にも様々な技能を持っている。彼女が作る香水は男女を問わず魅了し、城の料理人に、室内の香りにも気を遣って料理を出すよう勧めて、貴人たちから喜ばれていた。
「なんという香りだ」
狂乱の宴に近づいたレオニスが、慌てて執事に止まるよう指示する。
テーブルを中心に、猛烈な香りが渦を巻いていた。料理の香りだけではない。テーブルのあちこちに置かれた香油皿から立ち上る濃密な芳香が、目にしみるほどだ。
「我が家臣を狂い死にさせる気か、フロレス」
「いいえ、レオニス様……皆様の秘められた心を、自由にさせただけです」
女はゆっくりとテーブルを廻って、
「料理は、心を開くもの。それが宴席の心得でございます。たとえば、この方は今、幼い

頃に死別した母の記憶を思い出しているところ……」

皿をかじりながら金切り声を上げて顔を振りまくる男の肩を、そっと撫でた。かと思うと、その隣で己の髪をかきむしり、けたけた笑う男の背に手を当て、

「こちらの方は、若い頃、狩りのときに誤って大切にしていた愛犬を射抜いてしまった悲しみを思い出しているところ……」

深い愛情のこもったような声音で告げた。

「桶で水を汲んできて、全員の頭に浴びせろ」

レオニスがすげなく言った。フロレスが、残念そうな、咎めるような目つきで見やる。ぞくりとするような媚びを帯びたその視線も、レオニスは全く意に介さない。

「退屈まぎれに我が家臣を玩具にするか。人を狂わせる香りは封じておけ」

「狂わせるなどと……彼らの心の真実があらわれているのでございます」

「正気を失うような真実など、心の闇に呑み込ませておけ。さもなければお前の料理の香りづけに、アキレスの作った薬をかけさせるぞ。ほら、さっさと水をかけろ」

付き人たちが、おっかなびっくり貴人たちに水を浴びせて回る。正気に返ってぽかんとなる貴人たちの様子を優しく微笑んで眺めながら、フロレスはレオニスに近寄った。

「いつになれば、狩りに行かせて頂けるのですか……レオニス様？」

その囁きにさえ、甘い香りが漂うような声だった。レオニスは眉をひそめ、
「じきにトールが戻る。全てはそれからだ。絶好の狩り場を定めたら、お前にとって真実の獲物をくれてやる」
フロレスは匂い立つような仕草でうやうやしく頭を垂れた。
「真実……。ぜひ〈戦場の真実〉という名の獲物を、お与え下さい、レオニス様」
輝く目に、深い情念をたたえて、レオニスを見た。
レオニスはうなずき返し、車椅子を運ばせて今度こそようやく城に戻った。
「心待ちにしてるのは僕だ……。無事に戻って来てくれると信じてるよ……トール」
誰にも聞こえぬよう、ひそかに呟きながら、レオニスは彼方に目を向けていた。

3

青年が一人、馬で駆けていた。道から外れて草原を越え、やがて森に入った。ろくに周囲を見もせず、ひたすら真っ直ぐに進んでゆく。体内に羅針盤でも埋め込んでいるかのような鋭い方向感覚を持った青年だった。
しばらく森を進むと、ふいに門が見えた。古い聖堂の門だ。青年は離れた場所に馬を止めると、物音一つたてず門に近づいていった。

銀の髪に、濃い紫の目をした青年であった。引き締まった体に黒い法衣。鋭い顔つきをしているが、ひどく気配が薄い。それこそ木の影の一つであるかのような存在感の無さだ。影法師トール——気配を絶ち、影のように標的の背後に忍び寄る、優れた暗殺能力の持ち主であった。また逆に人の気配を察知する能力にも優れ、建物の中だろうが森の中だろうが、誰がどの辺りで動いているか、すぐに分かる。

そのトールが門をくぐり、はっと立ち止まった。石造りの柱や階段のそこかしこが真っ赤に染まっているのだ。死臭がした。吐き気を催すような、濃い血の臭い。

それに構わず、影のようにするすると石畳を進み、聖堂に入って愕然となった。壁や柱が、片っ端から打ち砕かれている。いったいどのような力が吹き荒れたのか、太い石の柱ごと吹き飛ばされた人間の手足が、黒焦げになって転がっていた。

トールは緊張を帯びぬよう体の力を抜き、中へと進んだ。部屋という部屋が荒らされ、ずたずたにされている。中庭に出たとき、ふいに何かが聞こえた。

低く、聖歌の旋律を口ずさむ声——礼拝堂からだ。入り口の脇に忍び寄り、中を覗いた。磨き上げられた床に亀裂が走り、砕かれた石像の腕や顔が転がっている。

そこに、男がいた。

礼拝堂の中央で、打ち倒された巨大な石像の上に、悠然と腰掛けている。

暗い堂内で蒼く浮かぶ、長い銀髪。透徹とした表情をたたえた白皙のおもて。もう二年以上も放浪生活を続けているはずなのに、その貴族服にはしみ一つ無い。まるで優れた彫刻師の手による氷像が、青ざめたマントを羽織って座っているようだった。

男の右手に握られた鎖の先で、十字型の紋章が揺れている。その動きに合わせて、聖歌を口ずさんでいるのだ。誕生の聖歌——新しい生命が生まれるときの、祝福の歌を。

トールが、その男の姿を覗いていると、唐突に歌がやんだ。

「以前、連絡に使っていた諜報員の男はずいぶんと口数が多かったが……今度の連絡役は、逆に、ひどく無口だ」

優しいとさえ言える声で、男が言った。

トールは目を見開いた。以前、この男の接近する気配が全く読めなかったのだ。そして今度は逆に、あっさりと自分の気配を読まれた。そういう驚きと怒りがトールの中で湧きかけ——すぐに消えた。トールはすぐさま一切の感情を消し、男に歩み寄った。

男の手の鎖が、ひときわ大きく揺れた。十字型の紋章が、滑らかな手に包まれる。

群青の目が、ゆっくりとトールを見つめた。苛烈なまでの意志がみなぎる眼差し。近づくほどに、圧倒的な存在感が稲妻のようにトールを打った。

汗ばむ手をひそかに拭い、トールは懐から書状を出した。

「レオニス様からの書状です……ヴィクトール・ドラクロワ卿閣下」
相手の足下に置くと、するすると退いた。
ドラクロワの右手が伸び、書状を取った。それまで握っていた十字型の紋章は、いつの間にかどこかへ消えている。半ばトールに目を向けながら書状を開き、
「トール・ヴュラード……。ヴラドの民の英雄、ドルク・ヴュラードの息子か……」
呟くようにそう口にした。声に、どこか面白がるような響きがあった。
「因縁だな……。あの男を……父の敵を討ちたいか？」
「は……」
曖昧な口調で返し、頭を垂れた。ドラクロワは書状を読み、微笑って言った。
「お前の主人は、あの男を狩るために狩人たちを雇ったか。お前も狩人の一人か？」
「はい……あの男を仕留めた者に、〈招く者〉の力を奪う権利を与えて下さるとか」
トールが、感情を殺した顔で、ドラクロワを見上げた。
ドラクロワは、静かに微笑している。だがその群青の双眸に、計り知れない思惑の光がよぎるのを、トールは確かに見た。
「お前の主人は、この書状で、二つのことを私に黙認するよう求めている」
「は……」

「一つは、増殖器の運搬を確実なものにするため、試作段階の増殖器を用いて囮とすること……。これについては承知したと伝えてもらおう」

トールは、ここに来る途中で見た、石柱ごと吹き飛ばされて黒焦げになった人間の手足を思い出していた。その未知の力を、いつドラクロワが放ってくるか予想がつかない。この男であれば優しく微笑みながら平然とその力を振るうだろう。まるでいつ落ちるか分からぬ断頭台の刃の下に首を差し出す気分だ。

その緊張に耐えながら、トールはドラクロワが表に出す全てを頭に叩き込んでいた。

「もう一つは、お前が今、口にしたことだ。あの男を討ち果たしたとき……〈招く者〉の力を、褒美として家臣に与えること……。確かに……あれはもともと、私が受け継いだ聖堂に伝わる秘儀だった。かつてこの私が、あの男に与えたものだ……」

ドラクロワは、ジークのことを不自然なくらい、あの男としか呼ばなかった。その名を口にすれば何かがあらわになってしまうとでも言うように。そして〈招く者〉の力について話すときの、日の光。先ほど口ずさんでいた誕生の歌――十字型の紋章の形状。

それらを完璧に記憶しながら、トールはドラクロワを見つめ、言った。

「どの狩人も、〈招く者〉の力が奪えるとなれば、命懸けで戦うでしょう」

「あの力は……素質がなければ、お前たちに恐ろしい苦しみの果ての死をもたらすだろう。

この私でさえ、あの力は受け継げなかったのだ」
明らかな脅し――事前にレオニスから教えられた通りのことを、ドラクロワは口にしていた。トールは内心を隠すように、うやうやしく頭を垂れた。
「あれほどの力を得るためならば、死をも覚悟します」
これもレオニスに教えられた言葉だった。僅かな沈黙。やがてドラクロワの何ごとかを心に決めたような気配とともに、
「良かろう……承知した」
刹那、凄まじいまでの力の気配が生じ、トールは反射的に何歩も後ろに飛びのいた。殺される――本気でそう思った。咄嗟に手を翻し、漆黒の短剣を現していた。
「その速さで、聖性と堕気を混ぜ合わせて鋼を造るとは……自分以外では初めて見たな」
穏やかに微笑しながらドラクロワは言った。その手の中で、何かが塵と化していた。
レオニスの書状だ――かすかに、黒い稲妻のようなものがマントに隠れた左手の辺りで舞っていた。あれが、石も人間も同じように吹き飛ばすドラクロワの力だろうか――
「失礼致しました……臆病者ゆえ……お許し下さい」
詫びながら、再び手を翻し、漆黒の短剣を黒い靄と化して消す。
「なに……お前のその力で、あの男を仕留められることを期待している」

そしてトールは確信した——ドラクロワは、内心とは全く逆のことを言っている。
「あの男を討ち果たした者こそ、〈招く者〉の力の、真の継承者となるだろう……そう主人に伝えるがいい、トール・ヴュラードよ」
ドラクロワは、そう言った。まるで、ジーク以外にあの力を受け継げる者などいるはずがないと、強く信じているかのように。

4

「ご苦労だったね、トール。本当に無事で良かった」
レオニスは、廷臣にもどんな客にも見せないような笑顔を浮かべてトールを迎えた。
トールも、いつもは無感情を絵に描いたような顔を、心なしほころばせ、
「レオニス様の予想通り、ドラクロワは確かに、ジークと〈招く者〉の力にこだわっているようでした。自分を追う最も手強い敵であるのに……。親友だったからでしょうか」
「そんな感傷にとらわれる男じゃないさ……ドラクロワは」
レオニスは、執務室の机に飾られた白水仙の花を手に取り、言った。
「これで確信した……。ジークという存在は、あの男が追い求める秘儀にとって必要なんだ。〈刻の竜頭〉も、〈招く者〉の力も、ドラクロワが継承していた聖堂に伝わっていた。

もしかすると、その二つは、どこかでつながりがあるのかもしれない」
「つながり……ですか」
「今、両方の秘儀について、学者たちに幾つか仮説を立てさせているところだ。少なくともこれで、ドラクロワの思惑が見えた。あの男につけ込める隙が」
愛しそうに花を撫でるレオニスのおもてに、ぞくりとするような微笑が浮かんだ。
「あの男の真実を、僕が奪ってやる……。ジークを倒して〈招く者〉の力を手に入れる。その次は外典イザーク書だ。そして……」
ジークの傍らにいるあの少女を、この聖地に迎えるのだ。彼女に、故郷を与えるために。そうするのにふさわしい領地にしてみせる。ドラクロワよりも聖法庁よりも、真に大陸の中心としてふさわしい場所に。たとえ、どんな力を——悪意を振るってでも。
その思いを灼熱の痛みとともに胸に秘め、レオニスは悽愴の微笑を浮かべて言い放った。
「時は熟した。狩人たちに、狩りを命じるときだ。さあ、皆殺しの矢を放たせよう」
「……あたし、行かない」
レティーシャが、ぼそっと、ほとんど聞こえないような声で言った。
何か言ったか、というのがレオニスの本音だった。自分より年上の者が子供のように

駄々をこねる姿というのは、レオニスにとって生理的嫌悪感の対象以外の何でもない。
　ようやく機が熟し、しかも今でなければならない風雲急を告げるこのときに――
「……兄様、そう言ってる。ね、兄様。行かない。ね、兄様。行かないって。ほら、ね」
　両手で持った頭蓋骨を揺すって、かたかた歯を鳴らせるレティーシャの鬱陶しさに、レオニスも無視しきれず、眉間に深い皺を寄せて振り向いた。
「どういうつもりだ、レティーシャ。黙って、兄様を綺麗にした男を綺麗にしに行け」
　レティーシャは、わざわざ執務室の隅に寄せた椅子の上で両足を抱えて座った姿勢で、
「……行かない方が良いって、兄様が。どうせ、この人たちと一緒だと無理だって、兄様が。どうせ、この人たちには無理だし。兄様、言ってるのに。兄様、ね」
　頭蓋骨と喋る地獄の彫刻師レティーシャ・ベルゼブベスを、残り三人が一斉に振り向く。
　吸血医師アキレス・ツェペット、惑乱の調香師フロレス・アンブローシャ、そして影法師トール・ヴュラードである。
「一度、彼女の頭の血を抜いてみたいものですね。良い毒が採れそうですよ」
　アキレスがレティーシャを見て嗤う。蛭が人の皮をかぶったような不気味な笑みだった。
「可哀想な子……。私が持っている香りの中でも最も快いものを嗅がせて、心を開かせてあげたいわ。まあ……心の中に、何か残っていれば良いのだけれども」

フロレスが艶やかな微笑に、ぞっとするものを込めて言う。
「馬鹿はみんな死んじゃえ」
頭蓋骨と目を合わせながら、レティーシャがぼんやりした顔のまま言った。
アキレスとフロレスが、それぞれの笑みを保ったまま、腰を浮かせかけた。
「……って、兄様が。ふー、兄様。おかしい、兄様。ふー」
笑っているのか何なのか、しきりに頭蓋骨に息を吹きかけるレティーシャの姿に、
「相手にするな。どうせ会話にならん」
レオニスがぴしりと言って、アキレスとフロレスの怒りを封じた。
「私は、何人でも構いません、レオニス様」
トールが無表情のまま顔をレオニスへ戻す。トールがひそかにレオニスから与えられた役目は、ジークと刺客たちの戦いから、ノヴィアを守ることだ。先頭に立つことはない。
また内心ではレティーシャと同感だった。アキレスにしろフロレスにしろ、ジークの力を殺ぐことくらいは出来るだろう。その上でジークを仕留めるのだ。複数の兵力で相手を消耗させることは卑怯でも何でもない、戦場での常套手段だった。
だが少なくとも背後からは狙わない。正面から全力で襲いかかる。そういう気だった。
「……ずるい人。ね、兄様。ふー」

レティーシャがまたぼんやりと言った。トールが反射的に目を向けるが、レティーシャは椅子に座ってからずっと頭蓋骨としか目を合わせていない。人に聞かせるつもりで喋っているのかどうかもはっきりしないくせに、どうも嫌な間合いで口を挟んでくる。

「気にするな。庭で鳴いているカラスか何かだと思え、トール」

レオニスが、完璧にレティーシャを戦力外と判断した顔で言った。レオニスもトールの算段は知っているが、アキレスとフロレスのいる前とあって、おくびにも出さない。代わりに、戦いの舞台となる都市やその周辺の詳細な地図を、三人にそれぞれ渡した。

「競争相手が減ったという喜ばしい事態になったわけですが……出立はいつですか?」

アキレスが体を動かし、レティーシャを視界から外して訊く。

「明日……夜明けの鐘が鳴る前にだ。三人一緒に、この地を出てもらう。この狩りこそ、聖地シャイオンの明暗を分かつ戦いだ。くれぐれも力を出し惜しみするな」

レオニスは三人を見渡し、最も重要なことを言った。

「ただし、ジークの従士には手出しは無用だ。くれぐれも彼女を傷つけるな。たとえ彼女がジークを補佐する者であったとしてもだ。彼女に万一のことがあれば、聖地シャイオンの総力を挙げて、僕が、お前たちを狩ることになる」

「重々承知しておりますわ、レオニス様。私たちの目的はあの男のみ……三人のうち誰が、

真実の獲物をとらえ、〈招く者〉の力を奪うのか……楽しみね」

フロレスが、レティーシャに背を向けるようにして、そっと立ち上がった。

「御心のままに、レオニス様……我が主君に、真にふさわしきお方よ」

アキレスもうやうやしく立ち上がる。トールだけ、ちらりとレティーシャの様子を窺いながら立った。行かないと言いつつ、実は三人に先行してジークを狙うのではないか――

「ずるい人はずるいこと考えるね、兄様。そうなんだ、兄様。馬鹿は死ぬんだ、ふー」

レティーシャが、ぼそぼそ囁く。明らかにトールの内心を読んでいるような言動である。

そのときトールの脳裏に浮かんだのは、あの頭蓋骨は果たしてただの玩具なのか、それとも何か力を秘めた道具なのか、ということだった。

レティーシャは、頭蓋骨を見つめたまま何も言わなかった。

トールは、何の表情も浮かべずに、レオニスに目を戻した。

「狩人たちよ、手に入れるべきさらなる力を求めて存分に戦うがいい。諸君らの勝利と栄光こそ、聖地シャイオンの偉大な礎となるだろう」

アキレスとフロレス、そしてトールが、揃って頭を垂れ、無言で執務室を出て行った。

レオニスはしばし宙を見つめていた。それから、部屋の隅に座ったまま、頭蓋骨をかた

かた鳴らし続けるレティーシャに、ゆっくりと顔を向け、睨みつけた。

「単独で動きたいのなら、なぜそう言わない。他の狩人たちを不意打ちしたりせず、ジークだけを狙うならば、他の三人には黙ったまま行かせてやる」

「……あたし行かない。……兄様、言ってる。兄様、ね。まだ綺麗じゃないよね」

苛々するレオニスを見もせず、レティーシャは体全体を揺らしながら囁いている。

「ならば働いてもらおう。この聖地シャイオンをあらわすような像を彫れ。戦士の像でも女神像でも何でも良い。ただし、お前ではなく僕が綺麗だと思う像をだ。絶好の狩り場を自分から捨てたんだ。それくらいのことはしてもらうぞ」

レティーシャは返事もせずに立ち上がると、愛しそうに頭蓋骨を撫でながら部屋を出て行ってしまった。まさしく遠慮も会釈もない。あまりのことにレオニスの顔から表情が消えた。猛烈な怒りをこめて車椅子の後ろの宝剣を握りしめた、そのとき――

「レオニス様……ほんとは綺麗になりたいの。ふー、あたしみたいに。いっぱい、あたしの綺麗な像を彫らせてくれたら、レオニス様の綺麗な像を彫ったげる。ね、兄様。そしたら、あたしの綺麗と、レオニス様の綺麗は、きっと一緒になるから。そしたら、一緒に綺麗にしに行こう。ね、兄様。それまで一番綺麗なのは、兄様だけ。ね。ふー」

ぺたぺたいう足音とともに、そんな声が聞こえてきた。

レオニスは宝剣から手を離し、車椅子の車輪を回して、廊下を見やった。
レティーシャが裸足で歩き去るのが見えた。初めて城を訪れたときは靴を履いていたが、今は城の中ならどこでも裸足だった。そのうち外でも裸足になるかもしれないなと、レオニスはぼんやり考え――はっと我に返った。思わず荒々しい声を放った。
「お前と一緒になるだと……？　そんなことになったら……自分から死んでやる」
「いけません、レオニス様」
背後からいきなり声をかけられ、レオニスがぎょっとなる。いつの間にか執務室に戻ったトールだった。他の面々と一緒に出て行ったのは、常に行動を同じくすると思わせておくための芝居である。その後で戻ってくることもふくめて、レオニスの指示だった。
「ご冗談でも、今のような言動はお控え下さい」
トールが無表情に言う。そのくせ、いつもはない妙な迫力があった。トールが怒っているということをレオニスは敏感に察した。取り繕うように咳払いし、肩をすくめ、
「ああ……あの女が、あんまり勝手なことを言うから……」
「私が斬りましょうか」
「あ、いや、いい。お前の剣が汚れる。あの女には、別の仕事をやらせることにした」
「は……」

「残りの二人の様子は？」
「アキレスは出発の準備をしております。フロレスは厩舎で馬を選んでおります」
「気を付けろ。何をするか分からない奴らだ。最初にお前を襲うかもしれない。ノヴィアのことだって、どこまで守るか……」
「いざとなれば姿を消し、ノヴィア様を守ります。私の命に代えても」
トールにしては珍しく気負った返答である。レオニスは素直に喜んだ。
「頼んだよ、トール」
「はい」
トールはぴたりと内心の秘密を隠している。ノヴィアに対するレオニスの気持ちは、今や聖地を発展させる思いそのものとなっていた。この地をノヴィアにふさわしい故郷にする——その一念が、いったいどれほど、この若い領主の心の支えとなっていることか。
今はまだレオニスに、ノヴィアとの血縁の真実を知らせてはならない。またノヴィアをこの聖地に迎えてはならない。それら二つの決意を満たす行動は、ごく限られている。
ジークを倒した上で、それが正当な戦いの結果であることを納得してもらうとともに、ノヴィアに血縁の真実を告げるのだ。そして、聖地シャイオンに近づかぬよう頼む。
まさかあの少女が、復讐のために実の弟を殺しに来るとはトールには思えない。

代わりにノヴィアは、肉親が自分の想い人を殺すという最悪の傷を抱えたまま、故郷にも戻れず大陸をさまようことになる。それに耐えられず復讐をはかるなら、そのときはトールがその手で彼女を殺す。もし耐えるなら、いずれ機を見てトールからレオニスに血縁の真実を話し、そのときに改めて彼女を聖地に迎える。

我ながら、ひどく一方的で、虫の良すぎる話だが、今はそれ以外に考えられなかった。

さもなければ――もしかするとレオニスは、復讐に来るノヴィアに対し、自ら望んで命を差し出すかもしれないのだ。そして自分の代わりに、ノヴィアに聖地を譲る――

そんな事態だけは、何があっても許すことが出来なかった。

「必ず……御心のままに……レオニス様」

言葉を重ねて、自分の気持ちをごまかした。レオニスが嬉しげに微笑んだとき、ずるい、ずるい、というレティーシャの声が、トールの耳の奥で甦っていた。

5

「ルカの都市を攻めることになるかもしれんか……。貿易路の要で攻城戦などやれば、この街は大打撃を受ける。しばらく何の商売も出来なくなるだろう」

街の市長が言った。ジークはうなずいてみせた。ここの市長は聖法庁とも関わりが深く、

家柄ゆえに市政に携わりながら、同時に司祭になることも狙っているほどの有力者だった。
「だが多くの都市が、物資の運搬を見て見ぬふりをしている」
「商売を守るためだ……当然だろう。逆に物資の運搬を任せられれば金になる。たとえそれが武器であろうとも、自分たち自身が戦争をするわけではないからな」
「その結果、大陸中に戦乱が起こる可能性がある」
「お主は、その可能性とやらを信じておるのか？　あのドラクロワが……それほどの戦乱を起こそうとしているなど、本気で信じられるのか？」
ジークは無言でいる。その脳裏に、数々の光景が思い浮かんでいた。どれもドラクロワがもたらした、悲惨な殺戮と破壊の光景だった。
「わしには信じられん……かつての彼の理想を、わしも聞いたことがあるのだ……」
「この聖堂が、ドラクロワのための物資の運搬に手を貸していたことは分かっている」
淡々とジークが言った。市長が息をのみ、思わず席を立ちかけたが、
「確かに、お前たちが戦争をするわけではないだろう。ならばいつどこで戦いが起こっても、最後まで手を出すな」
「そ……それは……わ、わしらを見逃す代わりに、じっとしていろと……？」
「ルカの都市が滅んでも黙って見ていろ。さもなければ俺が、この都市ごと滅ぼす」

市長は死人のように青ざめ、力無く椅子に身を沈めた。その様子を見てから、ジークはシャベルを担いで席を立った。部屋を出ようとして、市長が震える声を零した。

「ドラクロワを信じぬのか……？　そなたは、かつてドラクロワの第一の騎士……。もし万が一……ドラクロワがそなたを信じてことを行っていたら、どうするのだ」

「そのときは……理想が死ぬときだ」

市長が、びくっとのけぞった。一瞬遅れて、ジークはそれほどの殺気を全身にみなぎらせていたことに気づいた。さっと市長に背を向け、足早に市庁舎から出て行った。

あのまま市長を目にしていたら、うっかり斬り倒してしまいそうだった。

どうせ自分たちは戦わないからと武器を売り、無責任に戦乱の首謀者を信用し、さも自分の側に善意があるかのような言葉が、ひどくジークの癇に障った。何より――

（ドラクロワがそなたを信じてことを行っていたら）

その言葉をあのような者に口にされるだけで、燃えるような怒りが胸中に吹き荒れた。

気づけば左手が凄まじい力でシャベルの柄を握りしめている。普段は押し込めている焦りや怒りや悲しみが、内側からジークを責め苛んだ。

ジークは人混みの中を歩み、広場に来て立ち止まった。街の豊かさを示すような噴水が、涼やかな飛沫を飛ばしている。ざわめきと雑踏の音に紛れるようにして、

「ドラクロワ……」

かすかな呟きが零れた。もしドラクロワがいまだに理想を抱き、ジークを信じて、数々の陰惨な内乱を引き起こしていたとしたら——そんな歪んだ理想と信頼をドラクロワが抱いているということ自体、耐え難かった。ドラクロワが完全に理想もジークの存在も棄てて聖法庁に復讐する気でいる場合と、どちらが辛いのか——自分でも分からなかった。

「あいつを止められるのか……俺に……。シーラ……」

止めるために相手に迫り、そして力至らずドラクロワに殺されるなら、まだいい。

だが止められずに、殺してしまったら？　怒りや悲しみで、あの男を自分の手で斬り伏せてしまったら？　自分はそれに耐えられるのか？　かつてともに理想を抱いた者たちを、二人とも自分の手で殺めてなお、一人だけ生き延びた自分を許せるのか？

そして——こんな思いを抱いたまま戦ったところで、ただ殺されるだけではないのか？

ジークは鋭く、噴水の飛沫の下で揺らめく水面を睨みつけた。

己の左腕にやどる堕気が、より強大な力を求めている気がした。シャベルの柄を握りしめる左手から、細い糸のように、かすかに青白い稲妻のかけらが零れ出す。

遥かに強大な力を持てば——ドラクロワを殺さずに止めることが出来るだろう。

そして、もし万が一ドラクロワを殺してしまったとしても、強大な力さえあればそれが、

自分にとってのドラクロワの代わりとなるだろう――

そういうとてつもない負の思いが、にわかに左腕全体に膨れあがるようだった。狂おしい呻きが、塊となって喉をのぼってきて今にも吐き出されそうになった、そのとき――

ふいに、視線を感じていた。

(ノヴィア――)

その名が、思いも寄らぬ心のどこかからか響いてきた。

(俺も、いつでも怪物になる可能性がある)

ジークは天を仰ぎ、目を閉じた。遠くから見守る者のかすかな聖性を感じ、怒りと焦りで忘れかけていた心が甦ってくる。

(絶対にそんなことはありません)

口をついて出たのは、呻き声ではなく、深い溜め息だった。それまで胸の奥で渦巻いていたものが鎮まり、左腕に荒れ狂いそうになっていた力がゆっくりと宥められてゆく。

(私が見守る限り、絶対に、ジーク様にそんなことはありません)

かつて聖地シャイオンから、ノヴィアとともに旅立ったときの言葉――

力が至らなかったとして、どうだというのだ。自分の力など完全なものか。怒りで追うな。焦りで追うな。ただ信じろ。相手を――そして自分を。

ジークは目を開き、揺れる水面を見つめた。噴水の涼しさが心地よかった。
（ジーク様――）
ふと、ノヴィアとは違う者の声が、心の奥の方から響いてきた。
かつての従士の声――自分の名を呼ぶ、若い娘の面影が胸をよぎる。ジークの記憶の中で、娘はいつも諦めの込もった悲しい微笑を浮かべている。心の片隅に残る彼女の悲しみのせいで、そんな風にしか彼女のことを思い出せないのだろう。
彼女だけでなく――かつていた四人の従士たちの誰も、生きて望みを叶えられなかった。ある者は力に巻き込まれ、ある者は力を求めて。ジークがその手で斬った者さえいた。非業の死を遂げた彼らを葬ってなお、こうして五人目の従士を――それも、あのような小さな少女を死と破壊の場につれてゆくことになるとは我ながら信じられなかった。だが、
（私も、出ました――）
一度は置いて行こうとしたとき、ノヴィアが見せた意志が、ジークに決めさせたのだ。
（私も、円から出ました）
ノヴィアが受章の際に、決めたこと。それこそ過去四人の従士の、誰もが越えられなかったことだった。それをあの少女は、自分だけの意志で越えてみせたのだ。そしてだからこそジークは己の旅にノヴィアを迎えたのだった。この世界を、見守る者として。

ジークは、ゆっくりと、自分の腹の辺りを見つめた。
並んで立ったとき、ノヴィアの頭がちょうど来る辺りである。
「小さいものか……」
ぽつっと呟き、顔を上げた。滅多にないことに、かすかな微笑さえ浮かべていた。

ノヴィアはどきっとなって視覚を元に戻した。ジークがいきなり微笑んだのだ。それも、まるで自分が覗いていることに気づいて、笑みを浮かべたかのように。
どうせ子供のすることだ――ジークにそう言われたかのように、ノヴィアには思えた。
従士として咎めるのにも値しない。叱っても仕方がない。まさか、自由に力を使えと言ったのは、再びジークをのぞくかどうか試したのではないか。ノヴィアの自制心を。力を持つ者としてふさわしいかどうかを。従士としての価値を。
「なんで……やっちゃったんだろう……私……」
たまらない恥ずかしさと不安ともの悲しさに、真っ赤になってうつむくノヴィアに、
「あれ……？　ノヴィア、ちょっと、ねぇ……やっちゃったって……また見たの？」
アリスハートが呆気に取られたように訊く。
ノヴィアが顔を上げ、こくんとうなずいた。拍子に小さな涙がぽろっと零れた。

「なんでだろう……私……」
またうつむくノヴィアの首筋を、アリスハートが困ったように撫でた。
実を言えば、アリスハートには「なんで」の理由が痛いほど分かっている。
盲目だったノヴィアに光を与えたのがジークだからに決まっていた。見るということを再びもたらしてくれた相手なのである。ノヴィアがジークを見るとき、それは太陽を仰いで、暗闇から救ってくれた輝きの恩恵に感謝することと同じことなのだ。
そんな大事なものから目をそらせと言う方が無茶だった。
「そんな、ちょっと見ちゃうくらい平気だよぉ。大丈夫だよぉ」
「ねぇ……一緒に謝ってよぉ……アリスハート……」
顔を伏せたまま弱々しく言う。いつものノヴィアに比べて信じられないくらい子供っぽい態度だった。それだけ心細くなっているのだ。いや、むしろ、普段は押し込められている本来の年齢に見合った心が、単にこうして出てきているだけなのかもしれない。そう思ってアリスハートはしみじみとノヴィアの首筋を撫で続けながら、
「良いわよぉ。何だったらあたしが見ろって言ったって、そう言えば良いじゃない」
「駄目よぉ、そんなのぉ……」
袖で目元を拭い、嗚咽を我慢しながら、きっぱりと顔を上げた。

「ちゃんと謝らないと、自分のこと嫌いになっちゃうよぉ」
半分泣き声になって言う。その目も鼻も赤い。アリスハートは微笑ましげにノヴィアの首を叩き、元気良く言った。
「そうね。頑張れ、ノヴィアちゃん」
ノヴィアは、ぐすっと一つだけしゃくり上げながら、
「……はいっ、……頑張りますっ」
弱々しいながらも精一杯の潔さで応えるのだった。

「どうした、力を使いすぎたか」
ジークの第一声が、それだった。淡々としているようでどこか驚いたような響きがある。
涙目になって見上げるノヴィアを、逆に上から覗き込むようにして、
「目が赤いな」
「あ、あの……ジーク様、私……」
「しばらく休む必要があるか？」
ノヴィアが、慌ててかぶりを振る。
「だ、大丈夫です。明日になれば、全然……何の問題もありません」



咄嗟にそう答えながら、なんで叱らないんだろうと不思議に思うばかりだった。
夕刻になるだいぶ前から、ノヴィアは聖堂を訪れ、ジークの帰りを待っていた。
万里眼で捜し出して街の中を追っかけて行くことも考えられたが、ジークの任務の妨げになるのではという恐れから、ただひたすら待つことに決めた。待つ間も、万里眼を使って今どこにいるのかと捜したりしない。
その代わり、食事の用意などは済ませてしまっていたのだが、
「今日はもういい。帰って休め」
などと、さらにノヴィアの所在なさを招く結果となってしまった。
そばではアリスハートがほとほと困ったようにノヴィアとジークを見比べている。
「わ、私、お側にいては……いけませんか」
「お前の力が、必要だ」
ジークが言った。そのたった一言で、ノヴィアは全ての言葉を失った。なぜ自分が絶句するのか、それさえ咄嗟に分からなかった。
「明日、街を出る。準備が整った。おそらく戦いになるだろう」
ノヴィアは、おずおずとうなずくしかない。
「今日は休め」

また反射的に、うなずいた。とぼとぼと部屋のドアを開け、

「……失礼します」

やっとのことでそれだけ言葉を絞り出し――聖堂を後にした。

「私の、力が必要……」

宿に向かう途中、無意識に呟きが零れ、やっと理解していた。

「私が必要なんじゃないんだ……」

アリスハートが、ぎょっとなった。それはノヴィアが一番陥ってはいけない感情であることをよく知っていたからだ。ノヴィアにとって呪いに等しく、また盲目に戻るかと、

「そ、そんなことない、そんなことない、そんなことないって」

慌てふためいたものだ。かと思うと、

「――良かった」

ノヴィアは大きく息をついている。

「え……、嘘……ノヴィア、ちょっと……」

「なんだか……少し、ほっとしちゃった。ジーク様、私のこと、を怒ってなかったんだ」

「ノ、ノヴィア……？　ねえ……大丈夫う？」

「私の力が……要るって言って下さったから……。それだけでも……感謝しないと」

そう言って、にこっと笑った。アリスハートがあまり好きになれない、作ったような笑いだった。そんな笑いをノヴィアが浮かべることがショックだった。だが誰より辛いのはノヴィアであることも分かっていた。アリスハートは、しょんぼりと宙を舞い、
「そんな風に……そんなこと言っちゃ駄目だよぉ……ノヴィアぁ」
「だって……」
ノヴィアは作ったような笑みのまま、遠くにある聖堂を振り返り、ぽつんと呟いた。
「他にどうすれば良いのか、分からないんだもの」

暗い闇が森を覆っていた。そこにある聖堂の血塗られた跡も、闇の中でははっきりと見えない。まるで全てが綺麗に溶けて、どことも知れぬ場所へと沈んでゆくようだった。
「まだ……生まれないのか……シーラ」
男の囁きが、真っ暗な聖堂の中に響いた。打ち倒された像の上に座り、
「お前の……聖性の形は……私の心に、はっきりと見えているのに……」
右手に握った鎖の先で揺れる、十字型の紋章を、遠いものでも見るように眺めていた。
「聖性の形……。四つの翼……。白い鳥……。私の、新たな導となるもの……」
そしてふと顔を巡らせた。その苛烈な眼差しで、闇の向こうにいる誰かを捜すように、

「やはり、あの男でなければ駄目なのか……。お前を……殺した男でなければ」
ひどく澄んだような声で、問いかける。
「あの男の力……あの男の存在……。それらを引き出し……魂の形を招けるほどの莫大な聖性を、集積出来るほどの……聖地。それさえ揃えば……飛び立つのか……シーラ」
全てが溶けて沈むかのような闇に、男は座り続けていた。

「まったく私としたことが……あの女をみくびり過ぎましたね」
馬を駆り立てながら、黒髪の男が自嘲めいて言う。レオニスに招かれた狩人の一人——吸血医師アキレスであった。
「あの女の力を、レオニス様から聞いていたのではないのですか？　トールさん？」
すぐ隣で馬を走らせるもう一人の男に向かって、声を張り上げる。ことさら大声を出すのは、トールがあまりに気配がなく、馬だけ走っているような錯覚を起こさせるからだ。
「香りで、人の心の底にあるものを暴き、正気を失わせるとしか聞いていません」
銀髪の青年——影法師トールが無感情に答える。内心では、アキレス同様、己の不甲斐なさを呪うような気持ちであった。
出立を明日に控えたその夜——アキレスもトールも、実は抜け駆けをして深夜のうちに

聖地を出るつもりでいたのである。だが、なぜかそのことを思い出したのは、次の日の深夜過ぎであった。丸一日、いったい自分が何をしていたのかまるで分からない。

出立の日だと思っていた二人をレオニスが見つけ、

「お前たち、何をやってるんだ？　昨日の朝に出発したんじゃなかったのか？」

三人揃って呆然となり、ようやく事態が明らかになったというわけだった。

「私もあなたも同じような症状……間違いなくあの女の仕業でしょう。彼女の方が、私たちより上手だったということですね。それも、私の想像が正しければ……彼女が姿を消していかぎり、対決を避ける限り、彼女に勝てる者は誰もいないということになる……」

目的地に向かってとにかく馬を急がせながら、アキレスが呟く。

トールも半ば、フロレスの本当の力を悟り始めている。だが本当の問題は、フロレスがその力を用いて、目的地である都市で何をする気かということだった。

夜が明けてもなお、アキレスもトールも馬を使い潰す気で駆け続けた。街に入り、駅舎で馬を替え、さらに進む。結局、丸一日半かけて、三日はかかる旅程を走破してしまった。

それでもフロレスに追いつくことは出来ぬまま、

「おお、なんと勇壮な。やっと見えましたよ……城塞都市ルカが」

アキレスが思わず感嘆するほどの、巨大な石造りの都市に辿り着いたのだった。

北側の険峻な岩山を背に、ややいびつな六角形の街が形づくられている。城壁は五つ。西側は一面の崖で、大きな石橋が城門へと渡っていた。南と東に二つずつ城壁があり、それぞれの城門から、岩道を綺麗に舗装した街道が延びている。南から街に入り、

「……さて、着きましたが、どうしたものですかね」

早朝の霧が濃い街路を、馬で進みながらアキレスが言う。

「城の者に、レオニス様から書状が渡っているはずです。直接、行きましょう」

「城では、フロレスが待ちかまえているでしょうに」

「彼女の敵は、そもそも私たちではないはずですから」

トールが言う。アキレスが面白そうに、くすくす笑った。

「私とフロレスをぶつけて、その隙に今度はあなたが姿を消す気ですか？」

トールは無表情にアキレスを見やるだけである。本音を言えばその通りだったが、そう上手く行くとも思っていない。ただ、フロレスが待ちかまえている城に、正面から入ってゆくつもりはなかった。この霧に乗じて、城に忍び込むのである。かと思うと、

「彼女の敵が私たちでないのなら、良い考えがあります。一休みするのですよ」

「一休み？」

「ジークたちがこの街で彼女と戦うまで、じっとしているのです。こうなれば狩りの先頭

は彼女に譲りましょう。その代わり隙あらば襲いかかってジークを殺す……彼女ごとね」
アキレスは濡れたような黒い目を見開いて笑った。まるで巨大な蛭が笑うようだった。
「私にこのような屈辱を味わわせたのです。一滴残らず血を吸ってあげますよ」
そう言いながら馬から下りて宿へ向かう。トールもそれに倣った。確かに移動で体力を消耗し過ぎた。ジークがまだ現れていないことを考えれば、今は少しでも休むべきだった。
早朝であったが貿易の盛んな街とあって、宿の者もちゃんと起きている。アキレスは旅の医師、トールは巡礼者として、宿をとった。大部屋ではなく、個室である。ふいに、
「……これはこれは。トールさん、あなた気づいていましたか？」
「いえ……まさか……」
「あの、お二人とも、どうかなさいましたか？」
宿の者が不思議そうに尋ねる。アキレスがぬっと軟体動物のように身を乗り出し、
「この帳簿の、この日付は、本当に確かなのですか？」
宿の者は不審そうにうなずくばかりである。
アキレスは、くっくっと笑い声を零しながら、あてがわれた部屋へ向かった。トールはその隣の部屋である。階段を登りながら、アキレスが笑いに怒りをにじませ、言った。
「聖地を出てから二日ですか。てっきり一日ばかりかと思っていたのですがね。どうりで

疲れているはずですよ」
「半分……ですか」
「倍とも考えられますね。私たちはどうやら、朝が来ようが夜が来ようが、二日経たなければ一日が経たないと思い込まされているようです」
「過ぎた時間の半分しか思い出せないのかもしれません……。眠り続けているのか……あるいは目覚めたときに忘れてしまっているのかも」
「さあ……しかしこれではっきりしました。彼女の恐ろしさがね。彼女が人の正気を失わせていたのは、力のごく表面的な部分でしかなかったのですよ。彼女は、人を正気のまま操る力を持っている。さあ、私はこれから休みます。次に目覚めたとき、お互いの心のどこが無くなっているか、ゆっくり話し合おうじゃありませんか」

6

数日かけて馬車を乗り継ぎ、ルカの都市に向かう間、ノヴィアはやけに元気だった。
「今、南の街道を両方とも騎士団が封鎖しました。西と東はまだこれからのようです」
などと、潑剌とした目で辺りを見回しては、ジークに状況を報告する。
「都市を一斉に封鎖する期限は三日だ。どの騎士団もそれ以上は砦を留守には出来ない」

「はいっ」
「三日で叩く。都市に入ったらお前の目が頼りだ」
「はいっ」
ノヴィアがはきはきと受け答えする傍らで、アリスハートはどこか悲しげでいる。
「大丈夫ぅ、ノヴィア？　そんなに元気で三日も持つのぉ？」
「頑張らないと……だって、少なくともジーク様が求めてるこれは、私の力なんだもの」
こっそりアリスハートに囁き、しっかりと辺りを見る。
「ノヴィア、次の馬車に乗り換えるぞ。これで最後だ」
「はいっ」
素早く駅舎で降り、次の駅舎に向かう馬車に乗る。そうしてきびきびと動いていると、どんな嫌な感情だって意識せずに済む。そんな風にノヴィアは思う。
あるのは役に立ちたいという気持ちと、実際、役に立っているという実感だけ。それだけで良かった。それ以外は何も感じたくなかった。
何も見逃さないよう目をこらし、しっかりと巨大な城塞都市の周辺を、一定の間隔ごとに見てゆく。そのノヴィアの視覚が、ふいに異様なものをとらえた。
「西の街道に……ジーク様……大勢の人がいます」

「大勢？」
「みんな、西の大きな橋から、急いで街を出て行きます。他の門は閉じてます」
城門を閉ざすのは、明らかに戦闘準備である。ジークの顔がさらに鋭く引き締まる。
「あ……西を封鎖する騎士団が……大勢の人たちを止めようとして……何、あれ……」
「城外に脱出しようとする一団がいるのか？　西の門だけ開いているんだな？」
「は、はい……あ、騎士団も止められないみたいです。でも、何、あの橋の上の……」
「城の内部で分裂が起こったか……？　どうした？」
「あれって……みんな逃げてる……逃げてるんだ……あ、あ……ジーク様！」
いきなりノヴィアが叫び声を上げた。ジークが眉をひそめ、アリスハートが仰天する。
「じょ、城門の内側から、沢山の魔獣が出てきてるんです！　ひ、人を、人を襲って……
あ、あ、逃げて！　みんな早く逃げてっ！　みんな、みんな殺され……」
ジークが横からさっと左手を伸ばし、ノヴィアの目を覆った。
「見なくて良い、ノヴィア」
堕気が聖性を遮り、暗闇とともに大きな手の温もりがいっときノヴィアの心を満たした。
「力を温存しろ。最悪の状況かもしれん」
だがその一言で、ノヴィアの心はまた、大きなもので蓋をされたようになった。

役に立ちたい、役に立っている。この力を使って。そう、自分の力を使って——

ジークの手が離れた。ノヴィアは通常の視界で、ジークを振り向いた。

「おそらく、都市の内部で増殖器が発動したのだろう……」

低い呟きが、悔恨の響きを帯びていた。準備が、到着が、僅かに遅かったのだ。

あと一日早ければ——そういう思いをこらえてジークは遠くに見え始めた巨大な城塞都市に、じっと目を向けている。ノヴィアがその横顔を見守っていることにも気づかぬ顔で。

「銀脚獣か……」

ジークが馬車から降り、呟いた。それが西の城門から現れた魔獣の名だった。巨大な蜘蛛のような姿だが、その脚は全て鋭く硬い刃である。

ジークが到着するまでに、西の街道を封鎖する予定だった騎士団が、なんとか魔獣の群を押し戻していた。本来なら侵入を防ぐための城門が、逆に外側から縄をかけて、開かないよう厳重に閉ざされている。中から魔獣が出て来ないための処置だった。

「お、おのれっ……何という化け物だ……我が騎士団の大半が、あっという間に……」

騎士団の隊長が、橋のたもとで真っ赤に染まった鎧姿で呻いていた。部下たちが目の前で次々に殺され、その返り血を浴びたのだ。

「ひいえぇぇえ……あ、あの橋を渡るのぉおお？」
アリスハートが卒倒しそうになって慌ててノヴィアの懐に潜り込む。ノヴィアもさすがに青ざめている。石橋の上は、阿鼻叫喚の後の血の海だった。魔獣に鎧ごと引き裂かれて息絶えた騎士たち、普通の市民、貴族たちの区別なく、倒れ伏しているのだ。
魔獣の死体もあったが、数が少ない。
「斥候の群だったようだな。本隊の群が来ていたらここにいる全員がやられていた」
ジークが言った。騎士団の隊長が、わなわなと震えながらジークの外套の襟をつかむ。
「は……話が違うではないかっ。こ、こんな化け物、どうすれば良いのだ。あ、あの城門の中の者たちは、いったいどうすれば良いのだっ。助けようが無いではないかっ」
「俺がやる。俺が門の中に入ったら、すぐに門を閉めて開かないよう守れ」
隊長が絶句した。急に相手が誰であるか思い出したように、慌てて手を離した。
「黒印騎士団……ジーク・ヴァールハイト……。あ、あなたが一人で……中へ……？」
ジークはうなずき、石の橋を渡った。隊長が慌ててそれを追う。
「門を閉めたら、すぐに補強しろ。都市を封鎖している騎士団にも同じように伝えろ」
「で、ですが……我らは、三日と決めて連携しており……それ以上は責任が……」
「予定通りでいい。時間をかければ魔獣の数が増えて増殖器に近づくのが難しくなる」

「み……三日で……!?　どれほどの敵がいるかも分からないのに!?」
「万が一、三日経っても俺が帰らなければ、都市に油の入った樽を投げ込み、火を放て」
「と……都市を丸ごと焼けと？　あ、あなたは……」
「三日も魔獣の巣の中にいれば、強すぎる瘴気で自然に死ぬ」
隊長は愕然となってジークを見つめた。それから屹然となって敬礼するや、生き残った騎士団の面々に鋭く声をかけて集めた。
門の前に立ち、ジークは左手から右手へとシャベルを担ぐ手を替えた。そしてその左手に、青白い稲妻を帯びたとき——ノヴィアが、その傍らに立った。その懐では、アリスハートが震えながらも、逃げもせずノヴィアの胸元から顔を出している。
「ううう、やっぱ行くのねぇええええ」
「ノヴィア、お前は——」
「ジーク様はおっしゃいました。私の力が必要だと」
ノヴィアがひたとジークを見上げて言う。ジークはふと、その頭が思っていたよりも僅かに高い位置にあることに気づいた。ほとんど目立たぬほどの、かすかな笑みがジークの口元に浮かんだ。そしてそれをノヴィアは見逃さなかった。やはりジークが求めているのは自分の力なのだ。役に立ちたい——役に立つ。その思いだけがノヴィアを満たした。

「中に入ればお前の目の助けが要る。頼む」

ノヴィアはうなずいた。それだけは自分のものだと言うように。騎士たちが次々に縄をほどいてゆく。やがて固定されていた門が、重く軋んだ音を立てて開かれ、

「――ジーク・ヴァールハイトが招く！」

ジークの烈声が、閉ざされた都市に向かって響き渡った。

第二章　花の名は

1

都市の一角で、凄まじい輝きが起こった。

地中から迸る青白い稲妻とともに、堕気に満ちた烈風が吹き荒れる。そして続々と現れる異形の兵団が、そのおどろおどろしい姿とは裏腹に美しいまでの隊列を組んで前進する。

銀色の巨大な蜘蛛の化け物が建物のそこら中から現れ、異形の兵団と激突した。

「いらっしゃい、ジーク・ヴァールハイト……我が香煙の領域へ、ようこそ」

ふっくらとした唇から、香気をたっぷりとふくんだような艶っぽい声音が零れた。

岩壁を背にして建てられた巨大な城——その周辺に幾つもそびえ立つ塔の一つから、西の門で始まった戦いを眺める女がいた。

フロレス・アンブローシャ——レオニスが見出した狩人の女である。柔らかな肢体に、血のように鮮やかな赤のドレス。ふわっとした雛色の髪、戦いの光景にもかかわらず母性

的な笑みを絶やさぬ美貌、匂い立つような気品を醸し出す碧い双眸。
「覚えているかしら……ジーク。あなたが私から奪った、大事な大事な花の名を……」
右手を優雅な動作で左右に振りながら囁く。
今、その手の中指にはめた銀の指輪から、長く細い、銀の鎖が伸びている。
そしてその鎖の先にあるものが、手の動きに合わせて揺れているのだった。
手にすっぽり収まる大きさの、球形をした小さな銀細工――携帯用の、香炉であった。
香炉の中には何も入っていない。代わりにその表面に細かな紋様が刻まれており、香炉が振り子のように揺れるたび、紋様全体が淡く輝きを放っていた。
聖性に反応して様々な香りを生み出す聖具――本来は、ただ単に高位の聖道女が、儀式のときに香りを作るためだけに用いる物である。そして今、その香炉を通してフロレスの聖性が発揮されるや、目に見えぬ力となって都市中に広がってゆくのだった。
「あなたがその手で枯らしてしまった愛しい花の名……もし忘れているのなら、ゆっくりと思い出させてあげるわ……。あなた自身の、血の香りとともに……」
相手を、柔らかな花弁で優しく包み込むような微笑とともに、フロレスは囁いた。
魔兵の軍団が揃って右腕を突き出し、立て続けに砲火を轟かせた。

砲魔ネルヴ――焼けただれた体から煙霧を噴き、仮面のような顔を持つ魔兵である。
右腕は巨大な砲身で、瘴気の塊を砲弾と化して放つ。その砲火が、魔獣に殺された市民の魂の、凄まじいばかりの怨みの咆吼となって街路に響き渡った。
ジークが魔兵を招いて都市に入るや、その背後では、すぐさま門が閉ざされている。
続けてジークは、そのシャベルにやどる力を解放している。剣の鞘であり、シャベルであるものが、銀の飛沫と化して飛び散り、十六体の魔兵と化したのだ。
凄魔ギルト――人の形をした銀色のトカゲのような姿で、両手に分厚い剣を握り、接近する魔獣どもを切り払う。ジークも銀剣を握りしめ、
「このまま前進し、最も近い場所にある巣を叩く！　見えるか、ノヴィア！」
そこら中から現れる魔獣の群を、片っ端から撃滅させながら叫ぶ。
陣の中央で、震えるアリスハートを胸に抱いたノヴィアが、懸命に目を凝らし、
「あ……あちこちに真っ黒い靄のようなものが見えます！　もしかしてこれが……！」
砲火の轟音の合間を見計らって、大声で叫ぶ。
「万里眼の聖性を、強い瘴気が遮っているせいだ！　一番近くにある黒い靄はどこだ！」
「東へ……！　もう一つ向こうの通りの、大きな商館の中です！　白い建物で……！」
ノヴィアが建物の外観を素早く説明する。ジークが大きく剣を振るった。

「獅子座の陣！」
言下、魔兵が凸型陣形となって、進路を邪魔する建物に集中砲火を浴びせて前進した。石造りの建物が魔獣とももども木っ端微塵に粉砕され、がらがらと崩れる。
「うわぁあああ……なんかいつも以上に無茶苦茶するわねぇ……」
街の一角が消し飛び、アリスハートが呆然となる。それをよそに、
「天秤座の陣！」
ジークが続けて指示を出し、今度は陣を二つに分けさせた。一方はその場で陣を構え、もう一方は吹き飛ばした建物の瓦礫の上を続々と乗り越えてゆく。
「お前はそこにいろ！」
ジークはそう命じてノヴィアに背を向け、突撃側の陣とともに駆けた。
待機を命じられた魔兵は、ノヴィアを中心に円陣を組み、援護の砲撃を続けている。
ノヴィアは咄嗟に、ジークのもとへ走り寄りたいという衝動に襲われた。
むろん、そんなことをしても邪魔になるだけだ。代わりに宙を見すえ、
「……沢山の矢が、見えます」
もう一つの力――幻を見ることで具現させる幻視の力を発揮させた。人や獣、火や水など複雑で形の定まらないものは無理だが、矢なら今では一度に何十本も現すことが出来る。

金の矢が宙に現れ、魔獣に向かって雨のように降り注いだ。せめて自分は心配ないのだということを伝えるために。自分はこれだけ役に立てるのだと、ジークと自分の両方に思わせたくて。精一杯、その聖性を発揮させていた。

「やれやれ……本末転倒ですが、ジークが来たお陰で、我々も命拾いしましたね」

アキレスが街路を進みつつ、遠くで立ちのぼる爆煙を眺めた。岩山にもたれかかるようにして建設された都市であるため、街路といっても城壁を見下ろす高さにある。

「フロレスが先行した狙いを、読み間違えました。まさか増殖器だとは……」

トールも魔獣を警戒しつつ、複雑に折れる街路を進み、階段を登った。

向かう先は、城だった。予定を変更してフロレスを探しているのだ。大量の魔獣との戦いを避けるには、フロレスを倒して増殖器を止める以外なかった。

二日前――トールとアキレスの感覚からすれば昨日、宿泊した宿も、今では魔獣の巣窟と化している。騒ぎで目覚めてみれば、おびただしい異形の怪物が暴れ狂っていたのだ。

しかも城門という城門が固く閉ざされ、唯一、西の門だけ開かれていた。

市民がそれに気づいて西の門に殺到する頃には、人口の半分が殺戮されている。

全て、フロレスの仕業だ。城の兵など、材木と鉄の杭で片っ端から門を閉ざし、はたと

正気に戻って門を開こうとしたところを魔獣に殺されるという有様だった。
「いつの間に増殖器を発動させる手段を知ったのやら……きっと聖地シャイオンに招かれた博士たちを香りで操って聞き出したんでしょうね。都市を魔獣の巣にし、我々や住民もろともジークを葬る気なんですよ。まさか人間以外にも、魔獣まで操れるとは」
アキレスが傍らをちらちら見ながら言う。会話をしていないと、トールのあまりの気配の無さに、いるのかいないのかさえ分からないのだ。トールは無表情に辺りを見ている。
「魔獣の動きからして、自由に操るというより、自分だけは襲わせない程度でしょう」
「それだけでも、ジークをおびき寄せ、その力を消耗させ、ついでに我々を牽制するには、十分ですよ。その代わり、全ての人間を敵に回しますがね」
トールはうなずいた。これほどの規模で増殖器を使えば、聖法庁を驚愕させ、聖法軍の大兵力を招きかねない。今、レオニスとドラクロワが望むことではない。それどころか増殖器を独断で使用しただけでも、レオニスとドラクロワを敵に回すには十分である。
「それに彼女は、もともと〈銀の乙女〉の聖道女ですしねぇ……レオニス様の招きにも個人的に応じたそうじゃありませんか。もし〈銀の乙女〉にこれが知られたら……仲間であるはずの聖道女にさえ追われることになるというのに……」
「これが終われば、レオニス様との関係を隠し、〈銀の乙女〉に復帰する気ではないでし

ようか。レオニス様とドラクロワの共謀の秘密を盾にして、自分の身を守る……」

「自分を見逃せ……さもなくば〈銀の乙女〉に、聖地シャイオンの秘事を密告する、というわけですか。そんな脅しに、レオニス様が屈すると思うのですか？」

トールはきっぱりと左右にかぶりを振った。レオニスであれば、あらゆる手段を講じてフロレスを暗殺する。ドラクロワの怒りを避ける手段も皆無のはずである。

フロレスは命を捨てる覚悟でジークを葬ろうとしているのだろうか。それにしても、フロレスがこうも独断に走る反面、アキレスの言動には妙にレオニスへの忠誠がこもっている。下手をするとトールよりもレオニスのことを分かっているのだと言わんばかりだ。

人血を飲んで喜ぶような男が、レオニスへの忠誠をあらわにするというのは、それはそれでトールにとって、いささか不快ではあった。

「密告すれば彼女自身も破滅ですよ。ここまで捨て身になれるとは……女は怖い」

アキレスが呆れたように呟き、階段を登って街路に出た。そのときである。

影が射したかと思うと、にわかに異形の獣が数体、頭上から躍りかかってきた。

アキレスもトールも、ほとんど本能に任せた動作で、襲撃をかわしている。

槍の穂のような爪が、火花を上げて石畳をえぐり取った。数は三体。二体が街路へ跳んだアキレスへ、一体が階段を下方へ跳んだトールへ、唸りを上げて黒い牙を剥く。

子牛ほどもある黒い狼に見えるが、全身を昆虫のような殻に覆われた魔獣であった。
「また違う魔獣……いったい何種類、招き出しているのやら……」
アキレスはそう言いながら、滑らかな所作で、両手の白い手袋を外し、上着の内ポケットに入れた。そうして白く細い指を、くねくねと蛭が身をよじるように動かす。
なんと手の指の爪が全て剥がされている。その上で細かな紋様を、指先に刻み込んでいるのだ。さっと両手を翻すや、指の紋様が、青白い輝きをともした。
アキレスの唇の両端が、異様な高さにまで上がり、笑みの形になった。
一体の魔獣が、跳びかかった。同時に、アキレスの紅い唇が囁きを零す。
「出でよ我が魔獣……〈蛭氷〉よ……」
突然、石畳から鋭い何かが飛び出し、宙を跳んだ魔獣を真下から貫いていた。
透明な氷の塊――なんと巨大な氷柱が地面から逆さまに生え、魔獣を串刺しにしたのだ。
巨大な魔獣が悲鳴を上げて暴れるが、氷は鋼のような硬さで、ひびも入らない。
残り一体の魔獣が、あまりのことに、じりじりと後ずさる。アキレスが笑った。
「〈串刺し魔〉こそ私の異名……〈蛭氷〉よ、滅多にない獲物です。存分に吸いなさい」
氷柱から無数の氷の棘が生え出し、魔獣の全身に食いついた。目や口や硬い殻の隙間に、剃刀のような氷の棘が潜り込む。そしてまたたく間に、氷が、どす黒く染まった。

氷が、魔獣の血を吸い、力を奪っているのだ。魔獣の悲鳴がやんだ。その体は空っぽになり、硬い殻は内側に向かってひしゃげている。代わりに黒い色に染まる氷が、いきなり溶けて水に変じ、ばしゃっと飛沫を上げた。
黒い血はどこかへ消え、からからに干涸らびた魔獣の屍があるばかり。
「仲間の群を呼ばれる前に……もう一匹も、私がいただきましょうか」
アキレスが残りの魔獣に近づいたとき、ふいに何かが飛んできて、足下に転がった。
なんと、切断された魔獣の手である。階段を振り返れば、そこは刃風の嵐だった。舞うようなトールの右腕の動きに合わせて、身の毛もよだつような刃鳴りが乱れ交うのだ。
剃刀の鋭さと、鋼の強靭さを併せ持つ、黒い鉄鞭——それが、聖性と堕気を合わせて鋼を造り出すトールの、最大の武器であった。
とてつもない弾力で刃が跳ね、目に見えぬほどの速度で、縦横無尽に切り裂く。
魔獣にとっては、いったいどこをどう斬られたのか分からぬまま、次々に体が消滅してゆくようなものだ。硬い殻も役に立たず、悲鳴を上げることさえ出来ずに、ばらばらになって階段にぶちまけられるのだった。
トールはそのまま無感情な顔で、最後の一体に向かって階段を登っている。
「お見事……影法師さん」

アキレスが賞賛と警戒をこめて言う。トールもちらりとアキレスの両手の紋様を見る。
互いに、いざ戦うことになったときのために、相手の弱点を知ろうとする目だった。
アキレスが、両手の指をくねくねと動かしながら、残り一体の魔獣の横手に廻る。
トールが階段を登り終え、魔獣へ向かって歩み寄った。
魔獣が、恐怖と怒りで吠えた。瞬間――氷の槍と、鋼の鞭が、同時に振るわれた。
アキレスもトールも、自分の力を相手に見せつけ、優位に立とうとしての攻撃である。
二つの力に襲われ、魔獣が無惨なまでに砕け散る中、二人の視線が絡み合った。
そして突如――その二人を、凄まじい瘴気の気配が襲った。
アキレスもトールも、それぞれ弾かれたように建物の陰へ飛び込んでいる。
砕かれた魔獣の体が、青白い瘴気の炎を上げるそこに、夜が訪れたかのような影が落ちた。そしてにわかに現れたのは、一本の巨大な脚であった。
鋭い爪を生やし、青光りする鋼鉄の柱のような脚が、何本も何本も現れるに従い、ようやく、その全体がどんな形状か分かった。
聖堂の天井ほどもある大蜘蛛――魚のように青光りする鱗に覆われ、恐ろしく太った腹を揺らしている。かつかつ爪音を立てながら建物の上を歩き、その動きは異様に滑らかで、どれほど素早く動こうとも、爪音以外にほとんど音を立てない。

まるでこの都市の主人であるかのように街路を睥睨し、魔獣たちの屍に顔を寄せる。真っ赤な複眼の一つ一つをぎょろぎょろ動かし、ふいに口を開いた。トールたちの背丈を遥かに上回る巨大な顎から、無数の触手が伸びて魔獣たちの屍をとらえ、食らった。他に食べるべきものは無いかと複眼を動かし、気配を絶って隠れるトールたちに凍りつくような恐怖をもたらした。その巨大さ以上に、凄まじいまでの堕気の気配があった。

そのとき西の方で、ひときわ大きな崩壊の音が響いた。

大蜘蛛がさっと顔を上げた。そして異様な身軽さで身を翻すと、一目散に西へ去った。

「やれやれ、また結果的にジークに助けられるとは……。それにしても、なんという化け物か……。堕気の強さだけならばジークに匹敵する……実に素晴らしい」

アキレスが街路に出てきて、いやに物欲しそうな目で大蜘蛛の去った方を見やる。

「フロレスが、あの怪物を自由に操れないことを祈ります」

トールが素直に言う。アキレスが、くっくっと笑った。

「真の力というのはね……操れるようなものではないのですよ。力自体に意志はない……それゆえたやすく人の手を超えてしまう。そういう力に身も心も任せることこそ、力に対する正しい姿勢……そう考えれば、フロレスの行動も実に正しく思えてきますね」

トールは無表情でいる。否定も肯定もする気はなかった。脳裏には、かつて聖地シャイ

オンで炸裂した怪物の姿が甦っていた。力が行き着く果ての光景が。
あれが、この世に存在する全ての力の帰結であるとするなら——この世界は滅ぶためにあるようなものだ。そしてトールは、そのことを悲しいとも思わなかった。
「私の力は全て、レオニス様のためにあるもの。それだけです。先を急ぎましょう」
トールはただそう告げた。アキレスは笑いながら城へ顔を向け、言った。
「そうして人は知るのですよ……力は、ただ力のためだけにあるということを……」

2

大理石の彫像で飾られた瀟洒な商館が、柱も屋根も砕け、ごうごうと燃え盛っている。
商館に巣くっていた魔獣の群も、青白い炎を上げて消滅してゆく。僅かに生き残った魔獣どもは巣を破壊されて統率の意志を失い、散り散りになって逃げていった。
「残り三カ所か……。このどれかに、増殖器があるはずだ」
ジークが地図に印を付けながら言った。ノヴィアが黒い靄を見る場所——万里眼の聖性が遮られるほど瘴気が充満する地点である。魔獣の巣であり、増殖器が設置されている可能性が最も高い場所であった。
「どこに魔獣を生み出すものがあるのか、どうにかして見てみます……」

ノヴィアはなおも黒い靄を見通せないかと目を凝らしている。肝心の増殖器の位置が特定出来ないことが悔しかった。自分は役に立ちたいのだ。この自分の力で。なのに――

「あまり聖性を疲弊させるな。お前の目だけが頼りだ」

すっとジークの手がノヴィアの目元を覆う。それが無造作な命令なのか優しさなのか、咄嗟に分からないままノヴィアは視覚を元に戻した。その胸元でアリスハートが顔を出し、

「ねえ……その増殖器って、一つだけなの？　それとも……三つ全部にあるのぉ？」

「分からない。近いものから順に攻めるしかない」

ノヴィアが見た黒い靄は、城の地下に一つ、城の東側に一つ、都市の南に一つあった。

ジークは辺りを見回した。都市に充満する堕気のせいか、濃い霧が立ちこめてきている。

「まず南の巣を叩く。そこで一度、休息のための陣を敷く。互いにはぐれた場合は、あそこにある聖堂で落ち合おう。聖堂の持つ聖性が、魔獣を遠ざけてくれるだろう……」

地図を懐にしまいながら、ジークは、自分の従士を振り返った。

そこに、一人の若い娘がいた。

柔らかに波打つ雛色の髪を頭の上で束ね、淡く澄んだ碧い目に、どこか悲しげな光を溜めている。そのくせすっきりと整った頰には、常に微笑を浮かべていた。何かを諦めたような、全てを投げ打った後で浮かべるような、淋しい微笑を――

「どこへでもお供します……ジーク様」
娘の声とともに、かすかな香りが鼻をついた。ジークはその従士の名を思い出し、それを口にしようとして、はっと息をのんだ。思わず剣を握る手に力がこもり、
「お前は……俺が、この手で葬った……」
口に出して確かめようとしたときである。どこからともなく風が吹いて霧がゆらめき、
「……私が、どうかしましたか……ジーク様？」
ノヴィアが不思議そうに、ジークを見ていた。
「いや……。違う……」
ジークは珍しく呆然となって、かぶりを振った。先ほど感じた花の香りも消えていた。
「力が、風のようなものでも……人は、ただそれに吹かれるだけではないはずだ……」
「え――？」
ノヴィアがきょとんとなる。アリスハートも不審そうにジークを見上げた。
ジークは口を閉ざし、ノヴィアを見つめた。力を手に入れようとして逆に力に翻弄されてはならない――そんな思いがどこからともなく湧いていた。力にとらわれたかつての従士の面影――何かを諦めたようなその微笑が思い浮かび、また少しかぶりを振った。
ノヴィアに限って、そんなことはないはずだ。自分の五人目の従士――過去の従士とは

決定的に違う意志を秘めた、小さな聖道女。力を巡る葛藤においてジークでさえ決められなかったことを、かつて自分の意志で決めたノヴィアに限って、そんなことは——

「あ……あの、ジーク様……、私、何か……？」

何か失敗を犯したかと不安になるノヴィアに、

「少し……昔を思い出しただけだ。お前はよくやってくれている」

内心の思いをようやく胸に収め、ジークは霧の立ちこめる都市を振り返り、言った。

「移動だ。日が暮れる前に、二つ目の巣を叩く」

砲魔が方陣を組み、続々と移動を開始する。

陣の先頭付近でジークの傍らにいながら、ノヴィアは複雑な思いでいた。

よくやってくれている——ジークはどういう気持ちでそう言ってくれたのだろう。

ただの労いだろうか。それとも、もっと頑張れということだろうか。

喜べる言葉に思えるのだが、なぜか素直に喜べない。ジークが何を考えているのか変に分からなくなっているせいだ。何気ない言葉に、いちいち引っかかってしまう。

ノヴィアは目立たぬよう、そっと溜め息をついた。戦いの最中にいったい何を悩んでいるのか。自分の力に集中しよう。ジークが望んでいる力を最大限に発揮し、役に立つ。

それだけは確かなのだから。自分だけの力。自分だけのもの。自分だけがジークに与えられるもの。その力があるからこそ、自分はここにいられるのだから——
押し隠すように零される溜め息に、アリスハートが不安そうにノヴィアを見上げるが、これまたなんと言っていいか分からず、いつもの陽気さを失って口を閉ざすのだった。
魔獣の襲来を警戒しながら、濃い霧の漂う街路を進軍し、やがて南の街区に入った。
市民の多くがここに住んでいるため、西に比べて小さな建物が密集している。
賑わっているはずの広場も人気が絶え、道や建物のそこら中に破壊と流血の跡があった。
住宅街を避けて大きな道路を選んで進むうち、
「ジーク様、何かが……書かれています」
真っ先に、ノヴィアがそれに気づいた。
「書かれている……？」
「もう少し先に……大きく……沢山……何これ……」
ノヴィアの緊迫した声に、アリスハートがおどおどと首をすくめる。
「あれか——」
道路の向こうにあるものにジークも気づき、進軍をいったん停止させた。前方の陣列を開かせ、ジーク自ら足を運んでそれを見つめた。ノヴィアもその傍らに立つ。

霧の漂う大きな道路を、端から端まで、真っ赤なものが横断していた。
『思い出せ！』
そういう巨大な文字が、ジークたちを迎えるように道路一面に赤く書き殴られているのだ。
「血……。人の血で書いたのか……？」
ジークが、屈み込んで文字を見つめる。
「うぇえ、血で書くって……なな、なんでぇ？　思い出せって、どういう意味よぉ？」
アリスハートが震え上がる。ジークは身を起こしながら鋭く辺りを見回し、
「……沢山あると言ったな？」
「は、はい……この先に……」
「進むぞ」
先頭に立ったままジークが進軍を命じ、『思い出せ！』という生乾きの血文字を無造作に踏み越える。ノヴィアはなるべく字を踏まないようにし、魔兵たちは何の躊躇もなく、続々と血文字を踏んで進んでゆく。
やがて城門付近のひときわ大きな広場に来て、ジークは再び停止を命じていた。
霧が濃く漂う広場の光景に、ジークもノヴィアもアリスハートもしばし呆然と見入った。
『思い出せ！　思い出せ！　思い出せ！　思い出せ！　思い出せ！』

書き殴られていたのだ。筆跡が同じところを見ると、一人の人間がやったのだろう。
石畳、店の壁、噴水の縁、木の幹、それこそ広場のあらゆる所に、大小様々な血文字が
「まだ新しいものもある……生存者がいるのか？」
ジークは広場に魔兵を展開させながら文字を見て回り、
「い、い、いました、ジーク様！　東の方です！」
にわかにノヴィアが声を上げた。ジークは魔兵に四方を警戒するよう命じつつ、素早く
ノヴィアの指示した方へ向かっている。その後を、凄魔とノヴィアが追いかける。
霧の向こうに、まさしく建物の壁に文字を書き付けている一人の男の姿が現れ、
「あいつは……」
ジークが歩調を緩めた。男は、大きなものを壁に叩きつけ、字を書いていた。
「何をしている」
男がぎょっと振り返り、筆代わりにしていたものが、どさりと音を立てて落ちた。
「な……なな、なにあれえっ……。あ、あの男の人、ひ、人の脚で……」
追いついたノヴィアの胸元で、アリスハートがあわあわと震えた。
右脚——膝のすぐ上から食いちぎられた人間の脚であった。
その脚の傷口から零れる血を用いて、男は血文字を書き続けていたらしい。

「ま、待っているんだ……黒い馬が来るのを……足の先から尻尾(しっぽ)まで黒い馬が……」

男が声に恐怖(きょうふ)をにじませ、おどおどと告げた。諜報院(ガルム)の男――ジークがここに来る前に、街で情報(じょうほう)をもたらした、あの男であった。人相が変わるほどにやつれ果てた顔で、

「こ、この文字を書いている間は……俺(おれ)の体にしみついた香(かお)りが消えないから、魔獣(バロール)には食われないと……。だがそれも、黒い馬が来るまで……ああ……そうしたら俺は……」

「俺が、黒い馬だ」

ジークが言った。男が、びくんと背(そ)をそらし、愕然(がくぜん)とジークを見つめた。

「せ、聖王の馬……黒い毛並(けな)みの……。ま、まさか……お前のこと……」

男がうなされたような声を零しながら、おろおろと後ずさる。

「どうした。俺を忘れたか」

「お……俺に近づくなっ！　俺にはどうしようもないんだっ！　香りが移(うつ)るぞっ！」

金切り声を上げたかと思うと、にわかに男が背を向けて走り出した。

男の姿があっという間に霧に隠れて見えなくなる。すぐさま凄魔(ギルト)たちが男を追いかけ、

「ノヴィア、お前は戻(もど)れ！　陣(じん)の中で待っていろ！」

ジークもそう命じて男を追う。ノヴィアが返事をする間もなくジークの姿も霧に消えた。

「もも戻ろうよぉ……。ノヴィアぁぁあああ」

周りに誰もいなくなり、取り残されたような不安にアリスハートが怯えた声を出す。
ノヴィアはしばらくジークの姿を見ていたが、間もなく凄魔たちとともに逃げ出した男を取り押さえたのを確認し、広場で陣を敷く砲魔たちのところへ戻っていった。
「待っていろ……か」
ますます霧が濃くなる広場を歩みながら、ノヴィアは何となく悄然としながら呟いた。
母もそう言って自分を置いていった――もうとっくに解決されたはずの思いがふいに胸をつく。あるいはまだ解決されていないものがあるとでもいうのだろうか。心の底の暗い場所にある思いは、むしろ掘り返せば掘り返すほど新たに出てくるようだった。
ふいに、ノヴィアは何かの香りがすることに気づき、足を止めていた。
先ほどから――この広場に来る前からその香りをかいでいたのだが、今初めて心がそれに気づいたのだ。誘うような甘い花の香りが、霧とともに濃く辺りに漂い始めていた。
「どしたのぉ、ノヴィアぁ？　早く戻ろうよぉ」
アリスハートが急かす。
ノヴィアはうなずきつつも、香りの出所を探して辺りを見回し、はっと息をのんだ。
「あそこに、女の人がいる……」
えっ、とアリスハートが目を丸くする。ノヴィアは、男をとらえて尋問しているジーク

の方を見やった。それから、女性がいる方——香りがする方へと駆けだしていた。
「ちょ、ちょっと、どうするのノヴィアぁ」
「生きてる人がいるなら、助けないと……」
自分なら、ジークがどこにいようと見つけられる。いったん別行動をとっても、すぐに合流できる。そういう自信があった。それが自分の力なのだから。
生存者を確保すれば、もしかすると都市の情報が——増殖器の在りかが分かるかもしれない。そうでなくても生存者を救い出せたというだけで、きっとジークは誉めてくれる。
ノヴィアが役に立つということを認めてくれる。決して自分の力だけではなく——
にわかに込み上げてくる思いに任せて、ノヴィアは広場に面した館の入り口に走り寄り、扉を押し開けた。鍵はかかっておらず、玄関の壁に、魔獣の爪痕が深々と走っていた。
「助けに来ました！　もう大丈夫です！」
大声で告げると、上階で、がたっと物音が響いた。
アリスハートが不安そうに首をすくめる。ノヴィアは宝杖を握りしめ、灯の絶えた薄暗い館の中へ入っていった。相手を刺激しないよう、そおっと階段を登ってゆく。
上階に来ると、暗い廊下の両側に、幾つかドアが並んでいた。その一番奥のドアが開いており、ノヴィアはそこに一人の女性が立ってこちらを向いているのを見た。

館の女主人だろうか？　上品な赤い衣服に、黄色に近い雛色の髪。気品をたたえた碧い目が、まるでノヴィアと同じように壁を透かして見るかのようにこっちを向いている。
「安心して下さい。私たちは助けに来たんです」
そう声をかけながら廊下を進んだ。よく見ると廊下を這ったような血の跡が伸びている。
一番奥の部屋の前まで来て、開きっぱなしのドアから中を覗く。
寝室らしいそこには、誰もいなかった。全ての窓が閉ざされており、ひどく暗い。瀟洒な部屋の真ん中には、引き裂かれた血まみれのベッドがあった。きっと寝ているところを魔獣に襲われたのだろう。遺体を引きずって運んだため、廊下に血の跡が残っていたのだ。
「……誰もいないよぉ」
アリスハートが声をひそめる。ノヴィアはドアに手をかけながら部屋に入った。
「そんなはずないわ……だって、さっきまで……」
ベッドのそばに来たとき、背後でドアが、きいっと軋んだ音を立てた。
ノヴィアがはっと振り返る。大きな音を立ててドアが閉まった。
それまでドアがあって陰になっていた場所に、女が立って、じっとノヴィアを見ていた。
アリスハートが悲鳴を上げ、ノヴィアもあまりのことに愕然となって立ちすくんだ。
「眠りなさい。陽が沈めば、夜があなたを眠らせる」

女が言った。先ほど見た女ではない。気づけばノヴィアの見知った相手になっていた。
「そして夢を見なさい。あなたの心の底にある真実を夢で思い出しなさい」
女は優しく微笑みながら、甘い香りをたっぷりとふくんだような囁きを零した。
ノヴィアは我を失ってその言葉に聞き入った。いや、正確にはその声に――
何度となく夢で思い出し、心で対話を繰り返してきた相手。喜びも寂しさも全て最初にノヴィアにもたらした女性が、今かつてないほどの生々しさでそこに居た。
「母さん……」
ノヴィアが言った。そのとき、遠くで砲火が轟き、激しい戦いの音が鳴り響いていた。

「く、黒い馬を、俺は待っていた。あの文字を書きながら……し、死にたくない……」
凄魔に囲まれ、男が震え上がって言う。ジークは有無を言わせず男の肩をつかみ、
「死にはしない。いったい何があった？」
そう訊いたとき、かすかな香りが鼻をついた。先ほど感じた香り――
「眠れぇっ！」
いきなり男が絶叫した。同時に、目眩がするような強烈な香りがジークを包み込んだ。
「夜がお前を眠らせる！　真実が夢の中に現れる！　思い出せぇっ！」

男は、ぎらぎらと目を輝かせながら狂乱の叫びを上げたかと思うと、
「ひいっ……お、俺が言ったんじゃない。き、きっと俺はそれを言わされるために生かされていたんだ。お、お前は本当に黒い馬だったんだ。もう、俺は……お、俺は……」
「この香りは……」
ジークは咄嗟に息を止め、思わず男から手を離した。
男が弾かれたように逃げ出した。凄魔が剣をかざすが、それを男は素手で払いのけた。拍子に指が何本か切り落とされたが男は構わず走り去ってゆく。
「待て……！　まさか……この香り……」
ジークが声を荒げた。そのときである。男の行く手に、爆発的な堕気が生じていた。
いきなり夜が来たかのような影が射し――それが現れた。
そのあまりの巨大さに、さしものジークが言葉を失った。聖堂の天井ほどもある大蜘蛛が、いやに滑らかに街路の両側の建物に爪先を乗せ、さっと下方へ顔を寄せたのだ。
「逃げろ！」
ジークが叫ぶ。男が頭上から迫る大蜘蛛に気づいて悲鳴を上げかけ――ばくりと食われた。一瞬の出来事だった。大蜘蛛の口の中で、ごりごりと何かが砕ける嫌な音が響いた。
大蜘蛛が、青光りする鱗に覆われた牙の隙間から血を垂らしながら、ジークを見た。

ジークもまた、剣を掲げて、真っ向から大蜘蛛を睨みつけている。
凄魔たちが、ジークと大蜘蛛の間で生じる圧倒的な気配に、さっと退く。
さながら二匹の怪物の睨み合いであった。ジークと大蜘蛛の双方が、とてつもない瘴気を発散させ、無言のうちに咆吼していた。獣同士が吠え合って力を試し合うようなものだ。
ふいに大蜘蛛がまたぐ街路の向こうに、続々と何かが現れた。鎧姿の集団が列をなしてやって来るのだ。城の兵団が来たかに見えたが、すぐにその異様さが明らかになった。
フクロウやカラスやスズメなど巨大な鳥の頭を持った兵が、ぎょろぎょろと丸い目を動かし、剣や槍を掲げ、くちばしから金切り声を発して迫ってくるのだ。
鎧が血にまみれているところを見ると、城の兵を殺して武器や防具を奪ったのだろう。
「巣を守る群か……」
この街路の先に巣の一つがあるのだ。ジークの左腕が、にわかに青白い雷花を帯びた。
すっと大蜘蛛が音もなく身を引いた。かつかつとやけに軽妙な音を立てながら霧に隠れ——消えた。後方の巣を守るためか、それとも誘っているのか。いずれにせよ、あれほど強大な魔獣を生み出す増殖器がどこかにあるのだ。
もはや一刻の猶予もなかった。あの大蜘蛛が何匹も生まれて、無数の魔獣とともに城壁を破って外に溢れる前に、全ての巣を叩き潰して増殖器を破壊せねばならない。

そして、この惨劇を導いた者たちを——ドラクロワを、必ず追いつめる。
左腕の雷花が激しさを増し、ごうごうと瘴気の風が吹き荒れる中、
「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
烈声を迸らせ、その左腕を猛然と石畳に叩きつけていた。

「眠る……夜が眠らせる……。夢……」
ノヴィアは茫洋とした顔で繰り返し呟いた。そこへ、大きな喚き声が飛んだ。
「ねぇっ！　狼男が戦ってるみたいだよっ！　鏡なんか見てる場合じゃないよっ！」
最後の言葉でノヴィアの目が焦点を結び、急に我に返った。
女性も、母もいない。ただの大きな姿見が、ドアの脇に立てられているだけだ。
「鏡に映った……私……？」
「そうよぉ。急にドアが閉まって、鏡があったからびっくりしただけよぉ」
「ドア……誰が閉めたの？」
「何言ってんのぉ。部屋に入るときに自分で閉めたじゃないのよぉ」
そう言われて自分の手を見た。確かにドアに触れたような気がするが思い出せない。
そこへ砲火の轟きが立て続けに響いてきた。ノヴィアは慌てて窓を開き、

「ジーク様が戦ってる……？　そんな……いつの間に……」
「だから、さっきからそう言ってるってっ！　どうするのぉ、広場に誰もいないよぉ」
ノヴィアは音のする方を見た。砲魔の群が続々と戦場に向かっている。ジークもその先の魔獣の巣へ進攻しているところだった。いつの間にあれほど遠くに行ってしまったのか。
「急がないと……」
慌てて部屋を出た、そのときである。
とてつもない堕気の塊が、いきなり頭上に生じていた。
あまりの圧迫感にノヴィアは声を失って凍りついた。アリスハートも目を見開いたまま指一本動かせない。気づけば、かつかつと音を立てて、何かが屋根の上を移動している。
それが、先ほどノヴィアが開いた窓を覗き込むのが、凄まじい気配で分かった。
急いでジークのもとへ行かねばならないというのに全く動けなかった。あまりの怖さに涙さえ出そうになる。恐怖に耐えきれずに大声を出さないよう慌てて口に手を当てた。
ジークはいない。自分一人だ。自分のせいだ。自分が悪いのだ。生存者など本当にいたのだろうか。それとも頭上を動いているものに食われてしまったのだろうか――
ふいに強い香りが漂ってきた。ひどく心が安心するような、思わず身も心も任せてしまいたくなるような、甘やかな花の香りであった。

（眠りなさい――陽が沈めば――）
女の声が――母の声が耳元に甦る。急に全てが朦朧としてきた。
「もうすぐ陽が沈む……そうしたら……夢を見る……」
口が勝手に呟きを零す。自分が何をしようとしていたのか、分からなくなってきた。
「――ねぇっ……行っちゃったみたいよっ。ねぇったらっ……ノヴィアっ」
アリスハートが、ノヴィアの頬をぺちぺち叩く。
「こんなとこ、ずーっと居る方が怖いよぉ。早く狼男のところに行こう。陽が沈むまでここに居ようなんて言わないでさぁ。とっくに大砲の音も聞こえなくなってるんだよ」
「ずーっと……？」
この場に立ちつくしてから数分しか経っていないのではないか。そう言い返そうとして、ひどく足が強ばっているのに気づいた。確かにここで、じっと凍りついていたのだ。
「大丈夫ぅ？　さっきから変よぉノヴィアぁ」
「だ……大丈夫。少し、ぼうっとして……。い、急がないと……」
ノヴィアは混乱を振り払い、慌てて階段を下りた。何かがひどく怖かった。たまらない不安が背中から追いかけてくるような気がして、一目散に館を出て駆けていった。
そのノヴィアの背を、館の窓から見つめる女がいた。ノヴィアがいた部屋の、すぐ隣か

らである。鎖で吊した小さな香炉をゆっくり揺らしながら、
「アンブローシャの香り……やはり、人の魂から生まれたエインセルには効かない……。
ジークとあの少女に血の香りを嗅がせるには……少し、邪魔ね……あのエインセル」
フロレスは、甘い声音に、ひどく恐ろしげな響きをふくませ、そう口にしていた。

「髪が長かったような気がしますが……髪の色は思い出せません」
トールが言った。城のふもと――門衛が詰める小屋にいた。
そこで食料を物色しつつ女を探す算段を整えるうちに、あることに気づいたのだった。
「目の色は青だったか緑だったか……背丈はどれくらいだったか……やれやれ……」
アキレスは皮肉っぽい笑みを浮かべながら、干し肉を食いちぎった。その傍らでトールはチーズの塊を丁寧にナイフで切りながら、一つずつ口に入れている。
「相手が女であること。指輪をはめていたこと。そして……アンブローシャという名であり、香りを使うということ……はっきり思い出せるのはそれだけです」
「まぁ、私も似たようなものですよ。付け加えるならば、耳障りなほど甘い声をしていたことくらいですかね。ただ、どういう風に甘い声だったか……」
「断片的に覚えているということは、一度に全てを忘れさせるのは無理なのでしょう」

「時間が経てば経つほど少しずつ忘れてゆくというのも、ぞっとしませんがね。とにかく恐ろしい女ですよ。心の底にあるものを表に出させるなんて、まだ生やさしい……」
アキレスが飽きたように干し肉を床に捨て、それを踏みつけながらトールを振り返る。
「あの女の本当の力は……忘れさせることだったんですよ」
トールもうなずいた。チーズの残りを綺麗に紙にくるんで元あった場所にしまい、
「記憶を封じるのか消すのか……ここまで無謀なことをするのも、そのせいでしょうか」
「自分の仕業であることを、全員の記憶から消す気なのでしょう……。実際にそれほどの力があるのかは分かりませんが、そこまで身勝手な女は初めてですよ。ただ……私たちはまだ肝心なことは覚えていますからね。一つだけ確実な手段がありますがねえ」
「女を……殺す気ですか」
「そう。相手が女であることは確かなのですから。若かろうが老婆だろうが子供だろうが女であれば殺す……どうせ都市には大して生存者がいないのですから簡単です」
「相手を殺せば、忘れたことを思い出せるのか分かりません。捕らえるべきでしょう」
トールが反論すると、アキレスは急に見透かしたような笑いを浮かべた。
「逆に、のんびりしていたら力の影響を消せなくなって忘れたままになるでしょうよ。それとも……ジークのそばにいるあの少女を心配しているのですか？　甘いことを……」

「……レオニス様の御意志です」
影法師さん？　本当に守る気でいるのですか？　それ
「あ、な、た、の、意、志はどうなのです？
とも私があ、な、た、の、代わりに殺して差し上げましょうか……あの少女を」
トールは一瞬、アキレスがノヴィアとレオニスの血縁の真実を知っているのではないかと疑った。
だがそんなわけはない。無表情のまま、じっとアキレスを見つめた。
「真の王とは全てを棄てて力を求めるもの……。いずれレオニス様も、自分の弱さになるようなものは棄てるに限ると思うようになるでしょう……真の王になるために……」
そのときである。自分でも予想外の怒りがトールの胸に芽生えた。
「あの従士を殺しては絶対にいけません」
反射的にそう口にしていた。トール自身が驚くほど強い口調だった。だがアキレスが馬鹿にしたような笑みを浮かべるのを見て、さらに確信が湧いていた。
ノヴィアを守ることは、レオニスを守ることなのだ。最後に残ったレオニスの心の拠り所を。それさえ失ったレオニスを、自分は見たくないのだ。たとえレオニス自身が棄てることを望んだとしても、それだけは必ず自分が守り通さねばならない――
「ふふ……長年レオニス様の傍らにいたあなたの言葉ですからね……尊重しますよ。こう

してまだ、お互いのことを覚えているうちはね……」

「お互いを……？」

「そうです。あの女の力のせいで、あなたが誰だか分からなくなったら……そして敵が女であるということさえ忘れたら……私は、あなたを殺すかもしれません。自分の身を守るためにね。間違った考えではないでしょう？」

トールは沈黙した。今ここでアキレスを斬った方が良いのではないかという思いさえ湧いていた。だがアキレスはその思いさえ見透かすように笑って言った。

「しかし今は、お互い、唯一の味方ですよ。話し相手がいなければ、自分が何を忘れたか確かめることも出来ませんからねえ。あの女の力に抵抗する手段があるとすれば、常に二人以上で行動するということでしょう。決して離ればなれにならないようにね。たった一人では、何がおかしいのかも分からないまま、あの女に翻弄されるだけですよ……」

3

二つ目の巣がごうごうと燃え盛っていた。貿易のための大きな倉庫の一つを巣にして、周辺の倉庫街全てに魔獣がはびこっていたのだ。

生き残った魔獣どもを、巨人のような魔兵——腕も脚も馬の胴ほどもある巌魔ヘイトレ

ッドが、片っ端からなぎ倒し、掃討していた。
ジークは燃え落ちる倉庫を素早く見て回り、増殖器がここにもないことを確認した。
あの大蜘蛛の姿もない。そう思ったとき強烈な堕気を感じて、城を振り向いた。
霧がかかった城のふもとで、巨大なシルエットが走るのが見え――すぐに消えた。
堕気の気配も消えている。おそらく誘いだろうとジークは判断した。堕気を発散させたり抑えたりしながら、ジークをおびき寄せるだけの知能を持っているのだ。
生き残った魔獣も、たいてい城の方角へ逃げ去っている。ジークの力に対抗するため、戦力を城に集中させる気に違いない。優れた指揮官としての判断力を持った魔獣だった。
ジークは陣を整えながら、辺りを見回した。呼び寄せた砲魔たちとともに、てっきり自分の従士も来ていると思ったのだが――
何か大事なことを考えていた気がする。何だったか。力――そう、力に翻弄されること。力を巡る悲劇――あの娘の力は、ある種、無差別なのだ。自分以外の人間全てに強い影響を及ぼすのだから。だからあのように独りでいようとする。単独を選ぶ。自分のように。
だがあの娘でも、都市中の人間を同時に操ることは不可能だ。一度に操れるのは多くて十数人が限界のはず。だがそれも使いようによっては、都市を滅ぼすことさえ可能――
待て――何を考えている？　自分の従士はどうした。そう、二人目の従士。

ふと、霧の向こう——城へと延びる街路の一つに、娘が立っているのが見えた。
灰色の修道服姿。淡く澄んだ碧い目がこちらを向いている。雛色の髪が風に揺れ、何かを諦めたような微笑とともに、囁く声。
(部屋の中では咲かない花なんです)
(風が吹くところでしか咲かない……自分の意志で咲くことのない花……)
ジークはその花の名を口にしようとした。ふいに、澄んだ風が吹き、霧が揺らめいた。
一瞬のうちに娘の姿は消えていた。自分がその手で葬った従士——
「ノヴィア……」
はっと我に返り、その名を呟いた。それが今の自分の従士だ。五人目の従士——
ジークはすぐさま凄魔の数体を都市に放ち、ノヴィアを捜索させた。万里眼で自分を探している気配も無い。この短時間に、何かあったのか。
ともかくは城に進軍する。魔獣もそれに対抗して城に集まるだろう。そうすればノヴィアがどこにいようとも危険は少なくなる。そう思って辺りを振り返り——愕然となった。
倉庫街で燃え盛っていた炎が弱まり、焼け落ちた建物の残骸が広がっている。
「いつの間に……」
炎の様子からして、最低でも数時間はここで立ちつくしていたことになる。

まずい——にわかに焦燥が暗雲のように広がっていった。
(——眠れぇっ!)
あの諜報院の男の叫びが猛然と甦る。あれは暗示だ——じきに陽が沈む。夜が訪れる。もはや一刻の猶予もない。ジークは自分が混乱していることを察した。だが、いったい何がどう混乱しているのかさえ分からないまま、城に向かって進軍を開始していた。
(俺を見ろ、ノヴィア——俺を見ろ——お前の存在が必要だ、ノヴィア——)
ジークの本能は、必死にそう繰り返している。外部からのきっかけがなければ、この力を撃ち破ることは難しい。諜報院の男にしみついていた香り。このままではまずい——
だがジークの意識はすぐに香りをかいだことなど忘れ、戦いに没頭していった。

「な……なんでここに来たのぉ?」
アリスハートが呆然と声を上げる。ほとんど泣き声に近い。
「だって……はぐれたときは、ここで落ち合おうって……ジーク様が……」
すぐ向こうの通りでは、焼け落ちた商館が、いまだに火と煙を上げている。
最初に進撃した場所——一つ目の巣である。そこから街路を一つ挟んだところにある聖堂の中へと、ノヴィアは何の疑いもなく入っていった。

「ジーク様が来るまでに、準備しておかなきゃ……」
「じゅ、準備って……まさか、ここに泊まる気ぃ？　なんであいつを見ないのよぉ」
アリスハートが慌ててノヴィアの胸元から飛び出し、
「だってジーク様……何も言ってくれないんだもの」
ノヴィアはそう返した。ひどく冷淡な声で。アリスハートは絶句した。何かが――いや、何もかもがおかしかった。こんなときにジークは何をしているのか。
ノヴィアは聖堂の宿泊所へ入り、てきぱきと働き始めた。夜に備えてランプの火を灯し、料理を作り、湯どころで火を焚く。出来上がった料理を三人分テーブルに並べ、
「ジーク様……遅いわね。何かあったのかしら」
本気で心配しているように言う。そのくせ万里眼を用いてジークを探しもしない。
アリスハートもだんだん何が何だか分からなくなってきた。
やがてジークの分の料理をテーブルに残したまま、ノヴィアは当然のように湯浴みをしに行った。魔獣が徘徊する都市のまっただ中である。正気の行動ではない。
「ねぇ……大丈夫ぅ？　狼男を捜した方が良いんじゃない？」
「ジーク様のことだもの……心配ないわ。それに……何も言ってくれないし……」
そんな言葉を繰り返し、湯浴みを済ませる。それから部屋の一つを勝手に選び、きちん

とベッドを整えると、誰もいない宙に向かって、にっこり笑いかけながらこう言った。
「私たち、ここで寝ましょう。もう陽が沈むわ。眠りが訪れるから。夜が眠らせるの」
もうたまらなかった。アリスハートはふわっと宙を舞い、ノヴィアの頬を必死に叩いた。
「おかしいよノヴィアぁっ。絶対おかしいよっ。全部、変だよっ」
ふとノヴィアの目が焦点を結び、アリスハートを見た。驚きの表情を浮かべ、
「アリスハート……私……どうして、こんなところに……」
「ノヴィアぁ……狼男は、何も言ってくれないんじゃないよぉ。ノヴィアのこと……」
そのとき、ふらりとノヴィアの膝から力が抜けた。ベッドに倒れ込むようにして、
「眠い……なんで……ジーク様……。寒い……とても寒いの、アリスハート……」
毛布にくるまっていきなり震え出したかと思うと、すうっと眠りに落ちてしまった。
「ノヴィアぁ……起きてよぉ……ノヴィアぁ……」
後には不安と悲しさで泣きべそをかくアリスハートだけが、そこに取り残されていた。

寒いのは心だ。心が何かを失っていることに気づいて寒さを感じさせるのだ――
ジークは剣を振るいながら、はたとそのことに気づいていた。
体の奥の方から凍えるような感覚が広がり、意識がどんどん朦朧としてくる。

周囲では砲火が轟き、戦いの咆吼、刃鳴り、破壊の音が入り乱れている。
魔獣どもがそこら中から押し寄せ、ジークと魔兵の軍団を取り囲もうとしていた。
南の大道路を進軍し、真っ直ぐ城へ向かう途中、何種類もの魔獣による防衛線が敷かれていたのだ。ジークたちの進軍を停滞させつつ、左右後背から続々と魔獣が攻めてくる。
ジークもそれに合わせて、敵に包囲させた上での突撃戦を選んだのだが――
先頭を突き進んでいた厳魔たちが急に勢いを失ったかと思うと、後方から援護していた砲魔たちも狙いを外すようになっていった。
彼らを招き出しているジークが、力を発揮しきれなくなってきたのだ。
かつて経験したことがないほど強烈な睡魔――この激戦のまっただ中で、剣を放り出して眠りたくなるという異常な事態が、ジークを襲っていたのだった。
(夜がお前を眠らせる。真実が夢の中に現れる)
頭の中では、あの男の叫びが、がんがん鳴り響いている。
「――牡牛座の陣!」
気力を振り絞って、正面衝突を避け、突撃陣形による離脱を命じた。このまま激戦を続けることは不可能だと判断したのだ。いや、現実の戦いに没頭すればするほど、気づかぬうちに心の中に、あの力が侵入してくるのだ。無差別な力――あの香りが。

敵の勢力が最も薄い城の西へと突き進むジークの全身を、濃密な香りが包み込んでいた。
いったいいつからとらわれていたのか。一度こうなってしまっては、
（夢を見せるんです……。人が夢を見る理由って……ご存じですか？）
自分だけで、この力から脱することは困難を極める。
（色々な出来事や思いを夢で見て……忘れるんです。夢は、忘却の場でもあるんです）
雛色の髪の娘の、孤独な影を帯びた微笑——風が吹かねば咲かない花の名——
混乱する意識。とてつもない眠気が、耐え難い重圧となって襲いかかってくる。
陽はどんどん翳り、夜が来る。戦いの光景が遠のいては近づき、また遠のく。必死に剣を握りしめ、もはや本能に任せて振るった。何を目標としているのかも漠然となり、
（城だ——魔獣が来ない場所——聖性が満ちる——どこか）
魔兵たちが次々に力を失い、咆吼を上げて倒れてゆく。陣形は崩れ、ただジークをふくめた先頭の集団だけが、生き延びるためだけに戦場からの離脱をはかる。
全軍の壊滅——まさしく、敗走以外のなにものでもなかった。
城のふもとの激戦をよそに、石造りの建物の屋根を走り飛ぶ、三体の影があった。
ジークからノヴィアの捜索を命じられた凄魔たちである。ノヴィアの聖性を追って、人

気の絶えた街区を駆け抜け、やがて、最初の場所——西の街区に来たときである。
しゃらん——ふいに、澄んだ金属の音が響いた。凄魔たちが一斉に音の方を向く。
街路に一人の女が立っていた。赤い衣服に身を包んだ、雛色の髪の女——
フロレスが、両手に細い鎖を垂らし、屋根の上の凄魔たちを見上げている。
「おいでなさい……ジークの使い魔たち……」
囁きながら、すっと右手を大きく舞わせた。しゃん、と澄んだ金属音を響かせて、香炉が滑らかに円を描く。左手からも同じように鎖と香炉が伸び、下方でゆっくり揺れている。
凄魔たちが街路に下り立つ。フロレスの背後には、ノヴィアのいる聖堂があった。
双剣を構え、凄魔たちが、かっとノコギリのような牙を剥いた。フロレスは、悠然と右手の香炉を舞わせている。円を描いていた香炉が、いつしか∞の形を描き始めていた。
濃密な花の香りが、押し寄せる波のように凄魔たちを呑み込んだ。
凄魔たちが、反射的に刃を振るって、空を切った。迫り来る見えない力を振り払おうとするのだが、形も色もない香りを追い払えるわけがない。
「あなたたちの敵はどこ——？」
たっぷりと甘い香りをふくんだような囁きが、凄魔たちの一体を動かした。
なんといきなり、傍らにいた他の凄魔に向かって、その剣を突き込んだのだ。

「何を求めて戦っているの……？」

胸元を貫かれた凄魔が、すかさず剣を振るって、相手の首をなぎ払った。

凄魔の首が、フロレスの足下に転がった。その首を優しく踏みつけ、フロレスが囁く。

「本当に憎むべき相手は誰――？」

最後の一体が、大きく剣を振りかぶったかと思うと、自分の腹に叩き込んだ。そのまま膝をついて動かなくなる。どの凄魔も、力を失って体が水銀のように溶けていった。

「ふふ……ジークが香りに染まっている分……使い魔を操るのはたやすい」

フロレスが香炉の動きを止めかけたとき――踏みつけていた凄魔の首が、にわかに牙を剝いた。フロレスが息をのみ、さっと足を引く。がちん。もし食いつかれていたら足首から先が無くなっていたような、凄まじい牙鳴りが響く。

左手の香炉が、紋様を輝かせながら円を描く。がちがちと牙を鳴らす首が、聖性の香りに包まれ、動きを止めた。そのまま、水銀のように溶けて消えてゆく。

「さすがジーク……まだ香りに染まりきっていないなんて……」

フロレスは両手の香炉の動きを止め、城の方へ冷ややかな目を向けた。

「でもじきに完全に夜になる。夢を見なさい、ジーク……私の最愛の妹を殺した夢を。その後で私が新しい夢を見せてあげるわ……あなたと従士が互いに殺し合う、血の夢を」

「とりあえず、これくらいでしょうかね」

アキレスが、紙にペンを走らせながら言った。自分たちがまだ覚えていることを列挙しているのだ。アンブローシャの女、その姿、なぜここに来たか、敵は誰か、自分は何者か。ランプの光を魔獣に察知されないよう、そこら中を布で覆っていた。

「やれやれ、まるで遺書ですね。記憶を失うだけで自分が死ぬような気になるとは……」

「心の死を体験しているということでしょう」

外で城を見張っていたトールが、あっさりと返す。城の詰め所であった。先ほどまで城のそばで激戦が繰り広げられていたため、今もそこらで魔獣の群がざわめいている。

女が現れるかと見張っていたが姿はなく、代わりにジークの位置は目星がついていた。

「ジークの動き……魔兵を犠牲にして城に入ったように見えましたが……」

「ふふ、私にはぶざまに潰走するように見えましたよ。あの女の力のせいでしょう。人を内側から殺すとは……実に恐ろしい女ですよ。我々としてはこのまま交代でジークを見張っているのが一番でしょう。そして、女がジークを狙って動いたとき、我々も動く……」

「女も、ジークを狙って城の中にいるのでしょうか」

「おそらくはね。混乱したジークに近づいて殺すのか……それとも他に方法があるのか。

どうジークを始末する気でいるのか楽しみにしながら待つとしましょうか……」
そう言ってアキレスは記憶を書き記した二枚の紙を手にし、ランプを消した。
詰め所から出て一枚をトールに渡し、城を見上げる。礼拝堂の窓で明かりが揺れている。
ジークがそこに入ってから動く気配はない。あそこで休息を取るつもりだろうか。
こうして見張りながら、トールは、女が記憶を操作したくらいでジークが戦闘で後れを取るだろうかと疑問に思っていた。女にはまだ別の力があるのではないのか。
加えてノヴィアのことが気がかりだった。なぜジークと行動をともにしていないのか。もし女の策略で離ればなれになっていたとしたら――女は、ノヴィアをどうするつもりか。都市の住民を平気で犠牲にした女である。ノヴィアの命など何とも思っていないはずだ。
「……少し、偵察に出てきます」
トールは言った。闇の中でも互いに夜目が利く。アキレスがこちらを見て、にやりと笑うのがはっきりと見えた。
「ジークの従士ですか……我々は今、二人でいることで女の力に対抗しているのですよ」
「二人よりも三人の方が、より対抗出来るのではないですか」
アキレスが驚いたように目を見開いた。トールは続けて言った。
「ジークの従士を確保すれば、人質にもなります」

アキレスが馬鹿にしたように笑う。どうせトールにノヴィアを殺す気が無いことを笑っているのだ。だが有効な手であることには違いない。アキレスは言った。
「良いでしょう。あなたが戻る前にジークが動いたら、私が追います。そのときは〈蛭氷〉をここに残し、位置を伝えます。再び会うまで互いを覚えていることを祈りましょう」
トールはうなずいた。するすると退き、影のように身軽に下の街路へ飛び降りていった。
毛布にくるまって眠るノヴィアの閉ざされた目蓋の隙間から、あとからあとから涙が零れ落ちた。この聖堂で落ち合おうとジークは言った。だから自分はここで待ち続けるのだ。
だが、もしいつまで待っても帰って来なかったら——母のように帰って来なかったら。
（行かないで母さん——）
何度も頼んだのに。危険な場所に行かないでと。だが母は、ただ一人の娘の思いよりも、民を優先し、そして死んだ。死に対する悲しみと怒りは同じほど強く、自分を置いていった母への怨み、また母を殺した者への憎しみもまた、根強く心に残っている。
そして——ノヴィア自身でさえ忘れていた、あの〈銀の乙女〉の施設の記憶が甦る。
そこではノヴィアは、ノヴィアでさえなかった。名前さえ持たない、棄てられ子——どこかから預けられた赤ん坊の自分。親のない不安。取り残された悲しみが、言葉に

ならぬほど根元的な感情として刷り込まれている。いったい自分の親はどこにいるのか。〈銀の乙女〉全体があなたの親になるのよと言い聞かせる声。たまらない寂しさ――そして、焼け落ちる建物の臭い。戦いが迫り、逃げ出す修道女たち――自分を置いて。

ノヴィアは声も無く泣きながら眠り、そして、夢を見た。悲しい香りのする夢を。

血の跡が点々と続いていた。左腕から夥しいほどの血が流れ落ちる。

ジークはたった一人、城への階段を登っていた。城の西側――魔獣の勢力がかろうじて弱い地区に逃げ込んだのだ。それから、どこをどう逃げたものか、まるで分からなかった。

散り散りになる魔兵のことが断片的に思い出された。自分がまだ剣を握っていることを何度も確かめながら、途切れそうになる意識を奮い立たせて階段を登ってゆく。

贅沢な飾りのついた壁や天井が現れ、いつの間にか城の中に入っていることに気づいた。

（いったい、どこへ行くのか――）

聖性が保たれている場所だ。城の西側では、魔獣が巣を作ることを避けている。そのどこかに自分が安心して休める空間があるはずだった。

やがてジークは、その空間に辿り着いた。城の礼拝堂――がらんとした石造りの広間。朦朧としながら礼拝堂に入り、扉を閉めたとき、足下で何かの輝きが起こった。

水銀の飛沫であった。凄魔たちが形を失い、ジークの手元に戻ってきたのだ。水銀の群が、あっという間に、ひと振りの巨大な銀のシャベルとなって左手に握られた。
剣を収める鞘――それを握りしめ、目が霞むのに耐えて扉を振り返る。
誰も信用できない――いったい誰が敵なのかも分からなくなりつつあった。
だが、少なくとも生き延びることは出来たのだ――多数の兵団を失いながらも。
そんな思いが湧いたかと思うと、突然、痛烈な悲しみがジークを襲った。
かつてドラクロワが失った兵団のことが思い出された。自分たちの軍が、なすすべもなく壊滅したことを。聖法庁の謀略に踊らされた末に、理想への階段を失ったのだ。
残されたのは互いの絆だけ。ドラクロワとシーラと自分。なのに――
投獄されたドラクロワの姿が、まざまざと甦った。
牢の鉄格子の向こう側から、苦しみに苛まれるドラクロワの呻き声が響いてくる。
そして、シーラの墓標。その墓石にはめこまれた、十字型の紋章――
ああ、全てが狂っていった。何もかもが歪んだまま、元に戻らなくなっていったのだ。
「ドラクロワ……俺がそこから出してやる……俺が必ずその牢から……」
がらん、と大きな音が響き、僅かに眠気から逃れた。気づけばシャベルを取り落としていた。ジークはそれを拾い上げ、柄と刃を分解し、何とか扉の取っ手に差し込んだ。

即席の閂である。何者かがここに侵入しようとすれば、すぐさまジークの力で凄魔が招き出されて迎え撃つ。もう誰も味方はいないのだ。近づく者は、皆殺しに——
いや、違う。まだ自分には味方がいるはずだ。従士——少女——若い娘——
彼女が、今、必要なのだ。一言でいいから、何か言葉を交わせれば——それがこの状況を破るきっかけになるかもしれない。それ以上に——
このままでは力だけに頼ることになる。心を失い、力だけしか信じられなくなる。
「思い出せ……。思い出すんだ……」
そう繰り返し呟きながら、ふらふらと広間を横切ってゆく。手も足もひどい寒さに震えていた。香りによって記憶が消えるとき、心が寒がるのだ。
ジークは、祭壇を避け、背後の壁にかけられた緋色のカーテンに向かって剣を振るった。
切り落とされたカーテンを体に巻き、毛布代わりにして何とか寒さを防ごうとする。
眠気に任せて膝をつきそうになり、必死に歯を食いしばった。このままでは自分に味方がいることさえ忘れてしまう。大事な存在を、何も分からず斬る可能性さえあった。
カーテンがなくなって剥き出しになった壁に向かって、ジークは剣の切っ先を掲げた。
ここに刻むのだ。従士の名を。忘れてはならない者の名を——
(ティア・アンブローシャです——)

かつて娘はそう言った。その陰のある微笑。今なお残る悲しみ。
ジークはかぶりを振って過去から響く声を振り払った。意識を集中して少女のことを思い出す。盲目に陥り、杖を突きながら必死に自分を追ってきた少女——力を得たにもかかわらず、自分の意志で力を越えることを決めた、あの聖道女のことを。
ジークは最後の力を振り絞って、その少女の名を、壁に刻んだ。
そして夜が訪れた。体の力が抜け、剣を握りしめたまま壁にもたれかかった。
「必ず思い出す……お前のことを……必ず」
壁に刻んだ文字が朦朧として見えなくなった。ずるずると倒れ込みながら、必ず思い出す、と心の中で繰り返した。いったいどちらのことか。少女のことか。娘のことか——
何もかもが溶けて渦を巻くような闇とともに、ジークもまた、眠りに落ちたのだった。

城の北西側にある領主の邸宅に、フロレスはいた。
広い寝室のそこら中に、死体が転がっている。みな互いに斬り合うか、己を刺し殺した、城の兵たちであった。下の階には、領主が家族を殺して飛び降りた死体がある。
魔獣たちは殺した人間の死体を巣に運び込んでいる。餌を貯めるためと、さらなる堕気を呼ぶためだ。だがこの邸宅はフロレスが都市に来て最初に訪れた場所であり、聖性に満

ちた香りが充満しているせいで魔獣たちが寄りつかず、死体もそのままだった。
フロレスは、その血と死体に囲まれたベッドに、ゆっくりと横たわった。
右手の香炉を顔に寄せ、自分自身に香りをかがせながら、目を閉じた。
「さあ……ともに沈みましょう……夢の中へ……記憶と忘却の舞台へ……」
勝利の確信をこめて囁きつつ、そうしてフロレスもまた眠りに落ちたのだった。

4

ひどく暗い夢だった。陰鬱な廊下に、足音がこだましていた。
じめついた壁に燃える松明の明かりを頼りに、地下牢への階段を下りながら、ジークはこれがいったい、いつの出来事なのかと記憶を探っていた。
そう――聖王の騎士となって、初めて得た従士を、その手で斬った直後のことだ。
その従士は、失われた故郷の代わりに他の国の土地を奪おうと画策する兄や仲間を止めるため、自分も武器を配ると見せかけて、自らみなの前でジークに斬られたのだ。
優しい青年だった。当時は今より戦乱が広がっていたため、故郷を失った同胞に与えられる土地がどこにもなかった。だから青年は、戦乱を鎮めることが、再び故郷を得る唯一の手段だと信じて働き――そして、ジークの手で葬られたのだった。

自分は今、その従士のことを思いながら、ある男に会うために、この牢を訪れたのだ。
自分がこの世で最も信じている男。その従士のように、全てを投げ捨ててでも救わねばならない相手——その確信が起こると、もはやジークはこれがいつの記憶なのかと考えることさえやめた。今の光景が現実であり、夢であるということさえ忘れた。
一般の囚人が入る牢獄の前を通りすぎ、獄吏に声をかけ、さらに下へ続く扉を開かせる。
地下深く——陽の光さえ閉ざされたそこに、分厚い鉄格子が並んでいる。
囚人たちの低い呻き声がこだまする通路を進み、最も奥にある牢の前に来た。
「ドラクロワ……」
悲しさが声に出ないよう、抑えた声で呼んだ。返って来たのは苦悶の声だった。それがしばらく続き、ジークは両手で鉄格子を握りしめたまま微動だに出来ずにいた。
「……ジークか」
やがて闇の向こうから、ドラクロワが声を返した。貴人にだけ許された特権のため、牢の中でも貴族服を着ている。身だしなみは常に整えられ、綺麗に梳かされた銀髪と、しみ一つ無い衣服が、闇に浮かぶさまは、この陰湿な地下にあってひどく不気味でさえあった。
ドラクロワは鉄格子から最も離れた壁際に背を預け、木のベッドに腰掛けている。その眼光は、牢の外の松明の光のせいで赤く燃えるように見えた。暗さのため表情は分からず、

「聖王の騎士となって、付けられた従士を……斬ったそうだな」
苦しみを押し殺したような声で、ドラクロワは言った。なぜ知っているのかとは訊かなかった。金で買収した獄吏から常に情報を仕入れているのだ。
また、ジークは正直、そのことをドラクロワに話したかったのだ。
自分が、聖王のもとでの所属になって起きた、最初の悲しみを。
「最初から……俺に斬られるつもりだったんだ。斬った後で……それが分かった」
「あの戦乱を鎮めるにはそれしかなかっただろう……お前は良くやった、ジーク」
まるで見てきたかのようにドラクロワが即答する。
ジークは、胸に熱いものが込み上げてきて、それを表に出さぬよう歯を食いしばった。
自分は、まさしくその言葉をドラクロワに言って欲しかったのだ。心底、情けなかった。
従士を——味方を殺したという心の傷を、自分だけではどうすることもできなかったのだ。
自分が救われねばならないドラクロワに、こんな風に甘えるしかないとは——
「聖王は、俺に、次の従士を付けようとしているんだ。もう候補を決めていて……」
「用意の良いことだ……。それだけ聖王も、お前の力量を買っているのだろう……」
ドラクロワの声には、まるで全て思惑通りに進んでいるというような響きがある。
当時ドラクロワは、聖王と対立する勢力と手を結び、秘儀を手に入れようとした罪で投



獄されていた。そのためジークは聖王直属となり、ドラクロワの騎士ではなくなっている。
その転属を受け入れるようジークに告げたのもドラクロワだ。
聖法庁の中で、自由に動ける地位を手に入れろ――それがドラクロワの命令だった。
その真意はジークにも分からない。秘儀の入手に失敗する前後から、ドラクロワはジークにさえ理解しがたい考えを抱くようになっていた。その上、秘儀に触れ、シーラが命を落として以来、ドラクロワは原因不明の苦痛に耐え続けていた。いったい何に苦しんでいるのかと訊いても、ジークには理解出来ない答えばかり返ってくる。
ジークに出来ることは、こうして牢を訪れながら、聖王のために働くことだけだった。
自分の働きによって、ドラクロワの罪が軽くなるよう聖王に嘆願するために――
そのためだけにジークは、黒印騎士団として大陸にはびこる争乱を闇に葬っていた。
それは大陸の秩序を守るための正当な戦いではあったが、かつてドラクロワとともに抱いた理想の実現からはほど遠かった――
「聖王の望みは、あくまで今の聖法庁の維持と発展だ……。聖王め……古来の秩序を守るために、どうしても、お前の力が欲しいのだろう……」
「お前が、俺にくれた力だ……ドラクロワ。この力は……聖王のものじゃない……」
「その力……今は聖王のため……聖法庁のために使ってやれ……ジーク」

ドラクロワが、かすかな笑いをふくませて言った。聖法庁全体に対する、深い憎しみを抱いているような笑い——そのくせジークには聖法庁のために働けと言う。ドラクロワの真意がつかめないことが、ジークにとっては耐え難いほどの悲しさを覚えさせた。

「聖王が選んだ従士に……もう会ったのか？」

「いや……称号名だけ聞かされたんだ。俺も聞いたことのない称号だった……」

「称号……？　お前と同じ騎士身分の者を、従士にする気か？　いや、そうか……〈銀の乙女〉の一員を、お前の従士として随行させる気だな……」

ジークはうなずいた。ドラクロワが闇の中で、鋭い笑みを浮かべた気がした。

「確かにそれなら、お前が再び従士を斬るようなことはない。何という称号だ……？」

「〈香しき者〉というらしい。どんな力を持っているのか、まだ分からないんだ……」

ジークが告げると、ドラクロワがふいに沈黙した。闇の向こうでじっと何か思案している様子を見せたかと思うと、煮え立つような怒りのこもった笑い声が牢に響いた。

「〈香しき者〉か……。聖王め……〈銀の乙女〉が持つ闇を、お前に使う気か……」

「〈銀の乙女〉が持つ闇……？　どういうことなんだ、ドラクロワ……？」

「気を付けるがいい……ジーク。聖王は、どうやら本気でお前を欲しがっている……」

そのドラクロワの声に、苦痛の響きが混ざり始めた。

またあの、ジークには理解出来ない発作が起ころうとしているのだ。
「俺は、お前の騎士だ。必ずお前を、ここから出してやる。そしてもう一度理想を……」
ジークが必死に言う。ドラクロワが苦悶を押し殺すようにして笑った。
「行け……ジーク。心を奪われぬよう気を付けろ……。全てを疑い……そして強く意志を保て……。お前もまた、大いなる秘儀の、歯車の一つなのだから……」
ドラクロワがうずくまり、闇の中でジークに背を向けるのが分かった。こうなるともう会話にならないことは分かっている。だがジークはなおもその場にとどまり、
「必ず……俺が、お前をここから出す……ドラクロワ」
誓いの言葉を繰り返し告げ、牢を立ち去った。
ドラクロワは、ただ独り、闇に沈みながら、苦痛に耐え続けていた。

ジークは地下牢を出た。ドラクロワには見ることの出来ない陽の光に目を細めながら、〈香しき者〉という称号について考えた。
（そう。このときはまだ、彼女をこの手で斬るという決意はどこにもなかったのだ――）
夢と現実が交差するような意識が僅かに起こり――ジークはすぐに今見る現実に従って街路を歩いていった。聖都を何重にも囲む城門をくぐり、丘へ来ていた。

風は陽気さを帯びている。春が近づいているのだ。鮮やかな緑が広がる丘を登り、小さな墓地へ入る。そしてそこにある白い墓石の前に立った。

墓石には、十字型の紋章がはめ込まれている。〈癒す者〉の紋章――生前、シーラが身につけていた紋章が。〈銀の乙女〉の墓にはたいてい、紋章をはめる孔を空けるのだ。

墓前には、いまだに大勢の者から、沢山の花が捧げられている。

ジークは、自分の手による墓標に――その手で葬った者に、心の中で語りかけた。

やっと、聖王の騎士としての任務を終えて、聖都に帰って来られた。

聖王の手の者がそこら中にいて、今も自分を監視しているが、それにももう慣れた。

ドラクロワの勢力は、もう復活の見込みがないほど離散してしまっている。

今では聖王派が、聖法庁を完全に支配しつつある。むろん自分の働きも、それに一役買っている。いったいドラクロワが何を考えているのかまだ分からない。自分が本当に分かりたいと思っているのかどうかも――だんだん分からなくなってきた。

このままでは、いずれ聖王の名の下で、聖法軍の枢要を任せられることになるかもしれない。それがひどく虚しい。ただ理想を生き延びさせるために――ドラクロワを死罪にさせないために、聖王に従っている。自分はいったい何のために戦っているのか――

「教えてくれ……シーラ……。俺は……どうすればいい……」

思わず低く声が零れたとき——ふいに、誰かが近づいてきて、ジークの傍らに立った。
「よろしいでしょうか」
ひどく丁寧な口調——相手を突き放すような印象を与えるほどの。
振り返れば、そこに一人の娘がいた。
ふわっと波打つ雛色の髪、淡く澄んだ碧い目。百合の蕾を連想させるような瑞々しく、凜としたおもて。清潔そうな灰色の修道服に、ほっそりとした身を包んでいる。
背はそれほど高くなく、ジークの胸の辺りに、小さな頭があった。
娘が両手に花束を抱えているのを見て、ジークは下がって場所を空けた。
娘が一礼して、ジークの前を通り過ぎる。かすかな香りがした。甘いというにはどこか澄んだような——まだ若い果実を思わせる香りを感じ、ジークはちらりと娘を見やった。
修道女が香水をつけているのかと珍しがったのだ。だがすぐに花束の香りだろうと思い直した。娘が墓前にしゃがみこむ。ジークはそのまま立ち去ろうとした。
「お花も持たずに……墓前に立つんですね」
娘が言った。咎めるというのでもない。ただ単に納得したような口調だった。
ジークは足を止め、再び娘を振り返った。〈銀の乙女〉らしい几帳面さを押しつけられるのかと思ったが、娘は墓標に目を向けたままでいる。まるでジークのことなど見てもい

ず、言いたいことだけを言ったという顔だ。あるいは——そうやってジークの反応を試しているのかもしれない。ジークが無視して行ってしまうかどうかを。
立ち去らずに声を返す気になったのも、娘のそんな姿勢ゆえだろうか。相手がすぐそばにいるのに、まるで遠くから言葉を投げ込むような仕方でしか相手と接せないような——
「彼女が好きな花は、夏にしか咲かない」
ぽつっと呟くように言った。娘が、僅かに目を見開いた。ゆっくりと屈めていた膝を伸ばし、墓標を向いたまま頭を下げ、うつむいたようになった。詫びのつもりだろう。
そのときになってようやくジークは、娘の言葉のおかしさに気づいた。
墓標には沢山の花が捧げられている。その一つがジークが捧げたものでないとなぜ分かるのか？　そう。この娘は、ジークが花を持たずにここに来たことを知っている——
「丘を登っていくあなたを、見ました」
娘が言った。うつむいたような顔が、まだ墓標を向いていた。
「今回のお仕事に就く前に……同じ〈銀の乙女〉として彼女にご挨拶をしておきたくて、ここに来たんです。それに、もしかすると聖王様からご紹介される前に、ここであなたにお会いできるかもしれないと。本当に会えるとは……思っていませんでしたけど」
「いつ、俺の顔を知った」

娘は目を伏せ、ジークに対してひどく悪いことをしたかのように身をすくめた。

「聖王様が、あなたに私の称号を告げられたとき……私、奥の間で控えていました。どんな方なのか、知りたくて。さぞ、ご不快のことと思います」

「いや……」

としかジークは応えない。実際、大して不快でもなかった。かえってこの娘への同情さえあった。従士をこの手で斬るような騎士のもとで働けと言われれば、誰だって不安になるだろう。どんな人間か警戒するのは当然だった。

それにしても、聖王と〈銀の乙女〉の高位の者たちは何を考えているのか。よりにもよってこんな若い娘を、策謀の渦巻く任務に放り込むとは――

「でも聖王様の前にいるあなたを見て、決心がつきました。あなたの従士になることを」

娘は、そこで初めて顔を上げ、ジークの方を振り向いた。かと思うと、

「私、あなたに斬られた従士は、幸せだったと思います」

とにかくそれだけは伝えなければならないといった、上ずった声を放った。

「――なに？」

ジークが眉間に皺を寄せる。

「本当です」

娘は、いったん目を合わせると、どうにも目をそらすことが出来ないと言うように、食い入るようにジークを見つめ、言った。
「あなたの従士は、最後まで、あなたのことを信じていたと思います」
そのまま、唇を引き結んでじっとジークを見上げている。
ジークが唖然となって見返していると、だんだんその顔が赤くなってきた。
「……そう言えと、聖王に言われたのか？」
娘がもの凄い勢いでかぶりを振った。自分の髪で、自分の頬を叩いている感じだった。
「あなたは、聖王様に、どんな従士でも構わないと仰っていました。ですから後は、私が従士の任を受けるかどうか決めるだけだと——聖王様は、それだけを私に仰いました」
確かに、ジークにいちいち従士を選ぶ気はなかった。どうせ聖王がこれと決めた人材をあてがってくるだけなのである。ジークとしてはそれに従うしかない。だが——
「本当に聖王が、お前に、俺の従士になれと言ったのか？」
思わずそう聞き返していた。この娘がどんな力を持っているか想像もつかなかった。
「私の力で、あなたを助けよと、聖王様と〈銀の乙女〉の聖女の方々が私に命じました」
だが娘は毅然として言う。その少年のような瑞々しさが、なぜかドラクロワと初めて出会った頃の自分を思い出させた。この娘を戦地につれてゆくことに抵抗を覚える自分と、

妙に納得させられる自分がいた。そのどちらが正しいのか分からぬまま、ジークは訊いた。
「お前の名は？」
するとは娘は両手を固く握り合わせ、何度も練習したのだと言わんばかりに声を上げた。
「ティア・アンブローシャです。どこへでもお供します、ジーク・ヴァールハイト様」

5

ぼそぼそと話し声がする中、自分が運ばれてゆく夢をノヴィアは見ていた。
声がするのは分かるが、何を言っているのか分からない。いや――まだその当時は、あまりに幼くて言葉の意味が分からなかったのだ。
花の香りがした。咲き乱れる白い花弁。白水仙の花――その中を運ばれてゆく自分。
悲しい泣き声。温かな母の胸から引き剝がされる悲しさ。手から手へ渡される赤ん坊。
忘却されていた心――漠然とした幼い頃の原初の記憶が、断片的に現れては消えてゆく。
それがいつまでも続いたかと思うと、ふいにはっきりとした記憶が夢に現れた。
「友達になろう」
魔法の言葉。どきどきするような。私も一人ぼっち。だから――
「この子、アリスハートっていうの。一緒に旅がしたいの。良いでしょう、母さん」

森の中で出会った、初めての友達。母の驚いたような顔。
「この子、探しているの」
故郷を。帰るべきところ——自分が生まれた場所を。
（大地から与えられる役割に従うがいい、遥かなる視覚を持つ少女よ）
母から教えられた、自分が生まれたという場所以外にも、帰るべきところがあるという
のだろうか。途方もない課題を与えられたような気がして呆然としたとき——
幼い自分が、母の膝を両手でつかみながら、不安そうに訊いていた。
「どうして私、お父さんがいないの？」
母は言った。いたわ、と。聖法庁の騎士だったという父。戦乱で死んだ。母は死を隠さ
ない。ノヴィアが嘘をつかれることでどれだけ傷つくか知っているから。
ただ母と、父がいない悲しみを共有した。母に近づけた最初の一歩だった。
「お母さん……お父さんがいなくて、寂しい？」
母は微笑してノヴィアを抱き上げた。そのまま、優しく胸に抱かれる。失われていたも
のが戻ってきたという安心感がノヴィアを包む。そして母は言うのだ。
「あなたがいるわ、ノヴィア。あなたがいるから……母さん、生きられたのよ」
そして——暗黒。

大勢の者がいる気配がする。鎧が鳴る音。アリスハートが運んでくれた花の匂い。それが盲目に陥った自分を外へつれ出してくれた。
「ねえ、アリスハート、訊いていい？」
冷たく凍えた心で、口にする。また失った。また奪われた。また置いて行かれた。
「これ、本当にお母さん？」
アリスハートの泣き声。
「誰か……私の知らない人じゃないの？」
そうなのだ。冷たくなった頬。自分に暗闇を授けて死んだ母。
『私の大切な娘、……へ』
分かっている。分かっていたのだ。愛してくれていたことは。だからこそ自分を置いて行った怨みも強く残っている。民を守るためだ。そのために母は死んだ。自分もそうなりたい。その思いもある。全てが正しいのだ。たとえ怨んでいたとしても母は自分のことをいつまでも愛してくれるだろう。だからこそ安心して怨んでいられるのだ——
夢の中でだけの思い——目覚めれば、それはとっくに解決したものとして思い出される。
だがもしその思いの先に、別の記憶があるとしたら——
「あなたがいるわ、……」

母が自分の名を呼ぶことへの違和感。また奪われたのだ。自分の名を呼んでくれる者を。
自分の名――それは本当に、自分の名だろうか？
大人たちの手から手へと運ばれてゆく赤ん坊。その子に名はあっただろうか？
〈銀の乙女〉の施設――戦乱で焼け落ち、自分を置いて逃げ出す修道女たち。
自分は、泣いて、泣いて、泣いて、泣いて、泣いて、泣いて、泣いて、ただ泣いて。
そして見つけてくれた母。自分に名を与え、自分を育て、そして、
「私の大切な娘、……」
奪われ、与えられ、また奪われ、また与えられ――幼い頃から自分は待つしかなかった。
今でもこうして待っている。誰かが迎えに来るのを。言われた通りに待っているのだ。
絶望の刃が背後から迫っていたときも、自分はただひたすら待ち続けていた。
そして――その男は、現れた。
暗闇に陥った自分を肯定してくれた男。強大な力を持ちながら、多くの魂の声を聞きながら、それでもひどく孤独なままでいる男。その男が自分の悲しみの多くを葬ってくれた。
待っていた。だから追った。自分からそれまでの居場所を捨てて出て行ったのだ。
初めての体験だった。もう決して、ただ手から手へ運ばれてゆくだけではないのだ。自分の意志で追いかけた。魔法で結びついた友達とともに。杖を頼りに、希望を求めて。

そして今——それすら奪われて。
「俺を見ていたな」
なぜ何も言ってくれないのか。
「お前はよくやってくれている」
自分の力だけ。自分を呼んでくれる者をずっとずっと待ち続けていたのに。
「見えるか、……」
名づけられることさえなく葬られた子供がここにいるというのに。
幼くなって泣いている自分。遠い記憶。悲しみが、隠されていた心の底から迫る。
忘れていた——それでいてこれまで常に自分の行いの全ての背後にあった悲しみ。
手放され、置き去りにされ、忘れ去られたという思い。少女の中の大事な何かが脆くも崩れ、かつて経験したことのない闇が広がった。そしてそこに響き渡る、最後の叫び——
私の名前は、何——？

聖地シャイオンの象徴である湖から、西へ離れた辺りにある、河の手前だった。
陽が沈んだそこに、ランプを手にした付き人たちと、車椅子に乗ったレオニス、そして

頭蓋骨を抱いてぼんやり佇む、地獄の彫刻師レティーシャ・ベルゼブベスの姿があった。
「お前に明かりは必要ないだろう。今ではこの場所に近づく者はほとんどいない。特に陽が暮れてからはな。夕方から夜の間、ここで幾らでも綺麗な像を彫らせてやる」
レオニスが言った。レティーシャは辺りを見回し、感心したような声を上げた。
「これ……レオニス様がやったのかな、ねえ兄様？」
レオニスは応えず、ランプに照らされた大地を見た。
黒く焦げついた土に堕気が染みこみ、草木も生えぬ焦土と化している。
焼き尽くされた大地――かつて湖から現れた怪物が炸裂した、爆心地であった。
ちょうど河の上で怪物が爆発したため水が氾濫し、しばらく泥地と化していたが、今は堤防を造り直し、河はこの一帯を迂回して流れている。
レティーシャはてくてくと炸裂の中心まで歩いていった。レオニスの予想に反して靴を履いている。城が丸ごと入りそうなほど広く抉られた地面の中心に立ち、周縁を見回す。
堕気を払うための聖性をやどした石碑が、墓標のようにぐるりと取り巻いているのだ。
それより内側には、幾つも巨大な石塊が運び込まれている。彫刻用の最高級の石である。
「父がやったことだ……僕には関係ない」
レオニスは呟くように言った。むろん嘘だ。父はあの怪物を――〈刻の竜頭〉を封印し

ようとしていた。それを利用して世界を滅ぼすための力をこの手で造り出そうとしたのだ。
その結果が——この焦土だった。
こうして改めて見るにつけ、ドラクロワが求めているものに強い疑問を感じた。
ただ堕気を無限に吸収して炸裂するような生きた爆弾の、どこが禁忌の秘儀なのか。
この秘儀に次の段階があるとしたら、いったいそれは何か。そしてその秘儀の最終的な目標とは何なのか。それが判明すれば、ドラクロワに匹敵する足がかりになるのに——
「レオニス様、またやろうとしてるんだ。同じことするんだ。ふー。兄様」
レティーシャが、彫刻用の石の一つを物色しながら言う。レオニスは肩をすくめた。
「臣下が誤解するような言動は慎め、レティーシャ」
ことさら呆れたように言う。臣下の誰も、レオニスがこの地で秘儀を暴発させたことも、ドラクロワと共謀していることも知らないのだ。ただ——レオニスは、レティーシャがときおり見せる、異様なまでの勘の鋭さに、警戒心を抱き始める自分を感じていた。
「最高の愚者は、ときとして最高の賢者にもなると言うが……つくづく嫌な女だ」
「ねぇ兄様、ここを沢山、綺麗にして良いのかな。本当かな。ねえ、兄様？　本当かな」
レティーシャがことさら大声を上げる。レオニスに確認を取っているのだ。
頭蓋骨との会話を通してしか疑問も意見も示せないのかと怒鳴りかけそうになりつつ、

「……本当だ。石が足りなければ運ばせる。地下牢のように存分に綺麗にしろ」
レティーシャは、頭蓋骨を胸に抱き、くるりとレオニスを振り向いた。
何をするのかと思ったら、ぺこりと頭を下げた。よほど嬉しかったのだろう。
レオニスが苦笑しかけたとき、レティーシャがひょいと顔を上げて、石と向き合った。
「待て――僕たちがいなくなってからにしろ……」
レオニスが慌てて言う。レティーシャは全く聞こえていない顔で、頭蓋骨を捧げ持った。
「うぬるむぬぐぬぬむぬにょいにぃあぁあるらるとるてにるのるるるぐああおおう……」
その口から朗々と流れ出したのは、何とも言えぬ奇妙な声であった。酔っぱらった狼が、自分の腸を貪り食らいながら発するがごとき奇声とでも言うべきか。聞いているだけで体中が痒くなるような異様な詠唱に、臣下たちが薄気味悪そうにレオニスに顔を寄せる。
「あ、あれはいったい、何の呪文ですか……？　レオニス様？」
「あの女のただの癖だ。力を発揮するときのな。この際だ、お前たちも見るか……」
その力を――とレオニスが口にしたとき、にわかに大量のそれらがレティーシャの足下や脇の下、衣服の隙間から溢れ出し、臣下たちが嫌悪の声を上げた。
唸るような凄まじい羽音がした。一つ一つは極めて小さいそれらが、レティーシャの影そのものから、真っ黒い煙がもくもくと噴き出すかのように現れるのだ。

その一匹が羽音を鳴らして宙を舞い、臣下が持っていたランプの上にとまった。
それは小指の先ほどの、黒い、人の形をしたものであった。背中に羽があり、非常に小さな黒い妖精にも見える。だが——何しろその頭部が異様だった。
「は……蠅……？」
臣下が悲鳴を上げた。なんと蠅の頭が、小さな牙をかつかつ鳴らしているのである。
「レティーシャの影から招き出される堕界の魔獣……〈邪妖精〉だ」
レオニスが、ぶんぶん鳴り響く羽音に顔をしかめながら言う。
「ま……まさか、彼女の彫刻は、この蠅が……」
ランプを持った臣下が怯えた声を漏らしたとき、
「うるるぐあいあおうおうぬるにあるるあ♪　おうろろろるるあいあいおうるがぐが♪」
レティーシャの奇声とともに、黒煙のごとき蠅の群が、一斉に彫刻用の石にたかった。
何万という蠅の牙が、削るような引っ掻くような、何とも耳障りな音を立てて石に食らいつく。レティーシャの服の至るところから蠅が湧き出し、その手に捧げ持った頭蓋骨の両方の眼窩からも、泥水のように溢れ出している。
そして蠅の群が徐々に石の頭の方から飛び立ってゆくにつれ、見事なまでの彫刻が現れてゆくのだった。身もだえ、叫び、苦しむ人間が、得体の知れない力でどろどろに溶け合

われて、そのまま凍りついたような、地獄の彫刻が。
「あの蠅の牙は小さいが、どんなに硬い物質でも齧り取ってしまう。しかもレティーシャは、何十万匹という蠅を呼び出すだけでなく、同時に一匹一匹を正確に操ることが出来るんだ。いったいどういう頭脳をしていればそんなことが出来るのか、想像もつかないよ」
レオニスが呆れたように言ったとき、さっそく最初の彫刻が完成していた。
続けてレティーシャは体中に蠅をたからせたまま、てくてくと歩いて──平然と足下にいる蠅を踏み潰しながら──次の石へと向かっている。潰された蠅はどろりとした染みとなってレティーシャの影に吸い込まれるようにして消えていた。
「綺麗ぇぇいいうるあるがぐがぐあるあ♪　とっても綺麗ぇいいいぬぐえあいぇぬぐ♪」
石ばかりでなく、焦げ付いた地面でさえも蠅の群に齧られ、次々に得体の知れない像が彫り込まれてゆく。こんな声と蠅の羽音を四六時中聞かされていては、地下牢の囚人たちがおかしくなるのも当然である。さながら闇から地獄が姿を現すかのような光景に、
「まさしく〈蠅姫〉……。何度見ても、凄まじい……」
さしものレオニスでさえ、背筋に冷たいものを感じるほどであった。
「さぁ……いつまでもこんなものを見ていてもしょうがない。城に帰ろう……」
レオニスが指示しかけたとき、ふと全ての像に共通して彫られているものに気づいた。

白水仙――その花弁や葉や茎が、阿鼻叫喚の地獄で苦しむ老若男女の手に握られ、その口にくわえられ、ときには胸や腹に刻み込まれているのだ。
「一緒になるよ、ねぇ兄様。あたしがレオニス様の望む女神様を彫ったら、きっと、あたしとレオニス様は一緒になるよ。ねぇ兄様。あたしたちみたいに綺麗に、ねぇ兄様」
レティーシャが、くすくす笑いながら言った。幼い子供が泥遊びをして喜ぶように。うきうきと石から石へ歩き回り、レオニスでさえ初めて見る速度で像を仕上げてゆく。
「馬鹿を言え……。お前と兄と、一緒だと……」
吐き捨てるように言うが、レオニスは像に彫り込まれた花から目が離せないでいる。
ふいに両手に灼熱の痛みが起こり――すうっと消えた。目の前の花の像が――地獄に咲いた花が、その痛みを消したとでもいうように。なぜかレオニスは、自分にとって何か大事なものが、いきなり何の前触れもなく失われたような気持ちに襲われていた。
「トール……」
思わずその名を呼んでいた。返事など無いと分かっていても。急に予想もしない怖いものが、明確な形を伴って現れてゆくような気がしていた。
「うるるむいにぁ一緒にぐあらるえおう♪　綺麗ぇいにぬるぐぬあぬ綺麗ぇぇいいに♪」
レオニスは、呆然とレティーシャを見た。無邪気に歌いながら、どこまでも陽気に騒然

と地獄を出現させようとする蝿の群とその姫を。

6

いったいどこで彼女を斬る決心をしたのか——
(たった二人だけの姉妹だったのに)
夢の中のジークの心を、誰かが探ろうとする気配があった。なぜあの娘が、
(同じ力——ともに〈銀の乙女〉の闇を司り——大陸の平和のためと信じて)
ジークの手で、葬られねばならなかったのか。その答えは記憶の彼方に沈んでいる。
(信じられる相手——生きる上での希望——それを奪われた痛みを分からせた上で)
どこからともなく声が響き、すぐに消えた。
ジークは、出会ったばかりの二人目の従士——ティアとともに丘を降りていった。
そのまま別れて任務が下るまで会わないでいても良かったが、何となく同じ道を歩くうち、ジークが、その住まいにティアを招くことになっていた。ジークとしては単に、一人目の従士のときも、そうしたというだけで口にしたことだが、ティアはことのほか喜んだ。聖都に来てまだ間もないため、招待してくれる知人などほとんどいないのだという。
途上、短い言葉しか交わさなかった。互いに短く言葉を投げては、しばらく間があり、

かと思うと、やおら反応を示す。そういう、会話とも何ともつかぬやり取りがあった。
「ここには滅多に帰らない。埃だらけだ」
ジークはそう言って、部屋に迎えた。高位の騎士が聖都で与えられる部屋だったが、ジークが選んだのはその中でもとりわけ狭いものだった。
「あまり広いと、どう飾ればいいか分からない」
呟くように言いながら、客間の椅子を差し出す。
「騎士様の住まいを、私、初めて見ました」
雑然と積み重なった本や箱の間に、それだけ手入れが行き届いている剣や防具が無造作に置かれている。ティアは、ほっそりした指でテーブルをなぞり、
「埃、ですか」
綺麗に磨かれていることに、ちょっと驚いた顔をする。
「そこは先日、帰還したときに掃除した」
住まいに戻ったところでそれ以外にすることが無い。
それに身辺を整えることは、兵舎で過ごす上で身についた習慣だった。
ジークが茶を淹れて出すと、ティアはひどく恐縮したように身を縮めて受け取った。
「お茶、お好きなんですか」

台所や居間の棚に並ぶ、茶葉の入った瓶を見やってティアが言う。
ジークは適当にうなずいた。滅多に酒を飲まないため、茶が多いのだ。
左腕の堕気を抑えるための薬湯も、自分で調合して作るのが習慣だった。
「本、お好きですか」
今度は、部屋の一角を占める本棚を見る。ジークも、ティアと差し向かって座りながら、ちらりとそちらを見た。この部屋で最も埃が積もっている場所を。
「好きになれと言われている」
呟くように返し、茶をすする。どの本も、かつてドラクロワかシーラから勧められたものだった。そしていまだにどれ一つとして、読破していなかった。
「せっかくの、お休みのときに……お邪魔して、御迷惑でしたか」
お茶をすすり、ぽつねんとした感じで言う。
「いや……」
としかジークは返さない。僅かな沈黙のあと、呟くように訊いた。
「俺に斬られる心配はしないのか？」
ティアは、ぶっと、すすりかけていた茶を噴き出した。
ジークが唖然となる。ティアは慌てて袖で手や口元を拭った。その動作が妙に幼い。

「……な、なんでですか？」
逆に訊き返してきた。
「聖王に謁見していた俺を、見ていたと言ったな」
「あ、あれは、あなたのことを、知りたかったから……」
「……それで、何を知った？」
「あなたが、とても悲しんでいること……。聖王様には、分からないみたいですけど。従士を失ったことや……それ以外の全てに対して、あなたは、とても悲しんでいて……。だから、私の仕事は、あなたに、悲しみを忘れさせることかなって……思いました」
ジークは沈黙した。いったいこの娘は何を言っているのか。前の従士のことを忘れろと言うのか。これまでに起こったあらゆる悲劇を、そう簡単に忘れられるとでも言うのか。
ティアも両手でコップを持ったまま黙る。ジークが席を立ち、新しい茶を淹れていると、
「……私、何の野心も抱いてません」
ティアは、それが全ての答えになるというように、目を伏せたまま言った。
「言われたことしか、やるつもり、ありません。あなたは、そういう人を斬りません」
ジークは黙ったままティアのコップを受け取り、新しく茶を注いでテーブルに置いた。
「ティアの花をご存じですか」

立ったままのジークを見上げて、訊いた。ジークは、かぶりを振りながら席に戻った。
ティアはまた目を伏せ、小さな声で言った。
「部屋の中では咲かない花なんです。風媒花って言うのとは……少し違いますけど」
「咲かない……？」
「風が吹くところでしか咲かない……自分の意志で咲くことのない花……。それがティアの花です。私、それと同じです……。余計なこと、してはいけないって」
僅かに上げた目が、遠くを見るようだった。その目が急に焦点を合わせ、ジークを見た。
「あ……だから、私、あなたに従います。何でもご命じ下さい、聖王の騎士様。出来る限りのことを、してご覧に入れます。今日から、あなたが、私の風です」
やけに、きっぱりと言ったものだった。ジークは何かが引っかかるのを覚えていた。このティアという娘がどうというのではない。聖王の意図がどこにあるのかということだ。なぜこんな娘が従士に選ばれたのか。心を奪われぬよう気を付けろとドラクロワは言った。まさか〈銀の乙女〉に自分を籠絡させようというのか。もしそうなら笑止の沙汰だ。
「自分の名は、嫌いか」
何となくそんな感じがして、つまらなそうにジークは言った。
だが、ティアはびっくりしたように目を丸くして、

「え……そんなこと、ありません。多分……だって、私につけられた名ですから」
どこまでも受け身なことを言う。かと思うと両手を握り合わせ、にこりと笑った。
「あなたの名前は、好きです。勝利って、意味ですよね」
これだけは本心だとでも言うような口調——世辞を言っているという印象はない。
ひどく無邪気だが、同時に、苛々するものを感じさせた。
「聖法庁、最強の軍団であるあなたに、ふさわしい名です。偉大な力を持つ人の……」
「力があれば救えていた」
思わず語気が鋭くなった。ティアがびくっと肩を震わせる。ジークは口をつぐんで、その先に続く言葉をのみこんだ。最初の従士も、ドラクロワも、謀略の犠牲になった何万という友軍も、そしてシーラも——本当に偉大な力があれば、みな救えていたのだ。
ティアは驚きのあまり硬直したようにこちらを見ている。こんな娘に怒りをぶつけて何になるのか——ジークは我ながら情けなくなり、詫びるように視線を落とした。
そのときふと、ティアの両手の中指に、それぞれ奇妙な指輪がはめられていることに気づいた。両方の指輪から、細い銀の鎖が、袖の奥へと伸びているのだ。
ふいに澄んだ香りがした。かすかな聖性を感じ、香水の香りなどではないのだと咄嗟に気づいた。聖性による力か？〈香しき者〉——その力はいまだ不明だった。

指輪からティアの顔に目を戻すと、まだじっとこちらを見ていた。
だがその表情は一変して真剣なものになっている。心から誓うように、ティアは言った。
「私、あなたという風に従います」
ひどく真っ直ぐな視線――まるで赤ん坊が親を求めるように。
「……好きにしろ」
ジークは、そう言って、ただ目をそらすためだけに茶をすすった。
それから妙に長い時間、二人でまたぽつぽつと言葉を交わした。
騎士と従士としての関係を築くためというより、たまたま多くの理由があって一緒にさせられた二人が、ぎこちないながら親しくなろうとするような時間が過ぎてゆく。
やがてようやく夕刻になり、ティアが丁寧に辞去を告げた。玄関先で送る段になって、
「……お前の力を、聞いていなかったな」
今さらのようにジークはそう口にしていた。途端にティアは身を縮こまらせた。
「申し訳ありません……〈銀の乙女〉の中でも、秘密が多くて、決まりも多いんです」
ジークはうなずいた。どうせ守秘するだろうと思っていたのだ。ジークの力も、左腕の聖印が力の源であることや、大地を通して力を現すことは、一部の者しか知らない秘事だ。
いずれ任務をこなす過程で互いの秘事が明かされるだろうと思い言及せずにいると、

「あ……でも、一つだけ」

ティアは顔を上げ、しっかりと両手を握り合わせながら、こう口にした。

「夢を見せるんです……。人が夢を見る理由って……ご存じですか？」

その指輪の鎖をちらりと見つつ、ジークはかぶりを振った。ティアはにこっと笑い、

「色々な出来事や思いを夢で見て……忘れるんです。夢は、忘却の場でもあるんです。そして私の力は……人に夢を見せること。今はそれだけ、お伝えしておきますね」

嬉しげにそう言った。まるでその力を見せればジークが喜ぶとでもいうように。

第三章　記憶の囚人たち

1

なぜ斬った――

その問いを残したまま、夢が、ふいに終わろうとするのを、ジークは感じた。

過去の聖都での光景が、ぼんやりと輪郭を失い、

（私の力は……人に夢を見せること）

娘の微笑みだけが心に残される。そして、

（斬るしかないのか――）

その思いが、心の暗い場所で鋭く響いたのを最後に――夢は急速に醒めていった。

同時に、どこかからか、かすかに伝わってくる気配。

（さすがジーク、心の底をたやすく見せない――過去を辿るには時間がかかる――）

離れた場所から向けられる、ひそかな視線。何者かの思惑。甘い香り。

（まだ十分に時間はある――葬られた真実……ゆっくりと暴いて――）
都市には早朝の霧が立ちこめ、城の礼拝堂では、緋色の布にくるまって眠るジークの体が、ぴくりと身じろぎした。
眠りの呪縛から解放されようと、どうにかして体を動かそうとする様子を見せる。
夜明けとともに、眠りに沈んでいたジークの意識が、徐々に浮かび上がろうとしていた。

城の北西側にある、領主の邸宅の寝室で、フロレスは深い溜め息をついた。
目蓋が開き、碧い目が冷たく宙を見すえる。
「誰……？」
ふっくらとした唇が、苛立ったような囁きを零す。
夢の時間が思ったよりも短かった。まだもう少し相手の過去を探れたはずなのに――
誰かが、自分の香りの防壁に踏み込もうとしているのを感じたのだ。
それで、ジークたちに仕掛けていた夢を、途切らせてしまった――
フロレスは、上体を起こした。この邸宅に、侵入を試みる者の気配はどこにもない。
ここではない――ノヴィアが眠る聖堂の周辺で、誰かが動いているのだ。
すぐに見当はついた。あの二人の狩人たち――一人は医師、一人はレオニスの側近。

二人とも魔獣から逃れて潜伏している気配があったが、どちらか一方が動き出したらしい。それも、どうやらノヴィアを確保するために。

二人とも魔獣に食われてしまうことを期待したが、なかなかしぶとい。自分の思惑通りにことを運ぶ上で、ノヴィアは大事な駒だ。今ここで第三者に確保されてはまずい。

「予定よりも早いけれど……目覚めさせるしかなさそうね……」

フロレスは左手を闇にかざした。香炉がゆっくりと揺れ、精緻な紋様が淡く輝き始める。

右手の香炉は、迷いの香りを。

左手の香炉は、導きの香りを。

今、その左手の香炉を通して、人を衝動にからせるための香りを現してゆく。

喉の渇きを覚えるほどの甘い香り——それが、ノヴィアにしみこんだ香りにも現れているはずだった。あの聖堂は既に、聖性による香りで覆いつくしている。僅かにノヴィアを支配する香りを変化させるだけで、思い通りの行動をとらせることが出来た。

ただしあまり離れていては、こういう真似は出来ない。右手の迷いの香りは永遠に相手を呪縛する反面、左手の導きの香りは、遠く距離が離れていては使えない。

それゆえ閉ざされた場所が必要だったのだ。今のこの都市のように、誰も出て行けない檻のような空間が。そして香りが届く限られた範囲の中で、自分の姿を見せないようにし

ながら、全員を操る。それが、フロレスの戦い方だった。

「ジークの前に、あの少女を完全に手に入れておきましょう……。それからジークに、私と同じ苦しみを味わった上で死んでもらう……。大事な存在を奪われる苦しみを……」

聖堂の寝室で眠るノヴィアは、ふと香りを感じた。夢が遠のき、かすかに身じろぎした。

いまだ眠りから覚めない意識に、強烈な香りが染みこんでくる。

夢の中で感じた悲しみと怒り……――それらを、おもてに出さずにはいられなくなる。

一晩中、母親の死が何度も何度も再現されていた。燃え上がる〈銀の乙女〉の施設。手から手へと運ばれる赤ん坊。名もないまま捨てられたという原初の記憶――

ノヴィアの肩が震えた。その枕元に、疲れて眠ってしまったアリスハートがいる。

だが今やノヴィアの心は信じるべき相手を見失い、夢の中にそれを求めた。

(影が近づいているわ――目覚めなさい――警戒――憎しみを込めて――)

その相手は、甘い声で囁いている。

(影を討ちなさい――)

(母さん――行かないで――)

(奪ったのよ――あなたの大事なものを――あなたの名前を呼んでくれる相手を)

（死──影）

ノヴィアの目が、唐突に見開かれた。自分が今まで眠っていたという意識さえ無いまま、万里眼の力を発揮させた。さっと顔を巡らし、動く者を探った。

建物の陰から陰へと移動する影──恐ろしく気配の薄い存在。夢の中からの警告がなければ、とても発見出来なかっただろうその存在を、ノヴィアは、はっきりと見た。

（仇──憎い──）

ノヴィアは、ゆっくりと身を起こした。

自分はいったい、何をしているのかという疑問がかすかに起こり──そして消えた。

「矢が……見えるわ」

押し殺したような低い呟きが、その唇から零れた。

アリスハートが、その異様な気配を察し、ぱちりと目を覚ました。

トールは、アキレスと別れてのち、都市の西へと向かっていった。

アキレスには言わなかったが、陽が沈む頃、そちらの方角で明かりが灯されるのを確認していたのだ。西はジークが都市に侵入した場所であり、魔獣が少ない区域であることからして、そこにノヴィアがいる可能性は極めて高かった。

途中、何度か魔獣に見つからぬよう、気配を殺して隠れねばならなかった。西側の破壊された巣を再建したいのだろう。だが、まだ警戒しているらしく、斥候の群が、あちこち徘徊しているだけだった。

どの魔獣も、聖堂の方には近づかない。建物自体が聖性をやどしているからだ。巣を作って、聖性を打ち消すほどの堕気をもたらすまで、聖堂には侵入しないだろう。

ノヴィアが聖堂にいるということは確実なことのように思われた。

あとはノヴィアをどう説得するべきか――

ジークと自分たちの戦いが済むまでじっとしているよう頼んでも、聞くようなノヴィアではないだろう。眠っているところを拘束し、視覚の力を封じてしまうしかない。

トールはそこで、ふとノヴィアの傍らにいるはずの、あの陽気な妖精を思い出していた。

(アリスハートをどうするか――)

そう考え、複雑な気持ちになった。どうもこうもない。ノヴィアとともに拘束するしかないのだ。ただし、殺してしまおうとは――考えられなかった。

影法師という渾名以外の呼び名を考えてくれようとして、

(トールは、トールなの)

結局、その結論に達したアリスハートの大真面目な顔が思い浮かぶ。そして、

（出番だぞーっ、影法師ぃーっ）
ノヴィアを危機から守るため、アリスハートが今もどこかで叫んでいるような気がして仕方がなくなってくる。それは何とも言えない不思議な感情だった。アリスハートがそう叫んでいると思うだけで、自分が動かねばならない気になるのだから。
その行動は、もはやレオニスのためでもノヴィアのためでもなく、ジークのためでもない。トール自身の意志と選択であるように思えてくる。
トールは、その思いとしばしば格闘せねばならなかった。いざとなれば自分は、ノヴィアやアリスハートから憎まれる役になるのだ。それこそ自分の意志として。
そのためには一切の心を殺し、感情を消し、影法師である自分に徹さねばならない。
しいて無表情を保ち、トールは魔獣を避けながら聖堂へ近づいていった。やがて大通りを挟んだ聖堂の向かいの歩道に、するすると足音もなく到達したとき——異変が起きた。
そう思って東の山々を仰ぎ、愕然となった。なんと空が青紫色を帯びてきている。
遠くで鳥の声が聞こえたのだ。夜明けには、まだかなりの時間があるはずなのに——
「朝が……来る……」
そうだった。自分は時間の感覚を狂わされているのだ。
アキレスと行動をともにするうちに、そのことが意識から消えていた。

気づけば足が疲労していた。特に膝の辺りに痺れを感じる。まるで長時間、同じ姿勢で立ち続けていたように。おそらく魔獣を避けるために立ち止まり、様子をうかがうたびに、何時間もその場に同じ姿勢でとどまっていたのだろう。
つまり、立ち止まったり休息したりするたびに、自分がどれだけの時間を過ごしたかという意識が消えるのだ。ただ移動している最中は、時間感覚は元に戻っているはずである。のろのろ動いていれば、とっくに魔獣の餌食になっているに違いないからだ。
自分が思うよりも遥かに早く時間が進んでいるという感覚は、何とも言えぬ焦りをもたらした。本当に事態が把握出来ているのか、それとも気づかぬうちに取り返しのつかない事態に陥っているのではないのか――その判断さえ危うくなってくる。
それに、時間が過ぎているということは、それだけ気づかずに体力も精神力も消耗していることになる。知らぬうちに疲労困憊して動けなくなるという事態に陥りかねない。
ともかく急いでノヴィアとアリスハートを確保し、アキレスと合流するのだ。正直、あのいやらしい男になど頼りたくないが、それ以外に忘却の力に対抗するすべはなかった。
すぐさま聖堂に向かって大通りを渡りかけたところで、ふいに、香りがした。
思わず身も心も委ねたくなるような甘い香り――
先ほどからずっと香りが濃く漂っていたが、そのことに今、突然、気づいたのだった。

そうだ。この香り。これが敵の力。まさか――敵は既にノヴィアを確保している？
戦慄がトールの背を駆け抜け、はっと大通りの真ん中で立ちすくんだとき――
聖堂から、猛然と黄金色の輝きが飛来したのだった。

「夜が……明ける……」
アキレスもまた、トールと同じように呆然と東の空を見上げていた。
まだジークに動きはないが、いずれ動き出すだろう。自分と同じように時間感覚を狂わされているトールが、すぐに戻るとは思えない。このままではますます離ればなれになる。
「何もかも狂わせてゆくとは……敵の力ながら、実に素晴らしい……」
そう口にして、はっとなった。急いで懐から紙を取り出し、己の記憶を探った。
「敵は……アンブローシャの……女……」
ついに敵が女であるということを忘却したのだ。アキレスは慌てて城の詰め所に戻り、
『敵がいる。記憶を消す女である。自分は既に記憶を消されている』
重要な事柄を強調して書いた。このままでは自分に敵がいることさえ忘れかねなかった。
敵が香りを使うこと、自分には影法師トールという味方がいることはまだ覚えている。
それにしても一晩中ジークを見張っていたにもかかわらず敵は――女は現れなかった。

まさか香りで人を殺すことまでは出来ないはずだ。それならば記憶を消す前に命を消している。いったい、どのような手段でジークにとどめを刺す気か――

そのとき突然、爆発的な堕気がすぐ近くで生じ、アキレスはぞっとなりながら素早く窓の隙間から外を覗いた。城の東側の塔に、それがへばりついているのが見えた。

まるで黒い太陽が昇ったかのようなシルエット――

あの大蜘蛛が、東側の塔からじっと何かを窺うような様子を見せている。

ジークを狙っているに違いなかった。あの大蜘蛛は、ジークの強い堕気を食らって自分の力にする気なのだ。だが今はまだジークの力を警戒して直接、手を出さずにいる――

ふと、アキレスは妙なことに気づいた。なぜジークが城の中にいるにもかかわらず、大蜘蛛は外にいる？　急いでまた紙を読み、増殖器を囮にしてジークを招き寄せたことを確認した。その記憶はまだ自分の中にある。ジークの目的は増殖器の破壊だ。なのになぜ大蜘蛛はそれを守ろうとしない？　城の中に増殖器は無いのだろうか。それとも――

すっと堕気の気配が弱まった。あれほど強烈だった存在感が呆気なく消えてゆく。城の中に入ったのだ――アキレスでさえそう思い、再び外の様子を窺って、目を見開いた。

大蜘蛛はいぜんとしてそこにいた。気配を出したり消したりすることで、相手をおびき寄せるだけの知恵を持っているのだ。そして大蜘蛛は、さっと塔を降り、姿を隠した。

「ふうん……そういうことですか。増殖器は、そこ、にあるのですか……」
アキレスが笑みを浮かべた。巨大な蛭が人の皮をかぶって浮かべるような笑みだった。
「ならば私は、あの大蜘蛛を味方につけれ、ば、良、い、……もはや余計な味方は、必要ない」
そう言ってアキレスは小屋を出ると、注意深く移動し始めた。トールも敵の存在も、もはや眼中に無いかのように、大蜘蛛の消えた方へ向かって行った。

黄金色の輝きが猛然と迫り、トールは身を転じて横へ跳んだ。だが金の矢は、恐るべき勢いで軌道を変えて追ってくる。弧を描いて飛来する矢に、トールは思わず唸った。
その右手を翻し、堕気と聖性を混ぜ合わせた鋼を出現させる。
鞭ではなく、ひと振りの黒い短剣である。とても鞭を現す余裕などなかった。
異様なほどの殺意のこもった矢を、短剣でなぎ払った。
軌道を逸らされた矢が、石畳に突き刺さる。なんと矢の半ばまで石に潜り込んでいた。
矢を払った手首に強い衝撃を感じながら、トールが、ふわりと地に降り立つ。
これほど強力な矢を、あの少女が人に向かって放てるとは、予想外も良いところだ。何よりなぜ、いきなり自分を狙うのか。もしや、既に敵の力に取り込まれているのか――？
さっと左手を翻し、両手に短剣を握りながら、トールが聖堂を仰いだとき――

　ノヴィアは完全に目覚めて、ベッドの脇に立っていた。素早く青い法衣を着込み、宝杖を握りしめる。そうしながら、ぞっとするような目を、外の男に向け続けていた。
「ど、どうしたのっ！　何があったのよぉっ！　ねぇっ、……っ！」
　傍らではアリスハートがしきりにわめいている。だがその小さな存在が、何という名で自分を呼んでいるのか、ノヴィアには聞き取れない。心が、その名を忘れてしまっていた。
　ノヴィアは、男の姿を見逃さぬように気を付けながら、急いで部屋を出た。束ねていない髪が乱れて顔にかかるのも構わず、階段を降りてゆく。
　絶対に男を逃がしてなるものかという思いがあった。あの男こそ自分の、
（死――母――影――手から手へ）
　大事な存在を奪った相手に違いないのだ。夢が、それを教えてくれたのだ。
「ま、待ってよぉっ！　どうしちゃったのよぉ……あっ！」
　アリスハートが慌てて追いかける。ノヴィアは咄嗟に、その小さな存在へ矢を放ちかけ、心の深い部分が、必死にそれに抵抗した。ノヴィアは矢を放つことを諦めた。代わりに、
（友達になろう――）
「矢が、見えるわ。沢山の、沢山の、沢山の……矢が」
　一階の広間に降りるや、うなされるように言い放った。数多の鋭い金の輝きが具現され、

宙を埋め尽くしてゆく。アリスハートの悲しい顔が、驚愕に引きつった。
「もう誰も……待ったりしない。誰も……迎えになんか来ない」
悲しみと怒りを込めて――少女は、全ての矢を放った。

2

「……ノヴィア」
ジークは、自分が壁に刻んだらしい名を口にした。
だが――何も思い出せはしない。
どこかからか漂ってくる花の香りが、かすかに強くなった気がした。
じっと刻まれた名を見つめるうちに、他のことが意識にのぼった。
(増殖器――ドラクロワを追う手がかり――都市に満ちる魔獣)
そのために自分はここにいるのだ。戦うために。
ジークは広間を出る前に、最後にもう一度だけ壁に刻まれた名を見つめた。
(ジーク様――)
若い娘の声が脳裏に甦る。自分の従士の声――なぜかひどくもの悲しい気持ちになる。
「この城のどこかにいるのか……ノヴィア」

その名をしっかりと心に刻み込むように呟き、壁に背を向けた。
礼拝堂の扉を開き、注意深く廊下を見渡す。自分が今いるのは城の西側だ――
ふと、地下牢へ向かう自分の姿が思い浮かんだ。あれは夢の中での出来事だったろうか。
曖昧な記憶を探りながら廊下を進むと、突然、爆発的な堕気が城の外で生じていた。
ジークは弾かれたように廊下の窓から外を覗いた。そこに、見覚えのあるものがいた。
塔にへばりつく巨大な蜘蛛の姿が、霧の向こうにおぼろに見えていたのだ。
大蜘蛛が堕気を収め、さっと塔を降り、街路の中へ紛れ込んだ。
自分を誘っている――？　注意深く辺りの気配を探りながら廊下を進む。大蜘蛛が自分を外におびき寄せようとしているのなら、増殖器は城の中にあるのだろうか。
いや――とジークの心の深い部分が反論する。
あの大蜘蛛を甘く見るな。自分を罠にかけるつもりかもしれない。
しかし、それほど知恵のある魔獣なのか――？　漠然とした記憶を探る。兵を失ったのだ――何万という友軍を。いや、違う。それはドラクロワとの――昔の記憶だ。
混乱を振り払い、さらに廊下を進む。魔獣があちこちで蠢いている気配がする。ときおり、夥しい血の跡や、遺体を引きずっていったらしい跡に出くわしたが、魔獣が襲ってくることはなかった。おそらくどこかで待ちかまえているのだろう。

何度か階段を降り、別の広間に辿り着いた。大きな食卓――ジークはその奥に進み、幾つかの部屋を通り過ぎて、調理場に入った。灯りをともし、食料を探した。
異形の獣が跋扈し、血と破壊に満ちた場所であるにもかかわらず、平然と食事をした。
自分の従士がいれば、こんな状況下でも食事を用意しただろうか――そう考えた。
思い出されるのは若い娘の顔だが、こと食事となると違う存在がいるような気がする。
いったい何人目の従士のことか。自分はこれまで、あまりに大勢を死なせすぎた。
(あなたに斬られた従士は、幸せだったと思います)
そんな馬鹿なことがあってたまるものか。
自分はあと何人の従士を犠牲にするのか――後悔の念がよぎり、それを振り払う。
敵の襲撃を警戒しながら軽い食事を済ませ、じっと動かず休息を取る。
頭の中では、あの大蜘蛛の動きを何度も思い返している。やはり自分を増殖器から遠ざけるために誘い出そうとしたと考えるべきだろう。この城の中に、あるのだ。
ふと自分の従士が黒い靄を見たことを思い出す。瘴気が集中している場所を探り、巣の位置を特定したのだ。しかし黒い靄とは？　従士が増殖器の在りかを知っている？
懐から地図を取り出し、印が付けられていることを確認する。
魔獣の巣は、残り二つ。城の内部と、東側だ。

そのとき、別の書類が懐の隠しポケットに入っていることに気づいた。

取り出してみると、血がしみついた書類だった。中身は、ある〈銀の乙女〉の経歴――

「ノヴィア……」

その名が記されていた。ノヴィア・エルダーシャ。〈銀の乙女〉フェリシテ・エルダーシャの娘にして力の後継者。これが自分の従士か？　万里眼の使い手？　なら、どうしてここにいる自分を発見して追って来ない？　それとも既に死んだのか？

続けてノヴィアの生い立ちのくだりを読み、愕然となった。聖地シャイオン？　レオニス・ジェルミナルとは姉弟？　ふいにレオニスとドラクロワが同盟したことが思い出された。そう、この事態は全てレオニスとドラクロワの共謀によるものに違いない。

ジークは書類と地図を懐にしまいながら、もしかすると自分は、

（杖の教え――力についての――）

ノヴィアという従士を置いて、ここに来たのかもしれないと思った。

レオニスの姉などを戦いにつれて行けば、今後どんな不測の事態が起こるか分からない。最悪の場合、自分を殺そうとするかもしれない。かつて、そういう従士がいたように。

お互いに最も大事な物を守るため、

（あなたの悲しみを、私が奪いました）

相手にとって最も大事な物を奪う――そういう従士がいたのだ。

(斬らねばならないのか――)

ふいに、その思いが強く湧いていた。まさか――ノヴィアという従士は今まさに自分を殺そうとしているのか？　あの礼拝堂に一人でいたのは、従士から身を守るため？

ぞくりと肌が粟立った。心が何かを失って寒がっているのだ。混乱が襲いかかり、ジークは、すぐさま全ての思案を打ち切った。このまま自問自答していても何にもならない。明確に存在する脅威を排除し、その上で敵が誰かを見定める。それしかなかった。

ジークは食堂を出て、さらに城の内部へ向かった。幾つかの鉄扉を、錠を破壊して進んだ。やがて地下へ向かう階段に差し掛かり、にわかに確信が起こった。とてつもない瘴気が、城の地下に充満しているのだ。ここに増殖器がある可能性は、極めて高かった。

ジークはためらいもなく薄暗い階段を降り、瘴気が渦巻く場所へ入り込んでいった。

(ご自分の身を危険にさらすことで、試しているんですか……)

遠い記憶――頭の中に霧がかかったようにうまく思い出せない。

(他人を……ご自分の、心と命さえも……そんな風に、試すなんて)

「ノヴィア……？」

その名を口にするが、しっくり来ない。ジークはかぶりを振った。今は従士の行方を探

す前に、魔獣を排除する方が先だ。自分に魔獣を集中させれば、その分、
（あなたには、もう信じられる人が、一人もいないのに――）
この都市にいるかもしれない自分の従士に降りかかる危険も少なくなるはずだ。
あるいはそのときこそ、従士が自分を狙いに来るのだろうか。
ジークは階段を降り、暗い回廊に立った。天井が高く、左右の壁の距離もかなり広い。
障気――この世の全ての命を蝕むような、どす黒い空気が、奥の闇から吹き付けてくる。
おそらくこの先に、岩山を掘り抜いた地下道か何かがあるのだろう。
風があるところを見ると、どうやら外部にも通じているらしい。
いずれにせよ、ジークがその力を振るって打倒すべきものがそこにあるのだ。
突然、闇の奥で何かがひしめく気配があった。ざわざわと騒がしい音が近づいてくる。
ジークはシャベルを掲げ、猛然と振り下ろした。シャベルの歯が、凄まじい勢いで床石を貫く。その左腕に雷花が迸るとともに、闇から、奔流のごとき魔獣の群が飛び出し、
「ジーク・ヴァールハイトが解き放つ！」
烈声が、暗い回廊に響き渡った。

逃げ回る影に向かって、ノヴィアは次々に矢を放っている。

「――ねぇっ！　……あっ！」
誰かが、すぐそばで呼んでいるのだがその名前がよく聞こえない。
ひどく寒かった。何かが失われたせいで体中が凍えそうだった。
自分はずっと待っていた。何度も置いて行かれた。与えられ、奪われてきた。
追いかけなければならなかった。もう待つことをやめて。憎しみを込めて。
母を奪った男。いったいそれが誰なのかも定かでないまま、ノヴィアは聖堂の外に出た。
聖堂の前の歩道に、点々と血の跡があった。矢で傷を受けたのだろう。だが肝心の男がいなかった。辺りを見回すが、影も形もない。こんな短時間で逃げられるとは――
「逃げられた……。母さんの仇……」
ノヴィアは必死に視覚の力を駆使して相手を捜している。そうするうちに、
「どこにいるの……。私を置いて行かないで……。お願い……置いて行かないで……」
いったい誰を何のために追っているのかも、だんだん分からなくなってくる。
「ねぇ、誰もいないよぉっ！　おかしいよぉっ、……あっ。どうしちゃったのよぉ……」
金色に輝くものが悲しい声を上げている。自分はいったい誰を捜しているのか、
「私……。名前……。何……」
自分はいったい誰なのか――全てが渦を巻いて溶けて消えてゆく。そして――

「ここにいるわ、ティア」
突然――街路から声が飛んだ。
アリスハートが、ぽかんとなる。ノヴィアも呆然となって、その女を振り返った。
「迎えに来たわ……待たせてしまって、ごめんなさい」
女――フロレスは、優しく微笑みながら、両手を広げてみせた。
雛色の髪に、碧い目――それがノヴィアには、栗色の髪に、紫の目を持つ女に見えた。
「母さん……?」
ノヴィアが震える声で訊く。だがフロレスは、そっと、かぶりを振った。
「あなたの姉よ……ティア」
「お姉さん……? 私……姉なんて……」
ノヴィアの目に疑念の光がよぎる。フロレスの右手から小さな香炉が現れ、揺れた。
「いらっしゃい……ティア。姉さんのもとへ帰って来なさい……」
フロレスの囁きとともに、甘い香りが漂う。ノヴィアは、おずおずとうなずき、
「ずっと待ってた……誰も迎えに来てくれないまま……ずっと、ずっと……」
その頬を涙が零れ落ちていった。金色に輝くものが何かをわめいているが何も聞こえない。ノヴィアはただ自分を迎える者を求めて――フロレスに向かって歩んだ。

からん、と乾いた音がした。宝杖が手から滑り落ちて、石畳の上に転がったのだ。
だがノヴィアはそれに目もくれない。ただ真っ直ぐ女に歩み寄り――
「行っちゃ駄目――っ！　ノ……あっ！」
突如として、目の前に金色の輝きが満ちた。ノヴィアの足が、はたと止まる。
「アリスハ――……」
通せんぼするそれの名を、咄嗟に口にしかけたとき、フロレスの手がさっと伸びた。
「邪魔なエインセル……私とティアの間に、入り込もうと言うの……？」
優しげな声とともに、フロレスが、金色に輝くものをつかむ。
金色の輝きが、滅茶苦茶にもがいた。そのわめき声が、ノヴィアを恐れさせた。
自分は何か恐ろしい目に遭っているのではないのか。何かが間違っているのでは――そして甘い香りの向こうで、甲高い絶叫が上がった。ノヴィアの目が呆然と見開かれる。
「こうすれば……、ほら……もう飛べないでしょう？」
フロレスは、ひどく丁寧な仕草で、何かをつまみ、ちぎっていった。
耳を塞ぎたくなるような悲痛な叫び。ノヴィアの目をあとからあとから涙が零れ落ちてゆく。もはや何が悲しいのかも分からない。ただ何もかもが無惨に奪われてゆく――
「私からティアを奪おうとする者は、こうなるの。分かった……？」

フロレスの手の中で、金色の輝きが弱まっていった。ぐったりとして動かなくなったそれを、放り捨てた。まるでノヴィアが落とした宝杖のように——それが街路に転がった。
フロレスの左手が、香炉を現した。たちまち喉の渇きを覚えるほどの甘い香りが漂い、
「いらっしゃい……ティア。もう何も、あなたを邪魔しないわ……」
ノヴィアは、ふらふらと女のもとに招き寄せられていった。そしてフロレスの腕が優しく肩に回されると、もはや自分がどこへ行くのかも分からぬまま、ノヴィアは、ただ悲しさと安心感とを覚えながら、濃い香りと霧の向こうへと導かれていったのだった。

「い、痛い……痛いよぉ……ノヴィアぁ……」
弱々しくまたたく金の輝き——アリスハートの泣き声が、悲しく街路に響く。
四枚あった背の羽が、全て無惨に引き裂かれている。
あの女が、その背の羽を、一枚ずつ、花でも摘むかのように平然とちぎったのだ。
背の痛みのせいで、うずくまったまま動くことも出来ず、しくしく泣くアリスハートの上に、ふいに影が落ちた。
アリスハートが、びくっとなって、小さな手で頭を庇うようにする。
「やめてよぉ……もぉ、やめてよぉ……」

だが呆気なく体を持ち上げられ、アリスハートは身を強ばらせて丸くなった。ひどい悲しみと痛みのせいで、このまま自分が消えて無くなってしまうのかとさえ思った。
「私です……アリスハート」
穏やかな声がした。同時に、背の痛みがすうっと薄らいでゆく。
アリスハートは、おどおどと相手を見やり、ぽかんとなった。
「ト……トール……？」
トールは珍しいことに目を細めて微笑み、
「はい、私です」
律儀にうなずいてみせた。
「今……私の手に、聖性を集めています。少しすれば、あなたの傷を癒せるでしょう」
トールが言った。その頬や肩に、鋭い傷跡が走っている。衣服のあちこちが裂けており、まるで刃の束の中に飛び込んだような有様だった。その手も、少し、血の臭いがした。
「な、なんでトールがここにいるのぉ。それより、どうしたのぉ、そのひどい傷ぅ」
自分の有様を棚に上げたアリスハートの言いざまに、トールがかすかに苦笑する。
「あなたほどではありませんよ、アリスハート」
「ま、まさか……ノヴィアが追いかけてたのって……トールだったのぉ？」

トールは、やや困ったように、うなずいた。
「あなたたちを保護しようとして……撃退されてしまいました」
アリスハートが、感心したようにトールを見上げた。
「あんたって、どこにでもいるのねぇ」
「たまたま、ですよ」
トールがますます困ったようになる。ふと、もう一方の手を伸ばし、宝杖を拾った。
「あ……ノヴィアの大事な杖……。ねぇ……ノヴィアはぁ……？」
「あの女に連れて行かれてしまいました。あの女の香りに、心を奪われたのでしょう」
「香り……？　何の匂いもしないよ……？」
アリスハートが小さな鼻を宙に向ける。トールはじっとアリスハートを見つめた。
「もしかすると……あなたがいることで、あの女の力を破れるかもしれません」
「力……？　あの女の人と……知り合いなの……？」
そう訊きながら、女の顔を思い出すだけで怖さで震えてしまうアリスハートだった。
その様子に、トールは心痛めるような顔になった。
「分かりません……本当に敵かどうかも。ですが少なくとも、あなたをこのような目に遭わせました。それだけで十分です。あの女を、私が仕留めます」

当然のようにそう口にし、女の消えた方に、鋭く目を向けていた。
アリスハートがちょっと唖然となるほど、その目が、怒りに光っていた。

3

凄魔たちが扇状に展開し、爆発的に溢れ出す魔獣を迎え撃った。
刃の脚を持った巨大な蜘蛛が、天井や壁をも覆い尽くし、ばらばらと降ってくる。
「非業の魂よ！　土刻星の連なりの下、剛魔ダゴンとなりて我が敵の前に立て！」
ジークが立て続けに左手を床に叩きつける。青白い稲妻とともに続々と現れるのは、薄汚い鉄の塊のごとき魔兵たちだ。咆吼を上げ、胸に槍のごとき鉄の角を生やし、突撃した。
凄魔たちがさっと退き、代わって剛魔がその重量にものを言わせて敵を蹴散らす。
ジークは果敢に前進を命じた。頭上から降ってくる魔獣を、凄魔が切り払う。
回廊を奥へ奥へと進むうちに、両側の壁が、剝き出しの岩に変わった。
最初の襲撃が収まる頃には、完全に地下道に入り込んでいた。
緑色に光る苔がそこら中に密生し、湿気をふくんだ風が、地下から吹きつけてくる。
坑道にしては天井が高すぎる。天然の洞窟だった。都市の外に魔獣が溢れていないことから、城壁の外まで通じているとは考えにくい。きっと都市の各所に出入り口があるのだ。

となれば、ここに増殖器を設置すれば、都市中に魔獣をばらまくことが出来る。
このどこかに、あるのだ。ドラクロワが仕掛けた罠であり、手がかりである増殖器が。
ジークの総身に烈気がみなぎり、それに感応したかのように無数の堕気が暗がりに生じた。
「蟹座の陣！」
魔兵が三個の突撃方陣を敷いた。ざわつく闇が、にわかに雪崩れた。これまでにない大量の魔獣の群に向かって、ジークは魔兵とともに剣を掲げて走った。
相手を——そしてまた己自身を試すように。その心と命を、争乱に投げ込んでいった。

涙が止まらなかった。自分にとって大事なものがすっかり奪われた感覚に、体も心もひっきりなしに震えている。ひどく悲しいくせに、何が悲しいのかも分からない。
「私……どうしちゃったんだろう……悲しくて……怖くて……」
泣きじゃくるノヴィアを、フロレスがソファに座らせた。
城の北西にある領主の邸宅だった。血と屍さえ少女の目には入っていない。甘い香りが満ちるそこで、ノヴィアはただ泣きながら、優しく肩を抱くフロレスの囁きに聞き入った。
「心配ないわ……ティア。あなたはいつも……力を使うたびに、そうなっていたわ」
「力……？」

「そう……。夢を見せ……そして夢を見る。全てを忘れさせるために。私たち二人は、聖法庁のために多くの人の記憶を消し……そしてまた、自分たちの記憶を消してきた」
「自分たちの……記憶……」
「私とあなただけなの、ティア」
フロレスの手に力がこもった。悲しみに声を震わせながら、ノヴィアを抱きしめる。
「私とあなただけが、お互いのことを覚えている……。どんなに忘れても、どんなに失っても、必ず、私にはあなたが、あなたには私がいた……。なのに……」
ノヴィアを抱きながら、フロレスの碧い日が、凄惨な光をやどして宙を見すえた。
「あの男が奪った……。私からあなたを奪った。フロレスからティアを奪ったのよ。ティアの花を……風が吹かねば咲かない、優しい花を……あの男が……散らせた」
もはや自分が抱きしめる者が誰かなど、関係が無いかのような口調であった。
「私はフロレスの花……みなが眠る、夜にしか咲かない花。誰も私がいたことを覚えていない……朝になれば、ただ萎れた花弁だけが残っている……どんな色かも分からずに」
やがて手をゆるめてノヴィアを解放しながら、フロレスは言った。
「ティア……あなたも奪われたのよ。大事な存在を……そうでしょう？」
ノヴィアは涙で濡れた日でぼうっとフロレスを見つめ、ゆっくりとうなずいた。

「私たちの力で復讐し……全てを葬るのよ。私はこの機会をずっと待っていた……忘れたふりをして。〈銀の乙女〉は、私がいつも通り全てを忘れたと思っている。辛かったわ……ずっと、自分に妹がいたことなど忘れたように振る舞わなければならなかった」

ふいにフロレスの双眸から、涙が溢れて頬をつたわった。ノヴィアの頬を撫でながら、

「あなたの名はティア・アンブローシャ……私の妹。さあ……私を、姉さんと呼んで」

そう囁いた。ノヴィアは、魂の抜けたような顔で、言われるままに繰り返した。

「私は、ティア・アンブローシャ……。あなたの……妹です……。姉さん……」

フロレスはしっかりとノヴィアを抱きしめた。子供が大事な人形を取り戻したように。

トールが城の詰め所に戻ると、アキレスの姿はなかった。〈蛭氷〉を残すと言っていたが、その様子もない。トールはちょっと肩をすくめた。どこか、せいせいした気分だった。

「どうやら……お互いに、単独行動になったようです」

「え……？　誰かここにいたの？」

アリスハートが、トールの肩の上に座りながら訊く。トールの聖性のお陰で、背の痛みは消えている。羽も、それぞれ半分くらいまでは回復していた。だがそれ以上回復するには、ノヴィアが持つような純粋で強い聖性を与えられる必要があった。

「一応、当面の仲間がいましたが……私が、ノヴィア様を確保しようとしている間に、ジークを追っていったのでしょう」

ついトールが口を滑らせた。アリスハートが思い出したように、

「そういえばトールって狼男の敵になったんでしょ？　なんで、あたしを助けたの？」

「あなたとは敵ではありません。レオニス様も……決して、ノヴィア様やあなたと敵対するつもりはないのです。ただ……立場上……そうならざるを得ず……」

ぼそぼそと要領を得ない返答をする。いざとなれば自分がノヴィアを斬る決意でいたなどと、とても口に出来ないトールだった。代わりに、次の点だけは正直に告げた。

「私は、ノヴィア様を戦いから守るよう、レオニス様から命じられているのです」

「……レオニスも、複雑なのねぇ」

感心するアリスハートをいったん机の上に置き、トールは自分の手当てをした。とはいえ体中を矢がかすめた部分を、血を拭って軽く包帯を巻く程度である。

「痛そうねぇ……。大丈夫ぅ？　ごめんねぇ、ノヴィアのせいで」

「あなたの方が痛そうでしたが……」

「そりゃもう痛いなんてもんじゃなかったわよぉ。あんたが来てくれなかったら、あたし死んじゃってたかも。ありがとうね、トール」

トールが微笑し、手当てを終えて黒い法衣を着込む。窓から街の様子を窺うと、幾つも影が走るのが見えた。魔獣が活発化している。おそらくジークが戦っているのだろう。
敵の行方はつかめておらず、魔獣を避けながら都市中を探索するほかなかった。
しかし敵を追いつめたとして、そうたやすく仕留められるだろうか。あの聖性による香りに覆われている限り、自分の侵入はたやすく察知されるだろうという確信があった。
そして香りに踏み込んだが最後、どう自分が操られるか想像もつかない。下手をすると、自分で自分を斬るかもしれなかった。そしてふと——その力に対抗出来る存在に気づいた。
「あの香りに勝てるのは、ノヴィア様だけかもしれません。香りの届かぬ場所から、気づかれぬよう敵の位置を見定め、攻撃する。それが出来るのはノヴィア様だけでしょう」
「でもノヴィア、つかまっちゃったし。あの女の人、ノヴィアをどうするつもりかなぁ」
トールにも確信はなく、かぶりを振りつつ、アリスハートを再び自分の肩に乗せた。
もとよりノヴィアに頼るつもりはない。自分の力を——暗殺能力を最大限に発揮して、敵に気づかれぬまま仕留めるのだ。そしてその上で、ジークと戦う——
「まずはノヴィア様を探しましょう。あなたがいるお陰で、相手の力に翻弄されずに済みそうです。私がぼんやりしたら、遠慮無く私の耳元で大声を上げて下さい」
「う……うん」

「そしてこれを、ノヴィア様の手に、戻して差し上げましょう」
そう言ってトールは、腰帯に差した宝杖を軽く叩いた。つくづく奇妙な立場だった。ジークとノヴィアの双方を殺す気で来ていたのに、逆に二人のために戦うとは。
ずるい、というレティーシャの声が、どこかからか聞こえてくるようだった。
そのくせ妙な快さを感じながら、トールは、街路へと身軽に飛び降りていった。

凄まじいまでの光景が広がっていた。
地下の広大な空間に出たかと思うと、至るところに屍が積み重ねられていたのだ。
命を失った腕や脚が、そこら中から垂れ下がっている。ほとんど都市中の人間の遺体を集めてきたに違いなかった。魔獣たちの餌——そしてまた堕気を呼ぶために。
いったん蹴散らしたかに見えた魔獣たちが、四方から怒濤のごとく押し寄せてきた。
どうやらこの空間を中心にして、幾つかの地下道が通っているらしい。
ジークは眼前の光景に、かっと目を見開いたまま、魔獣が包囲するに任せている。
そして、包囲を終えた魔獣が一斉に躍りかかろうとするのに合わせ、
「水瓶座の陣！」
密集させていた魔兵を、一挙に四方へ溢れさせた。

鉄塊のごとき剛魔に加えて、今や巨人のごとき厳魔も招き出されている。ジークとともに凄魔たちが走り、包囲に向かって果敢に斬り込んだ。幾つかの突撃陣形に分かれて包囲を突破し、素早く合流する。敵の有利さを覆すため、不規則に陣形を分離し、合流させることを繰り返す。魔兵の数が目に見えて減ってゆくが、同時に敵にも打撃を与えてゆく。

いったいどの通路が、敵の巣の中枢に通じているのか――それさえ分かれば形勢を逆転出来るはずだった。こういうときに万里眼の使い手が傍らにいればと痛切に思う。

だが実際にそんな存在はいるのだろうか？　もしかして、ノヴィアという名が記されたあの書状は、遥か昔のもので、自分はとっくにその従士を失っているのではないか？

そんな思念がよぎり、慌てて振り払う。やがてジークは大地全体の気配を探り、最も堕気の強い通路を発見した。すぐに陣形を整え、全軍を挙げて、その通路に突撃する。

予想通り敵が凄まじい抵抗を見せた。先頭で走っていた剛魔の硬い体が、次々に砕かれてゆく。背後からも魔獣が押し寄せ、厳魔の巨体を呑み込んでいった。

立ち止まれば、すなわちそこが死地になった。一歩として退いてはならず、ただひたすら前へ前へと突き進む。ジーク自身も、ただひたすら剣を振るい、

(私には……戦場で、あなたの命を守る力はないかもしれません)

敵と味方の血を浴び、屍を乗り越え、勝機と生存を求めて叫びを上げる。

（でもせめて……あなたの中の悲しみを、これ以上、増やさないために……）
全てが戦闘の狂乱に呑み込まれ、体も心も全ての力も、混沌へと投げ込まれてゆく感覚。
（全てに対して、あなたはとても悲しんでいて……）
ただ生きるために剣を振るい。
ただそれだけのために敵をなぎ倒し。
そんな自分が、理想を求めることで、初めてその剣に意味を見いだせたのだ。
いつかその剣を棄てる日が来ると、ただそれだけを信じて剣を握り続けてきたのだ。
（姉がいるんです！　私、一人ぼっちじゃないんです！）
娘の告白——意を決した言葉。安心する自分。この娘にも信じられる相手がいるのだ。
（憎らしくないんですか。あなたにはもう、信じられる相手なんて、一人もいないのに）
そうではないのだ。
自分は今でも信じている。
あの男のことを。どこまでも信じて追い続けている。だから戦えるのだ。
（あなたは悲しい人です。そんなにも悲しみが欲しいのなら取り返しに来て下さい）
凄烈に剣を振るう果てに——ジークは、ついに魔兵の先頭が通路を突破したのを見た。
（私は、あなたの悲しみを奪いました）

魔獣の群が通路の出口に殺到した。最後の防壁が築かれ、それを打ち破るや、

「ジーク・ヴァールハイトが招く！」

烈声を上げて、その左手を地面に叩きつけた。

「無念の魂よ！　火刻星の連なりの下、砲魔ネルヴとなりて我が敵を撃て！」

青白い稲妻が吹き荒れ、続々と現れる魔兵が、右腕の砲身を一斉に構える。

それまで洞窟が崩れることを警戒して使えなかった力であったが、もはやこの瞬間を逃しては勝機がなかった。ジークは通路を出たそこが、間違いなく魔獣の巣の中核であることを確かめながら、砲魔たちに砲撃を命じた。

鼓膜を破らんばかりの砲火の音が立て続けに轟いた。魔獣たちが増殖するための巣を粉砕し、焼き尽くしてゆく。その衝撃や轟音でさえ、総身に瘴気を帯びたジークにとっては何ということもない。戦闘の熱気で鋭敏になった目が、素早く増殖器を探し――

それが、どこにもないことが分かった。

「馬鹿な……。いったい、どこに……」

今もそこら中から魔獣が溢れ出しているというのに。ジークは巣の破壊を優先させつつ、空間のあちこちを探した。増殖器はどこにもない。あの大蜘蛛も、ここにいない――

ふいに不吉な予感が襲いかかった。もし、この全てが罠だったら。

そしてジークは、そこで信じがたいものを見た。
砲火の衝撃で亀裂の入った壁から、大量の水が唸りを上げて溢れ出すのを。
魔兵たちが水を浴びて、ごうごうと咆吼を上げた。その体が脆くも崩れてゆく。水そのものが弱点なのではない。地面を水が覆うことで、力を失って形を保てなくなるのだ。それでも今いる場所が地下そのものであるため、かろうじて即座に壊滅することはない。
もし、大蜘蛛の狙いが、これだったとしたら――ジークは、恐るべき戦慄に襲われた。
大蜘蛛は、何度かの戦いを通じてジークの力が大地を通して発揮されることを悟ったのだ。そしてその力を封じるために、大地とジークを何かで遮ることを――水で地面を覆うことを、考えついたのだ。そしてジークの力を封じるための罠を、ここに仕掛けた――
まさか、と思った。それは、もはや知恵などというものではない。獣の本能で、ジークを罠にかけたことになる。そんなことが起こりうるのか。
魔兵たちの凄まじい絶叫が、ジークを我に返らせた。立ち止まれば死地になる状態はいまだに続いている。いや、いっそう悪化していた。
(あなたの名前は、好きです)
ジークは、たちまち水に覆われる地面を駆け、この状況からの挽回をはかって必死に陣を整えていった。

（勝利って、意味ですよね）
娘の声が、遠い彼方から聞こえていた。ひどく悲しむような声だった。

4

ふいに都市の一角で地響きが起こった。アキレスは音の方を振り向き、目を見開いた。
都市の南の辺りの建物が、地盤が崩れて一斉に傾き、沈んだのだ。
騒然とする堕気をかすかに感じた。どうやらジークは地下で戦っているらしい。
凄まじいまでの力の奔流の余波が、遠く離れたアキレスにまで届いてくるようだった。
「実に恐ろしい男ですね……ジーク。その力……必ずや、手に入れてみせます……」
アキレスは抱きかけた恐怖を抑えるように笑い、目的の場所へと近づいていった。
城の東側——魔獣の巣の一つがある地区である。
用心深く、そこにそびえる塔を仰ぎ見た。思わず、ぎょっとなった。
あの大蜘蛛が塔にへばりつき、完全に気配を消して、じっと南の様子を窺っているのだ。
その姿は、どこか知恵深い人間が、静かに思案にふけっているようにも見える。巨大な蜘蛛が人間並みの知恵を持ってものを考えていると思うだけで、ひどく不気味だった。
アキレスは、大蜘蛛の意識が自分に向かっていないことに感謝しつつ、

「出でよ……〈蛭氷〉よ……」
その魔獣──吸血の氷を現した。足下から透明な氷柱が生え、アキレスを囲む。
「お前が吸った血を、少しばかり吐き出しなさい」
アキレスが囁くと、にわかに氷の表面がどす黒い色に染まっていった。
「さあ……私をその血で覆うのです」
氷柱に亀裂が走り、ぱっと砕けた。
どす黒い氷のかけらがアキレスの体に付着し、すっぽりと覆い尽くしてゆく。
黒々とした氷をまるで鎧のように着込みながら、アキレスは無造作に、大蜘蛛のいる塔へと歩み寄った。氷の表面が僅かに溶け、血がどろりと垂れる。
街路の至る所から魔獣が顔を出し、黒く染まったアキレスを見た。
だがすぐに、どの魔獣もさっと顔を背け、興味を失ったように姿を隠している。
塔の近くまで来たとき、ふと頭上を仰ぐと、大蜘蛛がじっと自分を見下ろしていた。
さすがに凝然と立ち尽くしたが、大蜘蛛もまた、傷ついた魔獣がのろのろと戻ってきたのだろうとでもいうように、ぷいとまた南の方へ顔を向けている。
全身に溢れる魔獣の血が、大蜘蛛さえ欺いたのだ。
アキレスはにやりと笑い、そのまま魔獣がひしめく館の一つへ入っていった。あの黒い

殻を持つ狼やら、銀色の刃の脚を持つ蜘蛛やら、泥をこね合わせたような猪に似た獣やらが、うじゃうじゃといる。それらの間を縫って上階に行き、奥の寝室のベッドに腰掛けた。目の前に死体が山と積まれているが、アキレスにとっては気にするほどのことでもない。
窓の外を見れば、いつの間にか、昼を過ぎている。
このままじっとしていれば、例の忘却の力で、あっという間に時間が過ぎてゆくだろう。
アキレスは低く笑いを零しながら、ベッドに横たわった。
自分はここでのんびりジークを待っていればいい。あの大蜘蛛が、罠を用意してくれているのだ。忘却の力を振るう敵も、この東側の地区を、決戦の場にするに違いない。
ジークがここに到達したときが楽しみだった。大蜘蛛もアンブローシャの女も、自分が出し抜いてみせる。そしてジークの力を、この自分が手に入れるのだ。
懸念があるとすれば、ジークがここに来る前に命を失うことだった。
だがそのときは〈蛭氷〉にジークの死体を食わせてしまえば良い――その左腕を。
アキレスは満足そうに微笑み、魔獣の血を全身に帯びた姿で眠りについたのだった。

南の広場で異変が起こった。石畳が鳴動したかと思うと、噴水の彫像が内側から砕け、粉々に吹き飛んだのである。続けて、噴水を中心に幾つも地中から爆発が起こった。

ごっそりと地盤が崩れた。めくれ返ったそこに、ぽっかり大きな穴が空く。

その穴から、ぴょんと丸っこいものが現れた。赤い風船のごとき魔兵――哭魔ブラスフェミーであった。堕気を凝縮させ、炸裂させる生きた爆弾である。

そして、暗い穴の底から、光を求めて――

ジークが、残り少ない魔兵たちとともに、ついに地上に姿を現したのだった。

ジークも魔兵たちも、ずぶ濡れになっている。魔獣どもが穴の底から追いすがり、それを撃退しながら、最後に哭魔が群をなして穴に飛び込んだ。

一瞬後、凄まじい爆発が地下で起こり、広場一帯に亀裂が走った。

魔獣どもの気配が静まり、ジークは、霧の漂う広場を見回した。

『思い出せ！　思い出せ！　思い出せ！』

いたるところに血文字が書き込まれた、あの広場であった。

（今は、聖王のため……聖法庁のために使ってやれ……）

ドラクロワの声が甦る。聖王がもたらす数々の任務。そして二人目の従士――

（心を奪われぬよう……強く意志を持て）

なぜ、聖王はあんな若い娘を自分の従士としてあてがったのか。

なぜ、ドラクロワはあの従士の力のことを自分に教えなかったのか。

なぜ、自分は――あの娘を斬る決意をしたのか。
なぜ、なぜ、なぜ――何も思い出せないくせに、何もかもが心の底にあった。眠ればその答えを夢に見るだろうという予感がしていた。生きて眠ることが出来れば――
そのとき、ジークは、霧の向こうでじっとこちらの様子を窺っている存在に気づいた。
あの大蜘蛛が塔にへばりつき、赫々と燃えるような赤い複眼をこちらに向けているのだ。
ジークは今こそ確信した。あの大蜘蛛が、この全ての罠を仕掛けたのだ。自分をおびき寄せると見せかけて追いつめ、増殖器の在りかを隠しつつ総力を挙げて攻め込んできた。
ジークの力の秘密と弱点を見抜き、その知恵と本能を駆使して今なお狙っている。
かつてジークが対決してきた中でも、最強にして最悪の前線指揮官であった。
ジークは大蜘蛛に向かって、ゆっくりと剣尖を掲げた。自分がいまだ健在であることを示し、その烈気で大蜘蛛を呑もうとする。ここで意気を失っては相手の思うつぼだった。
大蜘蛛もまた霧に包まれながら、ひたとジークを見すえている。
やがて、静まったと思っていた魔獣どもの気配が、にわかにざわめき始めた。
あらかじめ、この広場の周辺に布陣させておいた魔獣の群が、存在するのだ。
ジークが生き延びた場合の脱出路さえ、完全に読んだ上での布陣である。
ジークの左腕に雷花が咲き乱れ、生き残った魔兵たちが、ごうごうと咆吼を上げた。



堕気に満ちた風が吹き荒れ、霧を払うや――魔獣どもが大挙して押し寄せてきた。
ジークは左手を振るった。その力を試すように。誰一人として救えなかった力……――
(あなたにはもう、信じられる相手なんか、一人もいないのに)
せめて何か一つでも、生き延びさせられるものがあるのではと願うように。
手の平を地面に叩きつけ、新たな魔兵の群を招き出していった。
どこかで悲しい香りがしていた。

「じきに陽が沈むわ……夜が、あなたを眠らせる。ともに見ましょう……昔の夢を」
フロレスが囁く。ノヴィアはただうなずいている。邸宅に連れてこられ、食事とお茶を振る舞われながら、ノヴィアはひたすらフロレスの話を聞かされ続けていた。差し出されたものを食べ、言われるままに服を脱いで湯浴みをし、花の香りのする湯につかった。
そしてフロレスが邸宅のどこかから探してきた寝間着を身につけ、
「さあ、いらっしゃい、ティア」
「はい……姉さん」
招かれるままに従う。自分はそういう存在なのだという思いが、四方八方から押し寄せてきて心に染みこんでくる。ティア――風が吹かねば咲かない花。意志を持たず、ただ言

われるままに生きる。それで十分だった。自分の名を覚えていてくれる相手がいるだけで。
夕刻が徐々に近づいてきていた。霧はますます濃く立ちこめ、太陽の姿さえ見えない。
「私たち〈香しき者〉が人の心を直接覗けるのは、夜の間だけ……相手に過去の夢を見せ、それを見聞きするの。じきにあの男も眠りにつく頃よ。二人で彼の夢を見ましょう」
フロレスに手を引かれるままに、ノヴィアは寝室に入った。
血塗られ、屍が横たわっているとは思えぬほど、甘い香りに満たされた部屋――だがその底には死臭が漂っている。香りで隠されたものを敏感に察し、ノヴィアが震え出す。
「何も怖いことなんてないのよ……ティア。私たちは、もう何度も死を体験しているわ。心の死……忘却を。眠りの底での、魂の死を」
それでもノヴィアの震えはなかなか止まらない。心が失われる寒さには慣れそうもなかった。フロレスは、怖さと寒さで縮こまるノヴィアを抱きしめ、ベッドに横たわった。
「さあ……目を閉じなさい。先に夢を見て、あの男を待ちましょう……」
右手の香炉を、己とノヴィアの顔のそばで揺らした。
ノヴィアは言われるままに目を閉じた。悲しい記憶が甦り、自然と両手を握り合わせた。
かつて本当のティアがそうしていたように――手と手を握り、うずくまった。
悲しさが少しでも早く消えることを願うように。少女は背を丸め、眠りに落ちた。

ジークは刻々と暮れゆく空を振り返りながら、敵の包囲を突破するべく戦っていた。にわかに得体の知れない焦燥が湧いてくる。このまま夜になれば、自分は完全に無防備になってしまうという予感があった。眠り——抵抗出来ないほどの。

ジークは南から西へ、徐々に撤退していった。魔獣が少ない場所へ。最初に侵攻したところ。この都市で、数少ない安全な場所——はぐれたとき、落ち合うと決めた場所があるのだ。そのことに、はたと気づいた。

いったい誰との約束だったのか。

「ノヴィア……」

咄嗟にその名が口をついて出た。だが何も思い出せない。

陽が没するとともに、魔兵たちが目に見えて力を失っていった。

ジークの力が発揮しづらくなっているせいだった。そのせいで、先日は無惨に敗走したのだ。今は、着実に撤退することを考えるべきだった。

塔にへばりついていた大蜘蛛は、いつの間にか姿を消している。

敵を撃破しながら西に向かって退くうちに、追ってくる魔獣の数も減っていった。

あの大蜘蛛からすれば、ジークを撃退しながら塔に戦力を集結させているのだろう。

城の内部の巣は、完全に破壊したはずだった。
巣は残り一つ——あの大蜘蛛が待ちかまえる塔。そこが、決戦の場所になるだろう。
そしてそれは、この夜が終わってからのことだ。
朦朧とし始める意識に耐えながら、ジークは西の街区に入った。
魔獣たちの最後の追撃を叩き潰すとともに、魔兵たちが力を失って倒れてゆく。
凄魔たちが水銀のように溶け崩れ、ジークの手元に集まってシャベルに変じた。
ジークは、焼け落ちた商館の方を見やり、ほとんど本能に任せて街路を進んだ。
そして、辿り着いた。
聖堂——忘れてしまった誰かと、落ち合うべき場所に。
もたれかかるようにして扉を押し開き、広間へ入る。誰の気配もない。
何とか意識を保ち、宿泊所の方へ行き、食堂に入って、呆然となった。
食事の用意がされていたのだ。ただし、丸一日放置されたように冷えて乾いている。
ジークは戦いで汚れた体のまま、食卓についた。何も考えず、ただ食った。この味を自分は知っているという確信が、たとえようもない安心感をもたらしていた。
ここにいたのだ。ここで誰かが、自分を待っていたのだ。そう思いながら食事を終え、
「ノヴィア……」

その名を繰り返し呟いた。その従士は決して自分を狙ってなどいない。必ず見つけ出さなければならないという意識が芽生える。自分は——独りではないのだ。ただそれだけのことが、とてつもない希望に思えた。

調理場に行くと、薬湯が用意してあった。それを冷えたまま口に含み、左腕の籠手を外し、血に濡れた聖印に直接かけた。薬湯にやどる聖性の名残が、渦巻く瘴気を鎮めてくれた。

夜が迫り、寝所に入った。シャベルを分解して即席の閂にした。誰かが来ればすぐさま凄魔を招き出す気だった。もし相手が自分の従士なら——魔兵がそれを覚えているだろう。

湯どころに行く力がなく、かろうじて自分の体を拭い、気づかぬうちに負った小さな傷を確かめていった。それから再び鎧を着込み、剣を握りしめる。

ベッドに腰掛け、まだ少しだけ眠りに抗っていられる感覚があった。

ジークは、剣尖を壁に当て、名を刻んだ。自分がどうにか覚えている名を。今、求めなければならないはずの名。そうして、思い出していた。交わされたはずの約束を。

あまりに多くの従士を葬ってきた自分との、約束。もう二度とそれを繰り返したくないという思いを、ノヴィアという従士は、果たして理解してくれているだろうか。

「俺に……お前の墓を掘らせないでくれ……」

剣を走らせながら、ジークは言った。

「頼む……」
それを最後に意識が薄れ、剣を握ったまま、横たわっていた。
そうして眠りが訪れ、夢が始まった。

5

遠い夢の向こうから、馬車が、街道を走っている光景が、近づいてくる。
馬車の客席には、ジークと、その二人目の従士――ティア・アンブローシャがいた。
聖王から正式にティアを従士としてつけられ、任務を与えられて聖都を出立したのだ。
「直接、馬では、行かないんですね」
馬車を乗り継いで旅することを、少し不思議がるようにティアは言った。
「私……乗馬で、騎士の方についていけるかどうか、不安だったんです」
だがその不安も必要なかったというわけだ。ジークはちらりとティアを見やって、
「馬が、苦手でな」
ぼつっと言った。するとティアは真面目な顔で、こう提案した。
「あの……乗馬が苦手でしたら、私が馬を駆って、それに乗って頂くことも……」
こんな娘に、馬に乗せてもらうというのか。むかっとなりかけて、どうにか堪えた。

聖王は、予想通り、なぜこの娘が従士として選ばれたかは大して説明しなかった。
ただ〈銀の乙女〉の中でも優れた力を持つのだという。
だからといって、ろくに武器も持たぬ者を戦地につれてゆかねばならないとは——
(私もあなたも、きっと同じです。誰かがやらなければならないから……やるんです)
僅かに記憶が入り乱れ、誰かが、どこかからか自分を見ている気配がした。
だがその感覚も消え、すぐに夢が現実となった。ジークはティアから目をそらし、
「乗馬は得意だった」
憮然と返していた。ティアは意味が分からず、不安そうな表情を浮かべている。
「堕気だ。馬が、俺の体にやどる堕気を嫌がる。だから、乗れなくなった」
あ……とティアが納得したような声を上げる。顔を赤らめ、おずおずと頭を下げた。
「すいません……私、失礼なことを、言ってしまいました」
本気で恐縮している。ジークは肩をすくめた。いまいちどう返せば良いか分からない。
「力を持てば……その分、何かが持てなくなる」
何となくそれが無難な応答のような気がして、そう口にした。
「……そうですか」
ティアの表情が曇る。ジークは溜め息をつきそうになった。相手が何を考えてそういう

表情になるのか、まるで分からない。やや間があってから、ティアは呟くように言った。

「悲しくありませんか……力のせいで、大事なものを失うなんて……」

「それ以上のものを得た」

思わず、ぴしりとした口調になった。ティアがはっとなる。

自分がこの世で最も信じる相手から与えられた力なのだ。理想のために自分はそれを受け継いだのだし、何よりこの力は死者のためのものだ。それを悲しんでどうするのか――そういう思いがあった。だがジークもまた、そうした思いを伝えるすべを知らず、

「力が、俺を選んでくれた」

ただ、そう付け加えた。ティアはじっとジークを見つめている。

やがて、これだけは伝えねばならないとでもいうように、切々と言った。

「あなたが駆る馬に、乗せて頂きたかったです」

まさか慰めているつもりかとジークは呆れかけたが、ティアはすぐに目を伏せている。

まるで答えを聞くのが怖いというように。慰めではなく、本気の言葉だったのだろうか。

「馬に乗れるとは……もう思っていない」

やや毒気を抜かれて言った。ティアは申し訳なさそうに、小さくうなずいた。

「でも、お陰で……あなたとこうして、お話が出来ました」

目を上げ、微笑んだ。本当に嬉しそうな素振りだが、どこか、何かを諦めているような影があった。ジークはティアの微笑と、その影を見つめた。

「……そうだな」

うなずき返すと、僅かに、ティアのおもてにさす影が、薄れた気がした。

なぜティアの微笑には、あのような影がつきまとうのか。

失われてしまうことを知っていたのだ——夢を見るジークは、そう思った。

それは追憶であり、過去を経たからこそ理解出来ることだ。

どんな喜びも悲しみも、いずれ消えてなくなることを知っていたから、ティアの微笑はいつもどこかで諦めを帯びていた。しかしだからこそ、全ての瞬間に対して誰よりも必死だったのだ。全てが忘れ去られてしまう前に、出来るだけ自分の存在を残せるように——

ジークとティアは何日かかけて馬車を乗り継ぎ、任地へ赴いた。

途上、互いの力のことは話さなかった。必要なときにならなければ明かせないのだ。

信頼し合わねばならないのに、どこかで互いに秘密を抱えていた。

理解せねばならない相手なのに、どうしても疑いが残り続けた。

それは、何日かけようと、どれだけの言葉を交わそうとも変わらない関係に思われた。

そんな関係が一変したのは、任地まで僅かという、森の中でのことだった。
街道脇の木々の間に不穏な影が現れたかと思うと、ばらばらと矢を射られたのだ。馬も御者も無事だが、騎兵の群が前後を塞いできたため、馬車はその場で止まってしまった。
前方に二十騎ほど、後方に倍の数いる。森に伏兵がいることを考えれば、全部で百から二百――ジークはざっと推測し、御者に動かないよう命じた。
「お前は出るな」
ティアにそう言いつけ、単身、馬車を降りた。後方の騎兵たちが、ジークが担ぐ巨大なシャベルに呆気に取られた。だが誰も何も言わない。よく統率された集団だった。
「王弟派の者たちか」
ジークがそう口にすると、集団が殺気を帯びた。
団長格の紋章を鎧に帯びた男が、横手から馬を進めて来て言った。
「貴様が、聖王の黒い犬か。我らの同胞を、片端から滅ぼそうとしているそうだな」
ジークは無言でそいつを見た。もはや互いに、名乗り合う気すら無いようであった。
王弟が、聖王の座を奪おうとして失敗してから、まだ数ヶ月しか経っていない。
権力を巡って盛り上がった気運はたやすく消えず、いまだに王弟派が各地で暗躍し、聖王の座を覆そうとしているのだ。ジークの主な役割は、聖法庁の秩序を守るため、王弟派

を駆逐することだった。ジークからすれば、一部の馬鹿な有力者同士の争いが戦乱に発展せぬよう、後片付けをしている気分だ。
ドラクロワの理想のためではなく。ただ、今の自分たちを維持するためだけの戦い――
「王弟は死んだ」
ジークは、それだけは一応、確かめておくというように告げた。
「だが聖王は、まだ死んでおらん」
団長格の男が、物騒な槍を構えて言う。
「我らは聖王の愚かな権勢を排し、王弟様の御子息に、王座をお渡しする」
下手な口上に、唾を吐きたい気分になった。聖王は、ただ聖法庁全体の秩序を優先しているだけだ。そうなると特権を求める有力者たちにとって不満も多くなる。
王弟はそれを利用し、有力者たちにあることないこと約束して己の勢力としたのだ。
「何なら、お前が聖王の座を狙ったらどうだ」
淡々とジークは言った。さすがに男がぎょっと目を剝く。
どの勢力も、王弟の子息を担ぎ上げて特権を得たら、あとの執政の責任は全て放り出すに決まっていた。そして目の前の男は、そうした勢力の手駒に過ぎない。大した野心も持たず、所詮は欲で踊るやからだ――そういう侮蔑がありありとジークの態度に出ていた。

「この不敬者っ！　成り上がりの騎士風情が、聖王の座を何と思うかっ！　我らの同胞を殺した貴様を、八つ裂きにして聖王のもとに送り届けてくれる！」

ジークは猛然とシャベルを振り下ろした。爆弾でも落ちたかのような音を立てて、シャベルの歯が道路に埋まった。唖然となる騎兵たちへ、ジークは無言で烈気をみなぎらせた。

聖王の座など何とも思ってはいない。ドラクロワは王座を永遠に廃止するために戦ってきたのだ。自分も。同胞たちも。何万という友軍も。その理想のために――

「ジーク・ヴァールハイトが解き放つ！」

言葉にならぬ思いをこめて――その左腕から雷花を迸らせた。

「水刻星の連なりの下、凄魔ギルトとなりて、我が敵に見せしめよ！」

シャベルが、水銀の輝きとなって飛散し、十六体の、双剣を持つ魔兵に変貌する。

その輝きの中から現れた剣を、すぐさま握りしめ、敵の殲滅を命じる。

咆吼を上げて躍りかかる凄魔の群に、騎兵たちが愕然となって隊列を乱した。

ジークがちらりと馬車を見やると、窓からティアが恐怖に青ざめた顔を覗かせていた。

あの顔だと、いずれ〈招く者〉の力を恐れて従士を辞めるかも知れないなと思った。

何の武器も持たない従士をつれて戦うよりも、いっそ独りの方が良い――そんな風に考えながら、ことさら戦いの陰惨さを見せつけるようにしてジーク自身も剣を振るった。

慌てたように左右から伏兵が雪崩れてきた。推測していたよりやや少ない程度である。
ジークはすかさず雷花が閃く左手を地面に叩きつけ、新たな魔兵を招き出している。
かつて謀略の犠牲となり、敵と味方の両方に襲われて死んでいった、友軍の魂たちを。
巨人のごとき厳魔が続々と現れ、ティアの乗る馬車を守るように森の伏兵をなぎ倒す。
そして、前方にいた騎兵たちが他の部隊と連携せぬよう、魔兵に撃滅を命じたとき——
異様な光景に、さしものジークでさえ目を奪われていた。
騎兵たちが、すぐそばにいる味方に向かって、槍を打ち込み、剣をなぎ払っていたのだ。
仲間割れにしては、あまりにその行動が唐突すぎた。
ふいに澄んだ香りがした。まだ若い果実を思わせるような瑞々しい香り——
ティアが、その右手の鎖をゆっくりと揺らしながら、馬車から降りてきた。
鎖の先にある香炉が揺れるたびに、澄んだ香りが鮮やかに広がってゆく。
「あなたたちの敵は、誰……？」
ティアは言った。騎兵の一人が、絶叫を上げて味方を叩き殺した。
「あなたたちの憎むべき相手は、誰……？」
味方を殺した騎兵が、ぽかんとなって自分の武器を見た。まるで夢でも見ているような
呆然とした顔でいるところを、別の騎兵に刺し殺された。

ティアの仕業であることは明らかだった。どういうわけか同士討ちをさせているのだ。
それほど大人数を一度に操っているわけではない。せいぜい四、五人程度だが、それでも大混乱をもたらすには十分すぎる人数である。
敵はまたたく間に壊滅した。逃げ出す者はおらず、最後の一兵に至るまで死んだ。
ティアは、今や両手に小さな香炉をあらわした姿で、ジークを振り返った。
ジークが視線を返すと、ティアは目を伏せた。どこか気まずそうに鎖を手首に絡め、袖の中に香炉を隠した。それから、またおずおずと目を上げた。
「こういう状況でないと、私の力を、お見せすることは出来ないと思って……」
命じられもせずに敵を迎え撃ったことを、詫びるような口調だった。
「あなたの力を見せて頂いたのですから、私もそうすべきかと……」
ジークは小さくうなずいた。ティアの行動を許すというのでもなく、誉めるというのでもない。ただ、恐るべき力を持つ者同士が、互いの秘密を少しだけ打ち明けた瞬間だった。
「敵の指揮官を、捕らえたんですね」
ティアが、ジークから目をそらすように、森の方を見やる。
凄魔の刃に囲まれてひざまずく団長格の男がいた。周囲にいる生存者は、もはやその男だけだ。厳魔たちは、敵を駆逐すると、その身をどろりと崩し、消えていった。

「あ……」

ティアが声を上げた。崩れ去った魔兵の残骸から、ふわりと輝きが舞い上がったのだ。憎しみと怨みから解放された魂の聖性が、天に還ってゆく様子を、ティアは不思議な微笑みを浮かべて見守った。ふいに、ジークを向いた。最初に会ったとき――ジークに斬られた従士は幸せだと言い放ったときと、同じ目をしていた。そしてその目のまま、

「もう一つだけ、私の力を、お見せします。私に、捕虜の尋問をやらせて下さい」

勇気を振り絞るようにして、ティアは言った。

「聖王の犬が、このような化け物とは……。さっさと殺すがいい……」

男は言った。表情を消し、凄魔に囲まれてひざまずきつつも、見事なまでに恐怖を抑えている。尋問といっても一筋縄ではいかないだろう。

ジークとしてはこの男を逃がし、誰と連絡を取るか諜報院に探らせようと思っている。

だがその必要はないとティアは言った。そして男に近づき、

「あなたの仲間の名前を、教えて下さい」

そう口にしながら、その右手の香炉をあらわした。

男は、ティアを横目に見た。騎士を〈銀の乙女〉が尋問するなど前代未聞である。

しかもティアは、決まりでもあるのか、紋章さえ帯びていない。一介の修道女にしか見えない若い娘を前にして、男は呆れたように溜め息をついたものだった。

ティアの右手の香炉が揺れた。澄んだ香りが広がるとともに——

ぱん、とやけに高い音が響いた。ティアが、左手で、男の頬をひっぱたいたのだ。

ジークは眉をひそめた。男もさすがに目を丸くしたが、大して効いていないのは明らかだ。馬鹿馬鹿しそうにかぶりを振ると、またティアが男の頬を叩いた。そして、言った。

「今、何をされたか、分かりますか？」

ジークが、はっとなった。男は嘲るように頬を歪めた。その表情が、ふいに強ばった。

「……あんたの、その可愛いお手てで、ほっぺたを叩かれたんだよ」

僅かに間を空け、ようやく頬の痛みに気づいたように、言った。

男の目が急に落ち着きを失っている。すると、ティアは再三、男の頬を叩いた。

右手の香炉がゆっくりと揺れ、その聖性に満ちた香りが、男を包み込むように広がる。

「今、何をされたか、分かりますか？」

同じ問いを繰り返した。男の額に、いつしか脂汗が浮かんでいた。

「……そうだ。頬だ……あんたの……可愛いお手てで、ほっぺたを叩かれたんだよ」

「本当ですか？」

男が言葉を詰まらせた。
「もしかすると、頬に、焼けた鉄を、押しつけられたのかも知れませんよ」
ティアの言葉に、男の肩がびくっと揺れた。すぐさま凄魔たちが男の腕を押さえる。
「そ、そんな痛みは感じてない……」
男が必死に言い返す。ティアは小さくかぶりを振った。香炉の揺れが大きくなった。
「あなたが何も覚えていないだけではないのですか？」
男の喉が激しく上下し、生唾を飲み込む。
「よく確かめて下さいね。知らないうちに何かが無くなっていませんか？」
「な……何かって……何が……」
「先ほど、あなたの両腕を切り落としました」
ティアが淡々と言った。男がぎょっとなって背をそらし、また凄魔に押さえつけられる。
「う……嘘だっ！　俺の腕は……ちゃ、ちゃんと……」
ティアは、うっすらと微笑みを浮かべた。
「でも、いつ、本当に切り落とされるか、分かりませんよね？」
男が、がくがく震えだした。ティアの微笑が、暗く影をふくんだものになってゆく。
「覚えていますか？　あなたが何も覚えていないところで、大事なものが少しずつ無くな

っているかもしれませんよ？　手や足はまだありますか？　目は両方ともちゃんと残っていますか？　鼻や耳はまだついていますか？」
男の震えが激しくなった。その様子を見守るジークも、愕然となっている。
「寒いですか……？」
ティアが声を低めて訊いた。男は何度も、うなずいた。気づけば泣き顔になっていた。
「記憶が失われることで、心が寒がっているんです。これからどんどん寒くなりますよ。その前に、一つだけ教えておきますね。あなたは決して殺されません。あなたの体を傷つけはしますが、死なせはしません。その代わり、心は死にます。あなたは少しずつ自分の心が死ぬのを感じ続けるんです。死にたくなるほど寒くなるんです。よろしいですね？」
男はかぶりを振った。何度も何度も振り続けた。体の震えがますます激しくなった。
いったい自分が何をされたかが恐ろしいのではない。自分が何をされたのか分からないことが恐ろしいのだ。自分が今どんな状態なのか。それさえ分からなくなってゆくのだ。
「今、あなたの両足を切りました」
男が絶叫した。森中に響き渡るような恐怖の叫びに、ジークがかっと目を見開いた。
「し、しゃ、喋る！　な、な、何でも！　な、何でも喋る！」
男は訊かれもせずに、これからジークたちが赴く街の市長や司祭の名を挙げていった。

その他にも、仲間が潜伏している街の名や、どの砦が拠点かを震えながら喋ってゆく。
「まだ、何かありませんか？　もし無ければ……」
「た……た……助けてくれ……お、俺を殺さないでくれ」
ジークが動いた。男に歩み寄りながら、さっと左腕を振って凄魔たちを退かせる。
ティアが驚いたように脇にどいた。解放された男が、悲痛な泣き声を上げ始めた。
「この男に仕掛けた呪縛を解け」
ジークが鋭く命じる。ティアは慌てて香炉の鎖を腕に巻き付け、袖の中に収めた。
急速に香りが消え、男の震えが目に見えて静まってゆく。
ジークが剣を突きつけて言った。男は甲高い悲鳴を放ちながら、どうにか立ち上がると、
「消えろ。二度と王弟派に与するな」
よろめきながら馬に乗り、疾駆し去った。
ジークは、じっと、男が消えた方を見つめている。恐ろしく胸がむかついていた。
自分と戦った相手が、あのような醜態をさらしたことが、ひどく不愉快だった。
男の誇りも覚悟も、これ以上ないほど踏みにじったティアの力が──
「ご不快でしたか……」
ティアが、背後から、感情を殺したような声をかける。ジークは、かぶりを振った。

「お前に尋問させたのは、俺だ」
一筋縄ではいきそうもない男を相手に、ティアが何をするか、興味があったのだ。
ティアは、自分に出来ることをやっただけだった。その力を、ジークに見せるために。
「心を削り取ることが……〈香しき者〉の力か……」
ジークは、ティアから顔を背けたまま呟いた。
「忘却の力です……尋問を終えたら、あの人が受けた苦しみも忘れさせるつもりでした」
ジークは不快さを言葉にしないよう、歯を食いしばった。苦しめたことさえ忘れさせるというのか。互いに——どれほど心を踏みにじろうとも。全てを消し去って——
それこそ本当に、相手の全てを踏みにじるということではないのか。
「……俺が命じない限り、その力、決して使うな」
「はい」
あまりに当然のような返答に、ジークは思わずティアを振り返っていた。
「ティアの花のように……。私の意志で力を使うことは、ありません。あなたが私の力を知ることを望んだので、お見せしただけです。私はただ、あなたという風に従います」
微笑を浮かべて、ティアは言った。その顔に、諦めの影が色濃くさしていた。
ジークは無言で左腕をひと振りし、凄魔を元の姿に——剣を覆うシャベルに戻した。

「先を、急ぎましょう」
ティアが、馬車で待っている御者の方を振り返る。
「死者を葬ってからだ」
これまた当然のようにジークが返す。驚くティアをよそに、シャベルを担いだ。
「手伝え。お前のその香りで、死者の怨みを消してやれるか、試してみろ」
ティアの目が大きくなった。ジークを見つめたまま、微動だにせずいる。
「急げ。日が暮れる」
「は、はい」
ティアは、どきっとなったように両手を握り合わせると、
「あなたという風に……従います」
まるで祈りを捧げるように目を伏せ、繰り返し、その言葉を口にしていた。

「やはり、死者に香りは効きませんでした。聖性で、堕気を払うことは出来ますが……」
ティアは少し残念そうに言った。馬車の客席に、ジークと差し向かって座っている。
「せっかく、ご命じ下さったのに……申し訳ありません」
ジークは小さく肩をすくめた。大して本気で命じたわけではなかった。

ただ、暗い微笑を浮かべるティアを見るうちに、そんな言葉が零れていたのだ。
また正直、ティアの聖性が、どれほど死者の魂に影響を与えるか、確かめたい気持ちもあった。いざというときに、自分の軍団が、ティアを拘束出来るかどうかを――
「葬法は、よく学んでいる。十分に、死者を慰められただろう」
淡々とジークが言う。途端にティアの表情が明るくなった。
「〈銀の乙女〉で、位を授かるときに、学びましたから……」
少しはにかんだようになってそう説明する。ジークはうなずいた。ただの相づちだったが、自分にしては珍しい仕草であるような気がする。二人の間にあったぎこちなさも、だいぶ消えたようだった。互いに力を見せ合ったことで信頼感が芽生えたというのだろうか。
「位を授かったのに、なぜ紋章を持たない？」
「これが、紋章の代わりなんです……」
ティアは袖の中から香炉を取りだして見せた。中には何も入っておらず、細かな紋様が刻まれている。その紋様の一部に、確かに〈香しき者〉の称号名が刻まれているのだ。
「両方の香炉に、同じ称号があります。表向きは、称号を持っていないことに……」
つくづく秘密ごとの多い立場だった。その力の恐ろしさを考えれば、厳重に管理されるのも当然な気もする。だがなぜそんな立場のティアを聖王は従士として選んだのか――

者同士を組み合わせて、聖法庁の秩序を盤石にしようとしているだけにも思えてくる。
推測は幾らでも出来たが、ティアの態度を見ていると、単に聖王は、恐るべき力を持つ
「お前は、なぜ、その力を受け継いだ？」
「亡き母が、この力を持っていました……受け継ぐのは、当然ではないでしょうか？」
ちょっと自信なさそうに訊き返す。ジークは肯定も否定もする気もなく、うなずいた。
「あなたは、ヴィクトール・ドラクロワ卿から、力を受け継いだと聞いております」
隠す気もないことだったので、ジークは、ああ、と短く応えている。
「あなたの力は、とても恐ろしいけど、どこか……優しい。きっとあなた自身が……」
ジークは対応に窮した。死者の怨みを荒れ狂わせることが、優しい――？
「あなたが、それほど戦いを好むとは思えません。私もあなたも、きっと同じです。誰かがやらなければならないから……やるんです。でもあなたの場合……もっと優しくて」
「剣を棄てられないだけだ」
ぼつっと応えた。自分をそういう風に正当化して欲しくはなかった。血塗られたというのも生やさしい、体中が血でずぶ濡れになるほど戦場をくぐり抜けてきたのだ。
そして今も、戦乱を防ぐために圧倒的な戦力で火種を叩き潰し、真実を闇に葬るため大陸中を駆け回っている。心の底では常に理想を求め続けている自分からすれば――

「とても自慢にはならない」
ジークはつまらなそうに言った。ティアは、少し困ったように微笑んだ。
「私は……どう自分を誇れば良いかも、分かりません。私の力は、残酷で……汚いから」
ジークはかすかにかぶりを振った。
まるでティア自身が、自分は残酷で汚いと言っているように聞こえたからだった。
「良い香りだった。つい囚われるのも分かる」
誉めているのか皮肉なのかも分からぬまま言った。妙な気分だった。もしティアの力で深く傷ついている者がいるとすれば、それは、ティア自身のような気がしていた。
「もし、操られさえしなければだが……」
「あの、もちろん、普通に香らせることも出来ます。お望みでしたら、ここで……」
ジークを遮るようにして、慌てて言う。おどおどしているくせに、目が真剣だった。
「……頼む」
ジークは、困惑しつつ、それを悟られぬよう、暮れかけた外の景色に目を向けた。
どれほど恐ろしい力を持とうとも、結局ティアは、ただの普通の娘なのだ。
それが分かって、妙に気が沈んでいた。自分が斬った従士の面影が脳裏に浮かんだ。自分たちの故郷を取り戻すために身を捧げようとする明るく優しい青年――その体に、自分

の剣が叩き込まれたときのような衝撃を、このティアという娘から感じていた。
誰か一人を犠牲にして他の多くの者を生き延びさせようとするような、気の重さ——
ふいに、そのジークの陰鬱な心を、優しく宥めるような香りが、客席に満ちていた。
瑞々しい香りに、心がふわっと軽くなるような、何とも言えぬ安らぎを感じた。
「あの……いかがでしょうか」
ティアが、両手にそれぞれ香炉を握りながら、不安そうにこちらを窺っている。
「……良い香りだ」
呆然と振り返る。賛嘆の念が顔に出ていた。ティアが、ぱあっと耳たぶまで赤くなった。
「私、普段は、調香師として働いているんです。出来れば、ずっとこうして人に喜んでもらえるような香りを作っていたいんです……。人に、覚えていてもらえる香りを……」
ひっそりとした口調になってゆく。まるで到底叶わぬ願いを口にしているように。
かと思うと、やや顔を伏せながら、心底嬉しそうに微笑して言った。
「良かった、あなたに喜んでもらえて……」
ジークは、この娘が泣き出すのではないかと思った。だがティアは微笑したまま、
「私には、あなたを守るほどの力は無いかもしれません。でもせめて、あなたの悲しみを消す努力だけは、させて下さい……あなたの痛みが、それ以上、増えないように」

顔を上げて、そう言った。その言葉の本当の意味を、ジークはまだ知らなかった。
馬車は、巡礼者の小屋の前で止まった。ジークとティアが降り、馬車は来た道を戻る。
目的の街は、ここから徒歩で行ける距離にある。
街には王弟派がひしめき、行けば戦地となるだろう。この小屋が、その兵站だった。
ジークが地図と情報を確認する間、ティアが従士らしく食事を用意した。正直、あまり美味くはなかったが、香りは抜群だった。ティアなりの工夫が、妙にありがたかった。
「明日、早朝から街に入る。訪問することは通達してある。一日がかりの戦いになる」
相手の戦力を確認しつつジークが告げる。ティアはしっかりとうなずいた。
「どこまでもお供します、ジーク様」
だが本音を言えばジークはこの段になってもティアをつれてゆくことに戸惑っていた。
確かにティアの力を使えば、戦いの被害を最小限に抑えられるかもしれない。
だが果たして、ティアに、力を使えと命じられるのか――なぜか、自信がなかった。
「今はゆっくり休め」
さっそく身構えるティアにそう命じるくらいしか、自分には出来ないような気がした。
それは、今も残る疑念のせいだろうか。聖王がなぜティアを選んだのかもまだはっきり

しない。ドラクロワがジークに告げた、心を奪われるなとはどういう意味なのか。

そもそもティア自身、どこかで自分の力に強い抵抗を覚えている。

人の心を操るというだけで、ああも諦め、傷ついたような気配を帯びるのはなぜなのか。

何かが危うい気がしたまま時間は刻々と過ぎていった。ここまで来れば戦いのことしか頭から無くなっているのが普通だったが、逆にますますティアへの疑念が強くなってくる。

ジークは戸惑いを振り払うように、ティアを置いて小屋を出た。

ランプを手に、裏の湯どころへ行ったのだ。既に火を焚き、湯を沸かしてある。湯が冷めれば焼いておいた石を入れて温める。湯気のこもる浴室に入ると、妙に安心した。

湯浴みを済ませながら、明日は一人で行動した方が良いかもしれないと思った。

ティアは不服だろうが、力を合わせて戦うより、何もするなと命じる方が気が楽だ――

そう思ったとき、ふいに人の気配がした。物音を隠そうともしない。当然のように湯どころに入って来た。脱衣所に入り、服を脱ぐ音がした。ジークの肌が粟立った。敵意や恐怖ではない。不愉快さからだった。疑念の一部が、明確な解答を得ようとしていた。

胸がむかついた。背後の戸が開き、脱衣所に置かれたもう一つのランプの灯りとともに誰かが入ってきた。瑞々しい香りがした。思わず囚われそうになるような香り。

「……聖王から、そうしろと言われたか」

相手に背を向けたまま、ジークが怒りのこもった声を放つ。戸が閉まる音がした。狭い浴室が、さらに身動き取れぬほどの狭さに感じられた。香りがした。沈黙が過ぎていった。
「はい」
ふいに、短いいらえが返ってきた。ジークの目が、怒りにすがめられた。
「……〈銀の乙女〉の、聖女たちからも、そうしろと言われたか」
「全ての聖女からではありませんが、何人かから、命じられました」
「どう命じられた」
「たいていの騎士が、喜ぶようなことをしろと」
「お前は、騎士の従士となるのは、俺が初めてだと言ったな」
「はい」
「これまで、何人の騎士の従士となることを命じられてきた」
「……覚えていません」
ほとんど聞き取れぬかすかな声。ジークは怒りを押し殺しながら、構わず訊いた。
「聖都に知人はいないというのは本当か」
「……覚えていません」
「俺を、どうしろと命じられた」

「あなたの悲しみを、消せと」
もの凄い音が響いた。ジークが怒り任せに浴室の壁に拳を叩き込んだのだ。だがティアは微動だにしない。ジークは、ゆっくりと立ち上がりながら、最後の質問を口にした。
「お前の意志は、どこにある」
背を向けたまま、怒りで相手の心をこじ開けるように言った。そして予想通りの答え。
「どこにも、ありません」
怒りが沸点に達しかけた。かろうじてティアに拳を振り下ろす真似をせずに済んだ。
振り返りざまティアを押しのけて出て行こうとし、その肩に手を当て——愕然となった。
そんな気配などまるで無かったのに、ティアは顔をくしゃくしゃにして泣いていた。
だがジークが驚いたのはそれだけではない。ティアの左肩から胸元にかけて、大きな傷跡が走っていた。脇腹にも大きな傷跡がある。刀傷か火傷か、咄嗟に判断がつかなかった。
「この傷は……」
「覚えていません!」
急に泣き声になってティアが言った。ジークは思わず、その肩から手を離した。
「全て、忘れました。自分の力で」
大声で言い放ち、うつむいて涙を零す。ジークは、なすすべもなくティアを見つめた。

「……そうしろと言われたか」
ティアは、こくっとうなずいた。
「良いんです……。この傷も……敵に、されたのか……誰か私が知らない騎士の方に、されたのか、覚えていなくても、その方が……」
ジークが触れた肩に、自分の手を置いた。まるで言葉とは裏腹に、身を庇うように。
「だって、それが私の仕事で……。秘密を探ったり、言われた通り人を動かしたり、そんなこと……覚えてる必要ないって、言われます。覚えてない方が、良い、って。……私、心も体も聖性もばらばらにして、香りにするんです。どんなに醜いものがそこにあっても、隠してしまえるように……全てを香りで包んで消すんです……それが、私です」
しゃくり上げるティアを、ジークは虚脱感とともに見つめた。これまでティアが命じられてきたことは、だいたい察しがついた。心身を尽くして相手を探り、心を消す——敵も味方も関係なく。その体の傷も、相手が抵抗したせいだろうか。それとも自分で望んだ傷だろうか。苦しみから逃れるための最後の手段として死を選び——そして結局は逃れられずに。いずれにせよ答えは、もうどこにも存在しなかった。ティアの心にさえも。
「怒らせてしまって、申し訳ありません……私、覚えていないけど、分かるんです。騎士の方が、どんなことをすれば喜ぶか、何となく分かるんです。ですから、ジーク様にも、

同じことをと……。決して、操ろうだなんて、思ってません。信じて下さい。ただ、少しでも早く、あなたの悲しみを消せるようにと……」

いったい悲しみを消すとはどういうことか——分かるようで分からなかった。

ただ少なくともティアに敵意はなかった。ただ悲しんでいた。そして傷ついていた。体も、その心も。丸裸で放り出されたまま、身を守るものもなく。

「怒らせてしまって、申し訳ありません……このことを忘れろと言われれば、忘れます。忘れたいと言われれば、忘れさせます。いつでも、仰って頂ければ……。私、これまで、どんな方の言われることにも、逆らったことは……」

ティアは哀れなほど必死になって言いすがった。ジークはただティアから目をそらし、

「忘れないでいい」

そうとしか言えなかった。ティアは驚きを込めてジークを見上げた。

「たいていの方は、私に……忘れろって……」

ふいにまた泣き顔になるティアから目をそらし、

「俺のことは全て、覚えていていい。誰が何と言おうとだ」

鋭く言って、ティアの肩越しに、戸を開いた。ティアが身を縮こまらせて脇へどく。

「湯を浴びて、体を温めろ」

ティアを見もせず浴室を出て、後ろ手で戸を閉めた。胸の底でくすぶる怒りを紛らすように、さっさと身を拭って衣服を羽織る。何もかもが腹立たしく、哀れで、不快だった。
言われた通り、ティアが湯を浴びる音がした。
「明日、俺一人で行く。お前はここにいろ」
湯の音が止まった。代わりに、浴室から、細い泣き声が響いてきた。
その泣き声から逃げるようにして、ジークは足早にその場を立ち去った。

ジークは小屋のベッドに腰掛け、じっと考えにふけっていた。
悲しみを消すとは、どういうことか――
聖王が、ジークを操るためにティアを差し向けたとは、どうしても考えにくかった。
ドラクロワが投獄され、ジークの所属は聖王の側にある。今もこうして聖法庁のために働く自分を、いったいどう操る必要があるというのか。
それとも自分が斬った従士のことか。これまでの悲劇のことか。いずれにせよ聖王も余計な真似をしたものだった。悲しみで今さら自分が挫けるとでも思っているのか。
ふと、ベッドを仕切る布の向こうで気配がした。ティアが戻ってきたのだ。
ジークは声もかけずにいた。従士を辞めさせようという気持ちもあったが、果たして聖

王が承諾するかどうか。もし聖王が承諾したとして、その後、ティアはどういう目に遭うのか。恐らく、今まで通り謀略の道具にされるだけだろう。それなら――
「私を使うのは……それが一番、平和な手段だからって、言われてきました」
仕切り布の向こうで、ティアが、ぽつんと声を零した。
ジークは無言でいる。正直、反論すら出来なかった。確かにそうだからだ。
聖法庁に対し謀略を抱く領主がいたら、ティアを差し向けて、その心を消させれば良い。
そしてその後で、ティアもそのことを忘れれば、全ての問題が綺麗に消滅する。
むしろジークよりも、闇に葬るという言い方がふさわしい任務だった。
「あなたのこと、覚えていたいような、今すぐ忘れたいような、不思議な気持ちです」
声が近づき、布を隔てたすぐ向こうで立ち止まるのが分かった。
「今日のことを……忘れては、いけませんか」
「駄目だ」
即座に言った。ぐすっとすすり泣く声がした。かと思うと、
「ジーク様は……背中に、あまり傷がないんですね。騎士にしては、綺麗だと思って」
ふいに、そんなことを言った。ジークはむっつりと押し黙っている。
「でも……こちらを向かれたとき……傷の多さに、少し、驚きました」

ジークの胸も腹も、至る所が傷跡だらけだった。浅手も深手も体の前面に集中していた。
「昔……俺の仲間だった男がいた。顔も体も傷だらけだが、背には一つも傷がなかった」
幾分、声を和らげてジークは言った。
「誰にも背を向けなかったからだ。そいつが死んで、そいつのように戦おうと決めた」
まるで、お前もそうしろとティアに言っているようで、自分の傲慢さに嫌気がさした。
どれほどの力を持とうとも、若い娘に、切り刻まれて生きろと言うのか。
それでは聖王や〈銀の乙女〉が、ティアに強要していることと、何が違うのか。
「あなたは、きっと、傷の一つ一つを覚えているんですね」
ティアも、やや落ち着いたようになって言った。
「一つだけ、お願いがあります……。明日のことで……」
戦いに連れて行けと言うのだろう。駄目だ、とすぐさま返そうとして、
「あなたのことを、少しでも多く、覚えていたくて……」
ティアのそんな言葉に、咄嗟に口をつぐんでいた。
「そのために、あなたのそばにいても、いいでしょうか……」
おそらく、ずっと湯どころで、そのことを考えていたのだろう。
ジークは思わず深々と溜め息をついた。ぐすっとまたすすり泣く声がするのへ、

「俺の背に傷が少ないもう一つの理由は……互いに背を守り合う相手がいたからだ」

渋々といった感じで、そう口にしていた。

「力を使うのは、互いの命を守るときだけにしろ。それなら……」

途端に、ひとときわ大きな泣き声が響いた。

「ありがとうございます……」

なぜ礼を言うのかと聞き返したい気分だった。それほどまでにこの任務が重要なのか。それともほんの少しの失敗が、彼女の進退を危うくさせるのか。

(置いて行かれたくない――名前も存在も忘れられて――置き去りに)

ふいに、どこかからか、娘の思いに共感する者の思念が、夢をよぎった。

(ティア――それが私の名前――)

別の場所で夢を見る少女。ぴたりと何かが重なり合う感じがし――すぐに消えた。

ジークは、ゆっくりと仕切り布をどかし、ティアを見た。

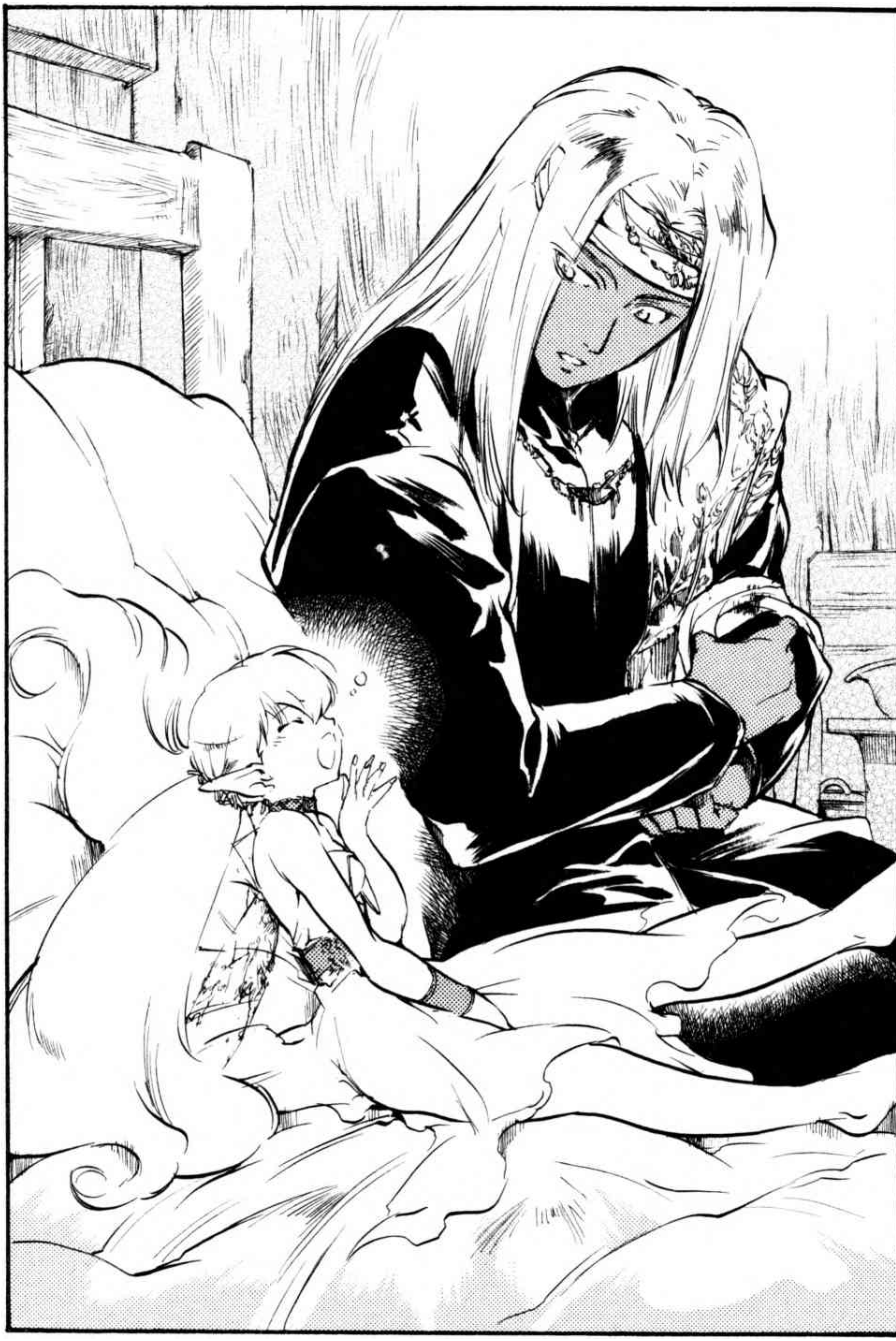
ティアは、両手を握り合わせて、身を折るようにして泣いていた。

この娘を斬らねばならない理由など、まだこのときは何一つとして思い浮かばなかった。

6

「ちょっと、トール。ねぇっ、トールったらっ」
建物の陰で様子を窺っていたトールが、肩の上のアリスハートの声に、はっと我に返る。
「はい、アリスハート。また、ぼんやりしてましたか？」
「うん。なんか時間が止まったみたいに、ぴたーっと止まるのよぉ」
「あなたがいてくれるお陰で、助かります」
この分だと、トールがアキレスとともにいたときも、二人で馬鹿みたいに動きを止めていた可能性さえあった。トールは自分の動作を意識しつつ、街路を移動した。
ノヴィアと敵がいる場所の見当が、ようやくついていた。
北西の街区に、聖性に満ちた香りが立ちこめている一角があるのだ。その周囲を巡りながら、どうにかして相手に察知されずに侵入できないかと思案していたのだが——
「トールぅ、あんたも少しは休みなさいよ。すっごい疲れた顔してるよぉ」
そう言われて思わず自分の頬を撫でた。気づかぬうちに体力を消耗しているのだろう。
「どうやら敵も、夜のうちは動く気はなさそうですね……」
トールはあっさりと退き、あらかじめ目当てにしていた西の城壁の詰め所に向かった。
本当は敵の正確な位置だけでも確かめたかったが、それで戦う力を削がれては意味がない。
香りと魔獣どもの両方を警戒しつつ詰め所に入り、部屋の奥にあるベッドに腰掛けた。

「真っ暗で、よく見えるわねぇ」
アリスハートが感心する。トールは微笑しつつ、アリスハートを枕元に下ろしてやった。
「半分は、アリスハートの羽の輝きのお陰です」
「あたしの羽、元に戻るかなぁ」
情けなさそうに、半ばしか回復していない羽を震わせる。
「ノヴィア様の聖性を与えられればすぐに戻りますよ」
トールはふとそこで、アリスハートに訊いてみたくなった。
「もし……レオニス様が、ノヴィア様を、聖地シャイオンに招き……あの地を故郷のように思って欲しいと仰ったら……ノヴィア様は、それに応じると思いますか？」
「え……？　うーん……狼男との旅があるしねぇ……」
枕元にちょこんと座りながら、難しげに言う。かと思うと明るい声になって、
「でも、故郷があるのは良いことだよ。あたしにとっては空が故郷だからね。そういうのがノヴィアにもあっても良いんじゃないかなぁ。でも、なんでそんなこと訊くの？　レオニスは、本当にノヴィアに故郷をくれる気なの？」
「ええ……そのようです」
ふうん、とアリスハートは感心したように呟き、



「確かにレオニスってば、ノヴィアのこと好きだものねぇ」
のほほんと核心を突いてきた。トールは思わず神妙になった。
「……ノヴィア様は、レオニス様のことを、どう思ってらっしゃるのでしょう？」
「弟みたいに好きだって言ってたよぉ」
トールがかすかに目を見開く。だが実際の血縁のことを言っているわけではない。
「レオニスの場合は、なんだろう……お母さんみたいに好きなのかなぁ」
アリスハートは欠伸混じりに言ったものだが、トールは一瞬、意味を受け取り損ねた。
「今……なんとおっしゃいましたか？」
「レオニスよぉ。ノヴィアのこと、自分のお母さんみたいに好きなんじゃないのかな。あたし、なんかそういう気がするなぁ」
予想外の考えにトールが唖然となる。アリスハートは枕に背を預け、また欠伸をすると、
「ノヴィア、大丈夫かなぁ……」
ことんと眠ってしまっていた。その寝付きの良さに、トールは困ったように微笑した。
「一応……敵なのですよ、私は」
そう口にしつつ、自分も休息を取るため横になった。
「レオニス様が……母親を……」

それが妙に気になった。まるでレオニスに関して、自分でさえ盲点にしている事柄があるように。だがすぐに不眠不休による疲労に襲われ、トールもまた眠りについたのだった。

執務室に座るレオニスの怒りの顔を、燭台の灯りが照らしていた。
「おのれ……フロレス・アンブローシャめ……なんということを」
報告書を握りしめた手が、わなわなと震えた。城塞都市ルカについての報告が、つい先ほど早馬で届いたのだ。完全な誤算だった。〈香しき者〉の力は多くが秘儀とされ、レオニスでさえ詳細を知らなかった。そのせいでフロレスの力の範囲を見誤ったのだ。
まさか、たった一人で増殖器を確保し、都市を崩壊にまで導くとは――
この聖地シャイオンで魔獣を招き出す方法を探ったに違いなかった。
「ね、兄様。やっぱりあの人たちとじゃ駄目だった。ふー。余計な怪我するだけ」
ぼんやりとした声が上がる。レティーシャだ。執務室の隅っこに置かれた椅子に座り、両手で捧げ持つ頭蓋骨と会話しながら、裸足の足を揺らしている。
「分かったような口を叩くな。お前が行ってれば違う状況になってたかもしれないんだ」
苛立ちに任せてレオニスが叱咤するが、レティーシャは一向にこたえた様子もない。

「女神様の像、彫らないと、ね、兄様。ふー。レオニス様、分かってるのに。ね、兄様」
レオニスはむかっとなりながらも、しいて感情を抑えた。
「……それで、お前は、どんな像を彫るんだ。もう充分、地獄の彫刻を彫っただろう」
「あんなの、少ないよね、兄様。聖地は、もっと広いんだよね、兄様。ふー」
「聖地シャイオンを、お前の彫刻で埋められてたまるか」
吐き捨てるように言う。レティーシャは足をぶらぶらさせながら、
「女神様だよね。兄様、そう言ってるのにね。あたしと兄様とレオニス様の綺麗な像」
「題材は任せる。ただし僕が綺麗だと思う像だぞ。だいたいなぜ女神像にこだわるんだ」
「レオニス様、欲しがってるものね、兄様。ほんとは欲しがってるのにね、兄様」
「欲しがる……？」
「ここに連れてきたいくせにね、兄様。来て欲しいんだよね、もう一度ね、兄様」
レオニスの顔が引きつった。いったいどういうつもりでこの女は言っているのか？
「誰を連れてくるだと……。まさか……なぜ、お前が、ノヴィアのことを知って……」
「どっちもだよね、兄様。どっちも欲しいんだよね」
「なに……？　どっちも……？」
「あたしと兄様にもいたものね、兄様。あたしたちを産んでくれた人、いたものね」

「……母親のことか？　僕の母の像を……女神像にするとでも言うのか？」
レオニスはそう口にしながら、にわかに漠然とした不安が込み上げてくるのを感じていた。その不安を振り払うように、ことさら眉をひそめて言った。
「あいにくだが、僕は母の顔をよく覚えていない。幼い頃に死別した上、父が母の肖像を片っ端から棄ててしまったんだ」
「嘘」
ぼそっとレティーシャが言った。
「なに？　……嘘だと？　お前に何が分かるんだ？」
レオニスの眉間に皺が寄る。レティーシャは頭蓋骨を揺らした。かたかたと歯が鳴り、
「兄様、言ってる。兄様、言ってる。兄様、なんて言ってるの？　ふーん。そぉ」
ゆっくりと、その頭蓋骨の顔を、レオニスに向けた。
「そうなんだ。ほんとは覚えてるんだ。思い出したくないんだ。だから忘れてるんだ」
頭蓋骨が、かたかた揺れながら、レオニスを見ていた。
「……なんだと」
そう返す声が、異様に嗄れていることに、レオニス自身がぞくりとなった。
「女神様だよね、兄様。彫るのはね。レオニス様が欲しがってるものをね、兄様。そうし

たら綺麗になるんだ、そうなんだ、兄様。全部一緒に綺麗になるんだ。全部、全部、思い出して綺麗になるんだ。あたしと兄様みたいに、全部綺麗に。ふー。おかしいね、兄様」

レオニスは、唖然となってレティーシャが揺らし続ける頭蓋骨を見つめている。

まるで悪夢の入り口に差し掛かっているようだった。その悪夢の先にあるものを見るべきか見るべきでないのか。その判断を自分が下すのを、レティーシャが、うきうきしながら待っているような気がした。どちらを選択するか、既に知っているかのように。

レティーシャは、頭蓋骨を揺らし続けた。

今見ている夢は、いったい誰の夢なのだろう――

ノヴィアは、自分の名が、夢の中で確実に違うものに変わってゆくのを感じた。

入れ替えられてゆく気持ち――寂しさも喜びも、盲目の身でジークを追って行ったときの気持ちも、その希望と悲しみも、全てが入り乱れ、かつてない形に整えられてゆく。

揺るぎないのは、大事な存在を奪われたという悲しみと、怨み――

母親という存在が無惨に奪われ、与えられ、また奪われていった。

その感覚を、夢の中の娘――ティアは、よく知っていた。全てを綺麗に消し、そしてま

た新たに与えられる。いずれ消すためだけに。それが娘の人生だった。永遠の空白。
ノヴィアは、だんだんと心までもが、その娘に重なってゆき、
（そう――あなたの名は――）
ティア・アンブローシャが、男と出会い、相手を覚えていることの喜びと悲しみに満ちるさまを、夢に見た。追憶はいつも優しいものだとは限らない――
ティアは――ノヴィアは、男の傍らに立ち、戦いへと赴いていった。
ただその力で、男の悲しみを、消したくて。

「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
烈声とともに魔兵の群が、続々と現れていった。総力を挙げてジークを亡き者にする気でいた王弟派の兵は、確実に、その数を失っていった。
街のど真ん中で突如として始まった戦闘に、市民が混乱して逃げてゆく。
ジークは魔兵を率いて、ティアとともに、市長が立てこもる市庁舎へと進撃した。
兵のほとんどが魔兵の異様な力を前に、戦意を喪失している。
苦もなく防壁を打ち破り、市庁舎の中庭をあっという間に占拠した。
「ジーク様……私の香りが、指導者の存在を、とらえました」

「逃がしはしない」
ジークが怒りの顔で言った。街に入るなり、市長は、市民の存在など完全に無視して兵を展開させてきたのだ。しかもこのままでは近隣の砦から新手が現れ、完全に街全体が戦場になってしまう。そのような事態を引き起こしておいて自分だけ逃げ出すとは――
「そいつの動きを止められるか」
「いえ、距離が遠すぎます」
「急ぐぞ」
まさしく電光石火の進撃で、魔兵に市庁舎を取り囲ませる。ろくな防備もない建物である。凄まじい速度で魔兵を侵入させ、立てこもる兵をなぎ倒していった。
ジーク自身も、ティアが察知した者を目指して建物に入る。ティアの指示に従って魔兵とともに上階に上がり、やたらと豪勢な執務室のドアを蹴破った。
「わ、わしは、王弟様の家系につらなる者だぞっ！　この不敬者を殺せっ！　殺せっ！」
逃げ場を失った市長が、わめきにわめくのをよそに、ジークと凄魔たちが衛兵を斬って棄てた。市長が呆然と声を失った。その市長に、ティアが香炉を揺らしながら歩み寄る。
「ジーク様、力を使う許しを、下さい……」
ジークは、市長とティアをじっと見つめた。市長の首を刎ね、それを街に迫る砦の兵た

ちに投げつけるべきか。それとも、ティアの力に任せるべきか——
「やれ、ティア。そいつの心から、野心を消してやれ」
ジークは、そらしかけた目をしいてとどめ、震え上がる市長を見つめたまま命じた。
ティアは、その通りにした。

「争いをやめよ！　王弟派の者たちよ！　この街に入ってはならん！」
市長が残りの兵を率いて、雪崩れ込もうとしていた兵たちを止めていた。
砦の兵たちは、呼応するとばかり思っていた市長の豹変に、度肝を抜かれている。
やがて街から兵が去ってゆく様子を、ジークとティアが、遠くから眺めていた。
「市長は、ただ王弟派に担がれた……。もうあの街で叛乱が起こることはない」
ジークが呟く。それがティアによる操作だった。市長はもはやジークやティアの顔すら覚えていない。自分が抱いた野心のことも。犠牲になった兵のことも——
多数の死者を出した理由そのものが、全て——忘却の彼方に消えていた。
「ジーク様……私たちも、記憶を……」
香炉を揺らそうとするティアを、ジークは身振りで止めた。
「でも……」

「俺たちくらいは、覚えているべきだ」
街に目を向けたまま、沈むような声で、ジークは言った。
そのジークの横顔を、ティアが悲しげに見つめていた。

その後も、立て続けに任務が下った。その全てが、王弟派の鎮圧だった。
ティアはことあるごとに、事件の全貌を知る自分たちの記憶を消したがったが、
「俺と一緒にいる限り、お前は何も忘れる必要はない」
ジークは断固として忘却を拒んだ。戦い以外での出来事でも決してティアの力を受け入れなかった。ティアはそんなジークをただ悲しそうに見ているだけだった。まるで、喜ばれると思っていた贈り物を、すげなく拒まれたかのように。
そうして幾つもの任務を果たすうちに、聖都への帰還が命じられた。
聖都への帰途、ティアはずっと悄然としていた。
「私、ジーク様の悲しみを、何一つとして、消せませんでした……」
「俺の悲しみ……？　いったい何のことを言ってる？」
ジークはこのときになって、ようやく、それが何を意味するのかを訊いていた。
「あなたの心をとらえている、一番の悲しみ……それが消せれば、あなたはきっと、今よ

りも自由な気持ちで、戦いに臨めるだろうと、聖王様は仰ったんです」
「一番の悲しみ……」
ジークは呟きながら、かぶりを振った。
「関係ない。俺は、何も忘れる気などない。たとえ、どんな悲しみでも……」
一番の悲しみという言葉が、何か具体的なことを示しているとは、このときは思いもよらなかった。ただ、ティアの悲しい微笑みと、
「ジーク様……。私、まだ……あなたのことを、こんなにも覚えています」
切々と繰り返すその言葉が、どこかで気にかかっていた。

「――ドラクロワの牢を……移す？」
ジークが愕然と顔を上げた。聖王は水色の目を細め、はっきりとうなずいた。
「お前の働きは高く評価している。だが……あの者の心は、もはや変わることがない。今なお秘儀を求め、聖法庁に対し深い憎しみを抱いておる。こうなればあの者をさらに深く閉ざし、その闇を封じる他ない。あの者は……あまりに多数の秘儀に通じすぎておる」
ジークはかろうじて怒りをあらわさずにいられた。約束が違う――そう叫びたかった。
だが聖王の言うことは正しかった。ドラクロワの異様なまでの執念は、ジークが聖都を

離れるたびに、どうにもならぬほど深められてゆくようだった。
それでも納得がいかなかった。なぜ王弟派の脅威がいまだに存在するこのときに、ドラクロワをそこまで危険視するのか。牢の中で、苦痛にもがくドラクロワを——
「……ときに、黒き騎士よ……アンブローシャの香りの力は、既に知っておるな？」
「は……あまり詳しくは……」
ジークは咄嗟に偽りを告げた。聖王の目がまた細められた。
「そなたは、かの香りを受け入れぬのか？」
聖王の問いに、ジークはやや眉をひそめた。
「任務のために、事件を忘れろと？」
「そうではない……そなたにとっての一番の悲しみを、なぜ消さんのだ？」
「一番の……悲しみ……」
にわかに——ジークは総毛立つほどの衝撃を受けていた。
「まさか……ドラクロワ……」
聖王は無言でジークを見つめている。もはや間違いなかった。
一番の悲しみとは、ドラクロワの存在そのものだ。この自分にドラクロワのことを忘れろと言っているのだ。いまだかつてドラクロワのことを、悲しみであるなどと認識したこ

とはなかった。今なお自分にとって希望であり信頼の対象だった。
だからこそ理解して当然のことを、このときに至るまで理解出来なかったのだ。
それだけではない。ジークが真に衝撃を受けたのは、別のことだった。
聖王の本当の意図——まさか、ドラクロワを殺すつもりか。
聖王は、そこまでドラクロワを危険視しているというのか。
確かに、聖王がドラクロワを殺そうとする素振りを見せれば、ジークは聖法庁全てを敵に回してでも止めようとするだろう。ドラクロワが解放される余地がまだあるからこそ、聖王に従っているのだ。もしその可能性が無いのだとしたら——
「ドラクロワがいなくなれば……戦う理由を失うでしょう……」
わなわなと震え出す体を必死に抑えながら、懇願するようにそう口にした。急に、何もかもが崩れ落ちてゆくような気がしていた。一番の悲しみだと——ドラクロワがいなくなることに勝る悲しみがあるものか。そう叫びたい気持ちを、かろうじて堪えていた。
「黒き騎士よ……そなたは、そなた自身の中に、十分に戦う理由を持っている……。それに、アンブローシャの香りの力を……そなたも既に知っておるはず」
ジークは、目の前が真っ暗になったような気がした。
野心を忘れ、犠牲者も忘れ、争いを止める領主の姿が思い浮かんだ。自分が何を求めて

いたかさえ忘れて、今ある地位と幸福だけで満足し、秩序のために生きる——
そんなものを受け入れることを、自分は今、強要されているのか。
ジークの中でふつふつと湧き起こる怒りを、聖王は静かに受け止めるように、言った。
「ドラクロワには……アンプローシャの香りが、全く通じなかったのだ……」
ジークは、唖然となって聖王を見つめた。確かにドラクロワは既にあの香りのことを知っていた。恐らく聖王の意図も。だが、なぜそれを自分に教えてくれなかったのか——
「ドラクロワさえ憎しみを忘却すれば、全ては解決されていた。だがかの者は、あくまで忘却を拒み、逆にますます我らへの憎悪を募らせてしまった……。そうなれば、かの者を永遠に葬るためにも、まずそなたが、全てを忘却せねばならぬというのに……」
ジークは蒼白となって言葉を失っている。聖王は静かにこう言った。
「ドラクロワは言った……自分の記憶を消せはしない。消したいのであれば、ジーク・ヴアールハイトの記憶を消せと。そうすれば自分がどんな目に遭おうとも、黒き騎士が抵抗することはないだろう……。その方が、黒き騎士にとっても、幸福かもしれぬと」
いったい自分がどこをどう通って来たかも覚えていない。どう受け止めて良いのかも分からぬ衝撃に呆然となりながら、ジークは、ドラクロワのいる牢へ向かっていた。

（その方が——幸福——忘れた方が）
地下牢への階段を降りながら、ドラクロワが言ったという言葉が脳裏にこだましていた。
本気でそう思っているのか。自分に、忘れろと——その方が良いと。恐ろしさで震えそうになりながら、それでも地下へと降りてゆく。何としても確かめねばならなかった。
ドラクロワの意志を。そしてまた、自分の心を。試さねば気が済まなかった。
牢への廊下を行く途中、ふと、澄んだ香りがすることに気づいた。
アンブローシャの香り——ティアがここに来ていた？
思わず辺りを振り返った。獄吏を呼んで確かめたが、若い娘など来てはいないという。
怪しいものだった。ティアが力を使えば、獄吏の記憶などすぐに消せる。
問題は、自分が命じてもいないのに、ティアがそんなことをしたということだった。
ジークはひとまずティアの存在を頭から振り払い、廊下を進んだ。そして、一番奥の鉄格子の前に立ったとき——闇の向こうから響いてきたのは、低い笑い声だった。
「私のことを、まだ覚えているようだな……ジーク」
苦痛に耐えながらも、その声は、どこか朗らかに聞こえた。
「ドラクロワ……本当に、俺が、お前のことを忘れれば良いと……思っているのか」
「そうするが良い……ジーク。誰も止めはしない」

暗い牢の中で、ひどく面白がるような微笑を浮かべて、ドラクロワは言った。
「ただし……お前が、そうしたければな。あるいは香りの力などで、お前と私を、どうにか出来るのであればだ……。聖王も〈銀の乙女〉も、我々を甘く見たものだ……」
ジークは力が抜けたように鉄格子にもたれかかった。ドラクロワは決して、この自分が記憶を消せば良いなどとは思っていないのだ。それが、はっきりと分かった。
「それにしても、ずいぶんと警戒されたものだな……。アンブローシャの力は、〈銀の乙女〉の中でも一部の者しか知らぬ秘儀……それを我ら二人に差し向けるとは。だがいずれ、かの娘も、もとの任務に立ち返ることになるだろう」
そこでジークは新たな驚きに打たれていた。考えてみれば当然だった。
ティアは、その本当の任務――ジークの記憶を消すという役目を、果たせなかったのだ。このままジークの従士でいる意味などない。〈銀の乙女〉に復帰し、また今までのような使命を与えられるのだ。自分の体と心を、削り棄ててゆくような使命を。
自分は、どうしたら良いのか――思わずそうドラクロワに訊こうとしたとき、苦しげな呻き声が響いた。ドラクロワは闇にうずくまり、苦しみを振り払うようにして言った。
「ジークよ……血の香りの力を破る方法は、ただ一つ……疑うことだ。全てを疑うがいい……それ以外に、お前がお前を取り戻す方法はない……。ジーク……疑え……」

そしてその声を最後に、ドラクロワは苦しみの中に沈んでいった。

ジークは牢を出て、呆然としながら歩いた。
どこかで澄んだ香りがしているような気がしたが、ティアの姿はどこにもない。
気づけば、丘を登っていた。シーラが眠る墓地に入り、ふと人影に気づいた。
そこに、ティアの姿があった。初めて出会ったときのように、墓前に花を捧げている。
ジークが近づいても、ティアはじっとうつむき、墓を見つめたままだ。
「ティア……牢に来ていたのか？」
ティアは答えない。ジークも、無言でその傍らに佇んだ。
丘から周囲へ目を向けると、春の景色が広がっている。もうしばらくすれば、シーラが好んだ花が咲くだろうと思った。そのときは、自分も墓前に花を捧げようと。
うつむくティアに目を戻し、ジークは言った。
「俺の記憶は、少しずつ消えていると、〈銀の乙女〉に報告しておけ」
ティアはぎゅっと目をつぶった。何かに耐えるようにその肩が震えている。
「……なぜですか？」
「今はまだ方法が見つからないが……いずれ必ず、お前を正式に俺の従士にする」

「……なぜですか？」
「お前に、俺の記憶を消させないためだ」
「なんで……そんなことを言うんですか」
震えをこらえながら、目を開いた。その淡く澄んだ碧い目が、力無く墓を見ていた。
「俺のことは、全て覚えていていい。誰が何と言おうとだ」
ティアの横顔に、微笑が浮かんだ。何かを諦めたような影が、色濃くさす微笑——
「あなたの従士でなくなる前に……彼女にご挨拶しておこうと思ったんです。あなたにも、会えるかと思って……まさか、本当に会うなんて……」
「ティア——」
「聖王様に、私の香りのことを訊かれたら、二つあると答えて下さい。一つは、あなたが知っている香りです。もう一つは……心が流す……血の香りだと。もし記憶を失えば、その二つとも忘れるんです。その二つの香りのことを言えば、聖王様はあなたには、アンブローシャの香りは効かないと判断するはずです。お願いですから、そうして下さい」
「なぜだ……」
「私が、あなたの従士でなくなるためです」
感情が消えたような声でティアは言った。その横顔から微笑が消えていた。魂さえ凍り

ついたような表情。ジークは長いこと沈黙した。怒りがあった。そして疑問が。
「なぜだ……ティア。〈銀の乙女〉がお前に命じる任務に、戻りたいか」
「姉がいるんです！」
突然、悲鳴のような声が、ティアの口から迸った。
「同じ力を持つ人がいるんです！　何もかも忘れて、世界中の人のことを忘れても絶対に忘れない相手がいるんです！　私、味方がいるんです！　一人ぼっちじゃないんです！」
一気に言い放ち、屹然と振り返った。途端に、冷ややかだったその顔が、涙をこらえるような表情を浮かべていた。そして信じがたいものを見るかのように、
「なぜですか……なぜ笑うんですか」
泣き声を上げるように、そう言った。
ジーク自身、意外な言葉だった。だが気づけば確かに微笑している。
「お前にも、信じられる者がいる……それが分かって、少し、安心した」
自然とそんな言葉が口をついて出た。ティアの双眸が、とうとう涙で濡れた。
「心が流す……血の香りを……お前とお前の姉は、知っているのだろう」
ジークは不思議な確信とともに言った。ティアは顔をくしゃくしゃにしてうなずいた。
「憎らしくないんですか。あなたにはもう、信じられる相手なんて、一人もいないのに」

ジークは、ゆっくりとかぶりを振った。
「私、あなたのことを忘れたくないんです。私のこと、覚えていてもらいたいんです」
ティアは、ぽつんとたった一人で立ちつくすように、泣きながら声を張り上げた。
「聖王様に仰って下さい。私の香りのことを。私は従士ではなくなります。力が足りなかったせいで私、罰を受けるかもしれません。今までよりもっとひどい仕事をするかもしれません。でも、それで良いんです。あなたが私のことを覚えていてくれるなら。たとえ私があなたのことを忘れても。それ以外にないんです。お願いします」
ジークはまた、静かにティアを見つめながら、かぶりを振った。
「それは出来ない。俺の従士でいれば……いつか必ず、ひどい仕事からは解放される」
「お願いです、ジーク様。お願いです」
ティアはジークにすがりつき、体中を震わせて泣いた。叫ぶような声だった。
ジークはただ、その小柄な体に必死に込められた力を、哀しい思いで受け止めていた。
ようやくティアが落ち着く頃には日が暮れかけていた。ジークはティアとともに丘を下りていった。途上、ティアが、ジークの住まいに泊めてもらえないかと小さな声で言った。
修道院に戻れば、〈銀の乙女〉の聖女たちから、ジークの記憶について、審問されるの

だという。今のような状態で、そんな審問を受けたくないのだと。
ジークは、好きなようにすれば良いと答えた。
結局、二人してジークの住まいに来た。ティアに寝室を明け渡し、自分は荷物が積み重なったソファを片付け、そこで眠ることにした。
ジークが食事の用意をし、ティアがそれを手伝う。二人とも言葉少なで、まるで最初に出会った頃のようだった。そのときよりも遥かに理解があるはずだったが、相手を理解しているということを、どう確かめれば良いのか、二人とも分からなかった。
聖王のことも、従士のことも、〈銀の乙女〉のことも、互いの力の秘儀のことも、何も話さなかった。最初にティアがここに来たときのように。ただお互いのことを話した。
多くの都合から、たまたま一緒になった二人が、その本当の理由を、なんとか見つけようとするように。薄い氷の上を歩くような危うさを感じながらも、それが相手のことか、自分のことか、それとも二人のことかさえ分からなかった。やがて夜が訪れ、
「おやすみなさい……ジーク様」
ティアは、ジークのシャツを寝間着代わりに着込んだ姿で、言った。
「今は……まだどうすれば良いか分からない。だが必ず、方法を見つけ出す」
ジークは、そのときになって初めて、そう口にしていた。

「力が、風のようなものでも……人は、ただそれに吹かれるだけではないはずだ……」
そのジークを遮るように、
「とても、楽しい時間を過ごせました。ありがとうございます」
ティアは、微笑してそう言った。諦めの影がさす微笑——余計なことを口にして、薄い氷を踏み抜くような真似は、自分はしないとでもいうような。
その微笑から伝わる悲しみを振り払うように、ジークは静かに言い添えた。
「忘却が奪うのは、過去だけではない。未来も……奪う」
ティアは何も聞こえなかったかのように、ぺこりと頭を下げた。
「良い夢を……ジーク様」
ジークはうなずくことも出来ないまま、寝室に入ってゆくティアを見送った。
それから、自分は居間へ行こうとすると、ふいに背後から声が聞こえた。
「それなら、なぜ人は夢を見るんですか……忘れるための夢を」
それは違う——咄嗟にそう返そうとしたとき、寝室のドアが閉まった。
ジークは、小さくかぶりを振りながら、自分の寝場所へ向かった。
思い出すための夢だって、あるはずだ——そう、胸の中で、強く思いながら。

その夜……ジークは夢を見た。暗い地下牢への階段を降りてゆく。どこかで誰かが自分を見ているような気配がした。じめついた廊下を進み、一番奥の牢の前にやって来る。闇の奥にいる者の姿が、ぼんやりとした輪郭を帯びている。咄嗟に相手の名前を呼ぼうとして、それが誰であるか分からないもどかしさに襲われた。

哀しい思いが、その牢の中にひしめいている。鉄格子を握りしめて中を覗き込むうち、牢に閉ざされているのは実は自分ではないのかという思いが湧いてきた。

いったいどちらが囚人なのだろうか。夢の中の自分と、現実の自分と。

もし夢が狭い牢獄なのだとすれば、現実はその夢よりどれほど広いと言えるのだろう。混乱が襲った。手足の重さ。朦朧とする視界。何もかも渦を巻いて溶け合い、どことも知れぬ深みへ沈んでゆくような闇。そして――瑞々しく澄んだ香りが広がる。

なぜ人は夢を見るのか。記憶があるからだ。追憶する心。思い。

忘却にだけ頼れば未来さえ失うのではないか。いや――その言葉は、間違いなく彼女を傷つけた。謝らねばならない。その力を棄てることなど、

(従士は決めたのだ。小さな聖道女――大きな可能性を秘めた)

自分にも彼女にも出来はしなかった。

夢の中の――夢だ。囚われた場所から、さらに囚われた場所へ――

何重にも記憶が交差し、自分がどこに属していのかさえ分からなくなってくる。
いっそ全てを忘れてしまえば――
「あなたは悲しい人です」
ふいに、はっきりとした声が響く。ぼんやりとした光。頬に何か柔らかいものが触れ、
瑞々しい香りがかつてない近さで感じられた。
「さようなら……」
待て――そう叫んだつもりだが、声は出ていない。咄嗟に動こうとして、動けなかった。
いったいいつの間に仕掛けられたのか。眠る前か、眠った後か――
最初から、このつもりで――
意識が混濁し、幾つもの思念が飛び散り、体が震えた。そして訪れる闇――

地下牢から出てきたときのような光を感じ、ジークは目を覚ました。
陽が高く昇っている。けだるさを感じながら起き上がった。軽い頭痛がした。
寝室を覗くと、誰もいなかった。
シーツと、ティアに貸したシャツが、綺麗に畳まれてベッドの上に置かれていた。
居間に戻ると、テーブルの上に、書き置きがあることに気づいた。

最初に、この住まいに迎えたとき、ティアが座っていた場所に、それはあった——

　あなたにこれを読んでもらいたいくせに、読まれたくない気持ちもあります。

　あなたは何か方法を考えると言うけれど、方法は一つしかありません。記憶以外のものを棄てるしかないんです。あなたは私に、力を棄てろと言っているのです。これだけを頼りに生きてきたものを、全て棄てろと言っているのです。私には、〈銀の乙女〉も、自分を待ってくれている人も、とても裏切れません。

　何より私には力が必要なんです。きっとあなたも分かっているのだと思います。あなたにも力が必要なんです。それが私たちの弱さなのかもしれません。

　少なくともあなたは一つだけ勘違いをしています。あなたは本当は従士が必要だとは思っていません。あなたは誰も必要としていません。

　あなたは優しくて残酷です。気づかないふりをしているというのとは違うと思いますが、それでも私は傷つきます。傷ついたらそれを忘れたいのが私です。でもあなたは忘れさせてくれません。きっとあなたはまだ本当に忘れるということを知らないのだと思います。忘れることで辛いこともありますが、その反面、とても安心もするのです。最後にそのことを教えてあげたいと思います。

私は、あなたの悲しみを奪いました。嘘だと思うのなら、昨日のことを思い出してみて下さい。あなたは牢にいる人に会いに行くたびに悲しい思いをしていたはずです。なのになぜあなたは今、悲しくないのですか？　あなたはもう忘れ始めています。大事なものが消されてもあなたには分からないはずです。

私は先に行っています。聖王様から次の任地を聞いて下さい。私はそこにいます。そこで最後の任務を果たした後、あなたは元通り聖王様の騎士として働き、私は自分を待ってくれる人のもとへ帰ります。そのとき、あなたは私と出会ったことも、ともに短い期間、旅したことも忘れているでしょう。あなた自身の悲しみのことも、全て忘れているでしょう。

それを止めるには二つしか方法がありません。私を斬るか、ご自分の力で香りの力に抵抗して下さい。でも、忘れているということをどうやって知るのでしょうか。誰かに言われなくてもご自分が何かを忘れているということに気づけますか。

私はあなたの悲しみを消すために、従士になりました。あなたは悲しい人です。そんなにも悲しみが欲しいのなら取り返しに来て下さい。

私は、どんなに辛い仕事を与えられても、平気です。私は忘れることが出来ます。

あなたの従士ティア・アンブローシャ

追伸　私は早くあなたのことを消してしまいたいです。

ジークは素早く身支度を整えると、書き置きを握りしめ、牢に向かった。
聖都を覆う城壁の門を幾つかくぐり、監獄に走り込んだ。じめついた階段を降り、獄吏に声をかけて奥の扉を開かせた。早足になって廊下を渡り、暗い牢を見た。
本当に暗かった。壁の脇の松明さえ消えていた。そこには誰もいなかった。
大声で獄吏を呼んで、わけを聞いた。獄吏が言うには、そこにいた囚人は、数日前に、さらに厳重な地下牢へ移送されたのだという。
その囚人が、ドラクロワであることも、間違いなかった。
ジークは、誰もいない牢の前で、呆然と立ちつくした。ふと、澄んだ香りを感じ、
（疑うことだ――ジーク）
ドラクロワの声が甦った。

誰もいない真っ暗な空間に、その声が激しくこだまするのが、はっきりと聞こえていた。

（疑え、ジーク――血の香りを破る、ただ一つの方法――全てを疑え――）

第四章　夢見る者の影

1

斬らねばならないのか――
恐ろしい予感とともに、ジークは夢が途切れようとするのを感じた。
疑え――悲しみを取り戻すために。任務――花の名を追う。従士――聖王の意図。
ドラクロワの行方――忘れろと言うのか。斬るしかない――
断片的な思念がぐるぐると渦を巻き、暗い牢の光景が遠のいていった。
ジークは、はっと目を見開いた。薄暗い部屋――明け方の、ひんやりした空気。
咄嗟に自分がどこにいるのか分からず、不安と恐怖で、ぞくりと背筋に寒気を感じた。
すぐ思い出した。城塞都市ルカの聖堂。剣を握りしめたまま、ベッドに横たわっている。
魔獣の出現――増殖器を破壊しに来た。それが目的だ。ドラクロワを追うために。
だが不安と恐怖は消えていない。とても大事なことを夢で見ていた気がする。

焦りに追い立てられるようにして、身を起こした。
何かをしなければいけない。だが何を――？
決まっている。戦うのだ。力の限り――敵を倒す。それしかないはずなのに、妙に心が落ち着かない。力に頼る弱さ――本当に欲しいものさえ手に入らない。
ふと、ベッド脇の壁を振り返り、愕然となった。
『ノヴィア　ノヴィア　ノヴィア　ノヴィア　ノヴィア　ノヴィア　ノヴィア』
壁一面に、その言葉が刻まれていた。自分が刻んだのだという意識――
(斬らねばならない)
ノヴィア――誰かの名前。さらに強い危機感が迫る。何かに追われている感じがした。
突然、その危機感が、はっきりとしたものに変わっていた。
とてつもない堕気が、この部屋に迫ってくるのだ。
そもそも、その気配が、自分の夢を途切れさせたことを、今やっと理解していた。
ジークの左腕に、眩いばかりの雷花が閃いた。それに呼応して、ドアの閂となっていたシャベルが青白い稲妻を噴き出し――凄魔の姿へと変じる。
同時に、窓を突き破って、刃の脚を持つ巨きな蜘蛛が、部屋に飛び込んできた。
聖堂のありとあらゆる窓や扉から――魔獣の群が、雪崩れ込んできたのだった。

フロレスは、夢を見ていた。
ジークの夢を覗き見る一方で、フロレスしか知らない記憶に思いを馳せていた。
そのときティアは、フロレスの前で、じっとうつむいていた。
「私……まだこんなにも、あの人のこと覚えてる……まだ何一つとして忘れてないの」
ぽつっと告白するように、ティアは言った。フロレスはそのティアの小さな肩を抱いた。
「これが終わったら……今度の騎士のことも、私が全て、忘れさせるわ」
ティアは、無言でフロレスの手に身を委ねている。かと思うと、こくっとうなずいた。
それがかえって、妙な不安をフロレスに感じさせた。
「私にとっても、あなたにとっても、忘れてはいけないことは二つだけよ……ティア」
「姉さんと〈銀の乙女〉」
ひどく従順にティアは応える。
「その二つだけは、死ぬまで私の記憶の中にある……」
死という言葉に、フロレスは、ひやりと冷たいものを感じた。
ティアは以前、その身を投げ出したことがあった。ある国の領主を籠絡させた後、城の寝室から飛び降りたのだ。中庭の鉄柵の上に。尖った柵がその体を貫いて串刺しにしたが、

そのお陰で固い石畳に叩きつけられることは防がれた。衛兵が身を投げるティアを発見し、たまたま都市にいた〈銀の乙女〉の〈癒す者〉がすぐに駆けつけてくれねば危なかった。
その記憶は、ティアの中にはもうない。フロレスが消した。
ただ傷跡だけは消せなかった——ティアの脇腹の傷は、そのときのものだ。
フロレスは、ティアがそんな真似をしたことに悲しみと怒りを抱いた。
なんと弱い娘だろうと思う。ティアはいつまでたっても、人を操ることの快感を覚えようとしないのだ。相手を人形のように操る快感——それさえ覚えれば、身も心も削ったところで苦にならず、優れた〈香しき者〉としての誇りを抱けるのに。次の任務を楽しみに思うようになり、決して死を選ぼうなどという気にならなくなるだろうに。
だがティアは別のことを信じ続けた。〈銀の乙女〉の一部の聖女たちが、姉妹に任務を与える理由——ティアとフロレスが働けば、何千人もが犠牲になる戦乱を避けられる。すぐに記憶を消されて忘れてしまう、あやふやな大義名分。そんなものにすがるティアが哀れだった。フロレスにとって戦乱などどうでもいい。ただ人を操れればいいのだ。
「ティア……必ず帰って来るのよ」
思わず、強い口調になった。ティアは、小さくうなずいた。フロレスが手を離すと、
「私、行くね……姉さん」

ティアは、うつむいていた顔を上げた。はっきりとした意志が、見て取れた。
ジークの記憶を消して戻ってくるという意志のあらわれだ——そのときフロレスはそう受け取った。だが今思えば、あれは死を覚悟した顔だったのではないか。
ジークの手で斬られることを半ば予想して、任地へ赴いた——
そして今フロレスは、ジークの夢を追うことで自分の怨みの正しさを悟った。
ジークは己の記憶を守るため、ティアを斬ったのだ。それ以外にどんな答えがあるのか。
怨むべきは三つだ。ティアを引き止められなかった自分。ティアを追い込んだジーク。自分たちをさんざん利用した〈銀の乙女〉の一部の聖女たち——
だが自分や〈銀の乙女〉を怨めば、これまでの自分たちの働きを否定することになる。
だから、本当に怨むべきは、ジークただ一人なのだ——
その怨みを晴らす機会がやっと訪れたのだ。決して誰にも邪魔をさせるつもりはない。
フロレスは、この復讐劇の、最後の仕上げに取りかかることを決めた。
そのとき——ふいに夢が途切れるのを感じた。
何か強烈なものが香りの防壁を突破し、ジークの眠りを覚まさせようとしていた。
フロレスは、すぐにその原因を悟った。魔獣だ——おびただしいほどの数でジークに迫

っている。ジークの本能が敏感にその危機を察し、目覚めようとしている。
だがもう充分、夢は覗かせてもらった。ジークがティアを斬ったことは間違いないのだ。
その確信とともにジークの夢から遠ざかり――フロレスは、現実の世界で目を開いた。
身を起こし、腕の中で眠るノヴィアを見つめた。
まだ年端もいかぬ少女――ジークがこのような従士をつれていると思うと、あらためて凄まじい怒りを催させた。ティアを斬った罪を少しでも覚えているなら、今さら、こんな少女を従士にするはずがない。ジークは、もうティアのことを何とも思っていないのだ。
何ということだろう。ジークが自分からティアのことを忘れるなど、許せはしない。ティアの存在を消していいのは自分だけだ。こうなればジークに全ての悲劇を思い出させた上で、ありとあらゆる記憶をずたずたにして殺さねば気が済まない。
そうして全てが終わったら――そのときこそ、自分の中から、ティアの記憶もジークの記憶も消してしまおう。そしてレオニスたちから自分の記憶を消す。
「夜にしか咲かない花……。朝が来れば、もう誰も、その花が何色だったかさえ分からない……。それがフロレスの花なのだから……」
フロレスは、左手の香炉を、そっとノヴィアの顔の前で揺らした。
ノヴィアが目を開いた。怯えたような表情で、不安そうにフロレスを見た。



「起きなさい、ノヴィア。ある男が、あなたを迎えに来るわ……」

「私を……?」

「そう。そしてあなたは真実を知るの……あなたと私の夢……その憎しみの果てを」

ノヴィアは、ぼんやりと目の前の女を見つめた。ひどい悲しさが渦を巻いていた。夢の中で、誰か別の人間になって、ひどく傷つけられていた気がした。自分には覚えのない思い――それが今、自分の悲しみや怨みと溶け合い、一つのものになっていた。

「良い、ティア? これから、あなたに、策を授けるわ――」

ふいにフロレスが、言った。ノヴィアは恐怖した。それは、最も不吉な言葉だった。母はその言葉を告げて死んだ。そしてフロレスは十分そのことを知っているような微笑を浮かべ、丁寧にその策をノヴィアに告げていった。

「置いて行かないで……!」

ノヴィアが弾かれたようにフロレスの腕にしがみついた。もう何度も奪われてきたのだ。与えられ、奪われ、そして与えられる――ただ奪われるためだけに。失う苦しみをもうこれ以上、味わいたくなかった。

「大丈夫よ……ティア」

そう言いながら、フロレスはむしろノヴィアの不安を煽るように、身を離した。
そのフロレスの姿が、ふいに幻のように消えるのを、ノヴィアは見た。
艶やかな微笑みが、見たこともないような残忍さを帯びたかと思うと――
目の前で、フロレスの姿が完全にかき消えた。ノヴィアの手が宙を泳いだ。
「置いて行かないで……！　お願いだから行かないでっ！」
ノヴィアの口から悲痛な叫びが迸った。その途端、何かが現れた。
薄暗い部屋にあるものが、急に、目に映るようになっていったのだ。
おびただしい血の跡――互いに斬り合った屍たち。それまで見えていたにもかかわらず、香りのせいで意識になかったそれらが、急に、その存在を主張し始めていた。
ノヴィアは、ベッドの上でうずくまった。血と屍のまっただ中で取り残されたまま、
「置いて行かないで……お願い……私を置いて行かないで……」
ただ一人、すすり泣いていた。

「たった一晩で、これほどの大群を生み出すとは……」
アキレスは、恐怖と賛嘆とを入り交じらせた表情で、呻くように言った。
魔獣の群の中に紛れ込み、死体に囲まれながら、都市の様子を窺っていたのだ。

今、雲霞のごとき魔獣の群が、霧のむこうの聖堂に、群がり寄っているのが見える。塔に集結して決戦に備える魔獣たちは、一体として動いていない。攻めているのは全て、一晩かけて増殖器が生み出した、新手の魔獣たちだ。

アキレスは、これほどの速さで援軍を造り出してしまう増殖器の恐ろしさを知るとともに、その援軍を惜しげもなく投入する大蜘蛛の優れた指揮に感嘆していた。

大蜘蛛も、この奇襲でジークを倒せるとは思っていまい。潜伏しているジークの位置を明らかにすることが目的なのだ。そしてジークの意気を少しでも挫き、消耗させる――

その後の決戦で優位に立つためには十分な布石だった。

「その上で私が、ジークの血をすすりましょう……その力を我がものとするために……」

アキレスは彼方の戦火を見つめ、にたりと笑った。

「うわぁあああ、化け物がいっぱいいるよぉ……本当にあそこに狼男がいるのぉ？」

アリスハートが、トールの首筋にしがみつき、おどおどと声を上げる。

「間違いないでしょう……ジークのことですから、心配は要らないと思いますが……」

トールは魔獣たちに見つからぬよう、注意深く建物の屋根を移動している。

通りを二つ挟んだ向こうの街区では、聖堂の壁や屋根に、魔獣の群がたかっていた。

決戦を控えた早朝に攻めて来るとは――しかも、安全と思われた城の西側に。
完璧な奇襲だった。ジークでなければこの時点で大打撃を受けているところだ。
「ノヴィアは大丈夫かなぁ……」
アリスハートが心配そうに呟く。こちらも、ジークは心配ないと思っているようだ。
「魔獣の目的は、ジークだけのようですね」
トールは北西の街区を見やった。ノヴィアがいると見当を付けた辺りだ。一体も魔獣がいないことから、敵の女が、何らかの防壁を張り巡らせているのだろう。
皮肉なことだが敵の手にある限り、ノヴィアもまた魔獣からは安全なのだ。
トールは、腰に差したノヴィアの宝杖に触れながら、記憶を探った。
敵は女一人――記憶を操る恐るべき力を持っている。
当面の味方であるアキレスは今どこにいるか分からない。敵はノヴィアを連れ去り、何かに利用するつもりらしい――殺すつもりならとっくに殺しているだろう。
自分の目的。ジークを倒すこと。ノヴィアを守ること。そして、あの女を仕留めること。
全てが矛盾しているが、全てをこなさなければならない。
なぜならそれが、レオニスの心を守り、トール自身の意志を果たすことになるからだ。
「街がこんなになって……悲しいことばっかで……なのにまだみんな、戦うんだ」

アリスハートがしょんぼり呟く。まるで魔獣の群にさえ訴えかけるように。

トールは何も言い返せない。ふと、レオニスの悲しさをどうすれば消せるのだろうと思った。聖地シャイオンを万人の故郷となるような土地にするという理想を掲げながら、一方では暗躍を重ねずにはいられないレオニスと自分の悲しさを。

答えは分からない。ただ、今出来ることの一つとして、北西へと移動していった。

ノヴィアを守り、あの女を抹殺するために。

大事なものを奪われたとして、たった一人でそれに気づけるのか――

激戦を繰り広げるジークの脳裏に、いつしかそんな問いが浮かび上がっていた。

誰かのことを思い出さねばならない気がしたが、それが誰であるか思い出せない。

そのことをどこかで安心している自分がいるような気がした。もし思い出せば、

（斬らねばならない――）

忘れてしまった悲しみを、もう一度、呼び起こすことになるかもしれないからだ。

だが悲しみを忘れれば、それは本当の喜びになるのだろうか――また別の悲しみを生み出すだけではないのか。そんな考えが起こるのを感じながら、ジークは包囲された聖堂から脱出し、魔獣の猛攻を受け流すようにして北へと退いていった。

あの大蜘蛛にも、まだこちらを追いつめて倒す気はないのだろう。さらに敵の援軍が来ることはない。だがジークのふいを突き、態勢を崩させるには十分な奇襲だった。
意識がどこか朦朧としたまま、やむなく力を発揮させたせいで疲労があった。
まだ半ば、夢と現実の区別がついていない。そのせいか、自分が抱いた危機感は、
（疑え――）
本当に、この魔獣たちに対してだろうかという疑問を感じていた。
やがて魔獣たちが退き始めた。戦闘が長引く前に、奇襲の効果を残して撤退しようというのだろう。それでも猛り立って襲いかかる一部の魔獣を撃滅しながら、ジークは妙な空虚感に襲われていた。自分はいったい何のために戦っているのか。何か大事なものが足りないような気がするのはなぜか。大事なものを取り戻すためには、
（あなたは悲しい人です）
誰かの大事なものを奪わなければならない――そんな思いに責め立てられながらジークは北へ向かった。どうにかして態勢を立て直す必要があった。戦うための心構えを取り戻さねばならない。自分が持つ力を最大限に発揮し、
（あなたの名前は、好きです）
敵を滅ぼし、戦場を生き延び、ただ己の力だけを頼りにして――

(勝利って、意味ですよね)

たった独り、生き残って——

だがそこでまた耐え難い悲しみに襲われた。いったい何が悲しいのかも分からぬまま、力に頼り、ただ全ての敵を滅ぼすことしか考えられなくなりそうになったとき——

ふいに、歌声が、聞こえていた。

安らぎたまえ、安らぎたまえ、あなたの平安は生まれた時に約束されているのだから。

そういう歌を、ノヴィアは一人、邸宅の前に立って口ずさんでいた。

恐ろしさと不安に耐え、ただ信じて待つために。

誰も頼れる者はいなかった。与えられていたものが、また奪われたのだ。

その寂しさと怨みを抱いたまま、言われた通り、自分を迎えに来る者を待っていた。

その後でまた奪われるとしても——希望を求めて歌うしか、なすすべがなかった。

やがて、霧が立ちこめる街路の向こうから、ふいに足音が響いてきた。

ノヴィアは息をのんだ。歌をやめ、じっと立ちつくした。

足音はどんどん近づき、霧越しに人影が見え——そして、男が現れた。

2

「ジーク様……ですか」
ノヴィアは、言った。ジークは立ち止まり、その少女を見つめた。
「なぜ……俺の名を知っている?」
驚きと警戒をこめて、低く問い返した。
「姉から聞いておりました。ここで、あなたを待っているようにと……」
「俺を待つ……?」
ノヴィアは、こくっと大きくうなずいた。拍子に涙が零れ落ち、
「あなたを……ずっと……待っておりました」
両膝から力が抜け、その場にひざまずきそうになった。
そうならなかったのは、ジークが咄嗟に歩み寄り、ノヴィアを抱きとめたからだ。
その小さな体を支えながら、なぜそんなことをするのか不思議な気分だった。ただ、そうせざるを得ない何かを感じていた。そのジークの胸に、ふいに強い思いが湧いた。
(斬らねばならない――)
この少女を――? なぜ? 大事なものを取り戻すためだ。馬鹿な――

目眩がするような一瞬の自問自答を押し隠し、ジークは訊いた。
「……お前の姉は、どこにいる？」
ノヴィアはかぶりを振った。分からないという意味だ。ジークの腕をつかむ手が震えていた。その心細さが、はっきりと伝わってくる。だが気丈に自分の足に力を込めて立ち、そっとジークから身を離した。その様子には、この少女もまたジークのことをまだ信用しきっておらず、どこかで警戒を抱いていることを感じさせた。ジークに敵意があるか探るように——あるいは、自分を無視して去るかどうか窺うように、
「お食事の用意をしております……どうぞ、中へ」
ノヴィアは、そう告げた。ジークはその大きな邸宅を見渡した。強い聖性が建物全体を覆っている。魔獣にとっては真っ暗な靄がかかっているように見えることだろう。ここに退いたジークを、魔獣が追わなかった理由の一つは、この聖性だったのだ。
ここで戦いの心構えを取り戻すことは、ジークにとってもありがたかった。
少女に従う素振りを見せつつ、ジークは一つだけ、肝心なことを訊いた。
「お前の名は？」
ノヴィアは、眩しげにジークを見上げて、その問いに答えて言った。
「ティアです……黒き騎士様」

ジークはうなずき、さっと左腕をひと振りした。ジークの背後の霧や建物の陰で隠れて様子を窺っていた凄魔たちが、水銀の雫と化して集まり、剣を覆う鞘と化した。
「それは……シャベル……？」
ノヴィアは目を丸くした。だがさほど驚いていない。それだけ肝がすわっているのか、それともジークの力についてある程度知っているのか——
「死者を葬るためのものだ。早く戦いを終わらせて、彼らを葬ってやりたい」
ジークは警戒しつつ、その点だけは正直に告げた。
ノヴィアは、頭上を見た。都市の上空に、死者の堕気が凝り固まって風を渦巻かせているのだ。それから、ジークに目を戻し、共感するように深くうなずいた。
ジークは相手の素振りを注意深く見ながら、ともに邸宅に入った。
中はひどい有様だった。魔獣が荒し尽くし、そこら中に死者が倒れている。
こんな場所で少女は一人で待っていたのかと思うと、憐れみさえ覚えた。
温かい食事を振る舞われ、ジークは久々に生きた心地を味わった。
ただ、どろどろに濁ったスープや、元は何であったか分からぬごつごつした緑色の塊が現れ、あまりの見てくれの悪さに眉をひそめたものだったが。
それでも何も言わず口にすると、極上の味わいがあった。

ふいに、この味を自分は知っているという確信が起こった。思わず少女を振り向き、
「ノヴィア……」
その名を口にしていた。だがノヴィアは意味が分からず、きょとんとしている。
「いえ……私の名は、ティアです……」
そう言いながら、何となく申し訳なさそうに肩をすくめる。
ジークも詫びるように小さくうなずいた。ティアという名も、ノヴィアという名も、どちらも妙にジークの胸を騒がせた。だがなぜそうも心が揺れるのか全く分からない。
そのとき、懐にあるものに気づいた。この少女なら何か知っているだろうかと思った。
「これを見てくれないか」
ジークは、血に染まった書状を懐から出し、ノヴィアに手渡していた。
ノヴィアは、それを丁寧に読んだ。そして何かを思い出そうとするように、
「フェリシテ・エルダーシャ……」
目を細めてその名を口にした。悲しさをこらえているような表情のようでもあった。
「知っている名か?」
「いえ……。このレオニスという方の、姉が、ノヴィアという方なのですか……」
「そうだ。そして俺の従士らしい」

「従士……」
「記憶がはっきりしない……魔獣の放つ瘴気の影響かもしれない。何か知らないか？」
「申し訳ありません。心当たりはありません。ただ……同じ力を私は持っています」
「同じ力……？」
「私も、万里眼を使うことが出来ます」
「お前も……？　俺の従士と同じように？」
ノヴィアは、悲しみと怨みが顔に出ないように我慢しながら、書状をたたんでテーブルの上に置いた。自分はティアだ——その強い思いが心を支配していた。そしてジークが、自分を探しているのではないということに、ひどく傷ついていた。ノヴィアという名前の人物が羨ましかった。男の従士——自分は、誰も迎えに来てくれないのに。
「はい……。きっとあなたの従士と同じように、お役に立てるかと思います」
だがジークは、書状をテーブルの上に置いたまま、思案げにしているばかりだ。
ノヴィアは、ジークがその従士のことを思いやっているのだろうと思って悲しくなった。
その二人を、フロレスが同じテーブルにつきながら、じっと見ていた。
フロレスは、右手の香炉をゆっくりと揺らしながら、慎重にその書状を手に取った。

すぐに書状を開きたかったが、少しでも集中を失えば、すぐにジークに自分の存在を意識されるだろう。見えているのに心が見ていない――そういう状態が崩れてしまうのだ。
これほど近距離で、聖性による香りの虜にしていながら、ジークは本能的な部分で危険を察知している。出来れば今すぐこの手でジークを身動き取れぬようにし、八つ裂きにしてやりたかったが、そうする気配を見せるだけで、ジークは自分を斬るに違いない――
何とも恐るべき精神力の持ち主だった。そしてそれほどの男を籠絡させる喜びが、フロレスの胸を高鳴らせてもいた。それは妹のティアが決して持とうとしなかった心であり――またフロレス自身も決して表立って口にしてこなかった感情だった。
そう。自分はこの瞬間をどこかで喜んでいる。人の心が歪められ、墜ちてゆく様を見て楽しんでいるのだ。逆に、そういう心構えにでもならねば、とてもアンブローシャの力など発揮してられない。残酷さとは――心の虚しさから自分を守るための防壁なのだから。
フロレスは、血に染まった書状を、そっと己の袂に入れた。
今、ジークの口から聞いたことは、とてつもない価値を持つ情報である可能性があった。
なぜレオニスは、ジークの従士を守ろうとするのか――てっきり、レオニスの恋心ゆえとフロレスは思っていたが……。それともレオニスもこのことを知らないのだろうか？
ふいに――フロレスは、周囲に張り巡らせた香りの防壁に、何者かが近づくのを感じた。

既に一度、その心を香りで染めている者だ。影のような気配の無さ——聖性によるこの香りを通してでなければ、とてもその接近を察知出来なかっただろう。
逆にその気配の無さで誰か分かった。あの影法師の坊や——フロレスは、思わず笑みを浮かべた。手に入れたばかりのこの情報を確かめる良い機会だった。
フロレスは、さらに香炉に意識を集中させ、忘却の香りでジークとノヴィアを包んだ。
これで二人とも、書状のことを思い出すことはない。
最初から無かったものとして、書状の存在は二人の中から消え去ったのだ。
香炉を揺らしながら、フロレスは、ゆっくりと席を立った。
会話を続けるジークとノヴィアを振り返ると、思わず喜悦の笑みが浮かんだ。
全てが思い通りになる確信があった。これからこの二人が何も思い出せぬまま互いに殺し合うことになるのかと想うと、うっとりとなる。
完璧なる復讐のときが迫っているのだ。何もかもを綺麗に消してしまえる瞬間が——
誰にも、その邪魔をさせるつもりはなかった。
フロレスは部屋を出て行った。
「あれって……狼男とノヴィアよねぇ。なんで二人が一緒にいるのぉ？」

アリスハートが驚きのあまり叫ばぬよう、両手で口を覆って言う。
「間違いありません……。おそらく二人とも、敵の力にとらえられているのでしょう」
トールも驚愕を抑えながらそう口にした。敵の様子を、邸宅の隣にある建物の屋根の上から探っていたところに、思いもよらぬ光景に出くわしたのだった。
「敵って……どこぉ？」
アリスハートが、トールの胸元から上半身だけ覗かせ、不安そうに辺りを見る。
トールも鋭く目を凝らすが、あの女の姿はどこにもない。
いったん移動し、別の角度から敵の位置を探るか——そう思ったときである。
「ト、トールっ！　か、影っ！　見えないのっ!?　後ろにいるよっ！」
アリスハートの叫びとともに、トールが弾かれたように横へ跳んだ。
にわかに——強烈なほどの甘い香りが鼻をついた。これほどの香りに、今の今まで全く気づかないとは——トールはさらに何歩か跳びながら宙で身を翻し、相手を見た。
女が、右手に香炉を揺らしながら、左手で包丁を振りかざしていた。
あの刃が、自分の背中に潜り込んでも、気づけただろうか——
「あら……羽をもいだエインセルと一緒だなんて……今度は、首をもいで欲しいの？」
フロレスが、艶やかに微笑みかける。

「ううう……やっぱりあの女だぁ……」
トールは、胸元で身を縮こまらせるアリスハートを、そっと左手で庇いつつ、
「あなたの首を、もぎ取りにきました」
ぼそっと言った。一切の感情を殺した声が、むしろ凄烈な怒りをあらわしていた。
「私の名さえ分からないのに――？」
フロレスは、さもおかしそうに微笑み、ひときわ大きく右手の香炉を揺らした。
「私が、あなたの肉親でないとどうして分かるの？　もしかすると恋人かも？」
「どちらでも構いません。あなたのような下劣な知人は、すぐに葬りたいと思います」
トールにしては珍しい、あからさまな罵倒だった。フロレスの微笑が怖いものを帯びる。
「あなたが自分の首を絞める前に、一つだけ訊きたいの……血のつながりについて」
トールの目が、かっと見開かれた。アリスハートがきょとんとなるのをよそに、
「ふふ……私が見たところ、レオニス様の彼女への想いは純粋なもの……。けれども、どうやらレオニス様の影であるあなたは、血筋の秘密を知っているようね……」
「あなたが、それを知って、どうしようというのですか」
フロレスの微笑みが艶やかさを増し、喉がひりつくほどの甘い香りが辺りに満ちる。
「あの優れた若い領主を、私の虜にする鍵になるかもしれないでしょう……？」

トールの顔が一切の表情を失い、仮面のようになった。真正の怒りがむしろ心を冷たく冴えさせてゆく。その右手をさっと翻らせ、堕気と聖性を混ぜ合わせて鋭い鋼を現した。
「あなたは私が殺します」
黒い鉄鞭の刃鳴りとともに、トールは言った。

3

「矢が……見えます」
ノヴィアの幻視の力によって金の輝きが宙に生じ、邸宅の石の壁を鋭く穿った。
矢の意外なほどの強力さに、ジークが息をのむ。ふっと矢が消え、
「これで私にも力があることを……分かって頂けましたか」
ノヴィアは、すがるようにジークを振り向いた。だがジークは考え込むように、
「本当に、一緒に来る気か?」
「姉の言いつけです。あなた一人を行かせることなんて、出来ません。私も戦います」
凜として告げながら、内心では、
(置いて行かないで――)
取り残される不安に怯えていた。その不安にせき立てられるようにして言い募った。

「必ずお役に立ちます。あなたの助けになると約束します。お願いします」
自分にはそれだけの力があるのだから。役に立つ力――それだけが頼りだった。
「……分かった」
ジークは言った。途端に、ノヴィアの胸に温かなものが満ち、思わず涙ぐんだ。それほど不安になっていたのかと自分でも意外なほどだ。ジークはその様子を見つめ、
「ただし、一つだけ約束して欲しい」
（お前の墓を、俺に掘らせるな――）
「決して俺の前に出るな。俺の力で、お前まで巻き添えにするかもしれない」
ただそれだけを言った。自分の背中を守ってもらう気などなかったが、どこかでこの少女を必要としているような気がしていた。自分は、この少女の持つ力が欲しいのだ。そう思った。それ以外に納得のしようがなかった。
ノヴィアはしっかりとうなずいた。自分の力は後方支援に適している。
何の不満もなかった。力と力――それが結びつきになるのなら、自分はそれだけでよかった。それだけの存在でもよかった。必死に見上げる少女に、
（斬らねばならない――）
一方のジークは、かすかな胸騒ぎを覚えている。だが今は生存者同士、力を合わせて、

(違う――疑え――)

この戦場を生き残ることが大切だった。戦って敵の命を奪い、己の命を得る――それ以上に考えねばならないことなどあるだろうか。少女は、そのための重要な戦力になる。

「行くぞ」

ジークが告げ、その後を少女が追う。二人は霧の中へと歩んでいった。

迷いを抱きながら――さらに深い迷いへと入り込んでゆくかのように。

「あなたの敵はどこ――?」

フロレスの甘い囁きが、トールの心に入り込んでくる。一瞬、フロレスの姿が、自分のすぐそばに出現したかのように思えていた。そちらに向かって鞭を振るうが、

「違うよっ！　右っ、もっと遠くにいるよっ！　そう、そっちっ！」

アリスハートの声に素早く意識を集中させ、乱れ交う刃風とともに敵を追う。

「トール、違う違う！　全然違う方へ行こうとしてる！　左、左、左、そう、そっち！」

まるで目隠しをされた状態で戦っているような状況だったが、アリスハートがいるお陰で一方的に操られることだけは防げていた。ただ一撃――それだけ食らわせられれば勝てるはずだ。フロレスは香りで人を操る代わりに、物理的な攻撃も防御も出来ないのだ。

トールは目を細め、いかなる幻惑にも注意をそらされぬよう、アリスハートの声を頼りに、じりじりとフロレスの正しい位置へと間合いをつめていった。
「あなたの敵は誰——？」
「そう、そっちだよっ。真っ直ぐ真っ直ぐ。あの人、もう逃げられないよっ！」
トールはしっかりと意識を保ちながら、建物の屋根の一角へと追い込まれるフロレスを見つめた。じきにその身に鞭が届くだろう。そうなれば一瞬で敵はばらばらになる。
「そう、もうすぐだよ影法師っ。手も足もみんな斬っちゃえ。ずたずたに引き裂いちゃえ。血まみれにしちゃえっ。殺しちゃえっ。殺し、殺せ、殺して、死に、憎い、……っ！」
違う——アリスハートはそんなことは決して言わない。
気づけば濃密な香りが消えていた——いや、意識から消されたのだ。しまった——
「トールっ！」
にわかにアリスハートの声が耳元で響いた。かと思うと予想もせぬ痛みが走った。
顔の横——アリスハートが、よじ登ってきて、トールの耳を思い切り噛んだのだ。
途端に、おぼろげに理解した。自分が追いつめられているということを。自分の足が屋根のふちのすぐそばにあった。そのまま真っ直ぐ転落するところだったのだ。
それだけではない。自分の右腕が、勝手に意志を持ったかのように、滅茶苦茶に鞭を振

るっている。そして鞭が、中途半端に屋根のふちを削り取り――跳ねた。

鞭が、自分に向かって跳んできた。自分ごとアリスハートを両断しかねない角度で。

鞭を消そうとしたが間に合わない。本能的に左手をかざし、体をひねってアリスハートを庇った。左手で鉄鞭をつかみ――堕気と聖性を分離した。その瞬間、鞭のしなりが恐るべき結果をもたらした。いきなり鞭が爆発したように、ばらばらになって飛び散ったのだ。

消しきれなかった鋼のかけらがトールの全身に突き刺さり、食い込んだ。

あまりの衝撃に、その場にひざまずいた。石の上に、細かな血が雨のように降り注ぐ。

刃をつかんだ左手がずたずただった。右半身が痛みで思うように動かない。

アリスハートが大声で泣きわめいている。どうやら無事らしい。

トールは、完全に敵の術中にはまった自分を、思わず呪った。

「あなたの敵は……誰――？」

フロレスが、左手の香炉を軽く振った途端――香りがトールの心に染みこんだ。

トールの右手が、自分の喉首をつかみ、もの凄い力で絞め上げた。

息が詰まり、目の前が真っ赤になった。血の香りがした。体から流れる血であり、心が砕けたときに流れる血――むせかえるほどの血の香りが、トールの心身を支配した。

何という無力さ。何という迂闊さ。己を呪い、殺してしまおうとする意識が強まり、

「トール、トール、トールっ！　死んじゃ駄目えっ！」
自分を呼び続けるアリスハートの声に、最後の意識を振り絞って、意識を集中させた。
「そうっ！　そのまま死んじゃえ、影法師っ！」
「駄目っ！　絶対に死んじゃ駄目っ、トールっ！」
トールはトール、と言ってくれた声――影法師としてではなく。
トールは、血まみれの左手をひるがえし、鋼を現した。
そして知った。甘い香りが自分へと流れ込んでくるのに対し、血の香りが自分の体から、どこかへ流れ込んでゆくのを。敵が、己の心を吸い取っているのを。
黒い短剣を握り――血の香りが流れてゆく先へと、投げ放った。
はっと息をのむ気配がした。にわかにトールの右手の力が弱まり、香りが薄らいだ。
トールは、顔のそばで淡い金の輝きを目にとめ、それを負傷した左手で、出来る限り優しく胸に抱いた。そして屋根のふちの向こう――宙へと、後ろ向きに跳んでいたのだった。
「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
その左手を大地に叩きつけ、稲妻とともに魔兵の大軍を招き出す。
ジークとノヴィアを守るように凄魔が円陣を組み、鉄塊のごとき剛魔の軍勢が驀進する。

入り組んだ通路は魔獣で溢れ、どこもかしこも見渡す限りの戦闘の嵐だった。
その中でもノヴィアは必死に平静を保ち、建物の陰から迫る魔獣を見ては、
「矢が……沢山、沢山、見えます」
敵の奇襲に先んじて矢を現し、狙い撃ちにする。また一方で進軍を助け、
「ジーク様、この先で魔獣たちが建物を崩して道を塞いでいます」
「よし、迂回する。南側に注意しろ。地下道が通っている。そこから来るかもしれん」
「はい」
どうにかしてジークの役に立とうと、最大限に力を発揮するのだった。
そんなノヴィアに、ジークは何かしらの危うさを感じていた。
確かにその力は有用だった。魔獣は所々で道を塞ぎ、こちらを袋小路に追い込もうとする。その敵の巧みな市街戦を、ことごとく逆手に取れるのは少女の力のお陰だった。だが、
(斬らねばならない——)
何か大事なものがそこには欠けているような気がした。互いに力を振るうことへの思いが強ければ強いほど、危機感が迫ってくる。何より——
「私……お役に立てていますか」
ノヴィアは不安そうな顔で訊くのだ。そしてジークがうなずくと、

「良かった……」
かすかな影を帯びた微笑を浮かべるのだ。何かを諦めたかのような微笑——それでも心の底では諦められずに苦しんでいる。そういう微笑を自分はまた目にしている——そういう思いが、何かから逃れられていないという不安を呼んだ。
決してノヴィアを便利な存在としてだけ利用しているわけではない。そのときどきで軍を二つに割いてでもノヴィアの安全を確保している。ただそれもまた、彼女の力を欲しているからだ。そう思うと、胸騒ぎがやまず、
「塔の方から新らしい群が来るのが見えます。右手へ回り込もうとしていて——」
使うな。そんな顔のまま、力を——
「分かった。このまま前進したところで、こちらもさらに魔兵を招いて戦力を増やす」
死者の怨みさえも、ほしいままに己の力に変えているのではないかという危惧。
もしかして、この少女が、自分をこうして戦いに駆り立てさせているのでは——？
ふいにそんな思いが湧いた。たちまち疑心暗鬼の念が膨れあがってくる。
自分が力に溺れるように仕向けているのでは——？
大事なものを奪っておきながら、それをおくびにも出さないのでは……？
あるいは彼女自身、何か大事なものを失い、奈落の底へ自分を引きずり込んで——

「ジーク様、あの壁です！　あそこを越えれば、塔への広場に入れます！」
ノヴィアが叫んだ。自分の力を知って欲しくて。その切実な眼差しを、
(斬らねばならない——相手が切実であればあるほど——そうしなければ全て失われる)
ジークは真っ向から見つめ、僅かな沈黙ののち、うなずいた。そして咄嗟に、
「兵を二分する。お前はここにいろ」
強く、そう言い放っていた。
「え……」
少女が、呆然となる。なぜジークとともに行けないのか、まるで理解が出来ないという顔——まるで突然、役立たずだとジークに罵られたかのような悲しい目。
「私……ご一緒して……」
「駄目だ、ティア。お前はここで待機しろ。この先は今まで以上の激戦になる——」
(俺はどんどん、お前を斬らねばならない気になってくる)
「お前にはこれ以上は無理だ。ここで待て」
ノヴィアの目が見開かれた。待てば——迎えに来てくれるというのか。
そのまま永遠に迎えが来ないことの悲しみを、この男は知っているというのだろうか。
母の冷たい死に顔を撫でたときの感触が甦る。焼け落ちる建物——手から手へと運ばれ

る赤ん坊。結局は見捨てられ、置き去りにされて。名前も無いままに。危機がすぐ背後に迫っても、なお待つしかなかった自分の心細さを、なぜ誰も理解してくれないのか。

過去と現実がノヴィアの中で入り交じり、涙が溢れ、ジークの腕をつかんで叫んだ。

「置いて行かないで下さい！　お願いです！　置いて行かないで下さい！」

その手には凄まじいまでの力が込められている。なぜこうも一緒に行きたがるのか、ジークにはまるで分からない。ふいに、この少女が最初に言ったことを思い出していた。

「姉の言いつけで、俺を待っていたと言ったな？」

少女は泣きじゃくってうなずき、

「はい……私……、ずっと、あなたを、お待ちして……」

「お前の姉は、何と言っていた？」

ジークが鋭く訊く。少女は怯えたような眼差しになって、

「あ、あなたが、私を迎えに来ると……あなたとともに任地へ赴き、従士として働けと」

(私、一人ぼっちじゃないんです)

「あなたにとって大事なものが失われているから……」

(あなたの悲しみを奪いました)

「あなたの悲しみを消すようにと……」

その言葉が、ジークを落雷のように打った。まるでノヴィアが呪われた存在でもあるかのように手を振り払い、身を離した。ノヴィアの泣き顔が、さらに悲しく歪んだ。

「お前は、ここにいろ……」

「置いて行かないで下さい……」

「すぐに……迎えに来る」

「行かないで……」

おろおろと歩み寄るノヴィアを、凄魔が横から腕を伸ばして止まらせる。

「お願い……」

それでも弱々しく手を伸ばすノヴィアから、ジークは目をそらし、

(斬らねばならない——)

「俺一人で行く。お前は、そこにいろ」

短く言い放ち、背を向けた。細い泣き声が上がった。

その声から逃れるようにして、左手に雷花を迸らせ、地面に叩きつけた。

甲冑を着たクラゲのごとき魔兵——甲魔アロガンスが、円陣を組んで現れる。

その四つの爪であらゆる攻撃を跳ね返す、生きた盾であった。

「天秤座の陣！」

素早く陣を二つに分け、敵の防壁へと向かってゆく。己の力だけを頼りに――己を見守る者を、背後に置いて。ジークはただ剣を手に、走った。

塔の前の広場には、海原が揺れるがごとき魔獣の群がひしめいている。

その目が、牙が、爪が、一斉に同じ方を向いた。広場を囲む建物と建物に築かれた、即席の防壁の向こうで、青白い稲妻が幾重にものぼったのだ。

そして壁が粉々に打ち砕かれ、ジークと魔兵が怒濤のごとく広場に進攻する様子を――アキレスが、別の建物からじっと見つめていた。

「なんとも凄まじい……」

賛嘆の念を込めて呟く。ジークが進軍してくるときの圧迫感たるや、正面から戦おうとする者の正気を疑いたくなるほどだった。これほど恐ろしい力をアキレスは他に知らない。

「くく……ついに来ましたね……私がその力を手に入れるときが……」

塔を振り仰ぎ、にやりと笑みを浮かべた。既に大蜘蛛は姿を消し、どこかへ潜伏している。ジークを罠にかけるためだ。罠が成功すれば、たちまち大蜘蛛はジークを食らい、その力を吸収してしまうだろう。そうなれば自分には手出し出来なくなる。

好機は、罠が仕掛けられた直後だった。力の振るいどころを失ったジークを背後から襲

い、その左腕を奪って逃げる。たとえ殺せなくともその腕さえ奪えばいいのだ。
「さあ……決戦ですよ……ジーク。せいぜい力の限り戦いなさい……」
アキレスの囁きとともに──ジークの魔兵と、魔獣の群が、真っ向から激突した。

「来たわね……ジーク。あなたの悲しみを取り戻しに……」
城の東側の回廊に、香炉を揺らしながら、塔を見つめるフロレスの姿があった。
香炉で身を守りながら、魔獣のひしめく城を通り過ぎ、ここまで来ていた。
右腕に、軽く包帯を巻いている。トールの短剣がそこをかすめたのだ。
トールたちがどうなったかは分からない。
トールは宙に身を投げたが、転落したわけではない。忽然と姿を消し、気配を絶って逃げ去った。香りに支配され、傷を負いながらの逃走である。大した青年だった。
血の跡を追って、とどめをさすことは考えなかった。どうせすぐには回復せぬほどの傷だろう。再び自分を追って来たら、そのときこそ、とどめをさせばいい。
何よりそれどころではなかった。今まさに、大詰めの瞬間が迫っているのだ。
見下ろせば、塔の周囲では激しい戦いが繰り広げられている。
塔は、全面石造りの、六階建てだった。その内部は魔獣の巣と化し、巨大な蟻塚のよう

な姿に変貌している。ジークは、増殖器があの塔の中にあると思っているのだろう。

本当にそうかどうか、フロレスにも分からなかった。

増殖器がどこにあるか――それは、あの大蜘蛛にしか分からないのだ。

フロレスにとって増殖器はもうどうでも良かった。ジークとその従士を自分のものにする上で、なくてはならない道具だったが、もはやそれも必要ない。このまま都市が魔獣の巣となり、この地域全体に大打撃を与えようとも知ったことではなかった。

「戦いなさい……ジーク。私の、完璧で、美しい……真実の復讐のために」

「情けない限りです……申し訳ありません、アリスハート」

トールが嗄れた声で言う。喉を絞めつけられていたせいで、がらがら声になっていた。

「そんなことないよぉ。トールは頑張ったよぉ。死んじゃ駄目よぉ、トールぅ。死んじゃやうくらいなら頑張らなくったって良いんだからねぇ」

アリスハートは涙目になってトールを見上げている。

あの建物から飛び降りざま、新たに短剣を現して壁に突き立て、落下の速度を殺したのだ。それから素早く移動し、血の跡を残しながら、途中でいったん道を戻り、血が零れぬよう注意しながら、手近な民家に潜んでいた。

敵が血の跡を追ってくれば、背後から問答無用で襲いかかるために。

だがフロレスは現れず、トールはそのまま家の中を物色し、アリスハートに手伝ってもらいながら手当てをした。左手が最も重傷で、痛みで拳を握ることも出来ない。体に食い込んだ鋼は全て消しており、幸い致命的な傷は避けられている。弾け飛ぶ鋼のかけらの大半が、自分がいない方へ跳んだのだ。そうでなければ、全身をずたずたに引き裂かれて死んでいただろう。

（本当に、ドルク・ヴェラードの息子か——）

ジークの言葉が甦った。父は両腕を斬り落とされ、胸を貫かれながらも、その口で、ジークの首に食らいつきにいったという。これしきの傷で逃げた自分が、情けなかった。

アリスハートに、あの女を倒すと約束までしたのに、これほどぶざまな姿を見せるとは。

いったい何のためにここに来たのか——香りに冒されるまでもなく分からなくなる。

ジークを倒したかった。ノヴィアを守りたかった。いざとなればノヴィアさえ殺す気だった——レオニスを守るために。レオニスと自分の悲しみをこれ以上、増やさないために。

それだけのことが出来る自信があったのだ。だが今あるのは無力さを呪う気持ちばかり。何も答えが見つからない。レオニスの心を守る方法さえ本当は何も分かっていないのだ。

力があればこうはならないのだろうか。ジークのような力があれば。

ジークに対する羨望が膨らみ、耐え難い辛さを感じた。そしてすぐさま凄烈な覚悟を抱いた。こうなれば、せめてこの命を捨ててでも、あの女を殺し——
「でも良かったぁ……トールがあの女の人を殺さなくて」
アリスハートの明るい声が、トールの思念を、粉々に吹き飛ばした。
「……は？」
トールは完全に虚を突かれて呆然となった。いったい今、なんと言われたのか——？
「あたしねぇ、本当はトールがあの女の人を殺さないで欲しいなぁって思ってたの」
「……な、なぜですか。あの女は、あなたを、あんな……ひどい目に遭わせたのですよ」
慌てて言った。自分はあの女を倒すと約束したのだ。なのに——
「そうだけどぉ……。でも……殺すことないわよぉ。もう痛くないし」
けろりとして言うアリスハートを、トールは、まじまじと見つめた。
「あの……もしかすると、アリスハートは……あの女を、怨んではいないのですか？」
「そりゃぁ怨んでるわよぉ、痛かったしぃ」
「では……同じような痛みを、相手に与えてやりたいとは、思わないのですか？」
アリスハートは、不思議そうにトールを見つめ返した。
「ううん。なんで？」

「あなたは……」
トールはなんと言って良いやら分からず、やっとの思いで、こう言った。
「あなたは……本当に凄いです、アリスハート」

4

「牡牛座の陣！」
ジークの言下、一歩として退かず、敵の群のまっただ中へと、突撃陣形となって躍り込んだ。剣を振るい、ひた走りに走りながら、それでいて背後が気にかかっている。
なぜ、あの少女をここまで連れてきてしまったのか。後悔のような念があった。
それほど彼女の力が役に立ったからだ。それ以上の理由など必要なのだろうか――？
ではなぜ、あの少女を置いてきてしまったのか。相手を裏切ったような気持ちがした。
だが何かが危うかった。自分にとって大事なものが奪われるような――
むろんノヴィアが罠を仕掛けているなどという証拠はない。
（斬らねばならない――）
彼女が自分を背後から襲うのなら、そうする機会はいくらでもあったはずだ。
彼女は味方なのだ。だが同時に敵でもあった。これ以上ないほどの危機感をもたらす敵。

戦いながら、ジークは何とも言えぬ虚しさに襲われた。自分はあらゆる人間を、敵か味方という風にしか考えられないのか——
（疑え——）
いったい何のために戦っているのか。目の前の敵を倒すためだ。この都市を救うためだ。そして、自分にとって最も大事な存在を、
（疑え——ジーク——血の香りを破る方法——）
あの男を追うためだ。それなのに、なぜこうも背後が気になるのか。
悲しみを奪われたからだ——そういう痛切な思い。そして斬らねばならない。
そうだ。自分は、あの少女を、安全な場所に置いてきたのではない。
他ならぬ、この自分から、あの少女を守ろうとしたのだ。なぜなら、
（墓を掘らせないでくれ——）
自分は葬ってきたからだ。全ての従士を。この手で——
途端に、あらゆる記憶が薄れ、つかみどころがなくなった。
ただ明確に意識されるのは、悲しみを取り戻すため、斬る決意をしたこと——
（あなたという風に……従います——ティアの花のように）
ああ、そうだ。ジークは、ふいにその花の名を思い出していた。

自分の意志で咲くことのない花——人の言うことを聞くことだけが彼女の意志だった。ノヴィアが罠を仕掛けたのではないかもしれない。だがノヴィアが罠そのものなのだ。かつて聖王が、自分の心から、ドラクロワという存在を消そうとしたように——それと全く同じことが、今、起こっているのだ。これは、過去の再現なのだ。
にわかに——あの少女こそが敵だ、という思いが膨れあがり、
(斬らねばならない——)
そしてただ奮迅と戦い、敵を切り崩し、ついに塔のすぐそばにまで到達していた。
巨大な蟻塚のごとき塔を前にして、ジークはさらに左手を地面に叩きつけた。死者の怨みがごうごうと吹き荒び、新たな魔兵が現れる。力こそが全てであり、力こそがありとあらゆる解決の手だてとなることが証明される瞬間が、ようやく訪れようとしていた。
塔を守る魔獣たちをなぎ倒し、塔へ——増殖器があるはずの場所へと迫った。
四方八方が敵だらけだった。その敵の中核がすぐ目の前にあった。自分の目的が。
なのに、それさえ大事なものに思えなかった。本当に大事なものがどこにもなかった。
ジークは、魔兵の群さえ押し分け、閉ざされた塔の門へと馳せ、剣を振りかぶった。
剣の柄に左手を添えた。左腕の堕気が剣身に発露し、青い炎となって燃え盛る。
堕気がもたらす異常なほどの力に任せて、鉄の扉ごと、内側の門を叩き斬った。

ジークはついに、閉ざされていた塔の門を打ち破った。一瞬の達成感――そしてすかさず魔兵を率いて塔の中に入る。ただひたすら、戦いの決着を求めて。

ノヴィアは、ただ遠く、ジークの戦いを見守っている。
この視覚の力は、手の届かぬところにいる者を、こうして見るためだろうかと思った。
誰かのために、何かを守り、ともに戦うためのものではなかったのか。
ノヴィアは、心が空っぽになったような気持ちでいた。
もう涙も出なかった。悲しみでさえ涸れることがあるのだ。ジークは優しかった。そして残酷だった。そのジークの胸を、自分が放つ金の矢が貫く光景が思い浮かんだ。
姉に言われた通り、そうするべきなのだろうと思った。
ジークとともに戦えればそれで良い。ただ、ジークが一人で戦うことを選び、悲しみをもたらすようなことがあれば――その悲しみごとジークを消してしまうべきだと。
姉は言った。
そうしなければならないほど、ジークの力は強大なのだ。ジークは悲しい怪物なのだ。
その怪物を、誰かが救わねばならないのだ――みなが、そう言っていると。
自分よりも前に、ある一人の娘に、みながよってたかって言い募ったのだ。だからその

娘はジークの悲しみを消そうとした。ジークの悲しみを奪い、そして——

それを今、自分が受け継いだのだ。

そのときノヴィアは、自分がかつて、ジークに矢を放ったことがあるような気がした。

なぜ？　すぐに分かった。ジークに置いて行かれそうになったとき。記憶が入り乱れ、

（俺が討てるか——）

ただ断片的な強い思いだけが、辺りに漂う甘い香りとともに意識を占めてゆく。

置いて行かれる悲しさ——母の死。その仇への憎しみ。ただ待っていた。母への怨みと愛情。決して消えない傷——その傷に殺されないために、強くならねばならない。

一斉に幾つもの思念が渦を巻き、その全てが弾けた。

心が砕けたときの、血の香りがした。

「討てます……」

もはや自分には誰も必要ないのだ。そのことを、証明しよう。

もう二度と、置き去りにされないために。

「私、あなたを討てます……」

そしてノヴィアは考えるのをやめた。ただ己の心から零れ出る血の香りに従って、魂の消えたような顔で、塔へ向かって歩き出した。

すぐさま凄魔が、ノヴィアの歩みを止めようとして分厚い剣を握る手を伸ばす。
「見えません」
ぽつっと、呟きが、ノヴィアの口から零れた。
凄魔の腕が、いきなり水銀の飛沫となって砕け散った。無視の幻視――ノヴィアの視覚の聖性が、凄魔の体を成り立たせる堕気を、無いものとして見たのだ。
別の凄魔が立ちはだかる。ノヴィアは、虚ろな目でそれを見た。
「何も……見えません」
それが何よりの真実だった。もはやジーク以外、何者も眼中になかった。
凄魔の胴体が吹き飛ばされて倒れた。円陣を組む他の魔兵が、一斉にノヴィアを振り返る。だがどの魔兵も、ノヴィアを遮ろうとしない。そもそもノヴィアに対する攻撃意志を持っておらず、ただ彼女を守るためにそこにいるのだ。そのノヴィアが自分から攻撃してまで陣を抜け出ようとすることを、もはや止めようとはしなかった。
ノヴィアは歩んだ。もう待たずに、自分から出て行った。暗闇にさす光を求めて。
ジークを討つために。
塔に入ったジークは、あまりのことに言葉もなく天を見上げた。

中はがらんどうだった。塔の中身がごっそりくりぬかれ、煙突のようになっているのだ。天頂に、ぽっかりと丸く切り取られたような空が見えている。まるで自分が深い地の底にいて、もがいてもがいても出られぬかのような恐怖が、ジークを襲った。

そこには、なくてはならないものが無かった。

広大な円形の広間と化したそこには、剝き出しになった地面以外に、何も無いのだ。

「馬鹿な……増殖器は……いったい、どこに……」

これまでに層倍する虚無感に襲われた。いったい何のために、なりふり構わず戦っていたのか。背後に置いてきた者の泣き声が耳に甦り、無力さに打ちのめされそうになる。

（疑え——）

違う。いつもの自分ならば、きっとこれも予想していた。たとえ結果が空虚であろうと、そこに何かしら次へ進むためのきっかけをつかんできたのだ。

戦意を保て。来るぞ。間違いなく。これは——

（全てを疑え——）

罠だ。

そのとき、がらんどうに見えた塔の内壁が、にわかにざわめいた。

愕然となった。円を描く壁に、びっしりと魔獣がはりつき、それまで微動だにせず潜ん

でいたのだ。天頂からの光で、かえって内側の壁が影になってそれと判断出来なかった。

ジークは忽然と悟った。何も無いのではない。むしろ、これがこの巣の形なのだ。

大蜘蛛が自由に出入り出来るための——円筒形の巣。

完全にとらえられた。ここは——死地だ。

急いで振り返ったとき、魔獣たちが身をもって入り口を閉ざすのが見えた。

一瞬の光——それが消え、入り口が閉ざされた。そして、全てが闇に包まれた。

壁にはりついていた魔獣が、一斉に身を躍らせ、陽光を遮ったのだ。

ジークの口から、言葉にならぬ烈声が迸った。全ての魔兵が咆吼を上げた。豪雨のごとく降り注ぐ魔獣を、戦いの叫びを上げて迎え撃った。ただただ、生き延びるためだけに。

今や、全ての魔獣が、塔にたかっていった。

巣であり、今やジークと魔兵にとって逃れようのない牢獄と化した塔に。

ノヴィアは一人、広場に佇んでいた。異形の屍が辺りを埋め尽くして、生きた魔獣たちは、ノヴィアには目もくれず塔の外壁をよじのぼり、天頂から中へ飛び込んでゆくのだ。

ノヴィアは、塔の中をじっと見た。堕気に包まれ、黒い靄がかかったように見えるその場所に精一杯の聖性をこらし、何とかジークの姿をとらえていた。雪崩をうって押し潰そ

うとしてくる魔獣をかわし、打ち払い、乗り越える。むさぼり食われるという表現が、これほどぴったり当てはまる状態もないほどの無惨さで、魔兵が倒されてゆく。
ジークが敵を切り払い、傷を負いながらも前進し——壁へ到達した。
その左手が、雷花を閃かせて、塔の壁に叩きつけられた。蟻塚のようにこねあげられた内壁は、大地に等しい。壁から一斉に魔兵が出現し、魔獣と戦った。
何という狭い世界だろう。
出口も無く、戦うために戦い、力尽きた者から順に死んでゆく。閉ざされた牢獄のような場所で、ただ食い合っている。塔の中で生き延びようとする者全てが哀れだった。
これが、何の理想もなく戦うということなのだ。
そしてジークは、延々とこれを繰り返してきたのだ。自分一人ではつかみようのない理想を——天を——遥か高みを——唯一の出口を求めて、戦ってきたのだ。
そして結局は、地上に引きずり下ろされ、無惨な戦乱に巻き込まれてゆく——
これが、自分を置き去りにしてまで戦いに赴いた結果なのだ。母も、こうして死んだのだ。全ての者が、何の意味もなく、ただ引き裂かれて、命を失っていったのだ。
いったいここに、どんな救いがあるというのか。
ノヴィアの頬を涙が零れた。涸れきった悲しさの最後の一滴が、地に落ちて消えた。

ジークは出てくるだろう。あの地獄から生きて脱出するだろう。戦いの傷で、身も心もずたずたになりながら、悲しい怪物の本能に従って生存するだろう。
そしてそのとき自分は矢を放つのだ。悲しみを終わらせるために。
置き去りにされた者の怨みを全てこめて——全ての戦いに、深い絶望を抱きながら。
ノヴィアは乾いた眼差しで、その瞬間を待った。ジークの胸を、矢で貫くときを。

もはや足の下に地面など存在しなかった。あるのは屍ばかり。魔獣のものか魔兵のものかも分からない。壁にはりつけられていた市民の死体さえ、足下に積み重なっている。
閉ざされた場所での際限の無い戦いの果てに——ジークは、いつしか血の香りをかいでいた。心が砕け、そこからどうしようもなく血の香りが零れだしてゆくのだ。
その香りがジークの身にやどる瘴気を、さらに猛り狂わせた。際限のない戦いを、むしろ望みたくなるような気持ちが、その心身を支配しようとしたときであった。
ふいに、視線を感じていた。
かすかな聖性が、こんな暗い地の底のような場所にまで、届いてきたのだ。
それが誰のものであるか、ほとんど本能の部分で察知していた。
自分を見ている者がいる——あの少女の聖性。

壁一面に刻まれた名前が思い出された。自分が刻んだに違いない名――

「ノヴィア……」

力の限り剣を振るいながら、その名が口をついて出た。狂乱する心が鎮まり、

(疑え――ジーク――全てを――血の香りを破る――)

そのとき、僅かな光が射し込んでいるのが見えた。

頭上からではない。壁――おそらくは窓であった場所。そこに小さな亀裂が走っている。すぐに魔獣の陰になって光が見えなくなった。ジークは真っ直ぐに、光があった方へ向かった。全てを賭けて。この牢獄から抜け出すために――その左手に、雷花を迸らせた。

「ジーク・ヴァールハイトが招く!」

魔獣をなぎ払い、かすかな光めがけて、手の平を叩きつけた。

「絶望の魂よ!」

声を限りに叫んだ。ただ生き残るために。そのジークの背に、魔兵が殺到した。

同時に、何体かの甲魔が、四つの爪を開いて盾を現し、ジークの周囲に集まっている。

「冥刻星の連なりの下、哭魔ブラスフェミーとなりて我が敵に雪崩れよ!」

赤黒い風船のごとき魔兵が、眼前の壁に、半ば同化するようにして出現した。

「牡羊座の陣!」



何のためらいもなく叫んだ。全ての哭魔が、ジークのすぐそばで一斉に炸裂した。
鮮やかな血の香りがした。心と体が砕ける香りだった。

5

「あなたを……見ています」
ノヴィアの口から、茫漠とした呟きが零れる。
「私が……見ています」
その視覚が、塔の異変をとらえた。塔の三階の辺り――ちょうどノヴィアから見て真正面の位置に、青白い稲妻のかけらが迸ったのだ。
そこだけ壁が薄いことを、ノヴィアは既に見ている。
もともと窓として開いていた場所を、魔獣が巣を作るために塞いだのだ。
その急所を、ジークはどうにかして知ったのだろう。
続けて起こった炸裂の光景を、ノヴィアは、見届けた。
何体かの甲魔がジークの周囲を守ったが、とても衝撃を完全に防げるものではなかった。
まるで閉ざされた魔兵同士でさえ互いに滅ぼし合うかのように、哭魔が、甲魔ごと壁を吹き飛ばしたのだ。ジークの姿が一瞬、堕気に満ちた閃光と炎で見えなくなり――

塔の東側の壁に、真っ黒い穴が開いた。
その穴から、煙とともに、何かが、ばらばらと零れ落ちる。
魔兵や、魔獣や、人の屍が、大量の石ころのように崩れてきたのだ。
そしてそれらの屍とともに、地上へと落ちてゆく人影——
ジークが、力を振り絞って剣を壁に突き立て、落下の速度を殺しながら、塔の壁を滑り下りるようにして地上へ到達した。
転がり倒れるようにして衝撃を殺し、よろめきながらも塔を振り向いた。
一瞬、ジークが塔へ戻ろうとしているのかとノヴィアは思った。
だが違う。開いた穴が広がり、続々と魔兵や魔獣が外へ飛び出してくるのだ。
閉じこめられていた戦乱が、外へ流れ出す様子に、ノヴィアは目を細めた。
「矢が……見えます」
まるで弔いの歌を、口ずさむように——愛しささえこめて、そう呟いていた。
塔の中で、さらに立て続けに炸裂が起こった。
逃げ遅れた魔獣が、魔兵ごと吹き飛んでゆくのをジークは凄惨な表情で見守った。
開いた穴からは続々と魔兵や魔獣が現れては地上に転がり出て、戦いを始めている。

魔獣の数がかなり減っている。塔の周囲にひしめいていた生き残りの魔獣は、いつの間にか綺麗に消えていた。おそらく、どこかへ消えた大蜘蛛のもとへ潜伏しているのだ。
大蜘蛛は今頃、移動させた増殖器を拠点として、新たな巣作りを始めているだろう。
泥沼のような戦いに挫けそうになる気持ちをこらえ、ジークは、鮮烈な血の香りを放つ左手をかざした。この巣を徹底的に破壊するための、最後の軍勢を招く必要があった。
「ジーク・ヴァールハイトが招く……！」
左手に雷花を迸らせ、地面に叩きつけようとしたとき——
凄まじいまでの聖性を感じ、咄嗟に振り返った。
金色の輝きが迅った。真っ直ぐ、己の体に向かって。かわす余裕も、剣で払う余裕もない。雷花を閃かせる左手で、それを受け止めざるをえなかった。
左手を、輝きが貫いた。度重なる戦闘の衝撃で籠手の一部が外れた。
矢はそのまま手の中へと突き抜け、胸へと迫った。
ジークは荒れ狂う堕気に任せて、手を貫く矢を握りしめた。
金の矢が、へし折られた。聖性が堕気によって霧散し、矢が砕け散る。
矢の尖端が、軌道を変え——勢いは失わず、ジークの頬を裂いて、背後の宙へ消えた。
（疑え——）

左手から、新たな血がしたたった。その左手を強く握りしめたまま、
(斬らねばならない――)
ジークは、この戦場に立つ少女を見つめた。
いったい何が起こったのか――少女への疑問が起こり、そしてすぐに消えた。
喉の渇きを覚えるほどの甘い香りが濃く漂い、それもまた意識から消えた。
濃密な血の香りが、ジークを覆い尽くした。剣を握る手に、力がこもった。
なぜ自分が――なぜ彼女が――疑問が起こっては香りがそれを消し去った。
そして最後に残る、ただ一つの、単純な答え。
また同じことが繰り返されただけだ。
大事なものを守るために――相手の大事なものを奪う。ただそれだけのことだった。
(疑え――全てを――ジーク)
ジークは、少女へ歩み寄った。剣を握りしめ、その身に戦いの烈気をみなぎらせて。
自分の大事なものを――それが何であるかさえ忘れてしまったものを、守るために。

「トールはここにいてよ。あたし、ちょっと行って来る」
アリスハートが元気に言って、半分しかない羽を試すように動かす。

「行く……？　どこへですか……？」
「ノヴィアのところよぉ」
決まってる、とでも言いたげなアリスハートに、トールは唖然となった。
「ちょっとくらいなら飛べるみたいねえ。少しずつ飛んで行こうっと」
「ア、アリスハート……なぜですか」
「へ？　なぜって？　何が？」
「あなたには……戦う力が何も無いのですよ？」
アリスハートは、また不思議そうにトールを見つめ、
「うん」
こっくりとうなずいた。それがどうしたといった感じだった。
「そんなあなたが、ノヴィア様のところに行って、何が出来るのですか」
トールは思わずきつい口調になって言った。無力といえば、これほど無力な存在もない。
敵の女に見つかれば今度は羽をむしられる程度では済まないのだ。そんなアリスハートが、ノヴィアを助ける力さえないまま、いったい何をしに行くというのか。
「何って……別に、何も」
ちょっとむっとしたように言う。何とか宙に舞い上がりながら、トールの顔の前に来た。

そして、トールの驚いたような困ったような不安そうな表情を見て、

「だって友達だもの。一緒にいてあげないとね」

にっこり笑ってそう言った。破れた羽を震わせて――それを苦とも思わずに。

トールは、ふいに、血の香りが遠のいてゆくのを感じた。意識から消えたのではない。

また別の――懐かしい匂いを思い出したのだ。

聖地シャイオンの湖畔の匂い。故郷――互いに寄り添うことしか出来なかった若い次期領主とその影法師の二人。必死に力を求めていた頃に感じていた、世界の匂い。

ほんの一瞬で、その匂いは意識から消えている。だが確かに覚えていた。心が――

トールは目を閉じた。

ああ、それが答えなのだ――

（疑え――）

飛来する金の矢を、剣で切り払い、ジークは猛然と間合いを詰めていった。

ノヴィアは冷淡とさえいえる眼差しで矢を現している。その矢が、およそありえぬ角度で飛来し、変幻自在の軌道を見せた。それらを立て続けに打ちかわしながら、

（全てを疑え、唯一の、血の香りを破る、疑え、ジーク）

己の心と体が発散させる濃密な血の香りを感じては、それが消えていた。記憶が失われ、あらゆる思念の根拠が無くなってゆく。もはやあらゆるものの意味が歪み、姿を変えていた。ただ衝動と、香りの導きに任せて行動する自分がいた。

そしてその中でも響き続ける声——

(疑え——ジーク)

ジークは、相手の疲労を正確に見抜いている。そう強力な矢は放てないはずだ。戦いの間ずっと万里眼を使い、幻視の矢を現し、ジークを助けていたのだから。なぜなら——

自分を陥れるために/自分の役に立つために/自分の従士として/彼女自身のために。

(疑え——)

ただ彼女はそこにいただけだ。たまたま出会った二人。理由は分からない。だから——

斬っていい/置いてゆけ/つれてゆけ/名を聞け/名乗れ/ノヴィア/ティア。

(疑え——)

ただ繰り返されるだけだ。同じことが。理由など知らない。それが自分なのだ——

葬った/斬った/殺された/約束/墓を/聖王の意図/自分の意志/つれて/置いて。

(疑え——)

なぜ自分はここに来たのか。なぜ彼女をここにつれて来たのか。ただ力を求めて——

必要だ／お前が／力が／見ていた／視線／聖性／斬る／救い／忘れ／もう／夢。
（疑え――）
もうやめてくれ。心がずたずたにされているのだ。何も分からない。もう何も――
ただ、過去と同じことを繰り返すしかないのだ。
ジークは、容赦なく相手の焦りを誘い、その疲労を招き、その怨みを煽った。
いつしかノヴィアの凍えきっていたような眼差しが、悲しみの光をやどし始めていた。
なぜ彼女は悲しんでいるのか。なぜ自分は悲しんでいるのか。もう何も分からない――
（疑え――全てを）
なぜだ／誰だ／いつ／俺は／ここ／かつて／少女／違う／娘／夢／そう／過去――
（信じるもの全て疑え――心を白紙に戻せ）
恐ろしい／無力／死／ただ生き残る／命／戦わねば／剣／棄てられない／過去――
斬らねばならない。そう決意した。それは確かだ。
（疑え――信じるべきもののために）
悲しみを／大事なものを／取り戻すため／何を／誰を／どこで／そう／いつ／過去――
ジークは、一挙に間合いを詰めた。
最後に現れた矢――それを、放たれる前に猛然となぎ払った。

その剣風で、ノヴィアの髪が、真横に翻った。ノヴィアの、すぐ目の前で、剣を振るったのだ。必要以上の力をこめて。圧倒的な力を見せつけ、相手の戦意を挫くために。
そしてその思い通り、ノヴィアは、がっくりと膝をついた。
ノヴィアが、呆然とジークを見上げた。
その視覚が、疲労で力を失おうとしていた。
ただ力が発揮出来なくなるだけではない。暗闇に落ちようとしていたのだ。
「……見えない」
ノヴィアが弱々しい声を上げた。
「……暗い」
諦めの表情――そしてノヴィアは、枯れ果てた悲しみとともに、目を閉じた。
ジークは、そのノヴィアの顔を静かに見つめたまま、剣を振りかぶった。
自分は、確かに斬ることを決意したのだ。そして――
「ティア……」
ああ、また自分はこれを繰り返すのだ／葬るのだ／約束／墓を／いつ／自分が／斬る。
剣を振りかぶったジークの手が、ふいに強く震え始めた。
これは過去の繰り返しだ――その思いがあった。かつてあったことの再現――

ならば、自分は／決意／失望／追って／悲しみ／取り戻す／嘘／偽り／その手で葬った。

(疑え)

忘却の力に抗うただ一つの方法――全てを疑え。

抗うな。ただ疑え。疑問を抱き続けろ。己に問い続け、全ての意味が歪められても――絶対に変わらないものを見つけ出せ。それが無い人間などこの世に存在しない。もしそれが無いのならばお前は香りに操られる前から狂っていることになる。

その声だ。いつでも響いてくる。俺に追って来いといった声。今でもお前を追って――

あらゆることを平然と疑え。お前の中にあるものは絶対にその程度で崩れはしない。

香りの本当の力とは、何もかも崩れてゆくのではないかという恐怖を起こさせる力であって、決してそれ以上のものではないのだ、ジーク。

ただ従え――絶対に変わらないものに。

ジークの手の震えが、ぴたりと止まった。一瞬だった。

渾身の力を込めて剣を振るった。そう／圧倒的な力／本気で／戦意を挫くため／斬るかのように／その心を／命を絶たず／彼女を解放するために――ただ眼前の空間を斬った。

魂まで切り裂くかのような剣風がノヴィアを正面から襲った。先ほどの剣圧など比べものにならぬほどの凄まじさだった。そしてそれが通り過ぎ――消えた。

「生きろ……」
ジークは、言った。
「力が、風のようなものでも……人は、ただそれに吹かれるだけではないはずだ……」
その口が、勝手に過去の記憶の通りに言葉を発していた。
「お前の姉も〈銀の乙女〉も……全て棄てろ」
ノヴィアの目が、ゆっくりと開かれた。かすかな光が残る目——そして深い悲しみと、その果てにある希望をこめて、ジークを見上げた。
「力を棄てろ、ティア！　お前が頼りにしていたものを全て投げ棄てろ！　それはお前にとって、本当に必要な力などではない！」
ジークの口から叫びが迸った。絶対に変わらないものに従って。
心を操られたノヴィアでさえ、はっとなるほどの激しさだった。
「俺が戦うのは、いつかこの剣を棄てるためだ！　そのために俺は戦っている！」
「それが、ドラクロワとの約束だ。お前が言う、俺の悲しみの正体だ。お前にも聖王にも、決して奪えないものだ……ティア」
己の心が流す鮮やかなまでの血の香りを感じながら、ジークはノヴィアを見つめ、
「そして……あのとき、お前が自分一人の意志で決めたことだ……ノヴィア」

そう、優しく声をかけていた。

6

ノヴィアは、驚いたような、怯えたような顔で、ジークを見上げている。
「俺は、ティアを斬ることを決め——彼女に全てを棄てさせた」
ジークの目が、ノヴィアのすぐ背後で香炉を揺らす女へと、鋭く向けられた。
「ティアの姉だな」
言いざま、その剣がなぎ払われた。フロレスが愕然と跳びすさる。
だが一瞬、遅かった。フロレスの右手の指が切断され、ばらばらと宙を舞った。
ノヴィアの背後で、フロレスの中指が地に落ち、鎖と香炉が澄んだ音を立てた。
フロレスの凄まじいまでの絶叫が、高々と響き渡った。
「な、なぜ……！　香りに操られていながら……そんな……！」
金切り声を上げながら後ずさる。ひざまずいて呆然とするノヴィアを盾にしていた。
「俺に、過去の夢を見させたな。誰かの思惑を、夢で感じた。あれはお前だな」
断言した。フロレスの力がどこまで及んでいるか、完全に見切った口調だった。
「ならば最後まで見ろ。俺とお前の夢を見て忘れていることを思い出せ」

フロレスの足がぴたりと止まった。わなわなと震えている。痛みや怒りだけではない。明らかな恐怖が、そのおもてに、はっきりとあらわれていた。

「そんなこと……。私たち姉妹は……決してお互いを忘れない……何があっても……」

ジークは無言のまま、すっと横に動いた。フロレスが、びくっとなって同じように横に動き、あくまでノヴィアを盾にしようとする。その左手の香炉をかざし、

「下がりなさい……ジーク。導きの香り……私は、いつでもこの子を動かせるのよ」

ジークは何も言わない。その目が、かざされたフロレスの左手を見ている。まるでその香炉を少しでも揺らせば、そちらの指も全て失うだろうと告げているようだった。

塔のふもとから、魔獣を駆逐した魔兵が集まり、一帯を包囲しようとしていた。

もはや逃げ場を失いながら――ふと、フロレスが笑った。

「便利な魔獣だわ……こんなにも、役に立つなんて」

ジークが目を見開いた。その直後、凄まじい地鳴りの音が響いてきた。

みしりと何かが崩れる音が聞こえた。ジークの斜め後ろ――塔の方からだ。

「あの大蜘蛛の……最後の罠か」

そう呟いたまま、ジークは動かない。フロレスとノヴィアをじっと見つめている。

フロレスが、意味深に笑って言った。

「ここにいる私たち全員を助けられるのは、あなただけ……。この子に危害を加えないことは、約束するわ。今夜あなたの夢を見てから、明日もう一度、会いましょう。今は、私といい、いい、とこの子を助けなさい……ジーク」

「ノヴィアをこれ以上、お前に預けるのは、この一瞬だけだ。逃げられると思うな」

地鳴りの音が高まり、にわかにジークの左腕に雷花が迸った。

「ジーク・ヴァールハイトが招く！」

その烈声と同時に、突然、夜が訪れたかのような影がさした。

ジークの左手が地面に叩きつけられたとき——塔が建つ地盤が、いきなり沈んだ。

そしてなんと塔そのものが、ジークたちのいる場所へ向かって倒れ込んできたのだった。

地面の底からは突如として大蜘蛛が現れ、その鉄柱のような脚で塔を押し倒している。

フロレスが動き、ノヴィアを抱きかかえた。

周囲で、甲魔の群が出現し、一斉にその爪を開いて盾となった。

そして——

吸血医師アキレスが建物から飛び出し、その爪の無い手を、翻らせたのだった。

「獲った——！」

アキレスの叫びとともに、ジークの周囲の地面から、突然、幾つもの氷柱が生えた。
ジークが大きく目を見開いた。咄嗟に地面から手を離し、槍のごとき氷柱をかわしている。かと思うと、氷の棘が凄まじい速度で生え、ジークの左腕に絡みついた。
氷の牙が生えて、ジークの左腕を食いちぎりにかかったとき——
目に見えないほど細い鞭が、アキレスの右手首に絡みつき、引き寄せていた。
堕気と聖性が混じり合って出来た鋼——それがアキレスの注意をそらした。
アキレスの目が、ぎらりと鞭の持ち主を見すえた。
建物の屋根の上に、トールがいた。
崩壊が訪れたのは、その直後であった。

塔が倒壊し、大音響とともに巨大な石の塊がそこら中に乱れ飛んだ。
トールは素早く鞭を消し、建物の屋根に身を伏せ、魔獣が仕掛けた巨大な鉄槌の余波を避けている。アキレスは周囲に分厚い氷柱を現し、降り注ぐ岩から身を防いだ。
やがて——降り注ぐ土砂の下から、輝く盾を広げる甲魔の群が、姿を現した。
その半数の甲魔が、衝撃で叩き潰されていた。
ジークの力が途中で削がれたため、塔の質量を支えきれなかったのだ。

「魔獣使いがいるのか……」
ぼそりと呟いた。左腕を覆っていた鋭い氷が、跡形もなく溶け消えている。
魔兵を招くための稲妻が、氷とぶつかって相殺されたのだ。というよりも――魔兵を招くための力を、氷が吸い取って消えた、と言った方が当たっているかも知れない。
いずれにせよ、思わぬ伏兵がいたものだった。そのお陰で包囲が不完全となり、
「逃げたか……」
鋭く辺りを見るが、フロレスとノヴィアの姿はどこにもない。ふと甘い香りがした。
足下に、フロレスの右手の中指があった。その指につながる香炉から香りが漂っている。
一瞬の隙を突いて、ジークの意識から己の姿を消したのだ。この期に及んで、ジークに我が身を守らせ、さらにノヴィアをつれて逃げるとは――実に、したたかな女だった。
ジークは、香炉を真っ二つに斬った。
それから、最後の烈気を振り絞って、塔の地下から現れた大蜘蛛を見た。
大蜘蛛も、半ば地中に身を置いたまま、赫々と燃えるような赤い複眼を向けている。
ジークも大蜘蛛も、互いの疲労や痛手は見せず、敵意を剥き出しにして対峙した。
朝から延々と戦い続けてきたジークにとっては、気の遠くなるような睨み合いである。
だがここで弱みを見せれば、すぐさま大蜘蛛は襲いかかってくるだろう。

やがて、ジークの烈気は衰えぬと見たか、大蜘蛛が、ゆっくりと地中に姿を消した。
あれほどの魔獣の大群を操っていたのだ。大蜘蛛も疲労しているはずだった。
大蜘蛛の気配が消えるや——脚から力が抜け、ジークは思わず剣を杖にした。
地面に零れ落ちる血が、よく見えない。異常に目が霞んだ。思わず空を見上げた。
いつの間にか、夕刻が迫っていた。陽が没すれば——眠りのときが来る。
さっと左腕をひと振りして、凄魔たちをシャベルの姿に戻した。
脚を引きずるようにして移動する。眠っている間、安全な場所に隠れねばならない。
そのとき——行く手に、ふらふらと危なっかしく宙を舞う、金の輝きが現れていた。

「どこですか、トール・ヴュラード。出ていらっしゃい」
建物の裏手に回ったアキレスが、優しいとさえ言える声で呼んだ。トールの姿も気配も完全にないのだ。だからといって、トールがいないということにはならない。
そしてその考え通り、トールが、ひょいと建物の陰から現れた。頭に来ることに、アキレスが通り過ぎた場所からである。いつの間に背後に回ったのか見当もつかない。
「なぜ……邪魔をしたのか、理由を聞かせて下さい。私と敵対する気ですか？」
返答次第では、八つ裂きにせんばかりの殺気を漂わせて、アキレスは訊いた。

「敵対する気なら、鞭を刃にして、あなたの両腕を切り落としていました」
トールは、いたって無表情に応えている。
「殺気が無いので気づかなかっただけですよ……敵意があれば、あの程度の鞭……」
アキレスは歯を軋らせ、凄まじい笑みで言う。トールはしれっとしている。
「ノヴィア様を巻き添えにするような戦いは、固く禁じられておりますので止めました」
「ふ……ジークの従士は、あなたが確保したと信じてましたのでね。その傷は？」
「フロレスです。相手は姿を消します。ノヴィア様は、フロレスにつれ去られました」
「フロレス……？　姿を消す……？　それは……」
アキレスが言いかけて、言葉をのみこんだ。すぐに合点した顔になる。
「例のアンブローシャの女ですね。その女の力、どのようにして破ったのですか」
「破った……？　ああ……いつの間にか、思い出していますね」
トールは何の気もなく言った。そして逆に聞き返した。
「あなたは破れていないのですか？」
アキレスが怖い顔で笑んだ。
「方法が分かれば、破れるでしょうよ。何かきっかけはあったのですか」
「さあ……故郷を思い出しました。忘れようのない感情だったのでしょう」

それ以外に答えようがなかった。ほう、とアキレスは思案げにうなずきつつ、訊いた。
「どうやら女がジークの従士をさらったようですが、どうする気です?」
「ジークに相談しようと思います」
アキレスが、ぎょろっと目を剝いた。
「正気ですか?」
「はい?」
返答ではない。聞き返したのである。まるでこだまのように埒が明かなかった。
「あなたは、レオニス様がそんな真似を許すと思っているのですか」
「怒るでしょう」
当然ではないかと言わんばかりである。アキレスが冷たい目になった。
「裏切るのですか……あなた」
「いいえ。ジークには、正面から挑むと、あらかじめ告げてあります」
途端にアキレスが小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。
「あなたのその愚かさを、私からレオニス様にお知らせした方が良さそうですね。その上で、私とあなたと、どちらが側近として相応しいかレオニス様にお尋ねしたいものです」
トールは無表情なまま答えない。アキレスは妙に勝ち誇ったような顔で、

「なるべく早く、お死になさい……トール・ヴュラード。レオニス様のためにもね」
見限ったようにトールに背を向け、街の方へ歩き去っていった。
「うっわぁー……めっちゃくちゃぁ。何も塔まで倒さなくっても良いんじゃない？」
アリスハートは、ふらふらと破れた羽で舞いながら言ったものだ。
「俺が倒したわけではない」
ジークは憮然として返し、そのまま再び、脚を引きずるように歩き始めている。
「ちょ、ちょっとぉ、大丈夫ぅ、狼男ぉ？　あんたも、めっちゃくちゃにやられて今にも死にそうなくらいへたってんだから、我慢しないで肩を貸してもらいなさいよぉ」
さんざんに言うアリスハートを、ジークが眉をひそめて振り返った。
「誰の肩だと？」
「あたしじゃないわよ。決まってんじゃん」
「チビは、黙って羽を元に戻せ」
興味が失せたように言う。アリスハートがきっとなって、その赤い髪を引っぱった。
「チビって言うなってっ。トールじゃ羽を全部治せないんだから、しょうがないのっ」
「トール……？」

「私の肩でよければ、お貸しします」
まるで、そこらの石の影が、ふいに立ち上がったかのようなトールの出現だった。
だがジークは、トールを一瞥しただけで、
「チビが、世話になったようだな」
そう、無造作に返している。朦朧とする視界を悟られぬよう、しいて前へ進んだ。
「お前も、俺の肩を貸して欲しいなら言え」
トールは、包帯だらけの自分の有様をかえりみて、小さく肩をすくめた。
「お願いします」
すっと影のように近寄り、ジークの右肩の下に、己の左腕を差し入れた。
「何を考えている——?」
「あなたをどうすれば倒せるのかを」
正直に返した。そのトールの肩に、アリスハートが、ふわっと舞い降りた。
「俺は、お前の父親を斬った」
ジークは呟くように言った。トールは、こくっとうなずいた。
「父は、戦士でした」
それで全て終わりだとでも言うようだった。

「私も、戦士になりたい」
ジークは応えなかった。ただ黙って、トールの肩を借りて歩いた。

東側の街区の一角で、破壊を免れた建物を見つけ、そこに入り込んだ。
「フロレスとは、明日……決着をつける。ノヴィアも、必ず救い出す」
そう言ってジークはベッドに腰を下ろした。鎧も外套も着たままである。
膝元にシャベルを置いていた。トールに不審な動きがあればすぐさま凄魔を招くのだ。
戦士として当然の警戒――いかに疲労していようともジークはジークだった。それがトールにも分かった。さすがだと感心しつつ、トールはジークのために水を汲んできた。
ジークは特に感謝もせず、左手の血を洗った。ノヴィアの矢に貫かれた傷があらわになる。堕気が、矢の聖性を相殺したためか、傷はそれほど大きくない。
アリスハートが、真っ赤になる水に、うぇぇと唸った。
ジークが左手を布でぐるぐる巻きにしながら鋭く問う。
「増殖器の在りかについて、何か知っているか」
トールは正直に、かぶりを振った。増殖器とレオニスの関係も、一切口にする気はない。
代わりに腰に差したものを抜き、ジークの傍らに置いた。宝玉つきの短い杖――

「ノヴィアの宝杖か……」
トールがうなずく。ノヴィアを守ろうとした証拠ともいえる品だ。
まるで、その宝杖を渡すから、色々と追及せずにいてくれというような態度だった。
ジークは、じろりとトールを睨み、別のことを口にした。
「やつとも、明日、決着をつける。今は、やつもさすがに休養しているだろう」
あの大蜘蛛のことだとトールには分かった。まるで人間の好敵手のような扱いだ。
「私は、食料を見つけて、何か、食事を用意しましょう」
「トールったら、左手がそんなじゃ大変だってば。あたしも手伝うよぉ」
トールとアリスハートが揃って出て行こうとすると、ふいにジークが声をかけた。
「例の書状を……あの女に奪われた」
トールは静かに振り返った。
「はい……。フロレスは、それを利用して、レオニス様を操ると言いました。あなたの決着がどういうものであれ、機会があれば、私が、彼女を斬ります」
ジークは黙ってトールを見つめ、小さくうなずいた。
「フロレスは……既に逃げ出しているとは、考えられませんか？」
「まだ、最後の夢が残っている……俺とあの女にとって、見なければならない夢が」

「あなたは……本当に、従士を斬ったのですか？」
「一人目は確かだ。だが二人目の従士については、これからはっきり思い出すだろう。まだ、あの香りを完全に破ったわけではない。眠りが襲ってきているのがその証拠だ」
トールはうなずき、アリスハートとともに食事の用意をしに行った。
ほどなくして戻ったとき、ジークは、既に眠りについていた。
過去への旅――悲しみを取り戻すための、かつての戦いの記憶を、辿るために。

城の一室に、フロレスはノヴィアとともにいた。
寝室であった。魔獣に荒らされ、そこら中に破壊と血の跡がある。
ベッドの天蓋は引き裂かれ、安らいで眠るにはほど遠い場所であった。
ノヴィアは、魂が抜けたように呆然としたままベッドに座っている。ここまでフロレスに手を引かれてつれてこられたのだ。自分がいったい誰なのか、もう何も分からなかった。
あの男は自分をノヴィアと呼んだ。今目の前にいる女は今も自分をティアと呼ぶ。
そもそも、自分には名前など無いのだ――ノヴィアの心に虚無感が広がる一方、
「もう痛くない……やっと痛みを忘れたわ……」
フロレスが、言った。指を失った右手に、血で染まった布が巻かれている。

左手の香炉から放たれる香りで、自分自身の痛みを消したのだ。
本来なら右手で放つはずの、忘却と迷いの香りを、何とか左手の香炉から発していた。
「あなたを逃がしはしないわ……ティア。決して……逃がしはしない」
右腕をノヴィアの肩に回し、自分と一緒に香りに染まらせるよう、香炉を揺らす。
「あなたは大事な人質……ジークに対してもレオニス様に対しても……。さあ……ともに夢を見ましょう。あの男の偽りを暴く、真実の夢を……」
いっとき、フロレスのおもてに、恐怖の色が浮かんだ。得体の知れない不安――まるで、これから見るものを自分は既に知っているのではないかというような。
フロレスは、怒りとともにその考えを振り払った。
そんな馬鹿なことはない。ティアのことで忘れていることなどあるはずがないのだ。
たった二人の姉妹――それだけを頼りに生きてきたのだから。
そして何より、ティアはあのとき選択したのだ。〈香しき者〉としての道を。
「あの男を殺す……それが、あなたの結論だったのよ……ティア……」
フロレスはノヴィアとともにベッドに横たわった。甘い香りが二人を包み、眠りを誘う。
やがて、最後の夢が始まった。

第五章　霧の夜明け

1

ジークは夢を見た。悲しみに彩られた言葉の全てが甦り、再現される夢を――

「行くか……黒き騎士よ」

聖王は言った。ジークは応える代わりに、顔を伏せたまま僅かに頭を下げた。

この夢の光景を、どこかで他の者も見ているのだという意識が起こり――すぐに消えた。

夢が現実となり――ジークの耳に、聖王の声が届いてくる。

「行けと命じはせぬ。そなたが行かぬと決めれば、行かずともよい」

それが聖王の判断だった。ジークは目を細め、その判断の理由を聖王が語るのを待った。

「こたびばかりは、そなたにとっての死地になるかもしれん……。〈銀の乙女〉の一部の聖女たちが、そなたと……ドラクロワを抹殺したがっておる」

ジークは顔を上げた。〈銀の乙女〉と聖王が敵対したのか――そう無言で問うた。

「〈銀の乙女〉全体ではない。代々の〈香しき者〉たちだ。彼女らには、香りの力が効かぬ相手は殺す……という掟があるのだという。香りの力の秘密を守るために」

〈銀の乙女〉にも力に執着する者がいるとは——意外さと同時に、怒りを感じた。

そんなことのために、ティアは、この自分の記憶のみならず、命まで狙うというのか。

「そもそも、かの聖女たちの進言に従い、あの従士をそなたにつけることを決めたのだ。このままでは、そなたとともに任地に赴く者が、そなたを狙う刺客となりかねん」

その聖女たちとしては自分たちの存在を、聖王に対し印象づけたかったのだろう。

あるいは、聖王の最強の騎士を、自分たちが手に入れたかったのかもしれない——

シーラがいた組織が、そんな策謀を仕掛けてくること自体、恐ろしく不愉快だった。

「〈銀の乙女〉に対しては、聖王の名の下に、その真意を質す。そなたは……」

「行きます」

悲しみを奪った——そうティアは書き残していた。このままではドラクロワとの記憶を消されるかもしれないのだ。何としてもそれを防がねばならない。聖王がジークを引き止めるのも、あるいはドラクロワの記憶が消えればいいと思っているのだろうか——

「出立の前に……ドラクロワに会わせて頂けますか」

「それはならん。危険だ」

「危険――？」
「ドラクロワの牢を、そなたの従士が訪れたと、諜報院から報告があった。ドラクロワの記憶を消せぬと見て、何か仕掛けたかもしれん。そなたに危機をもたらすような……」
「ティアが……ドラクロワに、会った……」
不吉な予感がジークの背を走った。最後にジークがドラクロワに面会したときに感じた、澄んだ香り――やはりティアはあそこにいたのだ。そして何かをした？
ならばその後で聞いたドラクロワの言葉は、本心ではない――？
「一つ……そなたにだけ告げておく。ドラクロワを死罪に処すことはない」
思わず、はっと息をのんだ。自分を安心させるためだけの言葉か？　それとも――
「ドラクロワは、聖法庁の最も奥深くにある秘儀に触れ……その力のせいで、今なお苦しんでおる。その力がドラクロワを殺さぬということは、聖法庁の秘儀が、まだかの者を生かすと決めているということだ。秘儀が殺さぬ者を、聖王が殺すことは出来ぬのだ」
それが聖王の真意だった。それを伝えることにしたのは、この状況下では、ジークと聖法庁が敵対しかねないと思ったためだろう。ジークは、ただ無言で頭を下げた。
「……黒き騎士よ、こうなれば迷わず、あの娘を斬れ。ともに歩む従士でも情けをかけるな。それで〈銀の乙女〉が怨もうとも……聖王の名において、そなたを守ろう」

聖王は、そこまでジークの存在を重視しているのだ。だが大して嬉しくもなかった。
単に、この件に関して、聖王が敵ではないことが明らかになっただけだ。そしてまた、
(斬らねばならない——)
その思いを、ひどく重くジークの身に、のしかからせただけだった。
「行くがいい……こたびの任地ばかりは、己の命を守ることを優先せよ」
ジークは無言のまま、出立のために聖王のもとを去った。

ジークの夢を覗き見る一方で——
フロレスは、自分の記憶もまた、夢となって甦るのを覚えていた。
〈銀の乙女〉が管理する聖堂——その一角に、一部の聖女たちに審問されるティアの姿があった。そしてその場にフロレスも、いたのだ。
聖女たちはティアに様々なことを質問し、どうすれば良いか議論していた。
ドラクロワとジークの記憶を消すことに成功すれば、自分たちの力を聖王に知らしめることが出来るのだと強硬に主張する聖女たち。だがそれが失敗に終わろうとしている今、秘儀を守らねばならない。香りの力を破られた場合、必ず相手を殺すのが掟なのだ。
そうせねば香りの力の秘密が、世間に広まってしまうかもしれない。

そうなったら自分たちの立場が、危うくなるかもしれない。

己の保身ばかり語る聖女たち——かつての〈香しき者〉たちのなれの果て。

老いとともに力を譲り、今なお〈銀の乙女〉の闇にひそみ、自分たち姉妹を自由に操る者たち——その声を遮るように、ふいに、ティアが声を上げた。

「私が……その役を、負います」

聖女たちが振り返る。ティアは、冷ややかに言った。

「私が、あの騎士の心を葬り……それが出来ないときは、命を葬ります」

聖女たちが歓喜する。その意気だともてはやす。一方、フロレスはただ驚いていた。

ティアが自分から意志を主張したのだ。これまでずっと黙って従ってきただけなのに。

風が吹かねば咲かないはずの花が——自分から、ともに旅した騎士の心を消すと決めた。

ティアも必死なのだ——フロレスはそう納得した。このまま力を使いこなせなければ、棄てられるだけなのだ。〈香しき者〉の称号を剥奪され、力を失うだけではない。香りの力の秘密が明らかにされぬよう記憶を消され、修道院に一生幽閉されるか、どこかの領主か貴族に愛玩される存在として投げ与えられることになる。

そうならないためにも、ティアはあの騎士の記憶を消し、さもなければ殺すしかない。

ティアは、ただ冷ややかに、聖女たちが喜ぶ顔を見ていた。

それからティアは、ジークと一緒に過ごしている。その力をジークに行使するために。
そして、聖都からの出立の日――ティアとの最後の会話の記憶。
「全て終わったら……今度の騎士のことも、私がみんな忘れさせるわ」
フロレスはそう言った。自分たち二人だけなのだ。信じられるのは姉妹だけ――
「私、行くね……姉さん」
ティアは意志をこめて聖都を去った。ジークの記憶か命、どちらかを消して帰ってくるという意志。それ以外にどう考えられるというのだろう。ティアは、〈銀の乙女〉以上に、フロレスという存在に縛られているのだ。たった二人だけの姉妹に。
姉である自分が戻ってこいと言えば、必ず戻ってくる――それが当たり前だった。
フロレスが何かを望めばティアもそれを望むはずなのだ。フロレスが嫌うものは、何であれティアも無条件で嫌わなければならないのだ。フロレスの鏡映しの存在が、ティアなのだから。人を支配して操る快感――ティアには無いものを、フロレスは持っているのだ。
呪縛に等しい絆こそ、フロレスにとって最も信じられるもの。何よりの喜び。
ティアが勝手に死ぬことも、称号を剝奪されることも許せはしない。
ティアがいるからこそ、フロレス自身は、嫌な任務には就かずに済んでいるのだ。
本当に辛い仕事があれば、それはティアの仕事だ。身も心も砕かねば成し遂げられない

ことがあるとすれば、それはティアがすべきことだった。フロレスの影――大事な身代わりであるティアを、自分が心の底から愛するのは当然ではないか。

そのフロレスに、聖女たちが命令を下した。ひそかにティアの後を追えと。ティアが使命に失敗したら、聖女たちにとってもフロレスがジークを殺すのだ。またティアが死を選んだら、すぐに救うのだ。聖女たちにとってもフロレスにとっても当然の処置だった。

かくしてフロレスもまた聖都を出発していた。

ティアの意志がどこへ向かうにせよ、フロレスがそれをしっかりと握るために。

かつてティアが身を投げたとき、その体を鉄の柵が刺し貫いたことで、石畳への落下を免れたように。ティアを、苦痛の生存で貫き続ける、鉄の柵――それがフロレスなのだ。

ノヴィアはただ、二人の夢を見ていた。入り乱れるジークとフロレスの思い――

それでいながらノヴィアが思うことはただ一つだった。ティアの旅立ち、そしてその決意――何もかもが悲しかった。ティアの背負うものがよく分かった。棄てられることに怯える悲しさが。その凍りついた魂の香りの果てを、ノヴィアはただ、見守った。

ジークが夢で過去を辿り始めたその頃――

トールは、別室にあるソファに傷ついた身を横たえていた。枕元では、なぜかアリスハートがジークの方には近寄らず、白いハンカチを毛布代わりにして眠っている。
魔獣どもさえ眠りについたかのような静けさの中、トールは故郷を思っていた。
いつもかいでいた世界の匂いを。もし今の自分のこの態度をレオニスが見たら、烈火のごとく怒り、そしてついには呆れて笑い出すだろう。それは、確かなように思われた。
レオニスの野心は、どこへ向かうのだろう。トールとともに抱いた、ジークとドラクロワに匹敵するという強い思い。それがどんなかたちで実を結ぶにせよ、トールはただ信じたかった。レオニスを信じ、そして自分を信じたかった。
ふと、アリスハートが幸せそうに寝返りを打った。トールは、アリスハートを起こさぬよう、そっとその小さな体に、ハンカチをかけ直してやった。
（お母さんみたいに好きなんじゃないかなぁ）
唐突に、アリスハートのその言葉が思い出された。
レオニスは、母を思慕するように、ノヴィアのことを想っている——
トールにはとても辿り着けない考えだった。幼い頃にレオニスは母と死別しているため、母性的なものに惹かれているということだろうか。
何となく納得するものを感じる一方で、妙な胸騒ぎがしていた。

トールは目を閉じた。ただ信じたかった。お互いを。自分を。そして、未来を。

「まったく……こんな時間に呼び出されるとは。いったいどこまで面倒な女なんだ」
レオニスは、忌々しげにそう口にした。
空には月が昇っている。夜の湖畔に、衛兵や付き人とともにやって来ていた。
ここから僅かに離れたところに、レオニスにとっての秘密の場所がある。
自分が何度も土を舐めた場所――ノヴィアとともに歩く訓練をした場所だった。
そのすぐそばの空き地を、レティーシャに与えたのだ。この聖地を象徴するようなものを作れというレオニスからの依頼を果たすための、制作の場として。
ふいに、先頭を行く衛兵たちが、わっと声を上げた。
闇に、レティーシャが頭蓋骨を手に、ぽつねんと立っていたのだ。
灰色に近いその髪が、月光を浴びて、鬼火のような青白さで輝いている。
衛兵が仰天するのもうなずけるような不気味さであった。
「早いね兄様。レオニス様、すぐ来た。きっと女神様が気になるんだ。ね、兄様」
相変わらず頭蓋骨に喋りかけながら、レティーシャが近づいてくる。靴を履いてはいる

が、かかとを踏み潰し、スリッパのようにぺたぺた音を立てて歩いている。
「こんな時間に、習作を見ろとは、どういうことだ。なぜ昼間に作らない」
「昼は明るいもの、ね、兄様。夜の方が兄様も、よく話せるものね。夜って良いよね」
レオニスが苦虫を嚙み潰したような顔になるのも構わず、その傍らに立った。
「他の人はいらないんだよね、兄様。レオニス様だけ来れば良いのにね、兄様」
「悪かったな。僕はこの通りの身だ。お前の方から出向くべきところを、わざわざ……」
レティーシャは最後まで聞かず、いきなり手にしたものを、レオニスに渡した。
「兄様、少し待っててね。すぐに返してもらうからね。ちょっとの辛抱、ね、兄様」
切々と言い聞かせながら、なんとレオニスの背後に回って、車椅子の取っ手を握った。
頭蓋骨を渡されて啞然となっていたレオニスが、さすがに目を見開く。
「な、なにをするかっ、この魔女め！　レオニス様から離れろ！」
周りの衛兵たちが、にわかに殺気立って剣に手をかけるが、
「待て……！　どうやらレティーシャが僕を運んでくれるらしい。みな、ここで待て」
「で、ですが……レオニス様の身にもしものことがあったら……」
「だからレティーシャは、僕にこの髑髏を渡したんだ。いわば人質交換さ。レティーシャが何かをすれば、僕はこの髑髏を、宝剣で真っ二つにする。お前たちが何かすれば僕を殺

す。つまり……お互い手出しは出来ないってことだ」
「レオニス様、けっこう頭良いんだね、兄様。助かるね、兄様」
「けっこうとはなんだ」
むかっとなるレオニスを無視して、レティーシャが車椅子を押し始めた。
衛兵たちがたたらを踏む。レオニスは手を振って、そこで待つよう指示した。
「まさか、お前に運ばれるとはな」
レオニスは呆れたように言った。頭蓋骨を落とさぬよう、両手で抱えている。
こちらのことなどお構いなしに乱暴に運ばれるかと思ったら、レティーシャは妙に丁寧に車椅子を押している。まるでトールに押されているような心地よさだった。
トールがいないことの不満が癒される一方で——得体の知れない不安を感じていた。
快く運ばれて行った先に、奈落の底が待っているような気がしてくるのだ。
だがそんなこともなく、レティーシャの仕事場へとやって来ていた。
習作用の石膏がそこら中に転がり、大理石の塊が幾つも運び込まれている。
像の顔を試行錯誤するために、何度か彫り直したらしい顔が並んでおり、
「まるで打ち首だな……僕に見て欲しいというのは、これか？」
レオニスが眉をひそめた。全ての顔が、ごてごてしていて表情が分からない。荒削りも

良いところだった。
「何となく見えたんだよね、兄様。レオニス様の綺麗なもの、ね、兄様。あとはレオニス様が、そこにいれば良いだけだよね。兄様、そこにいてね。あたし彫るね、兄様」
レティーシャは、レオニスに頭蓋骨を持たせたまま、石の方へと歩いていった。
「おい、まさかこれから彫るものを見ろと言うんじゃ……」
レオニスの声を、レティーシャの詠唱と、蠅の羽音がかき消した。
「うるるぐぬむむい綺麗ぇなお顔にうぐあえぐおるるむぶぶ綺麗ぇぇえなお顔おぐおが」
たちまちレティーシャの足下から、影そのものが騒ぎ出したかのように真っ黒な蠅の群が現れ、石にたかった。月下の湖畔で、地獄の蠅にたかられた〈蠅姫〉が獣のような声を上げるさまを、レオニスは、うんざりした顔で見守った。
「なあ、この髑髏をいつまで持っていれば良いんだ。お前の大事な兄様だろう」
だがレティーシャは、ちらりとレオニスの膝の上の頭蓋骨を一瞥しただけで、石に意識を集中させている。やがて、石に顔が彫り込まれていった。一つや二つではない、葡萄の房のように無数の顔が連なったものが、にわかに現れていった。
どれもが女性だった。歳が上のものから下のものまで。その全てが、よく似ていた。
レオニスが知る、あの少女の顔に――





「何というものを見せるんだ、レティーシャ！」
凄まじい怒鳴り声がレオニスの口から迸った。ノヴィアに似た顔が、蠅にたかられているのだ。総毛立つほどの不愉快さだった。だがレティーシャは一向にこたえる風もない。
「ね、兄様。違うと思うかな。まだまだ綺麗じゃないかな。それなら壊そう、ね、兄様」
「そうか……。この僕に、像の顔を選べというんだな……」
レオニスは背後に手を回して宝剣を抜くと、無造作に投げ放った。宝剣が、顔の一つを貫き砕いた。そのまま剣は宙を舞い、レオニスが操るままに顔を切り刻んでゆく。
「これも違う。これもだ。だいたいなぜ……お前が、この顔を……」
「ふぅん、兄様。また少し見えたね、兄様。レオニス様の綺麗、綺麗、綺麗、綺麗が」
レティーシャへの不快感と怒りに任せて顔の大半を斬り砕いてから、はっと気づいた。
レティーシャが、残りの顔を放っておいて、また別の石へ近づく。
「色々試さないとね、兄様。今度はちゃんと二人分ね、兄様。二つの顔を一つにしないとね、兄様。レオニス様を産んだ人と、これからのレオニス様を産む人。綺麗にね、兄様」
「何を……言っている」
レオニスは、右手に宝剣をつかみ、左手に頭蓋骨を抱いたまま、呆然となった。
「僕を産むだと……？　母のことか？　なぜそれを……そもそもなぜ、お前がノヴィアの

顔を知っているんだ。なぜだ……お前は、僕に何を見せようとしているんだ」
ふいに——左手の頭蓋骨が、かたかたと鳴った。
ぞっとなって、それを見た。確かに今、勝手に揺れたはずの頭蓋骨を。
いつの間にか、左手の頭蓋骨が、真っ直ぐレオニスを見ていた。
いったいなぜレティーシャは、わざわざ自分の手に、この頭蓋骨を渡したのか——
「兄様、教えてね。あたしに、レオニス様の綺麗を。綺麗にするね、レオニス様」
凍りついていたレオニスが、その一言で我に返った。レティーシャが、自分の名を呼んだのだ。兄様ではなく——まるでレオニスが、自分の同胞か何かのように。
レティーシャが、また朗々と、異形の詠唱を放ち始めた。
蠅にたかられる娘と、揺れる頭蓋骨を前にして、レオニスは、歯を食いしばった。
「良いだろう……」
恐怖と不安が押し寄せる一方、ここから逃げ出すことが、自分で許せなかった。何かが自分をここに呪縛していた。これから現れるものから目がそらせなくなった。
「見せてみろ……僕にとっての、本当に綺麗なものを」
レティーシャは、嬉しそうに声を上げ続けた。

2

ジークの夢は、ゆっくりと深まっていった。
かつての光景——戻らぬはずの過去。その記憶が夢に現れては、再び過ぎ去ってゆく。
ジークは、聖都を発ち、任地へと馬車を乗り継いでいった。
おそらく、ほぼ二日、ティアには遅れをとっている。
むろんティアの手紙を読んですぐに事態を悟り、聖王に謁見し、出立したのだ。
遅れは、ジーク自身にあった。時間感覚が狂わされているのだ。おそらく目覚めてからティアの手紙を読むまでに、丸一日かそれ以上、経っていたのだろう。
その間、自分が何をしていたのか覚えていない。
自分が一晩しか経っていないと思っている間に、最低でも二日は経過していたことになる。だから、ドラクロワのいる牢に行ったとき、そこは無人だったのだ。
もしかするとジークの時間感覚を狂わせたのは、任地に先行するためと同時に、ドラクロワに会わせないためだった？
疑念を重ねながら、何とも言えない疲労を感じていた。こうして馬車で移動している間も、ひっきりなしに浅い眠りが襲ってくる。最後に眠ったのは本当はいつなのか。疲労と

焦りで思考が乱れ、結局、どう考えてもティアを斬るしかないような気がしてくる。
（全てを疑え――ジーク）
他に方法がないかと、何度もティアの手紙を読み返した。そのたびに自分の迂闊さを思い知らされた。ティアの言う通りだった。自分は従士を必要としていないのに、ティアに従士になれと言った。〈銀の乙女〉の所属から自分のもとへ来いと。そんなことになれば、ティアは〈銀の乙女〉と決別せねばならなくなる。その力も称号も失うのだ。
さぞ自分のこの愚かさに、ティアは怒りを抱いたことだろう。
ティアは、ドラクロワとジークのいずれかの記憶を奪わねばならなかった。ドラクロワからは秘儀への執着と聖法庁への憎しみの心を、ジークからはドラクロワへの思いを。
そしてジークが忘却を拒んだため、強引に記憶を消しにかかったのだ。ジークが抵抗したときに備えて身を防ぎつつ。いざとなればジークを殺せるよう策を講じながら。
だが、果たしてティアが考えた策だろうか。あまりに手際が鮮やかすぎる。まるで、誰か、謀略を得意とする者が、ティアに策を託したかのように。
（ドラクロワ――全て疑え――ジーク）
仮にそうだとして、どうすれば良い。ティアを斬らずに済むには、どんな方法がある？
ジークは乱れる意識を振り絞った。そして結局、何も思いつかぬまま到着していた。

ティアが待つ場所――王弟派がいまだ実権を握る、とある都市に。
馬車を降りながら、ジークは、自分の心が悲痛な結論へと傾くのを感じていた。
結局これもまた、今まで起こり続けてきたことの繰り返しなのだ。
お互いの大事なものを守るため――お互いに奪い合う。ただそれだけのことなのだと。

ジークは正面から都市に入った。それがいつものやり方だったし、自分が来たことをティアに知らせる気持ちもあった。それでティアが姿を現すのではという、愚かな期待が。
だがジークを迎えたのは、領主と側近たちである。意外なほどの歓迎ぶりだった。みな揃って聖王への忠誠を誓い、ジークをもてなしたのだ。
とても信じられなかった。ここの領主は、武人の誉れも高く、戦乱好きだった王弟をひどく慕っていたという。罠に違いないとも思うが、それにしても殺気がなかった。
湯どころに通され、ぞろぞろ入って来ようとする女たちを退かせ、一人で身を清めた。
その後で、宴席に迎えられた。
領主も側近たちも兵も、にこやかに接してくる。まるで子供のような朗らかさだ。
「いかがですかな、聖王の黒き騎士よ。我らの祝宴を、楽しんで頂けておりますかな」
警戒しながら、ああ、とぼそっと返した。そのとき――

「それは何よりです、黒き騎士よ」
領主が、いきなり手にした肉切りナイフを、ジークの顔面に突き込んできた。
素早く顔をのけぞらせてかわし、膝に立てかけていたシャベルを握りしめ、席を立つ。
すぐさま凄魔を招き、剣を握ろうとするが――
「どうしました？　何か粗相がありましたかな……？」
領主は、意外そうな顔でいる。
思わず宴席を見渡した。臣下たちも不思議そうな目をジークに向けている。
誰一人として殺気がなかった。ジークは愕然と、彼らの微笑みを見た。
領主が場を和ませようとするように、壁にかけてある剣を手に取った。
兵たちが、微笑みながら槍を構える。臣下たちが杯を手にして立ち上がった。
「さあ、皆の者。我らが聖王の騎士を、都市を挙げて歓待するのだ」
臣下たちが一斉に乾杯した。兵が、どっとジークに向かって押し寄せてきた。
みな揃って、にこやかに剣を振り下ろす。朗らかな笑い声。ジークが攻撃を避けるたびに、みなが感嘆して拍手をする。楽器の演奏者たちが賑やかな音楽を奏で始めた。酒を運んでくる女たちまでもが、ジークに花でも捧げるかのように、刃物を振るってくる。
戦いの気配などまるでないまま、宴席は一転して戦場と化した。いや、ジークだけがそ

う認識していた。彼らは、あくまで、もてなしているつもりなのだ。

ジークは思わず唸った。誰もが殺意を忘れたまま、自分たちが最もしようとしていることをしていた。すなわち、ジークを取り囲んで殺すのだ。

彼らの微笑みの裏に、どろどろした怨みを感じた。権力への妄執。聖王の騎士への憎悪。

そしてティアは、それらが表面に出るということを忘れさせたのだ。ごく一部の心の働きだけを消しているから、ティアもこれだけの人数を一度に操れるのだろう。

殺気が無いせいで誰がどう襲ってくるかまるで分からない。誰もが敵でいながら、戦う気になっているのは自分一人だ。何という悪夢か。気がおかしくなりそうだった。

何より、これでは魔兵を招き出すことが出来ない。魔兵は相手の殺意や戦意に反応する。それがないまま戦わせれば、怨みで汚れた魔兵の魂をさらに汚すことになってしまう。

「ジーク殿、どこへ行かれるのだ。ぜひ我らの宴席に連なり、ともに聖王の秩序の安泰を祝おうではありませんか。我らは敬意と忠節をもって、あなたを迎えたいのだ」

領主が微笑みながら剣を構えて突進してきた。ジークはそれをかわし、窓の外へ跳んだ。下の階の開いていた窓を踏み壊しつつ、地上に着地する。そこへ――

「おお、聖王の騎士よ！　ぜひ我らの祝杯を受けて下され！」

ずらりと待機していた兵たちが、喜びの顔で矢を放ち、剣を抜いて迫る。矢をかわして

走ると、突然、女給たちが台所から飛び出し、楽しげに包丁を振りかざしてきた。
ジークは、とにかく身を隠せる場所を探して走った。
かつてどんな敵も、こんなかたちで魔兵を封じたことはない。香りの力よりも、そのことが恐ろしかった。ジークの力を読みきった上で、最も効果的な戦法を仕掛けてきたのだ。
本当にティアがこれを一人で思いついたのか。それとも――
いずれにせよ完全に術中にはまっていた。走りながら疲労と眠気に襲われた。気づけば夕暮れだ。いったい何時間、宴席にいたかも分からない。酒は一滴たりと呑んだ記憶は無かったが、それも怪しいものだ。
ジークは、ただひたすら追っ手をくらまして走り、やがて食料庫に入り込んだ。
どうやら隠れられそうだと判断すると、棚に並んだ袋の口を空けて、横に倒した。
小麦粉が、さらさらと床にこぼれる。即席の砂時計だ。それを見つめながら考えた。
このままでは、いたずらに逃げ回っているうちに、ジーク自身が記憶を消される。
自分が何のために来たかも分からなくなる。ティアの顔をいつまで覚えていられるか。
いったいティアはどこか。これだけの力を発揮するからには近くに潜んでいるはずだ。
ティアを見つけ出さねばならない。そして――見つけ出して、どうするのか？
(斬る――疑え、ジーク)

ふと気づけば、小麦粉がすっかり床にまき散らされている。十秒も経っていないように思われたのに。小麦粉の量からして、少なくとも倍から三倍の時間は経っている。

ジークは、時間感覚の誤差のだいたいの目安をつけ、食料庫の奥に座りこんだ。

殺意は無くとも王弟派の憎しみは本物だった。都市にいる者全てが敵に思えた。

まさに死地だ。ただ生き延びることに死力を尽くさねばならなかった。

シャベルを解体し、剣を握りしめた。シャベルは、自分がいる場所につづく通路のそばに置いた。敵が来たらすぐさま凄魔を招き出す――だが上手く行くだろうか？

もし幼い子供が剣を持って襲ってきたら？　凄魔に殺させるのか？

そう思って、怒りが湧いた。魔兵を封じるために都市中の人間を犠牲にするつもりか。

ティアはそこまで本気で自分を殺そうとしているのだ。怒りがさらに心を決意へと傾けてゆく。ティアを斬る――待て、この策は本当にティアの策か？

剣を握りしめたまま、疲労に抗えず目を閉じたとき、両手を握り合わせるティアの姿が浮かんだ。ティア――自分の意志では咲かない花の名。何かがおかしかった。ティアにとって最も大事なものは何だ？　〈銀の乙女〉の命令？　策を託されて実行させられている？　都市中の人間を犠牲にするかもしれない策を？　何のためにティアは働いてきた？

戦乱を避けるために、ただ己一人の心身を犠牲にする。それがティアだ。

意識が朦朧となった。ドラクロワとの最後の会話を思い出す。好きにしろ——忘れたいのなら忘れろ。ドラクロワの笑うような声。そして、夢が訪れた。地下牢の夢だ。
薄暗い地下の鉄格子に向かって立つ、ティアの姿が見えた——
ティアが、牢の中にいる者と何かを話している。にわかに立ちこめる澄んだ香り。
夢へと引きずり込まれそうになるのに抗い、ジークは、かっと目を見開いた。
気力を奮って剣を壁に突き立て、記憶を刻んだ。
『ドラクロワ　牢　ティア』
今こそ悟った。間違いない。自分がドラクロワと最後に話したとき——その牢に、ティアが来ていたのだ。自分よりも前に牢を訪れ、何かをドラクロワと話していた。
そして自分は、その会話を聞いたのではないか。それを悟ったティアが香りの力で、ジークに忘却させた。まさか、いきなりティアに力を振るわれるとは思いもしなかった。
あのときから既に、自分は、ティアの術中にはまっていたのだ。
ティアの決意は、そのときに既に下されていた？　では、墓地でティアと会ったときの会話はなんだったのだ？　血の香り——なぜそのことを自分に告げた？　なぜ自分の住みかを訪れた？　自分は何かもっと大事なことを忘れているのではないのか？
何より——この策をティアに託したのはドラクロワか？

（あなたの悲しみを奪いました）

ティアの声が甦る。目を閉じた途端、これまでになく強い眠気に襲われた。

自分の一番の悲しみとは何なのだろう——薄れゆく意識で、そんなことを考えた。

根本的な問いだった。この事件の全ての始まり。自分がまだドラクロワを信じていることは、そんなにも悲しいことなのだろうか。それよりもさらに悲しいことがあるのに。

眠りに落ちる恐怖に耐えるため——剣を握りしめている自分。

いつか棄てるはずの剣を、まだこうして握っているのだ。

そう思ったとき、かすかに血の香りがした。

（疑え——）

剣の重みだけを感じ——ふいに、自分が何を斬れば良いのか、分かった気がした。

だが、それも束の間のうちに消えた。ジークは、眠りに落ちた。

せめてティアを斬るとき、自分が悲しいと思えるよう、祈りながら。

夜明けの冷気で、ジークは目が覚めた。胸の奥から凍るような寒さだった。

震える手足に力を込めながら立ち上がる。心が、記憶を失って寒がっていた。

ジークは壁を見た。ドラクロワとティアが牢で会ったらしい。そうか——自分は、あの

とき既にティアの術中にはまっていたのだ。そう考えた途端、自分は一度、その結論に達したのではないかという疑念が起こった。たちまち忘却への不安が押し寄せてくる。
ジークはしいて、自分の体へ意識を集中させた。ある程度、疲労は回復した。
これからどうするか――敵には戦意も殺意もない。都市中の人間が敵の可能性がある。
ティアはどこか近くにいるはずだが、位置が分からない。
何も忘れていない。ジークは状況を打開する策を案じ――
ふと、自分が背を当てていた壁を見て、愕然となった。
『ティア　ドラクロワ　牢』
そこにも、全く同じ文字が刻まれていたのだ。明らかに、自分が刻んだものだった。
先ほど見た壁の文字をもう一度見た。
『ドラクロワ　牢　ティア』
――どちらが、先に刻まれたものなのか。
ある確信とともに、思わず膝から力が抜けそうになった。
自分は、何度も、同じ結論に達し、そのたびに忘れているのだ。
つい先日この都市に来て領主に歓待を受けたと思っているが、きっともう自分は何日も、都市中を逃げ回っては、同じような場所に隠れているのだ。

のろのろと辺りを見回した。――そして、自分の足下の床に、それを見つけた。

『ドラクロワ　牢　ティア』

さらにもう一つ、壁の、やや低い場所に、あった。

『牢　ティア　ドラクロワ』

合わせて四カ所に、同じ文字が刻まれている。

もし眠りに落ちる寸前に記憶を刻んでいるとすれば、最低でも四日は経っている。

四日という日数を意識した途端、体の底の方からひどい疲労が込み上げてきた。

（疑え――）

何が正しいのかさえ分からず、たまらない無力感に襲われた。そのとき――

「……なぜだ」

思わず、呟いていた。文字の順番が、どれも同じなのだ。

必ず、牢の次にティア、ティアの次にドラクロワ、ドラクロワの次に牢と刻んでいる。

何か――かすかな引っかかりを感じた。偶然にしては奇妙だった。

おぼろげな記憶――そう、順番が、一夜過ぎるごとにずれているのだ。時間感覚を失った自分の、せめてもの抵抗。だとしたら、どれが一番最初に刻まれたものなのか？

すぐに分かった。単純なことだ。ドラクロワが最初で、次が牢、最後がティアだ。

三つの文字を、一つずつずらせば、三日で一巡する。四日目には同じ文面が二つ出来る。
ふと疑問に思った。なぜティアが最後なのか？
これは、ティアを牢で見たはずの記憶を刻んだものだ。
(疑え――)
ドラクロワに会いに牢に行き、そこでティアの香りをかいだ。それは忘却された後の記憶だ。実際は、ティアが、牢で、ドラクロワと会話しているのを見たに違いないのだ。
ならばなぜ、ティアが最初に意識されない？
ティアが牢でドラクロワと会話したことが、これほど自分にとって重要な記憶である理由は、ただ一つだ。ティアに策を授けたのが、ドラクロワであるに違いないからだ。
ドラクロワはいったいいつ、ティアに策を授けた――？
時間感覚が狂わされている。
全てを疑え、という声。
本当に自分は、あの住まいで目覚めてからティアの手紙を読むまでに数日も経たのか？
ティアは任地へ先行した。目覚めてすぐに牢に行った。ドラクロワが移送されてから既に数日が経っていた。最低でも、二日はティアに遅れを取った。
いったいいつ、それだけの時間が消されたのか？

ティアはいったいいつ、聖都を発ったのか？
（疑え――）
ティアはいったいどこに、いるのか？
自分は、目覚めて牢に行った。それからすぐ聖王に会い、任地へ急行した。
聖王は言った。このままでは、ともに任地に赴く従士が、ジークを狙う刺客となる。
その後ですぐに、馬車に乗った。そして都市に来て罠に陥り、堂々巡りの忘却と記憶の迷路に叩き込まれた――ゆっくりと確実に、ドラクロワの記憶を消すために。
ジークは、目を閉じた。全身の神経が、鋭く研ぎ澄まされているのを感じた。
そしてふと、何日もかけて敵から逃げながら、見えぬ敵を探しているような気になった。

食料庫を出て庭園を通り過ぎるや、たちまち兵士の一団の目に留まった。
「聖王の騎士よ！　我らが歓待がお気に召さぬか！」
馬蹄の音がした。なんといつの間にか近隣の砦から訪れたらしい兵団がいた。殺到する兵をよそに、ジークは城へ入った。わらわらと人が現れ、微笑みながら武器を掲げて迫る。
彼らもまた、ずっとジークを捜し続けていたように見えた。
「おお、ジーク殿！　今、冷めた料理を下げさせ、温かいものを運ばせたところだ」

領主が声を上げた。その手に剣を握っている。顔に疲労の色が濃くにじんでいる。まるで延々と宴席を続けていたかのように。ここ数日間、ずっと。ジークを湯どころに通し、宴席に招き、そして逃げ出したジークを追う――それを延々と繰り返してきたのだ。

ジークは迷わず駆け寄った。領主の手から剣を叩き落とし、背後に回って動きを封じ、

「誰も動くな!」

叫びながら、シャベルを振り上げた。周囲にいる半数が、領主が人質にされたことに驚いて動きを止めた。その意識が起こらなかった兵たちが、微笑んで寄ってくる。

どん! 凄まじい勢いでシャベルを振り下ろし、床を穿った。兵たちが、ぽかんとなる。

「――ジーク・ヴァールハイトが解き放つ!」

雷花が咲き乱れ、凄魔が飛び出し、円陣を組む。ジークは現れた銀剣を左手で取った。右手は領主をつかんだままだ。立て続けに起こった異変に、兵たちの微笑みが強ばる。

ジークの堕気が剣身で発露し、炎となって燃え上がるや――領主が驚愕して叫んだ。

「お……おっ⁉　ジーク⁉　黒き騎士よ、聖王の、聖、騎士、敵、おのれ……」

その声が低くなり、殺気がこもる。予期せぬ事態に、忘却を忘れて元の心に戻ろうとしていた。兵も殺伐とした表情になる。ジークは、その様子を、しかと見た。

突然、澄んだ香りが辺りに立ちこめ――すぐに消えた。

居並ぶ者たちが、また柔和な表情に戻った。
「おお、ジーク殿。今、温かい料理を運ばせているところだ。さ、ともに広間へ」
微笑む領主を、ジークは突き飛ばした。見るべきものは見た。
ジークは身を転じ、窓から跳躍した。凄魔が一斉に従う。
地面に着地し、さっと剣を振るって凄魔たちに散るよう命じた。
十六体の凄魔たちが雄叫びを上げながら、別々の方向へと走り去る。
地上にいた兵たちが驚愕し、凄魔たちを追って、ばらばらに分散してゆく。
その隙を突いて、ジークは、広大な庭園に向かって走っている。
一度だけ、城を振り返った。だがその必要はないと悟った。自分は既に香りにひたされているのだ。自分がどこにいるかくらい、すぐに分かるだろう。
やがて歩調を緩めた。すぐ先に噴水があり、そこまで歩いていって足を止めた。
ひどい疲労感を紛らわすように、揺れる水面を見つめた。水飛沫が心地よかった。風は春の匂いを帯びている。左手を水にひたし、拳を胸の高さに持ってきた。
左拳から零れる水滴が、ぽつぽつと噴水の縁に落ちる。
その水滴を数え、時間の感覚を漠然と把握しながら、考えた。
そもそもの最初から間違っていたのだ。自分は、目覚めてすぐにティアの書き置きを見

つけ、間を置かずに牢に向かった。そして、すぐに聖王に謁見し、ただちに出立したのだ。

そこで数日も経ってはいない。せいぜい半日足らずだ。

では消えた数日間はいつなのか。それは、自分がティアとともにいた時間だ。

自分は、ティアを住みかに迎え、書き置きを見つけるまでに、何日もともにいたのだ。

そして、その間に——ティアは、ドラクロワから策を得たのだ。

最初に牢で香りを感じたとき、まだティアは香りの力を自分に使っていない。ティアの力にとらわれたなら、香りを覚えているわけがない。おそらく、そのときティアは、ドラクロワの記憶を消そうとして失敗したのだ。自分が感じたのは、残り香だ。

自分は、ティアを住みかに迎えた後で、もう一度、牢を訪れているに違いない。

そしてそこで初めてドラクロワとティアの会話を聞き——香りの力で忘却させられた。

いつの間にか、拳の水が乾いて、水滴が落ちなくなっていた。

ジークは拳を下ろした。再び水面を見つめながら、結論した。

誰かに命じられなければ決して力を使わないティアが——ドラクロワに言われて、ジークに、香りの力を使った。ティアの出立は、その後——おそらくは、ジークと同じ日。

ジークに、力を行使し続けるために。

ティアの書き置き——巧妙な偽り。先に行く。

そして、にわかに訪れる解答。

自分は、ティアが待つ馬車に乗り込み、ともにこの都市に来たのだ。

3

噴水の水しぶきの向こうから、瑞々しく澄んだ香りが、涼風のように流れてきている。

その香りが自分に流れ込むと同時に、別の香りが、己の身から流れ出すのを、ジークは感じていた。鮮やかなまでの、血の香り——心に亀裂が生じて流れる血の香りを感じながら、ジークは、ただ静かに思った。

心砕けても、自分に残るものが何か。もう一度、力を手放せと口に出来るかどうか。

（私に触れもせず、あなたは……そんなことを言うのですね——）

にわかに、消されていた記憶が甦る。

（〈銀の乙女〉と決別し、一生をあなたの従士として過ごして、本当に良いのですか）

棄てられる怖さに怯え続けてきた娘を前に、自分は何と迂闊なことを口走ったのか。

（あなたの悲しみが好きでした）

ジークは目を閉じた。

（初めて聖王様に謁見するあなたを見たときから、あなたのことが——）

ジークの脳裏に浮かんだのは、今もそのときも、墓標だった。
十字型の紋章がはめこまれた〈銀の乙女〉の墓。自分の手で葬った女の面影。
(私はあなたのことを、忘れなければならないんです。でもせめて、あなたに私のことを、覚えていて欲しいんです。それがそんなにいけないことですか)
悲しみを背負ってやることも出来ず、沈黙で答えようとした。
そのせいで、一つだけ、伝え忘れたのだ。力についての──自分の剣について。
(あなたは、悲しい人です)
それを伝えるために、出て行ったティアを追ったのだ。だが言葉をかけられず、ただ後をつけ、ティアがドラクロワの牢を訪れるのを見て──
聞いたのだ。ティアとドラクロワの会話を。そして──香り。消されていた記憶。
ジークは、静かに告げた。
「すまなかった……ティア」
目を開くと、揺れる水面に、娘の姿が映っていた。
噴水を挟んだ向こう側に、ティアが立っているのだ。
水面に映るティアは、驚いたように目を見開き──それから、花が咲くように微笑んだ。
何かを諦めきった末に浮かべるような、ひどく清々しい微笑。

ようやく自分を見つけてくれたのかと、その微笑が言っていた。

聖都を発ってからずっと、ティアは、ジークのすぐそばにいたのだ。ジークの意識から、その姿を消して。全てを諦めた微笑を浮かべながら。

どうすれば、その微笑に、応えてやれるのか――

ジークは考えるともなく、自然と剣を握りしめ、目を上げた。

そして、噴水の縁を乗り越え、水面に足を入れていた。

そのまま真っ直ぐ水を蹴り、ティアへと歩み寄った。

ティアは微笑を収めると、右手の香炉を掲げ、さっと宙に舞わせた。

「あなたの敵は、誰ですか――？」

右手の香炉が円を描き、澄んだ香りが、今なおジークの心にとめどなく染みこんでゆく。

いまだ取り戻せていない記憶の隙間が、香りで満たされる。

それがジークの剣を握る手に、いっそう力を込めさせる。

「あなたが剣を持つのは、何のためですか――？」

ああ、やはり、そういうつもりだったのか。

香りに引き寄せられながら、ジークは思った。

ティアは、いずれ自分の姿を見つけられることを期待していた。

そしてそれが最期のときだと覚悟していたのだ。
誰も裏切らずに、ここまで来られたのだと、ティアの目が言っている。
いつしかジークの周囲から、香りが消えていた。再び香りの力にひたされたのだ。
今こそ真に、思い出すべきときだった。ジークにとっての、心砕けてなお残る思いを。
(疑え――忘却の力に抗うただ一つの方法。ただ疑え。そして全ての問いも答えも入り乱れ、意味が歪められても――)
心が欠けてゆく寒さに、激しく手が震え、
(あらゆることを平然と疑え。お前の中にあるものは絶対に崩れはしない)
ぴたりとそれが収まった。ジークは剣を振りかぶり、両手で柄を握った。堕気が発露し、刃が、猛然と青白い炎を上げた。ティアが、目を見開いた。一瞬だった。
(ただ従え――絶対に変わらないものに)
ジークは剣を振り下ろし、ティアの眼前の宙を斬った。圧倒的な力を浴びせ、その戦意を挫くために。魂まで切り裂くかのような剣風がティアを正面から襲った。その凄まじい風が吹き抜け――消えたとき、ジークは水から出て、ティアの側面に回っている。
ティアの右手の香炉が止まった。いまだかつて受けたことのない衝撃に呆然となっている。かと思うと、その左手に香炉が現れ、一度だけ大きく揺れた。導きの香りが、ジーク

の心に一瞬で入り込んだ。剣が再び振りかぶられ、ティアの両手が握り合わされた。
「死を受け入れろ、ティア」
刃が迅った。雛色の髪が、宙を舞った。ひどく鮮やかな血の香りが、辺りに広がった。

ノヴィアはその悲しい香りのする夢をただ見守り続けた。
ティアの思いがよく分かった。ティアは最初から死ぬつもりだったのではない。ジークが香りに抗えず記憶を失ったら、そのときは自分で自分の記憶を消すつもりだったのだ。
死を受け入れたのは、ジークが自分を見つけてくれたからだ。ティアの願い通りに。
そこまでジークに対して力を行使したということがティアなりの〈銀の乙女〉と姉への忠節だった。そして、もう力を振るわなくても良いのだという安心とともに、左手の香炉を用いた。最後の瞬間、ティアが自ら死を望んだということを、ジークに伝えるために。
雛色の髪が、束になってジークの足にかかった。
ジークは、かつて体験したことが無いほどの鮮やかな血の香りのまっただ中にいた。
己の心が流す、血の香りの中に。
ティアは、まだしっかりと両手を握っていた。
その目が、大きく見開かれて、宙を見つめている。

「なぜですか……」
頭の後ろの髪留めが、束ねるべき髪を失って滑り落ちた。
「生きろ……」
呟くように言って、ジークは身を屈め、
「力が、風のようなものでも……人は、ただそれに吹かれるだけではないはずだ……」
断ち切られた髪の束を、そっと拾い上げた。
「聖王に、この髪を見せ、お前を斬ったと報告しよう」
ティアが、呆然と振り向く。ひどく短くなった髪が、頬にかかっていた。
「ドラクロワから、策を授けられたな」
ジークが断言した。ティアは言葉もなく立ちつくしている。
「最初はドラクロワの記憶を消しに行き、果たせなかった。そして次に、俺に斬られるにはどうしたら良いかドラクロワに訊きに行ったな」
ティアは、おずおずとうなずいた。
「そしてその会話を聞いた俺の記憶を……ドラクロワの言う通り、香りで封じたか」
「だって……それ以外に……何も、考えられなくて……」
ティアが言う。まだ剣風で痺れたままのような声だった。

「ドラクロワが策を与えたのは、俺にお前を斬らせるためではない。お前の力を破らせるためだ。たとえお前の姉が来たとしても、俺が香りの力を破れるように」

ティアは魂が抜けたようにジークを見つめた。突然、その右手を掲げ、香炉を揺らそうとした。まるで怒りに任せてジークの頬を叩こうとするような、反射的な仕草だった。

ジークがさっと剣を逆手に持ち替え、ティアの眼前で、地面に激しく突き立てた。

「力を棄てろ、ティア！　姉も〈銀の乙女〉も紋章も、お前が頼りにしていたものを全て投げ棄てろ！　それはお前にとって、本当に必要な力などではない！」

まるきり戦いのときの烈声だった。ティアの手が、凍りついたように途中で止まった。

「その名を捨てて一人で生きろ！　ティア・アンブローシャは俺が今この手で斬った！」

ティアは、わなわなと震えだした。

「私一人……力を……」

まるで死ぬより恐ろしいことを告げられたように、恐怖に目を見開いている。

「お前一人ではない！　俺が戦うのは、いつかこの剣を棄てるためだ！　俺が持つ全ての力を棄てるためだ！　そのために俺は戦っている！」

ティアは、ただただ驚きに呑まれ、

「いつか……力を……？」

その言葉を、繰り返した。
「それが、ドラクロワとの約束だ。それが、お前が言う、俺の悲しみの正体だ。お前にも聖王にも、決して奪えないものだ……ティア」
ティアは、ただじっとジークを見つめ、その言葉を聞いている。
「お前はここで一度、死んだ。俺にしてみせたように、人に覚えてもらえる香りを作り……自由に生きろ」
「あなたは……」
置いて行かれそうになった子供が上げるような声で、ティアは言った。
「俺も必ず、お前の向かうところへ行く。力を棄てなければ行けないところへ。お前は、先に行け……。そして俺が剣を棄てられたとき……もう一度、会おう」
「必ず……あなたも……」
ティアがほとんど聞こえないような声で繰り返した。ジークはうなずいた。
「必ずだ」
「私……」
声が震えた。ティアは何かに耐えるように眉をひそめた。その途端、涙が溢れた。
不安も喜びも寂しさも全て涙となって溢れ出すようだった。ティアは両手を固く握り合

わせると、身を折るようにして顔を伏せた。そして――精一杯の勇気で、言った。
「あなたという風に、従います……ジーク・ヴァールハイト……」

ジークの夢を覗き見るフロレスは、恐怖と衝撃におののいた。
これは自分が確信していた過去ではない。全く逆だった。そしてある意味で、全く正しかった。自分の知るティアは、この時点でジークに斬られたのだ。そして自分の全く知らないティアが、そこにいた。フロレスにとって愛すべき従順なティアは死んだ。
そんなはずはない――フロレスの心が荒れ狂った。自分はこのとき、ティアの後を追ってこの都市に来ていたのだ。そしてティアとジークの攻防を陰から見張っていた。
この結末を、なぜ自分は知らないのか。自分の記憶はいったいどうなっているのか――
フロレスが怯える一方で、ジークの夢は、さらに深まっていった。
ティアの姿をジークが見つけるとともに――
操られていた領主たちは、自然とティアの力から脱し、解放されていた。
彼らの記憶は、ジークが来た以前から綺麗に消えているはずであった。
「こんなに短くなってる……」
ティアは面白がるように自分の髪を撫でた。ジークが、髪留めを拾って、手にある髪を

束ねるのをやけに嬉しげに見つめながら訊いた。
「これから……どうされるのですか?」
「お前の墓を掘る」
というのがジークの真面目な答えだった。ティアが、くすっと笑った。
「お前が生きていることを知るのは、俺だけになる」
ジークが確認するように告げると、
「……嬉しい」
ティアは、小さな声で呟いた。それから空を見上げ、晴れ晴れとして言った。
「私……もう、名前も無いんですね」
かと思うと、嬉しそうに微笑んだ。
「でも……あなたのことを、こんなにも覚えています。何一つ、消されないまま」
ジークはうなずいた。自分もまたティアのことを全て覚えているのだと言うように。
ティアは微笑を収めると、一つだけ願い事をするような顔で、こう告げた。
「もしも……私の力が必要になったときは……風が花を求めていると、街々にお告げ下さい……必ず私はそれに気づくでしょう」
そう言いながらも、その顔は何の力も持たない娘のようだった。それはティアなりの、

ジークに対する最後の甘えなのだろう。ジークは小さくうなずきつつ、
「お前に力を使わせる気はない」
はっきり返した。そしてまた、出来る限りの優しさで、告げた。
「もし、お前がその力で大きな罪を犯したときは……そのときこそ俺が斬りにゆく」
それがジークなりの別れの言葉だった。ティアにもそれが分かった。
「もし、あなたが、剣と力に溺れたときは、私が、あなたのもとへ参ります」
その場合はティアが死力を尽くして、ジークの力を封じるのだ。
そういう約束を交わしながらも、これが一生の別れになるだろうことは二人とも分かっていた。ここで別れれば、もう二度と会うことはない。ティアが安全に今後の暮らしを見つけてゆく上でも、それが最善だった。
そしてそれでも、お互いの記憶だけは失われずに済んだ。
「望み通りの生き方を見つけろ……ティア」
別れ際に一度だけ、ジークはその名を呼んだ。
「行け……。お前の背を、俺が見ている。お前が去ってから、俺もここを去る」
ティアは一瞬、泣きたいのを我慢するように眉をひそめて。だがすぐに微笑を浮かべ、
「さようなら……ジーク様」

心からの愛しさをこめて、別れを告げていた。
恐ろしい、恐ろしい——フロレスは怯え、怒りながら、ジークの夢を覗き見ていた。
自分が予想もせぬこの記憶はいったい何なのか。たとえティアの記憶を消そうとも、自分がティアについての記憶を消したことなど一度もないはずなのだ。
その傍らでノヴィアが泣いていた。花の行方に、悲しみと恐れを抱いていた。いったい何を恐れるのか分からないまま、ノヴィアはジークの夢の結末を見守った。
ティアは、最後に一度だけ振り向き——
それから庭園を出て、森へと姿を消した。
ジークは、しばらくそこに佇み、ティアの去った方を見つめ続けた。
やがて自分もまた背を向け、城へ戻った。領主や兵たちの状態を把握しておくためである。それからティアの過去を葬るための偽の墓を掘る場所を探さねばならない。
ジークは、雛色の髪の束を懐に収めた。
自分もいつかティアのように、ただ自由を求めて旅に出られるだろうか——
果てしない思いとともに、ドラクロワとシーラの面影が甦った。かつて、理想を信じてともに戦っていた頃のことへ思いを馳せながら、庭園を出た。

矢が、ばらばらと降って来たのは、そのときだった。
ジークは咄嗟に剣で、自分目掛けて飛んで来た矢を打ち払った。
凄まじいまでの殺気が吹き寄せてきた。兵が一丸となって雪崩れてきたのだ。
愕然となるジークをよそに、茂みや建物の陰から、潜んでいた凄魔たちが、兵の殺気に反応して飛び出してきた。
さすがのジークが、思わず呻いた。
領主以下、全員がティアの力で記憶を消されているはずだった。だがその思いを粉々に打ち砕くかのように、近隣の砦の兵まで迫り、あっという間に周囲に展開している。
ジークの左腕に、雷花が咲き乱れた。驚きと、腹の底から込み上げて来る恐怖があった。
（ティア――）
たった今、旅立ったばかりのティアの微笑が甦った。
まさか、兵はティアのもとにまで――そう思ったとき、兵たちが喚声を上げて迫った。
ジークは高々と左腕を掲げ、烈声を上げて、左手を地面に叩きつけた。
魔兵が続々と招き出され、庭園は、一転して逃れようのない戦場と化していった。
どこからか、甘い香りが漂ってきていた。

ノヴィアは、果てしなく涙を流し続けながら、ジークの夢を見守っていた。希望が潰える恐怖に心がおののいた。そしてそれが、夢の中のジークの気持ちとなっていった。
迫り来る兵に対し――
ジークは、この数日間の疲労を振り払い、死力を振り絞って戦っている。
徹底的に、迅速に、兵を撃滅した。その心は焦燥と恐怖に満ち、何とかティアが去った方へ兵を行かせないようにしながら、もはや何の躊躇いもなく魔兵を放っていった。
なぎ倒される兵の間から、甘い香りが漂う中――ジークは、たちまち敵軍を壊滅させ、出来る限りの速さで来た道を戻っていった。
あの噴水を通り過ぎたところで、騎兵の一団に出くわした。
すぐさま魔兵とともに撃退しながら、ますます恐怖に煽られた。
ティアが去った森のそこかしこに兵がいた。間違いなくティアを捜索し、追っているのだ。いったいなぜ兵がそんなことをするのか、まるで分からなかった。
ああ、お前たちが追っているのは、ただの娘なのだ。力を棄てた娘なのだ。
頼むから、やめてくれ――あの娘を旅立たせたのは、自分なのだ。頼む――
懇願とも、怒りともつかぬ気持ちに駆り立てられるようにして兵を叩き潰しながら、ジークはただひたすら祈った。あの瑞々しい澄んだ香りがどこかで感じられることを。

ティアが力を使って、無事に逃げていることを。
森のそこら中が血で染まった。肉体が砕かれ、命が滅ぶときの生臭い血風が吹き荒れた。
早くこの地獄から解放してくれ。心の底からそう願った。もう沢山だ。もう二度と、繰り返されるのだけは御免だ。いったい何度、それを繰り返せば良いのか――
ジークはただ森を奥へ奥へと走り、見つけていた。
点々と続く血の跡――放たれた矢が木や地面に刺さり、辺りには何の香りもしない。
周囲の兵を撃滅させながら、ジークは、よろよろとその血の跡を追った。
やがて、その場所に来た。
そこに、この世の呪いの全てが集まったかのような光景があった。
大きな樹の下に、何本もの矢を受けて血で染まったティアが、横たわっている。
ジークは、なすすべもなく、そこに立ちつくした。
「……ジーク様」
ティアの目が見開かれ、右手が震えながら上がった。ジークにはいったいティアが何をしているのかも分からない。ティアの袖から、香炉が現れて揺れた。
たちまち瑞々しい澄んだ香りが広がった。
なぜ、今さら――ジークが呆然と思った、そのとき。

突然、背後で、呻き声が上がっていた。
はっと振り返ると、領主と数名の側近が背後に潜み、弓を構えているではないか。
その側近の一人が、いきなり、隣にいた仲間を射抜いたのだ。
それがティアの最後の力となった。ティアの右手が、力無く地面に落ちた。
領主が、香りで操られた側近を斬り殺し、慌ててそいつから弓を奪って構えた。
「聖王の犬めっ！」
怒号を上げる領主の胸を、ジークの投げ放った剣が貫いた。矢がジークの足下の地面に刺さり、領主がどっと仰向けに倒れた。残りの側近たちに向かって凄魔が殺到した。
ジークは胸の奥が凍りつくような思いでティアへ歩み寄り、その傍らにひざまずいた。
「ティア……」
ティアは薄く目を開き、微笑した。
「良かった……無事で。力を……あなたの……ためなら……許して……下さると……」
ひどく弱々しい声が、ジークを打ちのめし、
「なぜだ……なぜ、力を自分のために使わなかった……」
だがティアは微笑したままでいる。それがさらにジークを絶望の淵に叩き込んだ。
ああ、分かっていたではないか。この娘は、そもそも自分のために力を使ったことなど

無いのだ。もしあるとするならば、それは死を選んだときだけ――
何よりティアはジークとの約束を守ろうとしただけなのだ。
力を棄てるということを、その身をもって証明するために。最後まで――
ジークは、ティアをそっと抱きかかえた。他にどうしようもなかった。
「初めて……触れてくれた……」
ティアが言った。
「嬉しい……。私のために……泣いて下さって……」
ジークは、ただただティアに苦痛を与えぬよう、出来る限りの優しさで抱いた。
「ジーク様……私、一人で歩いたんです……」
ティアは言った。何か素晴らしいことでも報告しようとするように。
「名前も無いまま……ただ遠くに向かって……。本当に……楽しかったぁ……」
初めて見る、ティアの一片の翳りとてない、晴れやかな微笑だった。
ジークはうなずいた。何度も。ティアを褒め称えるように。
「私……幸せです……。きっとあのまま、歩いてたら……怖くなったり、不安になったり
……でもきっと、あの楽しさ……忘れずに……どこまでも……。もっと早く……力……棄
てられたら……。私……もっと……遠くまで……」

ティアの手が、そっとジークの胸に触れた。
「もし、私のような人が……また、あなたの前に、現れたら……ただ……遠くを……目指して……その人が……あなたを通して……もっと……遠くを……見られるように……」
「ああ……」
やっとの思いで声を振り絞った。
「その人に……教えてあげて……下さい……私が、やっと……分かったこと。力より……もっと大事なもの……」
「ああ……約束する。ティア……必ず」
ティアは、目を閉じた。
「あなたの……悲しみが……好きでした……」
ジークの胸を、ティアの手が滑り落ちていった。
「最初に、あなたを見たときから……あなたのことが……ずっと……」
最後の吐息が零れて消えた。かすかに澄んだ香りがした。もう何の力も持たない、瑞々しく澄んだ、心宥めるような良い香りだった。
ジークは、ティアの体を横たえ、立ち上がった。
森のそこら中から、殺気が吹き寄せてきていた。

ジークは倒れた領主へ歩み寄り、その胸を貫いたまま墓標のように立つ剣を、握った。
耐え難いほどの悲しみが、天から降り注いで自分を粉々に押し潰すようだった。
自分は、この期に及んで剣を握っているのだ。力を棄てられずにいるのだ。
「教えてくれ……ドラクロワ……。どうすれば、これを終わらせられる……」
天に向かって哀願するようにして、剣を遺体から引き抜いた。
兵士の一団が木々の間から現れた。魔兵たちがジークのもとへ集う。
ジークの口から言葉にならぬ叫びが上がり――自ら先頭に立って敵軍へ駆けていった。

4

ジークは、夢が、最後の記憶を辿るのを感じた。
戦いののち――
ジークは、ティアを、あの大きな樹の根本に葬った。
ティアが、心の底から楽しかったと告げた場所。その足が、最後に辿り着いた場所に。
それから聖都に戻り、聖王に経緯を語った。聖王は、ジークがティアを斬ったことにし、それで通すようジークにも言い渡した。例の、聖女たちへの牽制のために。
事実、聖女たちは完全にジークとドラクロワから手を引いた。特に、香りの力を破り、

〈香しき者〉を斬ったジークにはもう関わるなと、自分たちで手出しを禁じた。
ティアの遺髪は〈銀の乙女〉に渡された。
あの書き置きは、埃を払って綺麗にした本棚の間に置かれ、二度と開くことはなかった。
ジークは、またしばらくの間、騎士でありながら従士のいない身となった。
聖都に戻って数日後――ドラクロワとの面会が許された。
「策を授けた後……あの娘は、私に、こう言ったのだ。もしこの私が牢を出ることがあるのなら、この聖法庁も、〈銀の乙女〉も、大陸中の国々も、全て滅ぼしてくれと……」
ドラクロワは、それまでよりいっそう暗い闇の向こうに座り、ジークに告げた。
「何の喜びもない、苦しみと悲しみだけの世界に、未練はないと……」
「それで……お前は何と言ったんだ、ドラクロワ」
「何も……。ただ、そうしようと約束しただけだ」
「……俺が、ティアと交わした約束は、それとは違うものだった」
「それで良い……お前には、お前の役目がある。そのために、力を振るうがいい。きたるべきときのために。お前の力が、より大いなる秘儀の一部として働くときのために……」
「そのときは……棄てられるのか。そのときこそ、剣を棄てられるのか、ドラクロワ」
ジークは鉄格子を握りしめ、闇の奥に座るドラクロワに向かって訊いた。

「そうだ……ジークよ。そのときこそ、我らは、全てを捨て去ることが出来るのだ」
闇の奥で、ドラクロワはそう囁いていた。ジークはうつむき、その言葉の意味を考えた。
そして――周囲の光景が遠のき、夢が終わった。

ジークは、現実の世界で、ゆっくりと目を開いた。
目覚めてのちも、悲しみと怒りの余韻が、まだ胸の奥で響いている。
身を起こすと、どうやらトールがかけたものらしい毛布が、滑り落ちた。
立ち上がり、窓を開いて外を見た。夜明けの霧が、街路に立ちこめている。
どこからか、甘い香りがした。ティアが死んだときに敵から感じたのと同じ香り――
それが誰のものであるか、今、ようやく悟っていた。
ティアは、誰が敵を操って戦いに駆り立てていたか、知っていたのだろうか。
知っていて、力を使わず――
ジークは、そっとかぶりを振った。何よりも大事なのは、ティアとの約束の方だった。
「ノヴィア……。お前に……伝えることがある」
都市のどこかにいる少女に向かって、小さく呟いていた。

フロレスは夢から覚めると、慌てて己に香りをかがせた。
もっと忘却の香りが欲しい——右手の指があれば、もっと強く放てるのに。
その額にびっしりと冷たい汗を浮かばせている。その口が、くくっと笑いを零した。
「あはっ……あぁっ……あああっ……」
のけぞった喉笛が、引きつった笑いを発した。目はとめどなく涙を流している。
笑いながら泣き、必死に己に香りをかがせた。ようやく一切の痛みが忘却された。笑いが消え、涙が止まった。そうして、傍らで眠るノヴィアを見た。ぎらついた目だった。
この少女を虜にしておいて、本当に良かった——
フロレスは、今後のことだけを考えた。この少女を利用してジークを殺したら、また全てを忘れよう。いや——今度こそ本当に全てを忘れ去るのだ。自分に妹がいたという記憶さえ消して。それから後も、ノヴィアを利用して、我が身の安全をはかろう。
〈銀の乙女〉も聖法庁も、頼りにはならない。何せ、増殖器を勝手に使ったことで、ドラクロワが自分を消しに来るのだ。香りの力が効かない、恐るべき男が。
逃げ場はただ一つ——聖地シャイオンだ。レオニスが言うように、あの土地を第二の故郷とする。ノヴィアを使ってレオニスを操り、あの土地を我がものにするのだ。
聖地シャイオンの真の女王となる自分を夢想しながら、フロレスは懐の書状に触れた。

血で染まった書状――これとノヴィアさえ手中にあれば、たやすく操れるだろう。
ふと、ノヴィアが目覚めた。涙で濡れた目で、悲しげにフロレスを見上げた。
「姉さん……」
途端に、フロレスの脳裏にティアの面影が甦り、忘れていた苦痛が噴き出しかけた。
フロレスの手が翻り、ノヴィアの頬をひっぱたいた。
ノヴィアは、なぜ叩かれるのかも分からないまま、ひどく怯えた顔で後ずさった。
そのノヴィアを、フロレスはすぐに詫びるように抱きしめた。香りが漂い、フロレスとノヴィアを包んだ。フロレスは苦痛を忘れ、ノヴィアは自分が叩かれたことを忘れた。
「姉さん……？」
ノヴィアは、フロレスに抱かれていることに初めて気づいたような声を上げた。
「おはよう……ティア。食事の用意をしましょう。それから湯を沸かして身を清めるの。そしてあの男の血を浴びた後で、また湯を浴びましょう……全てを忘れる香りと一緒に」
何もかもを綺麗にするために――ノヴィアの背を撫で、フロレスは優しくそう言った。

その頃――
アキレスは、朝靄の中を移動し、都市の南側に来ていた。

噴水が吹き飛んだ跡に、ぽっかりと大きな穴が空いている。その中の様子を探り――見つけた。魔獣の群が、ざわざわと地下道いっぱいに、ひしめいているのだ。

たった一晩で、大蜘蛛はまたこれだけの魔獣を生み出したのだ――その増殖器で。

「一緒にジークと戦うなら、こちらの方が、よほど気が合うというものですね」

脳裏にトールの顔が浮かんでいた。味方として扱うには実に面倒な青年だが、そのトールに遅れを取っているのは確かだ。忘却の力から、まだアキレスは脱していないのである。

だがそれも、ある程度、相手の戦法を察していれば、対処は可能である。

「ジークともども、周りにいる者を全て殺し、その血を吸えば良いこと……」

そう囁くと、アキレスは大蜘蛛の姿を捜して、再び都市を移動し始めた。

「やつは地下にいるだろう。群を作りだして襲撃に備えているはずだ」

ジークが言った。大蜘蛛のことである。トールは律儀に朝食を用意して並べながら、

「いつ魔獣が来るか分からない状態で、ノヴィア様と……フロレスと対決するのですか」

「ノヴィアを呼び戻して、ともに魔獣と戦ってもらう」

淡々とジークは言った。どうやって、とトールは訊きたかったが、別のことを口にした。

「あなたの従士……フロレスの妹は、あなたが斬ったのですか？」

その言葉で、パンをかじっていたアリスハートが、ぎくりとなった。斬った斬られたという話はつくづく苦手なのである。しかもこれからノヴィアを敵の手中から取り戻しに行くのだ。ジークがノヴィアをどうするつもりか、不安になってくる。

ジークは別段、アリスハートとトールを安心させようという風もなく言った。

「殺したのは、俺ではなかった。俺はただ彼女を葬るしかなかった」

では誰が殺したのか――？　トールが目で訊いた。ジークは答えない。

「死んだ従士との約束を果たしに行く。お前は手を出すな、トール」

ジークはただ厳しくそう言いつけた。そして食事を終えてしばらくした頃――

ふいに街路に漂う霧が、甘い香りを帯びるのを、ジークもトールも感じていた。

ジークが無言で立ち上がる。トールは、不安そうなアリスハートを優しく肩に乗せ、ジークの後について建物を出た。これでは、まるっきりジークの仲間である。アキレスが見たら、また裏切り者呼ばわりするだろうが、今はこうするしかなかった。

「あの香りの力…自分から抜け出ようと思わない限り、抜けられないのでしょう？」

トールが言う。ジークはうなずいた。香りに包まれた当人がおかしさを自覚しない限り、脱出するすべはない。だからこそ全てを疑い、気づかぬうちに香りに囚われた自分を見つけねばならないのだ。だが果たしてノヴィアに、それが出来るのか――

「あいつは既に答えを知っている……俺はただ、あいつが忘れたものを、あいつ自身に思い出させるだけだ」

ジークは言った。それが、ティアとの約束を果たすことになるはずだった。

香りが流れてくる方へと歩み、やがて城のすぐふもとにある広場に来た。

ずん！　シャベルを突き立て、その柄を回し、剣を抜き放つ。そうして霧に浮かぶような城を見上げた。この戦いが始まった場所を。トールが無言で、すっと何歩か下がった。

アリスハートが固唾を呑み、傷ついた羽をかすかに震わせた。

にわかに――来た。

霧の向こうで黄金色の輝きが起こった。次の瞬間、凄まじい勢いで、矢が飛来した。

ジークが寸前で身をかわす。矢が胸元をかすめ、白外套の襟が僅かに裂けた。

その矢が地面に深く突き刺さると同時に、次の輝きが来た。先ほどとは別の角度である。

分厚い霧の壁を突き抜けて迫る矢を、ジークが剣で切り払った。

矢が砕け、ぱっと金に輝く塵となって消えた。

そしてその塵と同じほどの数の輝きが、霧の向こうで一度に起こった。

まるで金色の豪雨が降り注ぐようだった。ざあっと矢が群となって奔る音に、トールとアリスハートが愕然と息をのんだ。しかも全て別の角度から正確にジークを狙ってくる。

ジークが走った。それを追って、矢が立て続けに地面に突き刺さる。
残りの矢が、軌道を変え、前後左右から襲ってきた。
かつてこれほどの数の矢を、こうまで自由自在にノヴィアが具現したことはない。
ジークは矢をかわし、剣で払い、籠手で弾きながら、すぐさま広場を出た。
複雑に折れ曲がる階段を駆け、街路を跳び渡り、城へと登ってゆく。
そのジークに追いすがろうとして、壁や階段に金の矢が突き刺さっては消えてゆく。
「ど……どこ行くのよぉ、狼男ぉ。ノヴィアはどこにいるのよぉ」
霧の向こうへ消えるジークに、アリスハートがおろおろと声を上げた。
ジークの位置はすぐに分かる。霧の影で、金の輝きが、きらきら光るのだ。ジークがどこへ走ろうとも、矢が正確に追いかけてゆくのである。
「これほどとは……」
トールも思わず呻いた。ノヴィアからはジークが見えるが、ジークにはノヴィアの居場所を探す手段はない。とにかく矢が飛来する方角を読み、駆け回るしかなかった。
だが矢はいったん散開してから、複雑な弧を描いてジークへ殺到してくる。
とてもどの矢がノヴィアの居場所を示すものか、判別つかない。
ジークに出来ることは逃げるか――魔兵を招くかである。

だがジークの左腕は沈黙を保っている。ただ一人でこの雨のごとき矢と戦う気なのだ。
トールはそのジークの態度が続くことを祈った。もしジークが己の命を優先し、魔兵を展開させてノヴィアを追いつめたらどうなるか。ノヴィアが単に取り押さえられるだけならいい。万が一、猛り狂った魔兵がノヴィアを八つ裂きにしたら――
トールは一瞬、ばらばらになった少女の姿を想像して、ぞくっとなった。天性の暗殺能力を頼りに戦ってきた自分が、何を今さらと思う。だが肩にアリスハートが乗っていると、それだけで忘れていた怖さや悲しみが、後から後から湧いてくるのだから不思議だった。
そのアリスハートが、低い声で何やら呟いていることに、ふとトールは気づいた。
「アリスハート……？」
呼びかけるが返事はない。アリスハートは、ただ霧の向こうに目を向け、
「頑張れ……狼男っ。頑張れ……頑張れ……ノヴィアっ」
なんとノヴィアとジークの、二人の応援をしている。トールは呆気に取られつつも、すぐに理解した。ノヴィアもまた、己の心と戦っているのだ。香りの力に囚われたことのあるトールには、それがよく分かった。
やはりアリスハートは正しい。
そんな風に思いながら、トールは、金の輝きがきらめく霧の彼方を見つめていた。

城を背にして立つノヴィアの中で、何もかもが悲しく怨みに満ちていた。
名も無いまま置き去りにされ、母が自分を残して死に、その母を殺した者への怨みが、溶け合って渦を巻くようだった。そしてその渦の中心に、
(なんで何も言ってくれないの――)
ジークの姿が、あった。自分を戦いに連れて行きながら、途中で置き去りにし、そして何の希望もない戦いを、自分に見せた男。
あの男が、ノヴィアの母の仇なのだと、フロレスは言った。ノヴィアはそれを信じた。
あの男が、ノヴィアを置き去りにしたのだとも言った。ノヴィアはそれを信じた。
あの男が、ノヴィアに全ての悲しみをもたらしたのだ――ノヴィアは何の疑いもなくそれを信じた。姉だと告げる女に言われるがまま、この悲しみから早く抜け出したくて。
(何も言ってくれない)
心が欠ける寒さに、手も足も、ひっきりなしに震えていた。歯を食いしばり、胸を凍らせる思いに耐えた。ジークさえ殺せば全てが終わるのだと信じて、ただただ矢を放った。
(何も――)
「私が……見ています」

ふと呟きが零れた。その意識せぬ言葉が、さらに悲しみを増した。

「あなたを……見ています」

いずれ力尽きて暗闇に落ち込んでも、心は、あの男を見ているだろうと思った。

だがそれでもジークがこちらを見ることは決してない。それが分かって胸が痛んだ。

いつでも自分の視覚は一方的なのだ。それでも自分にはこの力しかなかった。必要とされるのはいつもこの力だ。これがなければ自分にはいったい何が残されるというのか。

誰も自分の名さえ呼ばなくなる――また、それが繰り返されてしまう。

そんな悲しみに震えながら、ノヴィアは、ジークの姿をどこまでも見た。

ふいに、ジークが矢を払いながら、こちらを向いた。戦いの気迫に引き締まった顔を、ノヴィアは正面から見た。悲しみが胸をつき、それを吐き出すようにして矢を放った。

そのときである。ノヴィアは突然、異常な事態に見舞われた。

ジークの顔が、まだこちらを向いていた。

まるでノヴィアがジークを見るように、ジークもまたノヴィアを見ているようだった。

そんなはずがない――

ノヴィアは慌ててその考えを振り払った。だがジークは依然として矢を避けながら、こちらへ顔を向け続けている。ノヴィアが得体の知れない恐怖に襲われたとき――

「お前が本当に見たいものは何だ、ノヴィア！」
ジークの烈声が、響き渡った。
その目が、今やはっきりとノヴィアに向けられていた。

「お前が見たいものは、この矢か！　お前の見たいものはこれか、ノヴィア！」
ジークは、矢が体をかすめるのも構わず、猛然と階段を駆け上がってゆく。
「お前の力は何のためにある！　お前が矢を見るのは何のためだ！」
階段を登り終えるなり狭い街路へ飛び込み、目指すべき場所へ向かって最短の道を選んで駆けた。そうしながら、その口は立て続けに叫びを上げている。
「お前の母は何のために死んだ！　お前は何のために旅に出た！」
そして目は鋭く彼方へ向けられていた。決してジークの力では見えぬはずの相手――
「お前が今そこにいるのは何のためだ！　疑え、ノヴィア！　全てを疑え！」
正しくノヴィアのいる場所に向かって、今やジークは何の迷いもなく駆けていた。
トールの考えは一つだけ間違っていた。ジークには確かにノヴィアの位置を探す力はない。だが、方法はあった。他ならぬノヴィアの視覚――その聖性に意識を向けるのだ。
かつて何度もジークの堕気を宥めてくれた聖性だった。



荒れ狂う力への欲求さえ静めてくれたその視覚に、今はっきりと応えるかのように、
「お前の目はどこを向いている！　お前は本当に俺を見ているか、ノヴィア！」
そう、凄烈な叫びを放っていたのであった。

まさか――なぜ、自分の居場所が分かったのか？
ノヴィアは必死に矢を現しながら、混乱と恐怖に襲われた。
もしジークの視線が自分に向けられていなければ、何を叫ぼうとも聞く耳を持たなかったはずだ。今、見られているという衝撃が、ノヴィアの心を激しく揺るがしていた。
「私は……ティア……」
それが自分の名前のはずだった。姉がそう自分に告げたのだ。自分はそれを信じた。
違う――ふいに疑念が起こった。自分の名。いったい自分の名は何なのか――
その疑念が最初の呼び水となり、にわかにノヴィアの心が、疑いに満ちた。
自分が本当に見たいものは何だったのか。自分はいったい何を見てきたのか。本当に自分はそれを見たのか。そもそも、なぜそれを見ようとしたのか。
「私……私は……」
「お前が今見ているものは何だ、ノヴィア！」

男が叫ぶ。少女は悲痛な顔で、両手を耳に当てた。それでも声が届いてくる。
「私……」
「今そこにいるのは本当にお前だけか！」
なおも矢を放ちながら、ノヴィアが愕然となる。
「私……一人で……」
姉はいったいどこにいるのか。いつの間にか姉がいなくなっていたのはなぜか。
そもそもあの姉はいったいいつから自分のそばにいるのか。
「お前はなぜ旅に出た！　誰と旅に出た！　何を求めて！　どこへ向かった！」
「友達……」
言葉が自然と零れた。それが自分の求めたものだと、口にしてから気づいていた。
「光……」
決して変わらぬものに従って——言葉が無意識に口をついて出てくる。
「遠くへ……」
ノヴィアは、矢を現すのをやめた。
「私……一人……じゃない……？」
呆然と呟いたとき、ふいに甘い香りがした。喉の渇きを覚えるほどの強烈な甘さ。先ほ

どからずっと感じていたのに、意識から消えていた香り。そして同時に——
「血の……匂い……?」
鮮やかなまでのその香りが己から発されていることに、気づいたのだった。
突然——ノヴィアの背後で、気配が起こった。
「そんな……馬鹿な……」
女の声が頭上から響いた。ノヴィアが振り返る。すぐ背後にそびえ立つ城の窓——
そこに、蒼白となったフロレスがいた。
「あなたは……」
ノヴィアが何かを言う前に、フロレスの姿が、ふっと幻のように消えた。
同時に、香りも消えている。だが疑念は強く残ったままだ。
ノヴィアは目に見えない力が、自分の心を握りしめてくるのを感じた。いったい自分は何をしているのか、何を考えていたのか、また分からなくなった。
「悲しみを消しなさい、ティア！　あなたとあの男の悲しみを、命ごと消しなさい！」
そういう言葉が、ノヴィアの心の中に一瞬で入り込んだかと思うと——
「疑え、ノヴィア！　お前が本当に見たいものを見るために、全てを疑え！」
もの凄い叫びが、すぐ背後で響いていた。

ノヴィアが愕然と振り返る。強い怯えの色が、その顔にありありと浮かんだ。
ジークは階段を登り終え、ノヴィアがいるのと同じ場所に立っていた。
城の東側にあるテラスである。都市を一望出来るほどの高さだ。
ジークは足を止め、ノヴィアと向かい合った。
互いに十歩ほど離れた距離だった。強い恐怖を目の前の男に感じながら、ノヴィアはふいに、この対峙を、かつて経験したことがあるような思いにとらわれていた。
置き去りにされる悲しさ——それに抗うために、自分は決めたのだという思い。
その思いが心に甦るが、すぐさま強い力が流れ込んできてその意識を封じ込めにかかる。
「お前が見たいものは何だ……ノヴィア」
ジークが歩み寄った。かつて経験した対峙とは違う。あのときは、ジークも自分も互いに一歩も動かなかったはずだ。そう思った途端、ノヴィアをさらに強く恐怖がとらえた。
何も考えず、眼前に意識を集中させた。
「矢が……見えます」
必死の声で言った。ひときわ大きな黄金色の矢を現し、ジークの足を止めさせた。
「それが……お前の見たいものか」
ノヴィアは応えない。ただ得体の知れない恐怖に支配されていた。自分の信じていたも

のが——信じ込まされたものが、一瞬で崩れ去り、心が砕け散ることへの恐怖だった。

「お前の力だ……自由に使え」

ジークは言った。ひどく淡々としたその声音に、ノヴィアがはっとなった。

何かひどい悲しみが胸をつくようだった。その悲しみが、いっとき恐怖を忘れさせた。

「お前が見たいものを見ればいい……ノヴィア」

はっきりとその名を呼びながら、いきなりジークが歩を進めた。

「来ないでっ!」

ノヴィアが叫び、矢がにわかに放たれた。ノヴィアが何かに矢を放つのも、ジークがその矢を受けるのも——かつてこれほどの近さで行われたことは無い。

ジークの剣が僅かに持ち上がり、止まった。そのときにはもう矢が胸元へ達している。

ノヴィアは、ただそれを見た。

金の輝きが、ジークの胸を貫き——突き抜けた。

血の香りが、辺り一面に飛び散るようだった。

5

「輝きが……消えた」

トールが呟いた。あれほど乱(みだ)れ飛んでいた矢が、ふいに消えたのだ。

ジークがノヴィアを止めたのか？　それとも逆(ぎゃく)に、矢に討(う)たれたか――！

「あたし、行ってくる」

きっぱりとした調子でアリスハートが言った。そんな破(やぶ)れた羽で飛んで行くというのか。

トールが、自分が連れて行くと口にしかけたときである。

ふいに強い気配を、とらえていた。殺気を持った者が、この近辺を移動(いどう)しているのだ。

香りの力から脱(だっ)したため、自分の能力(のうりょく)が最大限(さいだいげん)に発揮(はっき)されるのを、トールは自覚した。

「分かりました……私も行くところがあります」

「あらぁ……。あんたが連れてってくれるかなぁ、とか思ったんだけどねー」

アリスハートが正直(しょうじき)に言って笑った。トールも微笑(びしょう)して頭を下げる。

「申し訳(わけ)ありません」

「良いの良いの。また後で会いましょうねぇ」

破れた羽を何とか震(ふる)わせて、アリスハートが飛び立った。

「あんたも気をつけてねぇ。それ以上、怪我(けが)したらレオニスが悲しむわよぉ」

城(しろ)の方へ危(あぶ)なっかしく飛んでゆくアリスハートに、トールは手を振(ふ)って返し、

「全(すべ)ては……レオニス様のために」

鋭く顔を引き締め、先ほど感じた気配を追って移動した。同時に、ざわめきを感じた。

何かが続々と動き出すような気配が、ぴりぴりと伝わってくる。

「魔獣たちが行動を始めた……？」

だがどこにもそんな動きは見えない。トールは無人の街路を、音もなく走った。

城の南側で、ふとその気配が、動きを止めた。

トールはするすると狭い街路を進み、建物の陰から相手を見た。

アキレスが、悠然と階段の上に立ち、街を見ている。

トールは手を翻して、堕気と聖性を混ぜ合わせて鋼を現しながら、

「どこへ行くのですか」

こだまのような声を放った。だがアキレスは微動だにせず、笑みを浮かべている。

そして突然、アキレスの体に亀裂が走り、氷の破片となって砕け散ったではないか。

囮だ――自分をおびき出すための。咄嗟に身を翻そうとしたとき、足下や背後の壁から、

幾重にも槍のごとき氷柱が生えて、トールを串刺しにすべく迫った。

レオニスが悲しむ――というアリスハートの声が、どこからか聞こえるようだった。

「なぜ……」

ノヴィアは目をみはった。自分が見ているものが信じられなかった。
目の前が真っ赤になるかのような濃い血の香りが、辺りに漂っている。
にもかかわらず、ジークはそこに立っていた。確かにその胸を、金の輝きが貫いたはずなのに、倒れもしない。それどころか、はっきりと口に出してこう言ったのだ。
「お前はただ、見たくないものを見なかっただけだ……ノヴィア。初めて会ったとき、お前が光を閉ざしていたように」
光――その言葉がノヴィアにひどく苦しい、痛切な思いを呼び起こさせた。
「私は……見なかった……？」
聖性がジークの身を通り抜けただけなのだ。矢が幻に戻って。そして苦しいのは――心が砕けたせいだ。それらがいっぺんに理解されて、呆然となった。この血の香りは自分の心が発するもの。そして――その苦しさの向こうから、何かが現れようとしていた。
「見たいものを見ろ……自由に力を使え。もしそれでお前が罪を犯したなら……俺がともに、その罪を背負う……」
ああ、そうだったのだ――
ノヴィアは目を閉じた。光を閉ざすのではなく。相手の言葉を、はっきりと聞きたくて。
「お前が何を見ようと勝手だ。何でも見ろ。ただ、その二つの力でお前が見るとき……い

見ているのは自分だけではなかった――
「そこに、お前の聖性がやどる……それを忘れるな」
ジークもまた、自分を見てくれていた。だから、何も言わずに――――
ノヴィアの心の深い部分で、安堵が訪れた。温かな吐息が零れた。
「お前は、自分の意志で決めることが出来た……俺が教えるまでもなく」
ノヴィアは、ゆっくりと目を開いた。
「お前は一度、自分から全てを捨てた。称号を、紋章を、その力さえも」
そう告げる男を、静かに見つめた。自分が見たいもの――見続けたい相手を。
「名前さえ無いまま歩む喜びを……お前は自分で見出した」
血の香りの鮮やかさとともに、答えが現れた。誰も自分を呼ばない寂しさが消え、ただ無名の自分が歩いてゆく喜びだけがあった。名づけようのない心の源がその歓喜に震えた。
「その力がまだお前のもとにあるのは、より遠くをお前に見せるためだ……ノヴィア」
「遠くを……」
「お前は、遠くを見ればいい……。多くを見て、そこに辿り着けるように」
そう言って、ジークは、懐から短い杖を取り出し、
「教えて下さったからです……あなたが私に……多くを教えて……」

おずおずと宝杖を受け取りながら、ノヴィアは言った。
「私を……見てくれて……だから……力を棄てて……新しい杖を手に入れることが……」
涙が溢れた。視界がぼやけ、ジークの姿が霞んだ。はっきり見たくて目を伏せてまばたきし、再び見上げた。そして突然——ノヴィアはそこに、違うものを見ていた。
「矢が……見えます」
その口が、はっきりと声を放った。ジークの目が、かっと見開かれた。
金の矢が、猛然と迅った。はっきりと、相手を刺し貫く意志をこめて。

幾重にも氷柱が生え出すや——凄まじい音が、街路に響き渡った。
まるでトールを中心として何かが爆発したかのようだった。石畳も壁もごっそりと抉られ、砂煙が上がるとともに——砕かれた氷のかけらが、そこら中にまき散らされた。
トールは、目を見開いてそこに立っていた。その体には、傷一つない。
代わりに、その手から鞭が消えている。ほとんど一瞬の、本能に任せた動作だった。
右手で鞭を舞わせると同時に、左手で柄を叩き——堕気と聖性を分解したのである。
その結果、鞭がばらばらの鋼の破片となり、とてつもない弾力のままに飛び散ったのだ。
無数の針が、四方八方に凄まじい速度で撃ち出されたようなものである。それが石畳も

壁も氷もろとも吹き飛ばし、抉り、削った。トール自身が呆然となるほどの威力だった。
フロレスとの戦いで、香りの力に翻弄されたときに起こった現象を、今度は己の武器として転用したのだ――そのことに、危機を逃れてから初めて気づいていた。
「あなたには、少し、怪我をして、静かにしていてもらおうと思ったのですが……」
通路の向こうに、アキレスが現れて言った。冗談だとでもいうような軽い口調だった。
「なるほどねえ……あなたの鞭には、そういう使い方も、あるのですか」
にたりと笑った。昨夜、トールに、早く死ねと告げたときと同じ目をしていた。
「殺されるかと思いました」
素直にトールは言った。何の感情も無くアキレスを見た。
「どこへ行くのですか？」
「ジークが、自分の従士と戦っているのです。好機とは思いませんか？」
「ノヴィア様に危険が及ぶ可能性があります。手出しは控えて下さい」
「言うと思いましたよ……。まぁ、私の本命は、これからですがね……」
アキレスが、くすくす笑って、城を見上げた。その頬に、ぴしりと亀裂が走った。
またもや氷となって砕ける様に、トールがはっとなる。時間を稼がれた。そう悟ったときである。アキレスの氷人形が崩れる寸前に見ていた方角に、何かが現れていた。

夜が訪れたかのような、巨大な影――
あの大蜘蛛が、霧に包まれた城の頂上から、にわかに飛び出したのだった。
突風さながらだった。金の矢が、ジークの顔のそばを走り抜けた。
ジークはただ、ノヴィアを見ていた。
明らかにそれまでとは違う、はっきりと自分自身の意志を持った、ノヴィアの表情を。
ノヴィアはジークを見ずに、宙を見上げている。そのことにジークが気づいたとき――
矢は、突如として頭上から襲いかかってきた大蜘蛛の頭部に、吸い込まれるようにして
突き刺さったのだった。
ジークが、はっと見上げた。大蜘蛛が、完全に気配を絶ち、迫っていたのだ。
赤い複眼の一つが、矢に貫かれている。大蜘蛛が、初めて凄まじい咆吼を上げた。
その巨体からは信じられないほどの敏捷さで壁を蹴り、霧の向こうに跳び去った。
「お、大きな魔獣です……ジーク様！　巣が近いのでしょうか!?」
ノヴィアが叫んだ。その目が、大蜘蛛の去った方を向いている。
「あ、あれ……？　巣が……いつの間にか……消えています。どうして……」
おろおろとジークを振り返った。

「……ノヴィア」
「はい……。ジーク様……」
「今は、幾つ目の巣を攻めているところだ？」
ノヴィアは、自分が何か失敗でもしたかと、不安そうに首をすくめ、
「ふ……二つ目です。都市の南側で……男の人が血で字を書いていて別行動に……それで私、他に誰かがいたような気が……。あ、あれ……なんで私、こんな高い場所に……」
ジークが何かを言おうとしたとき、ふらふらと金に輝くものが霧の向こうから現れた。
「ノヴィア、ノヴィア、ノヴィアーっ！　良かったー無事でーっ！」
アリスハートが、危なっかしく宙を舞いながら、ノヴィアの胸元に飛び込んでくる。
「いつの間に、どこへ行って……アリスハート、ど……どうしたの、この羽!?」
アリスハートを受け止め、ノヴィアはすぐさまその手に聖性をあらわしている。
ふわっと羽が生え揃い、アリスハートが喜びと安心感で、わっと泣き出した。
「良かったぁ……ノヴィアも羽も、元に戻っててぇ」
「いったい、どうなってるの……私……」
「ずうぅっと夢を見てたんだよぉ、ノヴィアぁ」
「夢……」

思わずその言葉に引き込まれたようになるノヴィアに、
「巣は全て俺が潰した。まだ増殖器は見つかっていない。さっきの大蜘蛛が増殖器を使って魔獣を増やしているらしい」
ジークが淡々と事態を説明した。ノヴィアは呆然となった。
「こんな少しの時間で、全ての巣を……？　凄いです……ジーク様」
アリスハートが慌てて説明しようとするが、ジークは構わず言った。
「大蜘蛛が群をつれて来るぞ。ノヴィア、辺りを見ろ」
「はいっ」
ノヴィアは急いでアリスハートを胸元に入れさせ、宝杖を握りしめて万里眼を発揮させた。妙に心が軽かった。戦いの真っ最中だというのに、わけもなく嬉しい気持ちがする。
「何でだろう、戦いが好きになっちゃったのかな……」
ちょっと心配になった。そのときノヴィアの目が、地下から来る大量の魔獣の姿をとらえた。思わず、ぞっとなる。戦いが好きだなどと、とんでもなかった。
「下から沢山来ます！　地面が……崩されてます！」
ジークの左腕に雷花が閃いたとき——突然、それが起こった。
周囲の建物が土台を失い、次々に倒れたのだ。テラスに亀裂が走り、足下が大きく揺れ

た。ジークはいったん雷花を収め、左腕でノヴィアを抱え、跳んだ。

ノヴィアがびっくりしてしがみつく。その直後、テラスのあった地面が割れた。

「俺の力を読んでいる……」

南側へと走りながら、ジークが呟く。崩された地面を掘り抜いて、わらわらと魔獣が現れる。大地を通して魔兵を招くジークから、地面そのものを奪いに来たのだ。

「ジーク様、う……上です！　上にあの大蜘蛛が……！」

ノヴィアがジークの腕の中で叫んだとき、頭上で、かっと眩い輝きが起こった。

「雷……？　いや……増殖器か！」

雲霞の向こうで稲妻が閃き、青白い輝きとともに魔獣が現れ、次々に降ってくるのだ。

「城の頂上に、増殖器があったのか……」

素早く身を転じて頭上からの襲撃をかわし、崩壊する大地から逃げるジークに、

「ち……違います、ジーク様！　あの大蜘蛛です！」

ノヴィアが慌てて告げた。ジークはうなずいた。大蜘蛛が頭上にいることは、既に聞いている。だがノヴィアは、咄嗟にジークの襟をつかみ、大声で言い直していた。

「違うんです！　あの大蜘蛛が、増殖器なんです！」

恐ろしい、恐ろしい――フロレスは、荒れ狂う心を香りで封じながら、地鳴りの音が響く城を、よろよろと進んでいた。また自分の手から、大切な妹が失われた――大事な自分の身代わりが。その思いが、消したはずの記憶を、繰り返し意識させる。それが何より恐ろしかった。ティアを殺したのが本当は誰なのか。香りで城の兵の殺意を増長させ、姉である自分さえ棄てようとしたティアを襲わせたのは――

（許せなかった――自分を置いて行こうなどと――ティアが意志を持つなどと――）

フロレスは必死に、その記憶から逃げた。たとえどんなに歪んだ利己的な愛情だろうと、間違いなく自分はティアを愛し、その存在を心の支えにしていたのだ。

それを、まさか、自分が――

「あっ、あああっ……あああっ」

笑いが涙とともに溢れた。断たれた右手の指の痛みが、ずきりと起こり――消えた。同時に、記憶も消えていた。フロレスは、ただこれからのことを考えた。

自分の身代わりが消えたのであれば、それに代わる者を使えばいい。まだ一人――香りでとらえている者がいる。その者の位置も、香りの流れてゆく先を辿ればすぐに分かる。

すぐに、そこに辿り着いた。

アキレスが、城の一室に潜み、外の戦いを悠然と眺めているのだ。

フロレスの姿は、アキレスの意識から消えている。フロレスはゆっくりと近づき、
「いらっしゃい……。あなたを使ってジークを殺し、あの少女を取り戻す……」
そう囁いたとき、ふいに足下で、爆発的な堕気の気配が起こった。
慌てて跳びのくや、床から巨大な氷柱が生え、天井にまで伸びて突き刺さった。
アキレスが、おや、というような、やけにのんびりとした動作で振り向いた。
「ほう……そこにいるのですか。なんとも、私には全く見えませんがね。まあ〈蛭氷〉に、近づく者は全て食らうよう命じておいたので、そんなことは関係ありませんが」
フロレスは香炉を揺らし、聖性による香りを放って氷の怪物を追い払おうとした。
「うん？　香りがしますね。〈蛭氷〉を操る気ですか？　ふふ……この魔獣は、私が造り出したものでしてね。純粋な食欲の塊なのですよ。たとえ聖性に満ちていようと平気で食らいつき、その血を——力を奪うことしか考えない、とても無垢な怪物なのです」
氷柱から、ぞろりと氷の棘が生え出した。フロレスが青ざめ、身を翻して逃げた。
そのフロレスの背に向かって、氷の棘が触手となって跳びかかろうとしたときである。
城全体に凄まじい衝撃が走り、部屋がぐらりと傾いたのだ。壁に亀裂が走り、氷柱が砕けた。アキレスは膝をついて周囲に氷を現し、降り注ぐ瓦礫を防いだ。
轟音が異常なほど長く続いた。まるで雪崩のように城が崩れていった。

城が東側から、崩れてゆく。まさかこれほど周到に土台を崩しにかかるとは――ジークはノヴィアを抱えたまま、崩壊する地面から逃げるように走った。

いきなり尖塔が倒れてきて道を塞ぎ、ノヴィアが叫んだ。

「橋が……見えます！」

足下から横手の宙へと、たちまち白亜の橋がかかる。ジークはすぐさま橋を踏み、城の南側へとひた走った。崩壊が迫り、橋が傾く寸前、力の限り跳躍した。

アリスハートの悲鳴が長々と虚空に響いた。石畳に着地し、勢いに任せてそのまま何歩も進んでから立ち止まる。振り向けば、東側の城の頂上部分が轟音を立てて落ちてゆくところだった。なんと城の三分の一が、ごっそりと土砂崩れを起こして消えたのだった。

凄まじい倒壊の音が収まり、ジークはノヴィアを下ろした。

「……来ます」

ノヴィアが言った。崩壊した地面の向こうから、続々と魔獣が這い登ってくる。かと思うと背後の壁を、かつかつと音を立てて大蜘蛛が這い下りてきた。その腹が、にわかに青白い稲妻を発した。その輝きが次々に魔獣の姿となり、群となって降ってくる。

「互いに……似たような力を、持っていたか」

大蜘蛛を見上げるジークの左腕に、激しい雷花が迸った。高々とその手を掲げ、
「最後の決着をつけよう」
にわかに、魔獣どもが前後から殺到してきた。
ジークは烈声を上げて左手を地面に叩きつけ、巨人のごとき厳魔たちを招き出した。
「双子座の陣！」
言下、二つの斜線陣形が、それぞれ魔獣の群を迎え撃つ。戦いの騒乱が巻き起こる中、
「矢が、見えます」
ノヴィアが、震えるアリスハートをそっと胸に抱きながら、敢然と矢を放った。
黄金色の矢が、大蜘蛛に向かって鮮やかに弧を描く。
大蜘蛛が、矢を避けて宙に身を投じ、恐ろしく軽やかに地面に着地した。
ほとんど初めて、ジークと大蜘蛛が、同じ地面の上に立って対峙していた。
大蜘蛛は間髪を入れず、咆吼を上げて驀進してきた。二つの陣形の間隙を突く進撃だった。
ジークはすかさず左手に雷花を咲かせ、新たに砲魔の群を招き出している。
「獅子座の陣！」
迫り来る大蜘蛛に向かって、立て続けに砲火を放ちながら前進した。

大蜘蛛は止まらない。これまで攻めては退くことを繰り返してきた大蜘蛛が、全身に砲弾を炸裂させせながら憑かれたように迫ってくる。そしてジークもまた、大蜘蛛へと歩み寄った。

大蜘蛛の前脚が吹き飛んだ。背が砕け、顔面に砲火を食らい、それでも真っ直ぐ進んでくる。ジークの歩調が速まり、さっと駆け出した。なんと砲魔たちよりも前に出た。

「ノヴィアっ！」

いきなり名を叫んだ。しかし何の指示もない。ノヴィアはすぐにその意図を悟った。ジークと大蜘蛛の動きを見届けた上で、どう動けば良いか自分で判断しろというのだ。

ノヴィアは見た。ジークと大蜘蛛を。二つの怪物の、真っ向からの一騎打ちを。

部屋は完全に崩壊していた。一方の壁が崩れ、外の街が見えた。

アキレスは立ち上がって辺りを見回した。氷が大人しくしているところを見ると、香りを使う敵は逃げたらしい。崩壊に巻き込まれて死んだのなら氷が血を吸っているはずだ。

傾いた部屋から外に出ると、すぐ下でジークと魔獣が――あの大蜘蛛が戦っている。

にやりと笑った。絶好の位置である。隙を狙ってジークを襲うのだ。ふと氷がざわめき、

「今度は、氷の塊ではなさそうですね」

いきなり背後から声をかけられた。アキレスはぎょっと目をみはった。

「やれやれ……崩れ落ちる建物に、入ってきますかねえ……普通」

馬鹿にしたような笑みを浮かべて、振り返った。そこに、トールがいた。手から鞭をだらりと垂らしたまま、無言でアキレスを見つめている。

「どうやら私が思い通りに動くためには、まずあなたを殺さねばならないようですね」

アキレスの笑みが、殺気を帯びた。トールは影のように何の気配も無く佇んでいる。

そのとき——大蜘蛛の咆吼が、辺りに響き渡った。

一瞬だった。ジークの剣が振りかぶられ、大蜘蛛が凄まじい咆吼を上げて牙を剥いた。

激突するかに見えた瞬間、ジークは、前のめりに倒れ込むようにして身を投げ出した。

ジークの背をかすめるようにして、大蜘蛛の牙が、恐ろしい音を立てて噛み合わされた。

その顎の下で、ジークは倒れ込みながら身を翻し、存分に剣を振るっている。

そしてそのまま、ジークは肩から滑り込むようにして地面に倒れた。

大蜘蛛は、そのまま勢いに任せて砲魔を蹴散らし、二つの陣形のど真ん中に突進した。

ノヴィアはその動きをしっかり見極め、陣の一方へ身を寄せ、大蜘蛛の乱入を避けている。

大蜘蛛は、食い止めようとする級魔をその脚で貫き倒し、真っ直ぐ走り抜けながら——

その頭が、ふいに、ずるっと妙な角度に傾いた。頭の付け根から、青黒い液体が噴き出す。
大蜘蛛の頭が切断され、どっと音を立てて地面に転がった。
それでもその体は前進を続け、城の南側の表門へ激突した。
巨大な脚が、しばらく、ばたばたと動き続け――間もなく止まった。
ジークは、ゆっくりと起き上がり、地面に落ちた大蜘蛛の頭へ歩み寄った。
ノヴィアは、アリスハートとともにその様子を見守っている。
大蜘蛛の牙は、まだ、かっかっと噛み鳴らされている。ジークはその前に立ち、言った。
「悪くない戦いだった」
かっ――と、最後に一つだけ、牙の音が響いた。
大蜘蛛の頭が動かなくなった。城に突っ込んだ大蜘蛛の体が呆気なくしぼみ、魔獣たちが咆吼を上げて溶け崩れた。増殖器である大蜘蛛を失い、体を保てなくなったのだ。
ジークはじっと厳しく大蜘蛛の頭を見つめている。その傍らにノヴィアが立った。
「……お手伝いします」
ぽつっと告げた。ジークが、不思議そうに、ちらりとノヴィアを見る。
何を手伝うというのか――ジークの方が、分からなかった。
「この魔獣を葬るのでしょう……人々が来て、彼を焼く前に」

ノヴィアはジークを見上げ、当然のように言う。その胸でアリスハートが呆然となる。
ジークも、意外そうにノヴィアを見つめた。やがて大蜘蛛の頭に目を戻し、
「……頼む」
どこか、ほっとしたように言った。

「ご覧なさい。ジークに正面から立ち向かえば、あの大蜘蛛でさえ、あの有様です」
アキレスが面白そうに、大蜘蛛の屍を見下ろして言う。
「増殖器（ジェネレーター）があの大蜘蛛であることを知っていたのですか？」
トールは全く構わず、別のことを訊いた。アキレスは小馬鹿にしたように肩をすくめた。
「気づいたのは、あなたが別行動をしてからでしてね……」
そう言いながら、トールを無視するようにして部屋を出て行こうとする。
「どこへ行くのですか？」
「聖地シャイオンに戻り、レオニス様に事の次第を報告するのですよ。もうここには用はありません。あなたがそばにいる限り、安心して戦うことも出来ませんしねぇ」
トールは無言で鞭を消した。アキレスは両手に白い手袋をはめながら、
「あなたはどうするんです？　ジークと戦って殺されますか？」

そうしろと言わんばかりに訊いてきた。
「フロレスを探します」
「……香りを使う女ですか。あなたも執念深いですねえ……その傷の意趣返しですか？」
トールは無表情に黙っている。アキレスは唇を吊り上げた。
「どちらが先にレオニス様に報告するか、競争になると思っていたのですがね」
「お先にどうぞ」
あっさり返すトールに、アキレスの唇がさらに高く吊り上がった。
「この次は、私が優先的に戦わせて頂きますよ……影法師の坊や」
アキレスが去ってのちも、トールはしばらくそこに佇み、ジークたちを見ていた。
ノヴィアの胸元からアリスハートが姿を現すと、安堵の微笑みがその顔に浮かんだ。
「……また会いましょう、アリスハート」
そう呟き、トールもまた部屋を出た。その顔が鋭く引き締まっている。フロレスを何としても見つけ出し、あの血筋の秘密が記された書状を奪わねばならなかった。
レオニスを守るために。
大蜘蛛の頭を岩山の片隅に弔ってのち、ジークたちは西の門へ向かった。

外では近隣の砦の騎士たちが、期限の日没とともに都市を焼き払う構えでいたが、
「門を開け！　魔獣は全て倒した！」
ジークが大声を上げると、わっと喝采を上げて封じ込めていた門を開いた。
ノヴィアにしてみれば、つい先ほどその門を入り、すぐにまた出てゆく気分である。
アリスハートから大まかに事態を説明され、三日三晩の記憶がなくなっていることは理解したが、どうにも不思議な気持ちだった。本当にそんなことがあるのだろうかと、ノヴィアは、橋を渡る途中で立ち止まり、何か証拠でも探すように都市を振り返っていた。
立ちこめていた霧は、魔獣の壊滅とともに消え、夕暮れが辺りを金色に染めている。
ふいに――ノヴィアは、西の門の向こうに、誰かが立っているのを見た。
若い娘だった。短く切られた雛色の髪が、風に揺れている。ノヴィアと目が合うと、嬉しそうに微笑した。ノヴィアが驚いて声を上げかけたとき、ふっと娘の姿が霞んで消えた。
澄んだ香りが、風とともに流れてくるのを感じたが――それもすぐに消え去った。
「どしたのぉ、ノヴィアぁ？」
肩の上のアリスハートが、不思議そうに呼ぶ。ノヴィアは、かぶりを振った。
「ううん……何でもない……」
再び橋を渡ろうとして、言葉を失った。

すぐ先で、ジークもまた同じように立ち止まり、門の方を見ていたのだ。誰かを見送るような眼差し──魂の最後のかけらが去るのを、静かに見届けるときの顔だった。

やがて、ジークは無言で都市に背を向け、橋を渡っていった。

ノヴィアは、もう一度、振り返った。もう誰もいなくなった都市を見つめ、呟いた。

「私……本当に、忘れてるんだ。ここにいたことを……」

「……え？　何か思い出したの？」

「ううん……。忘れたんだなってことだけは……何となく、分かるんだけど……」

何も思い出せはしなかった。だがそれでも、何かが、自分の中に残っている気がした。

全てが消え去ってのちに現れる、名前のつけようのないもの──

それを確かに今、誰かから、受け取ったような気がしていた。

「ねえ、狼男ったら一人で行っちゃったよぉ。早く行こうよぉノヴィアぁ」

「そうね……置いて行かれちゃう」

そう言いながらも、ノヴィアは大して焦りもせず、ジークを追って橋を渡った。

ゆっくりとした歩みで。

6

「レティーシャ殿が、しきりにレオニス様の名を、大声で口にしておりますが……」
「分かっている」
臣下の呼びかけに、レオニスは苛立たしげに返した。なぜ苛つくのか自分でも分からない。ただ、何かがたまらなく恐ろしいことだけは確かだった。
湖畔でレティーシャが待っている。理由は明白だった。像が完成したのだ。
この聖地シャイオンを象徴するような像――自分が本当に綺麗だと思う像が。
「僕は……歩けないんだ」
ふいに、呟きが零れた。それが、像を見ないための言い訳になるとでもいうように。
なぜそんなことを言うのか――一瞬、自分に対する強い怒りが起こった。
それが恐怖を抑え込んだ。レオニスはさっと手を振って合図し、車椅子を押させた。
レティーシャにしては珍しく、夜ではなく夕刻だった。まだ陽が沈みきっていないことに、付き人たちも衛兵たちも、ほっとしているようだった。
夕暮れの湖畔に、レオニスは動悸を感じながら、付き人たちに運ばれ、やって来た。
ふいに、衛兵が、うっと呻くような声を上げて足を止めた。

道の真ん中で、頭蓋骨を持って立っているレティーシャの姿があった。レオニスを見ると、かかとを履き潰した靴をぺたぺた鳴らして近寄り、無言で頭蓋骨を差し出した。
「みな……ここで待っていろ」
頭蓋骨を受け取りながら、レオニスが押し殺した声で命じた。
レティーシャは、何も言わず、レオニスの背後に回って車椅子を押した。
「……どんな像が出来た？　自信はあるか？」
訊くが、レティーシャは答えない。
「なぜ何も言わない。兄様は何て言ってるんだ」
やはりレティーシャは答えず、無言でレオニスを運んでゆく。
「僕は……歩けないんだぞ」
なぜか、またその言葉が口をついて出た。レオニスは歯を食いしばり、ただ運ばれてゆく己の身に耐えた。やがて木陰からそれの姿が現れた。それがどんどん近づいてくる。
レオニスは息をのんだ。本当に美しいものが、そこに立ってレオニスを待っていた。
レティーシャが足を止めた。像の真正面だった。レオニスは言葉を失ってそれを見た。
大きな像だった。両手を広げ、誰をも分け隔てなく胸に抱くような慈愛に満ち、優しさと同時に神々しいまでの気品をたたえている。面立ちは若く、それでいてひどく落ち着い

ている。限りない母性を感じさせ、女神像というよりも聖母像と言う方がふさわしかった。
「……母さん」
自分が像にそう呼びかけるのを止められなかった。幼い頃に死別した母が、そこにいた。
だが心は恐怖に悲鳴を上げている。こんな馬鹿な。自分も忘れたような母の顔立ちを、レティーシャが正確に再現出来るはずがない。
「素晴らしい出来映えだ……きっと誰もが自分の母を連想するだろう。これなら民も納得する。旅人もこれを見れば、この聖地こそ第二の故郷と思ってくれるに違いない……」
きっと、ノヴィアでさえも、ここが自分の故郷だと感じてくれるだろう――
無理やりにもそう思おうとして――レオニスは異常な恐怖に陥り、息をつまらせた。
なぜだ。そう絶叫したかった。なぜノヴィアの面立ちをレティーシャはこうも再現出来るのだ。なぜそれを平然とレオニスの母の顔に混ぜ合わせてしまえるのだ。
二人で一人――レティーシャは確かにそう言った。いったいこの像は――
「ところでレティーシャよ……これは……誰なんだ。この像は、いったい誰なんだ」
レティーシャは、レオニスの背後に立ったまま答えない。
正面を向かせていたはずの頭蓋骨が、いつの間にかレオニスを下から見上げている。
レオニスは、もう少しで、訳の分からぬ恐怖とともにレティーシャも頭蓋骨も、真っ二

つに斬り捨てたい気持ちに駆られそうになった。
そのとき――夕陽の輝きが、辺りを緋色に染め上げた。
真っ白い像が、にわかに赤く染まった。
レオニスの目が、大きく見開かれた。恐怖ではなく、ひどく呆然とした表情だった。
「母さんが……真っ赤だ」
ぽつんと呟いた。心が、勝手に母のことを思い出していた。その面影ではなく、なぜ母が死んだのかを。そう――母は、暗殺者の手にかかって死んだ。幼いレオニスを守って。
その光景が、瞬間的に思い浮かんだ。幼い頃の記憶――耐え難い恐怖と悲しさ。
最後に母を見たとき――
「母さんを……助けなきゃ」
それを突然、思い出した。母を助けなければ。今まさに母は殺されようとしているのだ。
死にかけて血だまりに倒れた母の姿を、ベッドの下のレオニスが、見ているのだ。
母がそこに自分を隠してくれたのだ。幼い頃から足が動かない自分を守るため――
「僕は……歩けないんだ」
「嘘」
ぽそっとレティーシャが言った。

レオニスは何かが音もなく崩れるのを感じた。まるで足下にぽっかり暗い穴が開き、そこから忘れていたものがレティーシャの蠅のようにうじゃうじゃ湧いてくる気がした。

その蠅がわめくには、レオニスは自分からベッドの下に隠れたのだという。

母が襲われるのを見て、咄嗟に逃げたのだという。暗殺者は死にかけた母を引きずってきてレオニスの居場所を吐かせようとしたという。そして血が赤く飛び散って――

なぜ助けなかったのだ。お前が出て行けば母は苦しまずに済んだのに。そう蠅が言う。

歩けないからに決まってるじゃないか。自分は歩けないんだ。足が動かないんだ。母を助けられなかったのは当然だ。出て行って姿を現すことさえ出来なかったんだから。

「嘘じゃない……。急に……歩けなくなったんだ」

レオニスは己の膝を握りしめて言った。涙が後から後から零れ落ちた。

せめて母が苦しまずに死ねるよう、自分も出て行って殺されれば良かったのだと蠅が言う。せめて敵がその手を止めるよう、大声で助けを呼べば良かったのだと蠅が言う。

蠅の叫び――確かに、お前は生まれつき足が弱かったが歩けないほどではなかった。成長して体が丈夫になれば普通に歩けるようになるはずだった。お前も覚えているだろう。幼い頃のお前は今よりも、ちゃんとその足で立つことが出来た。

なんと覇気がないことか――父の声が、にわかに甦った。

「助けられるわけがないじゃないか……僕は歩けないんだから……」

心が歩くことを棄てたのだ。自分だけ生き延びるために。自分が隠れているせいで母が苦しんでいることの正当性を求めて。助けることさえ出来ない無力さ。覇気がない――父の冷たい目。世界中が自分を責めている――歩けないんだ。領主になることの条件――歩いて玉座まで辿り着くこと。みなが期待している。自分が飛び出していって殺されれば母の苦しみを止められる。ああ、そうでなければ敵を殺してしまえる力が自分にあれば――

そして真実――怪物になりたい。力が欲しい――どんなものでも滅ぼせるほどの力。

それが歩くことの代わりになる。そんな自分を、あの少女が見つけてくれたのだ。手を差し伸べて、レオニスが歩いているところが見えると言ってくれたノヴィア――

「もう一人の……自分……。鏡映しの……」

母そっくりの顔をした少女。

母が手を差し伸べて、出ていらっしゃいと言っている。そのベッドの下から出てきて、一緒に死のうと言っている。自分の苦しみを早く止めてと言っている。蝿の声で。

そして――疑念が起こる。あの冷厳な父が、双子が生まれて掟通りに片方を棄てねばならないとき、何の理由もなく体の弱い子を手元に残し、健康な子を棄てるだろうか？

答えは、否――体の弱い子を残さざるをえない理由があった。

ではなぜ自分が選ばれたのか？
明確な答え――父には跡継ぎが必要だった。だからたとえ体が弱くとも男子を選んだ。
つまりもう一人は女子だったのだ。父は迷わず健康な彼女を棄て――レオニスを残した。
そして再び甦る少女の面影／母の面影／血の色／その二つが一つになって――
「ああ……そうか……そうなのか……」
魂の抜けたような虚ろな声が、レオニスの口から零れる。
あるのはベッドの下に這いつくばる自分のもとへ、母の温かな血が流れてきて己の両手を濡らす感覚。その剣で父を貫いた自分の手へ溢れる、焼けつくような血の熱さ。
「……なぜ父までノヴィアのことをあんなに気にかけていたのか、ずっと……不思議だったんだ。そうなんだろう……？　レティーシャ……お前は知っていたんだろう？　そしてきっとトールも……ああ、あいつも……知っていたんだ……」
レティーシャは答えない。ただ、そっと背後からレオニスを抱きしめ、そっと囁いた。
「綺麗でしょ……？　ね、レオニス様……」
ざわざわと足下から蠅の羽音が聞こえる気がした。レオニスは泣きながらうなずいた。
真っ赤に濡れた母は――血を浴びたノヴィアは、とても綺麗だった。



聖地シャイオンの聖母像が完成し、城の広間に飾られてから、数日後に――

まず、アキレスが帰還し、レオニスに一連の出来事を、事細かに報告した。

特に、トールの裏切りとも言える行為の数々を、丹念に述べ立て、

「もし許されるならば、今度の狩りではトール殿とは行動したくないものですな。彼の邪魔があったせいで、いったい何度、好機を逃したことか。どうかトール殿をこの使命から外し、私一人にお任せ下さい。きっと、お役に立ってご覧に入れます」

レオニスは、淡々とそれを了解した。

「良いだろう。ジークは今後、物資運搬の行方を追って大河を下ることが予想される。ジークが海岸に辿り着くまでの間が、お前の狩り場だ。そこで狩りの指揮を執れ」

アキレスはひどく満足そうに頭を垂れた。

それからさらに数日後。

トールが帰還し、執務室でレオニスと再会した。なぜこれほど遅れたのかと冷ややかに尋ねるレオニスに、フロレスを追っていたためであることを、トールは素直に答えた。

「それで、フロレスを仕留められたのか?」

「いいえ……逃げられました」

いったいあの崩壊と騒乱の現場から、どうやって脱出したのか。

おそらく外にいた騎士を操り、馬を奪うなどして、すぐさま逃走したのだろう。
「追う必要はない……フロレスは、ここに戻ってくる」
レオニスが断言した。トールもうなずいた。フロレスは間違いなく、彼女に関する記憶を全員の心から消すために聖地シャイオンに戻るだろう。あるいはレオニスを操るために。だからこそトールは追跡をやめて帰還し、フロレスを迎え撃つことを選んだのだ。
「ところでトール、一階の広間にある像を見たか。レティーシャに彫らせた像だ」
「……はい」
「母に似ていると思わないか」
トールは無言で頭を垂れた。その目が、あまりの無念さに細められていた。
正直、あの像を見た瞬間、不吉な予感に襲われたのだ。遅かった――心底そう思った。何かが間に合わなかった。最初からフロレスなど追わずに聖地に帰還するべきだった。
トールは己の迂闊さを呪った。レオニスの心を奪おうとする者はフロレスやアキレスだけではなかったのだ。レティーシャ――あの娘と頭蓋骨を、切り刻んでやりたかった。
「なぜ答えない？　他にもっと似ている者がいるからか……？　トールよ、お前は父から聞いていたんじゃないか？　かつて双子の片方がどうなったか？」
トールは答えない。ただひたすら悔恨に打ちのめされて頭を垂れている。

「なあ……トール」
ふいにレオニスの声が、いつもの親しげな響きを帯びた。
「もう、痛くないんだ」
トールは、はっと目を見開き、恐れおののくように、顔を上げた。
「急に……何の痛みも、感じなくなってしまった」
自分の両手を見つめて呟くレオニスの姿に、トールは己の両腕を自ら切り落として詫びたい気持ちになった。レオニスを守れなかった自分が許せなかった。
「もう……二度と歩けないかもしれない」
他人ごとのように、レオニスは言った。トールは悲痛な顔で、思わず一歩、前へ出た。
「レオニス様……」
レオニスが、ふいにトールを真正面から見た。そして、くすっと笑った。
「知っていたんだな」
トールは何も言い返せなかった。ただそこに呆然と立ちつくした。
レオニスは、優しく微笑しながら、トールを牢に入れることを告げた。
トールは一言として発せず、一切の抵抗をせず、ただ影のように大人しく投獄された。

凄まじい牢だった。壁中が、地獄の苦しみに悶える人間の姿で埋め尽くされている。
レティーシャがその彫刻で飾り尽くした地下牢――
そこに、トールは投獄された。罪状は、レオニスが適当にでっち上げたもので、それほど重くはない。ぎりぎりこの牢に入れられる程度の罪――いわば謹慎だった。
ただし期間は定められていない。トールは黙々と牢に入り、一番奥の壁に背を当てて座った。しばらくそのまま眠るように顔をうつむかせていると、ふいに人の気配が起こった。
トールは顔を上げ、今この瞬間、最も憎悪するべき相手を見た。
「兄様の言った通りね。ふー。レオニス様から綺麗なものを隠そうとした人だね。ずるい人はこうなるね、兄様。でも少し可哀想、でもしょうがない、ね、兄様」
鉄格子の向こう側で、レティーシャが頭蓋骨をトールに向けて囁く。
「ふうん。そうなんだ。この人、待ってるんだ。あの香りが来るのを待ってるんだ。それでレオニス様がどうするか待ってるんだ。いつでもこんな場所、抜け出せるくせに」
その通りだった。トールが大人しくしているのは、フロレスを待っているからだ。レオニスが帰還したフロレスをどうするか、ただ黙して見届けるために。
トールは、じっと鋭い目をレティーシャに向けた。その、頭蓋骨を――
「ふふー。この人、兄様のこと気にしてるんだ。ふうん。はい、うん、そぉ。教えるの、

兄様。そうなの。少しだけね。また兄様のこと欲しくなる人、出るかもしれないからね」
レティーシャが、ちらりと上目遣いでトールを見た。すぐまた頭蓋骨に目を戻し、
「兄様ね、予言者だったんだよね。未来を教えてくれるんだよね、兄様。人の心、分かるんだよね。みんなに喜ばれてね。みんなに憎まれてね。ふー。首だけにされちゃった」
ぼそぼそとした調子で、どうやらトールに何かを告げようとしているらしかった。
「でも兄様ね、首だけになってもね、教えてくれるんだよね。人の未来ね、兄様。みんなが兄様、持ってこうとしたね。あたしが兄様、取り返したんだよね。ふー、ね。みんなを綺麗にしてね、兄様も綺麗にしてね、あたしも綺麗になるためにね、兄様とね」
トールは、溜め息をついた。本気か嘘かも分からない。勝手にレティーシャがそう信じ込んでいるだけかもしれなかった。
「ふぅん。あの人、そういうの信じないの、兄様。夢がないんだ。つまんない。ふー。でも分かってるね。レオニス様とあたし、一緒だってこと。同じ綺麗だってこと」
トールは咄嗟に、この娘の首を、その頭蓋骨の横に並べてやろうかと思った。
「一番、好きになっちゃいけない人、好きになったからね。一緒だね。ふー」
だがその一言で、トールの中で悲しみが起こった。怒りが消え、疲労感が湧いた。
「みんな、レオニス様が欲しいのね。そうなのね、兄様」

トールは胸がむかつく思いでその言葉の正しさを認めた。アキレスはレオニスを自分にふさわしい王にしようとしている。フロレスはレオニスを道具として操ろうとしている。このレティーシャはレオニスを自分の同胞にしようとしている。そして、自分は——

「みんなで待とうね、兄様。それが一番ね。ふー。だってレオニス様、一人だものね」

トールは押し黙ったまま目を伏せた。レティーシャはトールを見つめ、それから奥へ行き、牢に入っていった。考えてみれば、ここはレティーシャの住居でもあるのだ。

トールは、待った。フロレスの帰還を。そして、レオニスの選択を。

Epilogue　血の絆

ジークたちが城塞都市ルカを出立したのは、大蜘蛛の死から七日目の朝であった。

その間、諜報院の者たちが都市に残された書類を調べ、物資の運搬についての情報を手に入れている。当初の予想通り、大河に沿っての物資の流れが判明し、聖王からジークに、正式な使命が下された。すなわち物資追跡のため、大河を海岸へと下るのだ。

ジークはそれまで、ノヴィアとともに死者を葬ることに日を費やしていた。

「大丈夫でしょうか……ジーク様」

道程を説明されたノヴィアは不安になった。これから延々と水辺を進むのだ。水があるところでは力が使えないジークにとって困難な戦いになることは明白だった。

「心配ない」

だがジークはいたって悠然と構えている。何が危険か分かっていれば、それに対処する手段も事前に用意しておけるのだと言った。だがノヴィアの不安は尽きない。

特に、ドラクロワやレオニスについての情報は、全く手に入っていないのだ。

ノヴィアは既に、アリスハートから、今回のあらましを聞いている。またもやトールがここにいたということは、レオニスがこの一件に関与している証拠だった。

もしジークがトールを捕らえていれば——ついノヴィアはそう思ってしまう。そうすれば聖王は、ジークに聖地シャイオンの調査を命じていたかもしれない。そしてノヴィアも、あの聖地に行き、レオニスに直接、問いただすことが出来たのに——

だが、その考えが無益なのは分かっていた。ジークの目的はあくまでドラクロワであり、それ以外に力を割くべきではないのだ。聖王も決して聖地シャイオンへの派遣を命令したりはしないだろう。それはあくまで諜報院の仕事だった。

そんなノヴィアの心情を、ジークはすぐに読み取っている。

「行きたいのなら、止めはしない」

出立の前の晩、ジークは淡々とそう言った。

ジークと別れてレオニスのもとへ行くかどうか、ノヴィアの意志を問うたのだ。

「狼男ったら、そんな冷たいこと言わないでさぁ。もうちょっと他に言い方が……」

アリスハートは、ノヴィアがまた傷つくのではないかと気が気でない。だが——

「私は、ジーク様の従士です」

ノヴィアは、呆れたように返したものだ。

「戦いの旅の最中に、そう簡単に、騎士が従士を手放すものではありません」
かえってたしなめるような口調になり、アリスハートがぽかんとなった。
「それに〈銀の乙女〉からも、ジーク様と旅をともにするよう、命じられております」
ジークは、ノヴィアの煎じた薬湯をすすりつつ、そっぽを向いて言った。
「お前の意志を聞いただけだ」
憮然とした感じである。年の離れた従士に説教される騎士というのも珍しかった。
むっとしてノヴィアが言う。ジークがまた薬湯をすする。アリスハートがはらはらした。
「私は自分の意志で、ジーク様の旅についているんです」
ふとノヴィアが告げた。微笑さえ浮かべている。ジークは初めてノヴィアに目を向けた。
「この戦いが終わったら……レオニスに会いに行きます」
「レオニスの部下が、戦いを挑んでくるかもしれない。あるいはレオニス自身が」
お前にレオニスと戦えるかと言っているようなものだった。
だがノヴィアは反射的に、きっぱりうなずいた。傍らのアリスハートが愕然となる。
「そのときは私が、レオニスを止めます」
半ば勢いに任せて言った後で、それが自分の役割であるかもしれないとさえ思っていた。
もう一人の自分――そんな風に感じられる相手に対しての、当然の心構えなのだと。

「分かった」
ジークはただそう返した。それ以外に何も言わない。だがその目は真っ直ぐノヴィアを見ている。多くの思いがその眼差しにこめられているのをノヴィアは感じた。
何となく、それだけで十分だった。
それから、出立を明日に控えていることもあり、早めに自分たちの宿へ戻った。近くの壊れた修道院の一室を借りているのだ。その途中、アリスハートはしきりに感心していた。
「なんだか凄い剣幕だったわねぇ、ノヴィアぁ。狼男が、びっくりしてたよぉ」
そう言われて、さすがにちょっと不安になったが、
「でも……本心だもの。それに、ちゃんと言わないと……ジーク様、また一人で行ってしまうから。まだこれから遠くへ行くんだもの……意志を持たなくちゃ。そうでしょう」
そうよ——
と、誰かが微笑んでくれた気がした。ノヴィアは立ち止まって、虚空を振り返った。
「どしたの、ノヴィア？　誰かいたの？」
辺りには、まだ復興さえ始まっていない、瓦礫の山が並んでいる。
「ううん……」
風が、どこからともなく澄んだ香りを運んできた気がしたが、それも気のせいだろう。

自分は、ただ自分の中から自然と聞こえる声に従って、彼方へ続く道を選んだのだから。
ジークの後を追って。その背を通して、より遠くを見ることが出来るように。
「行こうよぉ、ノヴィアぁ。明日も早いんでしょぉ、しっかり休まなくちゃ」
アリスハートが、ふわっと肩に舞い降りた。それから真面目な調子で、こう言った。
「今日でこの街も最後なんだから、良い夢を見なきゃ」
ノヴィアは微笑んだ。そうしてもう振り返ることもなく、ただ真っ直ぐ歩んでいった。

暗い牢の中――ただじっとうずくまるトールの姿があった。
ふと、その顔が上がった。危ういほど神経を研ぎ澄ましたような目で、宙を見る。
どこかからか、ほんのかすかに、甘い香りが漂ってきていた。
トールの手が翻され、鋼の鞭を現した。
一瞬ののち――鉄格子が火花を上げて切断される音が、暗い地下に響き渡った。

レオニスは、城の広間で、ただ一人、玉座に座っていた。
最近は、特に用事がない限り、そこでぼんやりと考え事をしていることが多かった。

ふいに、その無人の広間に、甘い香りが漂った。
レオニスは、どこか待ちわびたように、広間の入り口を見た。
「ただいま戻りました……レオニス様」
艶やかな声とともに、一人の女が、広間に入ってきた。
左手をかざし、ゆっくりと香炉を揺らしながら、レオニスに向かって歩んだ。
眼前に突き出されたその指が、全て折れ曲がっていた。
右腕は、もはやどこが関節か分からぬ形状に潰されている。
肩が平行ではなく、斜めに傾いでいた。
裂けた唇と頬から、歯が覗いて見えた。
顔の右半分が砕けて、青黒く腫れ上がり、鼻が潰れ、右目が白く濁っている。
まともに開いているのは左目だけだった。
右足首が異様な方向を向いていた。
腰骨が歪んだのか、右膝の方が、左膝よりも拳一つ分、下の位置にあった。
全身を、巨大な手で握り潰されたような有様――あの土砂崩れに巻き込まれたのだ。
「なかなか、痛みを忘れることが出来ずに……これほど遅れてしまいましたわ」
だがフロレスは、もはや何の苦痛も感じていないかのように、微笑んでいる。

その無惨な姿が、ぎくしゃくと近寄ってきた。
「あなた様にとって、とても重要な情報を、ジークから奪い取ってきましたわ」
折れた指で、もぞもぞと懐を探り、書状を取り出してみせる。
レオニスは、くすっと笑った。その目は冷たくフロレスを見つめ、
「僕はね……歩けないいんだよ」
ひどく丁寧に、そう告げた。
ちっ、とフロレスが舌打ちした。なんとも荒みきった態度だった。どうせすぐに相手の記憶を消すのだからと何の礼儀もないまま、玉座への階段を面倒くさそうに登った。
「さあ、これを見てご覧なさい……坊や」
すっかり馬鹿にしたような態度で、書状を突き出す。
レオニスは、気にした様子もなく書状を受け取り、中身に目を通した。
早く読み終わらないかと、フロレスは苛々しながら、ぞんざいに香炉を揺らしている。
「最初の狩人……サガ・トルホーズの調査か……大したもんだ、よく調べてある」
言葉とは裏腹に、ひどくつまらなそうに、レオニスは顔を上げた。
フロレスは、やっと読み終わったかというように、にっこりと砕けた顔を微笑ませた。
「さあ、苦しいでしょう……悲しいでしょう……もう全てを忘れてしまいましょう……」

体中がべたべたするような甘い香りを放ちながら、レオニスに迫った。
「その悲しみを消してあげるわ……何の苦痛もない本当に幸せな状態にしてあげる」
まるで、その香りが、レオニスの衣服に忍び込み、体中を撫で回した挙げ句に、心の中に無理やり入り込んでくるようだった。
それでもレオニスは、何も感じないかのような冷たい顔でいる。
フロレスのねじ曲がった指が、愛玩するようにレオニスを撫でた。
「そして今日から……あなたが、私の弟になるの。私が、あなたの姉になるのよ。さあ……私をノヴィアと呼びなさい……レオニス」
その瞬間――胸が焦げつくような血の香りが、レオニスを満たした。
レオニスの手が背後に回され、何のためらいもなく宝剣を抜いた。
「汚らわしい手で触るなっ！」
煮えたぎるような怒りの声とともに、刃がフロレスの腹を貫いた。
フロレスが、呻き声と血を吐きながら、よろよろと後ずさる。
レオニスの手から剣が離れた。それでもフロレスは倒れない。
その腹を貫いていた剣が、ずるっと音を立てて引き抜かれ、宙に静止した。
「い……痛い……痛みを……忘れて……」

慌てて香炉を己の顔に寄せようとしたとき――
ひゅっと刃風が鳴り、フロレスの左手首が、水のように切断された。
フロレスの左目が、黒い影を見た。階段のすぐ下で、トールが鞭を縦横に振るっていた。
「か……香りで……」
フロレスの首が、腕が、足が、胴が、レオニスの目の前でばらばらになった。
その体がばらまかれるや――いきなり床から何本もの氷柱が生え、次々に刺し貫いた。
フロレスの体の断片が、一つずつ氷の槍で串刺しになって陳列されるような光景を、レオニスは、なんの興味もない目で見つめた。
氷が赤く染まった。フロレスの血を吸っているのだ。ざあっと氷が溶け、ばらばらになって干涸らびたフロレスの体が、今度こそ床に落ちるや――
どこからともなく飛んできた無数の真っ黒い蝿が、猛然とその体にたかった。
僅か数秒ののち、蝿がさっと去っていなくなったとき、もうそこには何もなかった。
肉体も香炉も衣服も、髪や爪さえ、フロレスがこの世にいた証拠は一片も残っていない。
宝剣が宙を舞い、レオニスの手に戻った。
「もう……忘れることも出来ないや……」
くすくす笑って、うつむいた。

「どこにいるの……トール。そばにいてよ……」
宝剣の刃の上に、涙が一つ、零れ落ちた。
「ここにおります、レオニス様……いつでも、そばにおります」
トールは玉座のすぐそばにひざまずき、そっと誓った。
「我が王よ……どうか私めに、戦乱と力を、お与え下さいますよう」
アキレスがやって来て、トールと並ぼうとするように、玉座に向かってひざまずく。
「レオニス様……とっても綺麗……。ね、兄様……本当に、綺麗」
頭蓋骨を抱えたレティーシャが、広間の真ん中に、裸足で立っていた。
レオニスは顔を上げ、静かに三人の姿を眺めた。それから、宙を見た。
いっとき、遥か彼方を旅する、少女の面影が思い浮かんだ。
その少女の姿が、真っ赤に染まるのを見たような気がした。
身も心も焼けつくような血の香りが、いつまでも辺り一面に漂っていた。

後書き

初めましての方も、お待たせしましたの方も、こんにちは、冲方です。
皆様の暖かく、ときに厳しい応援により、『カオス レギオン』も五冊目に突入しました。
しかも前作をさらに上回る規定枚数のオーバーにより、超極厚本となっての刊行。本当にこういうことは読者の応援があってこそで、皆様には、大・大・大感謝です。

今回は新たに、ちょっと（？）怖い三人が、レオニスが招いた狩人として堂々の登場です。一人はドラマガ誌上での連載でも登場した人物で、三人全員がジークと因縁がある様子。そんな彼らとトールが、ジークを狩るべく放たれるが――
一方、霧深い城で目覚めたジークは、気づけば周りに誰もいないという状況。ノヴィアはどこへ？　アリスハートは？　一人さまようジークはそこで己の過去と直面する――
と、物語の構想を、喫茶店で担当のシバッチユイユイ氏に話したところ、
「本当に書けるの？」

などと、ひどい質問が勃発。もちろんですとも書いてみせますとも、と胸を張って宣言する僕に、シバッチ氏の恐ろしい言葉が……

「だって、今回の締め切りは一か月後だよ？」

「うぬるるむいぐあぁおうるえあぉおぅがごごごうあ！」

「何言ってるか分かんないって！」

「いやぁ……今回、新登場する人が、こういう口癖をしているもので」

「どういうやつだよ！　つかそれ口癖じゃないよ、絶叫だよ！」

「というか一か月ってナンですかぁっ!?　三十日ですかぁ!?」

「うーん……確かにねぇ。結賀さんも、そりゃ無理でしょうって言ってるんだよねぇ」

その言葉が落雷のごとくウブカタのハートを直撃。やる気魂に、いけない点火がオン。

俺がチャンピオンだ回路発動。脳内艦長が最終決断を無差別に発令――再三の絶叫を発射。

「やってやるぁ――――――――――――――――――――っっっ!!!!」

「うわ――――――――っ!?」

「さささ三十日あれば七百二十時間ですよっ、あなたっ!!」

「お、おおっ！　なんか時間が沢山あるっぽい！」

「そうですとも！　四万三千二百分間ですっ！　二百五十九万二千秒間ですよっ！」
「すごい！　なんかますます余裕っぽい！　やれる、やれるよ！」
「やれるやれるややややれるうおごがあいぇむぬるおえうやれるむやるうるむぬが！」
「おお、その意気だ！　何言ってるか分からんが頑張れ！」

そうして白熱の日々に突入し——生還したその成果が、本書なのです。
（まぁ、四万三千二百分間よりも実際は五千分間ほど遅れたわけですが）

とにかく、執筆の期間が短かろうが、本編が分厚いので後書きスペースが短かろうが、熱情だけは倍増なのです。ありったけの気持ちで書きました。どうぞお楽しみ下さい。

最後になりましたが、いつも刺激と信頼を与えて下さる、結賀さとるさん、カプコンの皆様、富士見書房の編集諸氏、シバッチ氏、奥さん、妖精さん、ありがとうございます。

そして読者の皆様へ——尽きせぬ感謝を込めて。これからも頑張ります。

冲方丁　二千四年四月

富士見ファンタジア文庫

カオス レギオン03

夢幻彷徨篇

平成16年5月25日　初版発行

著者――冲方　丁（うぶかた　とう）

発行者――小川　洋

発行所――富士見書房

〒102-8144

東京都千代田区富士見1-12-14

電話　営業　03(3238)8531

　　　編集　03(3238)8585

振替　00170-5-86044

印刷所――旭印刷

製本所――本間製本

落丁乱丁本はおとりかえいたします

定価はカバーに明記してあります

2004 Fujimishobo, Printed in Japan

ISBN4-8291-1618-8 C0193